

金
沢
城
跡

― 鶴ノ丸第1次・新丸第1次・尾坂門・二ノ丸園路・数寄屋敷 ―

二〇一六

石川県金沢城調査研究所

金沢城史料叢書27

金沢城公園整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書9

金 沢 城 跡

― 鶴ノ丸第1次・新丸第1次
尾坂門・二ノ丸園路・数寄屋敷 ―

2016

石川県金沢城調査研究所

金沢城史料叢書27

金沢城公園整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書9

金 沢 城 跡

—— 鶴ノ丸第1次・新丸第1次 ——
尾坂門・二ノ丸園路・数寄屋屋敷

2016

石川県金沢城調査研究所

例 言

1. 本書は、石川県金沢市丸の内地区に所在する史跡金沢城跡の埋蔵文化財調査報告書である。
2. 調査原因は公園整備事業であり、事業を所管する石川県土木部公園緑地課が石川県教育委員会に調査を依頼し、石川県教育委員会の委託を受けて財団法人石川県埋蔵文化財センターが調査を実施した。報告書作成・刊行は、石川県金沢城調査研究所が担当した。
3. 調査期間及び担当職員は次のとおりである。

現地調査

新丸第1次調査

平成11(1999)年度

期 間 平成11年7月29日～10月5日

担当者 滝川重徳(主事)、端 猛(主事)、熊谷葉月(主事)、土田友信(講師)、湯川善一(嘱託)

鶴ノ丸第1次調査

平成11(1999)年度

期 間 平成11年10月13日～平成12年1月14日

担当者 滝川重徳(主事)、端 猛(主事)、熊谷葉月(主事)、土田友信(講師)、湯川善一(嘱託)

二ノ丸園路調査

平成11(1999)年度

期 間 平成11年11月24日～12月8日

担当者 滝川重徳(主事)、端 猛(主事)、熊谷葉月(主事)、土田友信(講師)、湯川善一(嘱託)

尾坂門調査

平成12(2000)年度

期 間 平成12年12月6日～12月25日

担当者 富田和気夫(課主査)、滝川重徳(主任主事)、湊屋玲美(主事)、土田友信(講師)

平成13(2001)年度

期 間 平成13年4月23日～5月2日

担当者 富田和気夫(調査専門員)、湊屋玲美(主事)、土田友信(講師)

教寄屋屋敷調査

平成13(2001)年度

期 間 平成13年5月15日～6月26日

担当者 富田和気夫(調査専門員)、湊屋玲美(主事)、土田友信(講師)

出土品整理

平成13・15・16(2001・2003・2004)年度 財団法人石川県埋蔵文化財センター

4. 報告書の作成は、本田秀生(担当課長)、滝川重徳(主幹)、安中玲美(調査研究専門員)、荒木麻理子(調査研究専門員)、東 緋美(嘱託)、辻森由美子(嘱託)が担当した。
執筆分担は目次に記した。
5. 調査に関する記録・遺物は石川県金沢城調査研究所で保管している。
6. 調査・報告に際して、次の機関・個人から協力並びに指導・助言を賜った。
文化庁記念物課 防衛研究所戦史研究センター 公益財団法人前田育徳会
東京大学総合図書館 石川県立図書館 石川県立歴史博物館 金沢市教育委員会
金沢市立玉川図書館 松井建設
北浦 勝 北垣聰一郎 北野博司 田中哲雄 新谷洋二 橋本澄夫 平井 聖
堀内秀樹 横山隆昭 吉岡康暢 (敬称略)

凡 例

1. 本書の水平基準は海拔高を表し、東京湾平均海面標高（T.P.）である。
2. 方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の日本測地系第Ⅷ系に準拠した。
3. 石垣については、金沢城内の統一 ID 番号を付した。
4. 平面図における、上端・下端間のケバ種や線種、太さについては、下記の線種表の通りである。
5. 遺物名は次の略号を使用した。

P：土器・陶磁器・土製品 T：瓦 M：金属製品 S：石製品・骨製品

6. 遺物実測図図版（第 32～54、73、74、91～95、111～113、131～133 図）・遺物写真図版（写真図版 36～66）の遺物番号は、ゴシック体が本書報告番号、明朝体が遺物 ID（調査 ID 番号－実測番号）を表す。報告番号は遺物の種別ごとに 3 桁の通し番号を付している。調査 ID 番号は以下の通りである。

199902：平成 11 年度新丸第 1 次調査 199904：平成 11 年度鶴ノ丸第 1 次調査

199907：平成 11 年度二ノ丸園路調査 200006：平成 12 年度尾坂門調査

200101：平成 13 年度教寄屋屋敷調査 200103：平成 13 年度尾坂門調査

7. 遺物番号は、本文・観察表・遺物実測図・写真図版において共通する。
8. 遺物観察表中の（ ）付き数値は残存値、[] 付き数値は復元値を表している。
9. 遺構・遺物実測図の縮尺に関しては、各図中に示した。
10. 石垣構築技術などに使用される用語については、下記の石垣用語表のとおりである。
11. 引用・参考文献は、一括して本文末に掲載した。

平面図線種表

	ケバ種	上端線/下端線	ケバ種	上端線/下端線	ケバ種	上端線/下端線
トレンチ		崖ケバ 実線	遺構(未完壁)	 長・短ケバ 一点線線	遺構壁の傾斜変換壁	 長・短ケバ (下端線なし)
近代以後		短・短ケバ 実線	遺構(検出のみ)	 長・短ケバ (下端線なし)	遺構以外 (土質壁)	実線・ケバなし
近世以前		長・短ケバ 実線	(壁のみで確認された遺構)	 長・短ケバ (下端線なし)	石(埋没部分)	--- 一点線線

石垣用語表

石垣部分名称

用語	読み	解説
壁石部	つさいし	石垣の面部分
隅角部	ぐうかくぶ	石垣の折れ部分、外側に折れるものを出角(ですみ)、内側に折れるものを入角(いりすみ)と呼ぶ
天端	てんぱ	石垣の上端
天端石	てんぱいし	石垣の最上部の石材
裾部	すそぶ	石垣が地面と接する部分
根石	ねいし	石垣の最下部の石
築石	つさいし	石垣を構築する石材、平石(ひらいし)とも言う
詰石	つめいし	築石の隙間に詰める小振りの石
角石	すみいし	隅角部に使用する石材
角脇石	すみわきいし	角石の側に位置する石材
目地	めじ	石材同士の隙間
勾配	こうばい	石垣の角度。直線のノリと曲線のソリからなる

石垣内部名称

用語	読み	解説
栗石	ぐりいし	築石の裏込めなどに用いられる円盤
押さえ	おさえいし	石垣を補強するために裏込めに入れた石材
介石	かいいし	石材の固定及び角度調整のため据え置く石材
捨石	すていし	栗石の内部に押石・介石に満たさない状態で置かれた石材
盛土	もりど	本来の地面の上に盛られた土

積み方名称

用語	読み	解説
布積み	ぬのづみ	石材を横方向に並べながら積む積み方
乱積み	らんづみ	横目地が通らず、不規則に積む積み方
谷積み	たにづみ	石材の長軸を交互に斜めにして積む積み方
算木積み	さんぎづみ	出隅を構成する 2 面に長い石材の長辺を交互に向けて積み上げる積み方

石材部分名称

用語	読み	解説
面	つら	石材の表面のうち、石垣の表面に位置する部分
大面	おおつら	角石の算木積みで使用した石材の表面のうち、控が大きい面
小面	こつら	角石の算木積みで使用した石材の表面のうち、控が小さい面
控	ひかえ	石材の奥行き
石尻	いしじり	石材の後ろ側
駒	こま	石材の面と尻の間
合際	あひば	石同士の接点

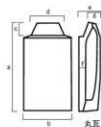
石垣使用石材名称

用語	読み	解説
自然石	しぜんせき	加工していない石。野面石・河川転石とも言う
削石	おろいし	削って、大きさを整えたり、面を滑らしたものを指す
粗加工石	あらかろいし	削石をノミ等で粗く加工した石材
切石	きりいし	面や合際まで加工した石材

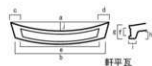
瓦計測部位凡例



軒丸瓦 (軒部) a 瓦当径 b 文様区径
c 内区径 d 瓦当厚

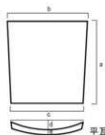


丸瓦 a 全長 b 体部幅 c 玉縁長
d 玉縁幅 e 体部高 f 体部厚
g 玉縁高

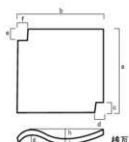


軒棧瓦

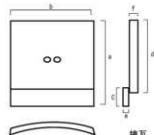
軒平瓦・軒棧瓦 (軒部・平部) a 上弧幅 b 下幅 c 右周縁
d 左周縁 e 文様区幅 f 文様区厚
g 瓦当厚 h 鬚高 i 顎下部高
j 弧深



平瓦 a 全長 b 広端幅 c 狭端幅
d 弧深 e 厚



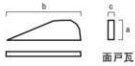
棧瓦 a 全長 b 全幅 c 平部切込長
d 平部切込幅 e 棧部切込長
f 棧部切込幅 g 棧部弧深
h 平部弧深 i 厚



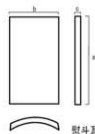
棟瓦 a 全長 b 全幅



輪遣い a 全長 b 広端幅 c 狭端幅
d 厚 e 高さ f 高さ



面戸瓦 a 全長 b 全幅 c 厚



製斗瓦 a 全長 b 全幅 c 厚

磁器胎土表記

	平滑性	光沢	器壁の空洞
1	極めて平滑	A 強い	a 目立たない
2	平滑	B 弱い	b 目立つ
3	凸凹目立つ		

陶器胎土表記

	硬さ	平滑性	砂粒	器壁の空洞
I	硬質	1 極めて平滑	A 希少	a 目立たない
II	軟質	2 平滑	B 細砂含む	b 目立つ
		3 凸凹目立つ	C 粗砂以上含む	

備瓦胎土表記

	胎質	粘土の調合	砂粒の量
A	硬質、緻密	1 断面縞状	礫、粗砂、細砂を微量、少量、多量で表記
B	軟質、空隙多い	2 断面縞状でない	例：礫微、粗砂多、細砂少
C	軟質、緻密、含有物なし		

目 次

第1章 経緯と経過	(滝川)	1
第1節 調査に至る経緯		1
第2節 調査の経過		2
第2章 歴史的環境	(本田)	7
第1節 金沢城跡と周辺の歴史的環境		7
第2節 金沢城の沿革		12
第3節 鶴ノ丸・二ノ丸・新丸の沿革		12
第4節 既往の調査成果		17
第3章 鶴ノ丸第1次調査区		21
第1節 調査の概要	(荒木)	21
第2節 遺構		21
第3節 出土遺物	(辻森・荒木)	43
第4節 小結	(荒木)	84
第4章 新丸第1次調査		89
第1節 調査の概要	(東)	89
第2節 遺構		92
第3節 出土遺物	(辻森・荒木)	113
第4節 小結	(東)	119
第5章 尾坂門調査区		121
第1節 調査の概要	(荒木)	121
第2節 遺構		121
第3節 出土遺物	(辻森・荒木)	142
第4節 小結	(荒木)	156
第6章 二ノ丸園路調査区		161
第1節 調査の概要	(安中)	161
第2節 遺構		161
第3節 出土遺物	(辻森)	177
第4節 小結	(滝川)	183
第7章 数寄屋敷調査区		184
第1節 調査の概要	(安中)	184
第2節 遺構		188
第3節 出土遺物	(辻森)	209
第4節 小結	(安中)	216
第8章 まとめ	(滝川)	219
引用・参考文献		220
報告書抄録		224
写真図版		225

図版目次

頁

第1図	調査区位置図 1	5
第2図	調査区位置図 2	6
第3図	金沢城の位置と周辺の近世遺跡	8
第4図	「御城中老分墓絵図」	11
第5図	「加州金沢之城図」	12
第6図	「金沢城図」	14
第7図	「金沢城惣後御普請等被仰付候絵図」	14
第8図	「御城分間御絵図」	15
第9図	「歩兵第七連隊構外木柵解除之圖」	15
第10図	「金澤旧城郭 第九師團司令部 歩兵第七聯隊 歩兵第六旅團司令部 第九師團城内被服庫 金澤憲兵隊配置図」	16
第11図	「歩兵第七聯隊図」	16
第12図	金沢城跡祭臺調査位置図(～平成27年度)	18
第13図	鶴ノ丸第1次調査区 調査区位置図	22
第14図	鶴ノ丸第1次調査区 調査区・絵図照合図	23
第15図	鶴ノ丸第1次調査区 平面図	24
第16図	鶴ノ丸第1次調査区 調査区北壁中央部付近平面図・土層断面図	26
第17図	鶴ノ丸第1次調査区 P07平面図・土層断面図	27
第18図	鶴ノ丸第1次調査区 P10平面図・土層断面図	28
第19図	鶴ノ丸第1次調査区 近代以降擾乱平面図・土層断面図	29
第20図	鶴ノ丸第1次調査区 石管検出状況・調査区南西部石管・粘土巻木樋平面図・土層断面図	32
第21図	鶴ノ丸第1次調査区 トレンチ1南壁土層断面図	33
第22図	鶴ノ丸第1次調査区 12号擾乱・4号擾乱平面図・土層断面図	34
第23図	鶴ノ丸第1次調査区 馬洗場下部構造粘土検出範囲・管路立会調査検出井戸状況図・写真	36
第24図	鶴ノ丸第1次調査区 石垣台(2330F・2330S・2330E)・基礎礎平面図	37
第25図	鶴ノ丸第1次調査区 石垣台(2330S・2330W)平面図・断面図	38
第26図	鶴ノ丸第1次調査区 石垣採取痕付近平面図・土層断面図	39
第27図	鶴ノ丸第1次調査区 基礎礎付近平面図・土層断面図	41
第28図	鶴ノ丸第1次調査区 調査区西壁北端付近平面図・土層断面図	42
第29図	軒丸・腰瓦分類	46
第30図	軒平・軒棧瓦分類	48
第31図	土師器皿の器形・胎土分類	50
第32図	鶴ノ丸第1次調査区 出土遺物実測図 土器・陶磁器 1	51
第33図	鶴ノ丸第1次調査区 出土遺物実測図 土器・陶磁器 2	52

第34図	鶴ノ丸第1次調査区 出土遺物実測図 土器・陶磁器 3	53
第35図	鶴ノ丸第1次調査区 出土遺物実測図 土器・陶磁器 4	54
第36図	鶴ノ丸第1次調査区 出土遺物実測図 土器・陶磁器 5	55
第37図	鶴ノ丸第1次調査区 出土遺物実測図 土器・陶磁器 6	56
第38図	鶴ノ丸第1次調査区 出土遺物実測図 土製品 1	57
第39図	鶴ノ丸第1次調査区 出土遺物実測図 土製品 2	58
第40図	鶴ノ丸第1次調査区 出土遺物実測図 土製品 3	59
第41図	鶴ノ丸第1次調査区 出土遺物実測図 土製品 3色分付図	60
第42図	既に用水粘土巻木樋模式図(構造)	61
第43図	既に用水粘土巻木樋模式図(連結部)	62
第44図	鶴ノ丸第1次調査区 出土遺物実測図 瓦 1	63
第45図	鶴ノ丸第1次調査区 出土遺物実測図 瓦 2	64
第46図	鶴ノ丸第1次調査区 出土遺物実測図 瓦 3	65
第47図	鶴ノ丸第1次調査区 出土遺物実測図 瓦 4	66
第48図	鶴ノ丸第1次調査区 出土遺物実測図 瓦 5	67
第49図	鶴ノ丸第1次調査区 出土遺物実測図 瓦当・刻印 1	68
第50図	鶴ノ丸第1次調査区 出土遺物実測図 瓦当・刻印 2	69
第51図	鶴ノ丸第1次調査区 出土遺物実測図 瓦当・刻印 3	70
第52図	鶴ノ丸第1次調査区 出土遺物実測図 瓦当・刻印 4	71
第53図	鶴ノ丸第1次調査区 出土遺物実測図 金属製品	72
第54図	鶴ノ丸第1次調査区 出土遺物実測図 石製品・骨製品	73
第55図	「二之御丸五正建御殿絵図」	86
第56図	鶴ノ丸第1次調査区 五正建御殿付近の絵図(近世前期・近世後期1)	87
第57図	鶴ノ丸第1次調査区 五正建御殿付近の絵図(近世後期2)	88
第58図	新丸第1次調査区 調査区位置図	90
第59図	新丸第1次調査区 調査区・絵図照合図	91
第60図	新丸第1次調査区 トレンチ1 平面図	100
第61図	新丸第1次調査区 トレンチ1 東壁土層断面図	101
第62図	新丸第1次調査区 トレンチ1 西壁土層断面図・石垣立面図	102
第63図	新丸第1次調査区 トレンチ2 平面図	103
第64図	新丸第1次調査区 トレンチ2 東壁土層断面図・石垣立面図	104
第65図	新丸第1次調査区 トレンチ3 平面図・北壁・東壁土層断面図	105

第66図	新丸第1次調査区	トレンチ4	平面図・西壁土層断面図	106
第67図	新丸第1次調査区	トレンチ5	平面図・南壁土層断面図	107
第68図	新丸第1次調査区	トレンチ6	平面図・北壁土層断面図	108
第69図	新丸第1次調査区	トレンチ8	平面図・北壁・西壁土層断面図	109
第70図	新丸第1次調査区	トレンチ9	平面図・西壁土層断面図	110
第71図	新丸第1次調査区	トレンチ10	平面図・西壁土層断面図	111
第72図	新丸第1次調査区	トレンチ11・12	平面図・土層断面図	112
第73図	新丸第1次調査区	出土遺物実測図	土器・陶磁器・金属製品・石製品	115
第74図	新丸第1次調査区	出土遺物実測図	瓦	116
第75図	新丸第1次調査区	近代以降の三ノ丸北垣の変遷		120
第76図	尾坂門調査区	調査区位置図		122
第77図	尾坂門調査区	調査区・絵図照合図		123
第78図	尾坂門調査区	検出色分け図		124
第79図	尾坂門調査区	2000-1地点	平面図	130
第80図	尾坂門調査区	2000-1地点	調査地点北部土層断面図	131
第81図	尾坂門調査区	2000-1地点	調査地点南壁土層断面図	132
第82図	尾坂門調査区	2000-1地点	石組礎1石垣面土層断面図・石垣面石材色分け図・西土土層断面図	133
第83図	尾坂門調査区	2000-1地点	調査地点東壁土層断面図	134
第84図	尾坂門調査区	2001-1地点	平面図・調査地点北壁土層断面図	135
第85図	尾坂門調査区	2001-2地点	平面図・調査地点北壁土層断面図	136
第86図	尾坂門調査区	2001-3地点	平面図・石組側溝1模式図・2001-4地点 路面1・2模式図	137
第87図	尾坂門調査区	2001-4地点	平面図・調査地点西・北壁土層断面図	138
第88図	尾坂門調査区	2001-5地点	調査地点東壁土層断面図	139
第89図	尾坂門調査区	2001-6地点	平面図	140
第90図	尾坂門調査区	2001-6地点	調査地点土層断面図(北・南トレンチ)・石組側溝1断面模式図	141
第91図	尾坂門調査区	出土遺物実測図	土器・陶磁器1	146
第92図	尾坂門調査区	出土遺物実測図	土器・陶磁器2	147
第93図	尾坂門調査区	出土遺物実測図	瓦1	148
第94図	尾坂門調査区	出土遺物実測図	瓦2	149

第95図	尾坂門調査区	出土遺物実測図	瓦柘木・金属・石製品	150
第96図	尾坂門付近の絵図(近代以降)			157
第97図	尾坂門調査区	尾坂門付近の絵図(近世)		158
第98図	尾坂門調査区・新丸第2次調査区合成			160
第99図	二ノ丸園路調査区	調査区位置図		162
第100図	二ノ丸園路調査区	調査区・絵図照合図		163
第101図	二ノ丸園路調査区	平面図		164
第102図	二ノ丸園路調査区	裏口門周辺平面図		165
第103図	二ノ丸園路調査区	中央部平面図		166
第104図	二ノ丸園路調査区	南部平面図		167
第105図	二ノ丸園路調査区	裏口門南石垣1・2	平面図・断面図	169
第106図	二ノ丸園路調査区	裏口門東石垣・南石垣間断面図		170
第107図	二ノ丸園路調査区	裏口門東・西石垣・土橋門東・西石垣立面図		171
第108図	二ノ丸園路調査区	礎石・ピット平面図・断面図		173
第109図	二ノ丸園路調査区	溝状遺構(SD01～SD03)平面図		175
第110図	二ノ丸園路調査区	SX01平面図・略断面図、SX02平面図		176
第111図	二ノ丸園路調査区	出土遺物実測図	土器・陶磁器1	179
第112図	二ノ丸園路調査区	出土遺物実測図	土器・陶磁器2	180
第113図	二ノ丸園路調査区	出土遺物実測図	瓦・金属製品	181
第114図	数寄屋敷調査区	調査区位置図		186
第115図	数寄屋敷調査区	調査区位置図・絵図照合図		187
第116図	数寄屋敷調査区	風呂屋口門地点遺構平面図・中央部断面図		189
第117図	数寄屋敷調査区	風呂屋口門地点	石段1立面図・土層断面図	192
第118図	数寄屋敷調査区	風呂屋口門地点	石垣立面図	193
第119図	数寄屋敷調査区	風呂屋口門地点	石段1立面図	194
第120図	数寄屋敷調査区	風呂屋口門地点	石段1下段北平面図・土層断面図	195
第121図	数寄屋敷調査区	風呂屋口門地点	石段1下段西土層断面図	196
第122図	数寄屋敷調査区	風呂屋口門地点	石段1下段南土層断面図	197
第123図	数寄屋敷調査区	風呂屋口門地点	石組溝1A・1B平面図・立面図	198
第124図	数寄屋敷調査区	数寄屋門北地点	遺構平面図	200

第125図	数寄屋敷調査区	数寄屋門北地点	西壁・露橋 2 土層断面図	201
第126図	数寄屋敷調査区	数寄屋門北地点	石段 2・3 平面図・断面図	203
第127図	数寄屋敷調査区	数寄屋門北地点	石組溝 2・3 平面図・断面図	204
第128図	数寄屋敷調査区	司令部門南地点	遺構平面図	206
第129図	数寄屋敷調査区	司令部門南地点	土層断面図	207
第130図	数寄屋敷調査区	司令部門南地点	検出面・土層 断面色分け図	208
第131図	数寄屋敷調査区	出土遺物実測図	陶磁器	211
第132図	数寄屋敷調査区	出土遺物実測図	瓦・金属製品	212
第133図	数寄屋敷調査区	出土遺物実測図	石製品・煉瓦	213
第134図	数寄屋敷調査区	数寄屋敷の絵図(近世)		217
第135図	数寄屋敷調査区	数寄屋敷の絵図・図面 (近世・近代)		218

表目次

頁

第1表	周辺の近世遺跡地名表	9
第2表	金沢城の沿革	13
第3表	金沢城跡発掘調査一覧(1)	19
第4表	金沢城跡発掘調査一覧(2)	20
第5表	鶴ノ丸第1次調査区 近現代遺構計測表 1	25
第6表	鶴ノ丸第1次調査区 近現代遺構計測表 2	25
第7表	鶴ノ丸第1次調査区 出土遺物観察表 土器・陶磁器 1	74
第8表	鶴ノ丸第1次調査区 出土遺物観察表 土器・陶磁器 2	75
第9表	鶴ノ丸第1次調査区 出土遺物観察表 土器・陶磁器 3、土製品	76
第10表	鶴ノ丸第1次調査区 出土遺物観察表 瓦 1	77
第11表	鶴ノ丸第1次調査区 出土遺物観察表 瓦 2	78
第12表	鶴ノ丸第1次調査区 出土遺物観察表 瓦 3	79
第13表	鶴ノ丸第1次調査区 出土遺物観察表 瓦 4	80
第14表	鶴ノ丸第1次調査区 出土遺物観察表 瓦 5	81
第15表	鶴ノ丸第1次調査区 出土遺物観察表 瓦 6	82
第16表	鶴ノ丸第1次調査区 出土遺物観察表 瓦 7・金属製品・石製品・骨製品	83
第17表	新丸第1次調査区 出土遺物観察表 土器・陶磁器・金属製品・石製品	117
第18表	新丸第1次調査区 出土遺物観察表 瓦	118
第19表	尾坂門調査区 切石列1構成切石計測表	125
第20表	尾坂門調査区 建物基礎構成切石計測表	125
第21表	尾坂門調査区 道路縁石構成切石計測表	127
第22表	尾坂門調査区 石段1構成切石計測表	128
第23表	尾坂門調査区 出土遺物観察表 土器・陶磁器 1	151
第24表	尾坂門調査区 出土遺物観察表 土器・陶磁器 2	152
第25表	尾坂門調査区 出土遺物観察表 土器・陶磁器 3	153
第26表	尾坂門調査区 出土遺物観察表 瓦 1	154
第27表	尾坂門調査区 出土遺物観察表 瓦 2・金属製品・石製品	155
第28表	二ノ丸園路調査区 石垣1・2(S1~S11)計測表	168
第29表	二ノ丸園路調査区 礎石・ピット計測表	172
第30表	二ノ丸園路調査区 出土遺物観察表 土器・陶磁器・瓦・金属製品	182
第31表	数寄屋敷調査区 風呂口門地点 石段1石計測表	189
第32表	数寄屋敷調査区 風呂口門地点 石組溝 1A・1B計測表	198
第33表	数寄屋敷調査区 数寄屋門北地点 路面1~6計測表	203

第34表	数寄屋敷調査区	数寄屋門北地点	石段2・3計測表	203
第35表	数寄屋敷調査区	数寄屋門北地点	石組溝2・3計測表	204
第36表	数寄屋敷調査区	出土遺物観察表	陶磁器・金属製品・石製品・煉瓦	214
第37表	数寄屋敷調査区	出土遺物観察表	瓦	215

写真図版目次

写真図版1	鶴ノ丸第1次調査区1	
写真図版2	鶴ノ丸第1次調査区2	
写真図版3	鶴ノ丸第1次調査区3	
写真図版4	鶴ノ丸第1次調査区4	
写真図版5	鶴ノ丸第1次調査区5	
写真図版6	新丸第1次調査区1	
写真図版7	新丸第1次調査区2	
写真図版8	新丸第1次調査区3	
写真図版9	新丸第1次調査区4	
写真図版10	新丸第1次調査区5	
写真図版11	新丸第1次調査区6	
写真図版12	尾坂門調査区1	
写真図版13	尾坂門調査区2	
写真図版14	尾坂門調査区3	
写真図版15	尾坂門調査区4	
写真図版16	尾坂門調査区5	
写真図版17	尾坂門調査区6	
写真図版18	尾坂門調査区7	
写真図版19	尾坂門調査区8	
写真図版20	尾坂門調査区9	
写真図版21	尾坂門調査区10	
写真図版22	二ノ丸園路調査区1	
写真図版23	二ノ丸園路調査区2	
写真図版24	二ノ丸園路調査区3	
写真図版25	二ノ丸園路調査区4	
写真図版26	二ノ丸園路調査区5	
写真図版27	二ノ丸園路調査区6	
写真図版28	数寄屋敷調査区	風呂屋口門地点1
写真図版29	数寄屋敷調査区	風呂屋口門地点2
写真図版30	数寄屋敷調査区	風呂屋口門地点3
写真図版31	数寄屋敷調査区	風呂屋口門地点4
写真図版32	数寄屋敷調査区	風呂屋口門地点5
写真図版33	数寄屋敷調査区	数寄屋門北地点1
写真図版34	数寄屋敷調査区	数寄屋門北地点2
写真図版35	数寄屋敷調査区	司令部南地点

写真図版36	鶴ノ丸第1次調査区	出土遺物	土器・陶磁器1
写真図版37	鶴ノ丸第1次調査区	出土遺物	土器・陶磁器2
写真図版38	鶴ノ丸第1次調査区	出土遺物	土器・陶磁器3
写真図版39	鶴ノ丸第1次調査区	出土遺物	土器・陶磁器4
写真図版40	鶴ノ丸第1次調査区	出土遺物	土器・陶磁器5
写真図版41	鶴ノ丸第1次調査区	出土遺物	土器・陶磁器6
写真図版42	鶴ノ丸第1次調査区	出土遺物	土製品
写真図版43	鶴ノ丸第1次調査区	出土遺物	瓦1
写真図版44	鶴ノ丸第1次調査区	出土遺物	瓦2
写真図版45	鶴ノ丸第1次調査区	出土遺物	瓦3
写真図版46	鶴ノ丸第1次調査区	出土遺物	瓦4
写真図版47	鶴ノ丸第1次調査区	出土遺物	瓦当・刻印1
写真図版48	鶴ノ丸第1次調査区	出土遺物	瓦当・刻印2
写真図版49	鶴ノ丸第1次調査区	出土遺物	瓦当・刻印3
写真図版50	鶴ノ丸第1次調査区	出土遺物	瓦当・刻印4
写真図版51	鶴ノ丸第1次調査区	出土遺物	金属製品
写真図版52	鶴ノ丸第1次調査区	出土遺物	石製品・骨製品
写真図版53	新丸第1次調査区	出土遺物	土器・陶磁器・金属製品・石製品
写真図版54	新丸第1次調査区	出土遺物	瓦
写真図版55	尾坂門調査区	出土遺物	土器・陶磁器1
写真図版56	尾坂門調査区	出土遺物	土器・陶磁器2
写真図版57	尾坂門調査区	出土遺物	土器・陶磁器3
写真図版58	尾坂門調査区	出土遺物	瓦1
写真図版59	尾坂門調査区	出土遺物	瓦2
写真図版60	尾坂門調査区	出土遺物	瓦当・刻印・金属製品・石製品
写真図版61	二ノ丸園路調査区	出土遺物	土器・陶磁器1
写真図版62	二ノ丸園路調査区	出土遺物	土器・陶磁器2
写真図版63	二ノ丸園路調査区	出土遺物	瓦・金属製品
写真図版64	数寄屋敷調査区	出土遺物	陶磁器
写真図版65	数寄屋敷調査区	出土遺物	瓦・金属製品
写真図版66	数寄屋敷調査区	出土遺物	石製品・煉瓦

第1章 経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

1. 金沢城公園の開設

金沢城は、16世紀半ばに成立した金沢御堂（金沢坊舎）を前身とし、天正8年（1580）以降、織田政権下の城郭となった。天正11年（1583）には前田利家が入城し、これより前田家歴代当主14代が約300年間にわたり城主となり、江戸幕府成立後最大の大名の居城として機能した。

明治初年から旧金沢城内は兵部省（のちの陸軍省）の所管となり、昭和20年（1945）まで第九師団司令部や歩兵第六旅団司令部、歩兵第七連隊の兵舎が立ち並ぶ陸軍の拠点であった。第二次世界大戦後の昭和24年（1949）には文部省の所管となり金沢大学が開学し、金沢城跡は大学キャンパスとして利用されてきた。

昭和53年（1978）、城内キャンパスは金沢市郊外の角間地区への移転を決定し、平成5年（1993）3月に総合移転を完了した。大学跡地の取り扱いは、平成3年（1991）8月に設置された金沢大学跡地利用懇話会で検討され、平成5年3月の「公園的、文化的利用を基本とする」との提言を受けて、公園化に向けた動きが始まった。

県は、この提言に沿って、平成7年（1995）3月に「金沢城跡整備実施設計報告書」をとりまとめ、平成8年（1996）1月に28.5haを都市公園に利用する都市計画を決定し、同年3月に国から大学跡地21.77haを取得した。平成8年度に始まった金沢城公園整備は、平成16年度（2004）までを公園としての基盤整備とする10か年計画に基づき、①敷地環境の整備、調査（不要建物の撤去、石垣修景等）、②広場、園地等の整備（二ノ丸等各种広場、幹線園路、便益施設等）、③城郭建造物の復元（菱櫓・五十間長屋・橋爪門統櫓、内堀等）を進めることとした。

公園の開設は、平成9年度（1997）の本丸等の暫定開園に始まり、平成13年（2001）9月の「全国都市緑化いしかわフェア」の開催を期に、公園計画区域のほぼ全域を開園した。

2. 公園開設に伴う発掘調査

公園整備の実施に先立ち、県教育委員会文化財課と県土木部公園緑地課は、金沢城跡が周知の埋蔵文化財包蔵地であることから、工事に伴い埋蔵文化財に影響が生じる場合は前もって発掘調査等の保護措置を講ずるべく、事前協議を進めていた。

その結果、平成9年度（1997）に県立埋蔵文化財センターが実施した内堀及び菱櫓台石垣上面遺構の確認調査を皮切りに、園地整備に係る工事設計と埋蔵文化財調査がほぼ同時並行状態で急ピッチに進み、平成10年（1998）には、新たに設立された財団法人石川県埋蔵文化財センターを調査担当として、いもり堀、本丸附段階段、菱櫓南（五十間長屋折曲部）、三ノ丸北便所の発掘調査、平成11年（1999）には、前年度から継続の建物復元整備に伴う内堀・五十間長屋に加えて、新丸広場（湿性植物園）、三ノ丸休憩所、新丸大手門便所、鶴ノ丸便所、二ノ丸園路等の整備に係る発掘調査が行われた。

公園整備に係る調査は以後も引き継がれ、平成12年度（2000）には北ノ丸（御宮・藤右衛門丸）、尾坂門、三ノ丸北、鶴ノ丸、いもり堀等、平成13年度（2001）には数寄屋屋敷（風呂屋口門等）、橋爪門、尾坂門等で、園路整備等に伴う遺構確認調査が実施されている。

本書で報告する対象は、このうち平成11年度に実施した鶴ノ丸第1次（鶴ノ丸便所）・新丸第1次（湿性植物園）・二ノ丸園路、12・13年度に実施した尾坂門、13年度に実施した数寄屋屋敷（風呂屋口門等）の各調査地点である。

3. 各地点の調査経緯

平成9・10年度は、内堀・菱橋等・いもり堀等、復元整備に伴う調査が主体であったが、平成11年度以降は便益施設・園路整備が急ピッチで進められ、これに伴う調査が増加した。本書で扱った調査においても、鶴ノ丸第1次調査は便益施設（トイレ）建設、二ノ丸園路・数寄屋敷調査は園路整備、尾坂門は園路整備及び植栽工事に伴うものである。これらの工事に際しては、近世遺構に影響を及ぼさない範囲で実施するよう調整を図る一方、遺構の調査についても基本的には検出のみとし、部分的な掘り下げ・断割を行うに留めた。

新丸広場の整備については、近代以後埋没した堀の上面に湿性の植物園を設けるというもので、公園整備計画の早い段階から構想されていたが、平成11年1月22日、教育委員会文化財課が主管する平成11年度事業調整会において、遺構の遺存レベルを確認し、影響を生じない範囲での施工を行う目的で、調査要箇所として挙げられた。なお、整備に係り総合的・専門的視点からの修築・復元の指針を検討し、提言することを目的に設置された「金沢城址の石垣、櫓に関する修築・復元専門委員会」の指導のもと、当初の整備計画のうち北岸平面や南西側護岸等の形状について、発掘調査結果及び近世後期の絵図描写に基づき修正されることとなった。

4. 公園開設後の動向

平成13年度以降の動向については、[石川県金沢城調査研究所 2015b・2015c]に詳しく、以下では概略のみ記述する。

石川県は、平成13年7月、金沢城の調査研究、関連資料の整理・収集、関連城郭の調査研究、調査成果の普及・啓発等を目的として、県教育委員会文化財課内に金沢城研究調査室を設置し、金沢城に係る学術的な調査研究を推進することとした。また一方で、今後の金沢城公園の整備計画を検討するため、平成16年（2004）2月に「金沢城復元基本方針検討委員会」を設置し、金沢城公園の復元整備の基本的な考え方、復元に際しての留意点等について検討を加え、①復元にあたっては史実の十分な調査と検証を行い、史実性の高い整備を行うこと、②復元に際しての時代設定は基本的に江戸時代後期に統一すること、③多様な公園機能にも配慮すること、④復元はゾーン別の保全・整備や活用方針等を踏まえて長期的視点も含めた段階的な取り組みを進めること、等の基本方針を示した。

この基本方針に基づき、平成18年（2006）5月には第二期整備計画を策定し、三御門（石川門、河北門、橋爪門）の整備、いもり堀の段階復元、石垣の保全・活用、玉泉院丸庭園の調査検討を実施することとした。これら整備に係る調査については、石川県金沢城調査研究所（平成19年度に金沢城研究調査室より改組）が、主管部局である土木部の依頼により対応しており、平成27年度現在、第三期整備に係る発掘調査（鼠多門）を行っている。

なお、平成20年（2008）1月11日に、金沢城跡の主要部分275,155.14㎡について、石川県が文部科学大臣に国史跡指定の申請を行い、平成20年5月16日に国の文化審議会の文部科学大臣への答申を得て、平成20年6月17日付け文部科学省告示第100号で国の史跡に指定された。

第2節 調査の経過

1. 発掘調査の経過

[平成11年度（1999）]

当該年度の発掘調査については、土木部公園緑地課の依頼を受けた石川県教育委員会から財団法人石川県埋蔵文化財センターに委託され、4月1日付けで業務委託契約が締結された。文化財保護法第57条第1項に基づく発掘調査届出書は4月1日付け及び7月6日付けで提出された。

当該年度の金沢城内の調査区は数多く、二ノ丸五十間長屋・内堀第2次・三ノ丸第3次・橋爪門外

橋脚脚・新丸第1次・三ノ丸第2次・鶴ノ丸第1次・新丸第2次・二ノ丸園路の9地点に及んだ。本書で報告するのはこのうち新丸第1次（湿性植物園）・鶴ノ丸第1次（鶴ノ丸便所）・二ノ丸園路の3地点である（他は報告済）。

鶴ノ丸第1次調査区（第1図①）は、鶴ノ丸西端にあった五正建庵の敷地に相当する。本調査以前に周辺では文化財課による工事立会・試掘が複数回行われている。このうち本年5月に行われた、本調査区の南側を通る管路設置に係る工事立会では、馬洗場に水を供給した井戸が検出されている。また6月に実施された試掘調査では、トイレ建設予定範囲南西部で辰巳用水石管を検出し、遺存状況の良好さや標高等を確認した。調査面積は約270㎡で、現地作業は10月13日から翌12年1月14日にかけて実施した。調査着手後早々に、調査区全体にわたり、近代以後の遺構・掘り込みが広がっていることが判明した。これらに影響を受けた近世遺構の確認作業に手間取ることとなったが、辰巳用水、馬洗場、橋爪門西側の石垣台、塀基礎等の遺構を確認することができた。中でも辰巳用水に係る遺構として、試掘時に確認した石管に加え、先行する木樋等を二筋検出した。12月17日に空中写真測量を実施し、同月28日には、木樋本体を粘土で巻いた導水管（SD02）について、その一部の取り上げを行った。

新丸第1次調査区（第2図）は、新丸の南縁西側、三ノ丸北堀北辺西側一帯に相当する。第1節3の経緯で示した通り、近代に埋立てられた堀の北辺ライン等の検出を目的に、11か所のトレンチを配置することとした。調査面積は約630㎡で、現地作業は7月29日から10月5日にかけて実施した。調査の結果、北辺ライン上と想定したほとんどのトレンチで、堀に関連する遺構を確認した。近代以後の削平を考慮に入れると、近世後期の絵図における描写とおおよそ一致する状況であった。

二ノ丸園路調査区（第1図③）は、二ノ丸御殿西側の敷地に相当し、裏口門からいもり坂口を結ぶ範囲を対象とする。調査面積は約220㎡で、現地作業は11月24日から12月8日にかけて実施した。検出遺構については、近代以後に撤去された裏口門南石垣の基礎、明治14年（1881）の二ノ丸火災を窺わせる被災遺物に覆われた石組、礫混じり粘質土を壁・底とする溝状遺構、礎石等を検出した。なお一帯の側溝工事に伴い露呈した裏口門東・西、土橋門東・西石垣の下部についても図面作成等を行った。

〔平成12年度（2000）〕

当該年度の発掘調査については、土木部公園緑地課の依頼を受けた石川県教育委員会から財団法人石川県埋蔵文化財センターに委託され、4月3日付けで業務委託契約が締結された。文化財保護法第57条第1項に基づく発掘調査届出書は4月7日付けで提出された。

調査区は、鶴ノ丸第2次（橋爪門枳形地点）、北ノ丸第1次（御宮・藤右衛門丸地点）、三ノ丸第4次（河北門・河北坂地点）、いもり堀第2次（稲荷屋敷下地点）、同3次（土橋地点・鯉喉橋地点）、新丸第3次（尾坂門地点）、本丸附段第2次の7地点で、このうち本書で報告するのは新丸第3次調査区である（他は鶴ノ丸第2次・三ノ丸第4次が報告済）。なおこの新丸第3次調査区については、翌13年度に隣接地点を尾坂門調査区と呼称したこともあり、本書においては尾坂門調査区に含め、2000-1地点として呼称することとした。

尾坂門調査区（2000-1地点）（第1図②）は、尾坂門周辺の園路整備に伴い設定したもので、門及び前方の通路に相当する。調査面積は約100㎡で、現地作業は12月6日から25日にかけて実施した。本調査区では中央に近代～現代の配管が重複し、近世の面は大きく損壊を受けていたが、調査区南東部では、これら掘り込みの下位に中世末から近世初頭にかけての遺構群を確認し、金沢城成立前後の様相を探る上で重要な所見を得た。12月20日には写真測量を行い、25日に現地作業を完了した。

〔平成13年度（2001）〕

当該年度の発掘調査については、土木部公園緑地課の依頼を受けた石川県教育委員会から財団法人石

川県埋蔵文化財センターに委託され、4月1日付けで業務委託契約が締結された。文化財保護法第57条第1項に基づく発掘調査届出書は4月23日付けで提出された。埋蔵文化財に係る調査はいずれも小規模で、年度の前半で完了している。

遺構が確認された調査区は、尾坂門、数寄屋屋敷（風呂屋口門等）、橋爪門、三ノ丸九十間長屋跡の4地点で、このうち本書で報告するのは尾坂門・数寄屋屋敷（風呂屋口門等）の2地点である。

尾坂門調査区(2001-1～6地点)(第1図②)は植栽工事に伴い設定したもので、前年度調査範囲の北・東・南側に隣接する。調査面積は約40㎡で、現地作業は4月23日から5月2日にかけて実施し、近世の路面や石組側溝等を検出した。

数寄屋屋敷調査区(第1図③)は二ノ丸西側(数寄屋屋敷)に位置し、風呂屋口門・数寄屋門北・司令部門南の3地点に細別される。調査面積は約100㎡で、現地作業は5月15日から6月26日にかけて実施した。近代の遺構・造成土が多くを占めたが、一部近世の石段・石組溝等を確認した。

2. 出土品整理の経過

大部分については石川県教育委員会から委託を受けて財団法人石川県埋蔵文化財センターが実施し、一部金沢城調査研究所が補足した。前者の委託事業について、今回の報告対象調査区に係る部分を抄出する。

[平成13年度(2001)]

鶴ノ丸第1次調査で出土した陶磁器・瓦・金属製品・石製品等の記名・分類・接合・実測・トレースを実施した。

[平成15年度(2003)]

尾坂門調査で出土した陶磁器・瓦・金属製品・石製品等の実測・トレースを実施した。

[平成16年度(2004)]

新丸第1次・二ノ丸園路・数寄屋屋敷調査で出土した陶磁器・瓦・金属製品等の記名・分類・接合・実測・トレースを実施した。

3. 委員会等

委員会組織としては、公園整備に関する基本的な事項全般を検討することを目的とした「金沢城址公園整備懇話会」、石垣・櫓について、総合的、専門的視点からの修築・復元の指針を検討し、提言を行うことを目的とした「金沢城址の石垣、櫓に関する修築・復元専門委員会」等が設置された。本書に特に関連する部分として、新丸第1次調査区の調査・整備に関する意見を得た。後者の委員構成、開催日程等は下記の通りである。

委員

新谷洋二(東京大学名誉教授) 橋本澄夫(金沢学院大学教授) 平井 聖(東京工業大学名誉教授)

北浦 勝(金沢大学教授) 吉岡康暢(国立歴史民俗博物館名誉教授) 田中哲雄(東北芸術工科大学教授)

*役職名は委嘱当時のもの

開催日程

第1回:平成11年3月29日 第2回:平成11年4月29日 第3回:平成11年5月17日

第4回:平成11年6月3日 第5回:平成11年7月12日 第6回:平成11年9月9日

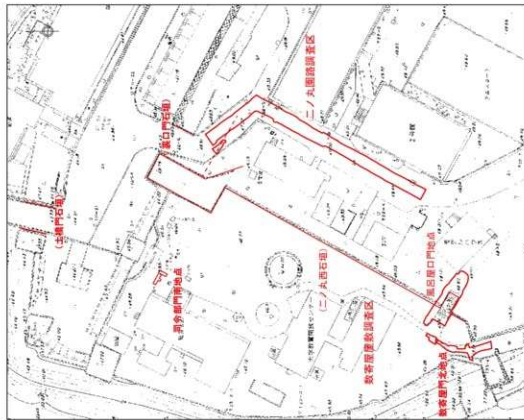
第7回:平成12年2月14日 第8回:平成12年7月1日



① 鶴ノ丸第1次調査区



② 尾坂門調査区

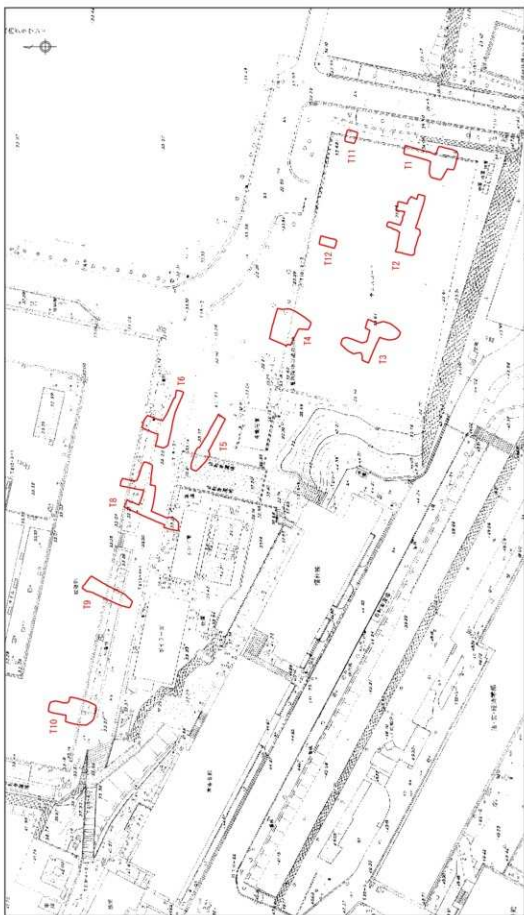


③ 二ノ丸園路・教客歴教調査区



第1図 調査区位置図1 (S=1/1,000)

* 下図は金沢大学校舎配置図



新丸第1次調査区

0 (S=1/1,000) 50m

※ 下図は金沢大学校舎配置図

第2図 調査区位置図2 (S=1/1,000)

第2章 歴史的環境

第1節 金沢城と周辺の歴史的環境

金沢市街地のほぼ中央を占める金沢城跡は、南東の山地帯より流れ出す犀川・浅野川によって形成された、細長く伸びる小立野台地の先端部に位置する。城外との比高差は、低所に位置する新丸においては約10m、最高所である本丸で30m以上を測る。本丸からは低地の金沢平野のみならず小立野台地方面についても眺望が叶う。また、城のある台地先端部とその南東に続く台地本脈との間には、自然谷が形成されていたらしく〔藤1999〕、城付近の地形は、人の手が加わる以前から独立丘的な状況を呈していたようであり、城は自然地形を巧みに利用して築かれたことが推察される。

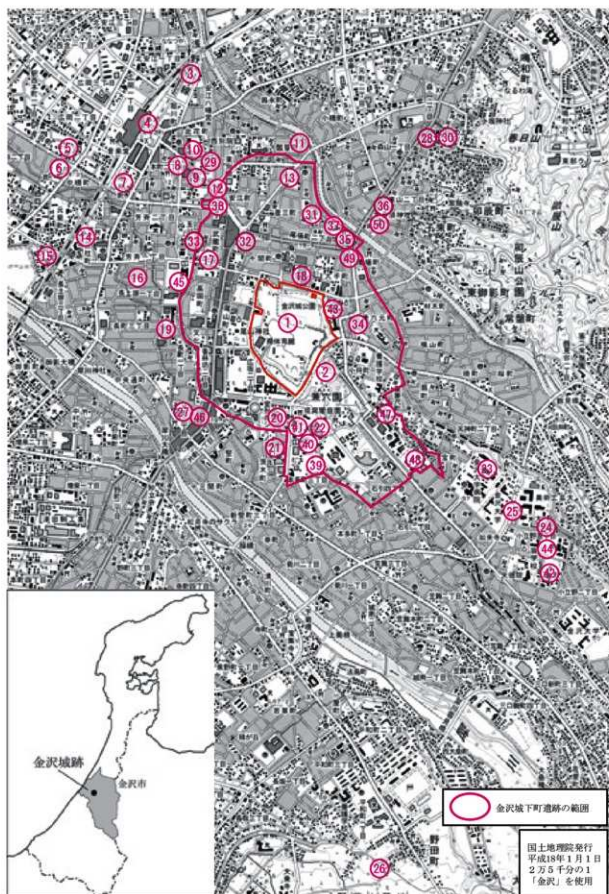
城下町は金沢城を中心に、小立野台地を含む河岸段丘から沖積平野に展開している。外堀としての内惣構堀、外惣構堀が城を遠巻きに二重に囲み、旧北国街道は金沢城を東に迂回するよう城下町を通る。それらを基幹として城下町と各地を繋ぐ街道や街路が整備された。これら城下町の基本的な構造は、現在の市街地に引き継がれ、城下町の町並を色濃く反映している様態は、歴史都市・金沢を特徴づける要素の一つになっている。

金沢城周辺の市街化は、絵図等の資料から近世以降の状況が確認できるものの、それ以前の姿については遺跡を含め判然とはしなかった。近年、城跡自体や城地に隣接する前田氏（長種系）屋敷跡地点〔石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター 2002e〕、広坂1丁目遺跡〔金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2004b・2005b・2006b・2007c・2009c〕、丸の内7番地点〔石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター 2014a〕の発掘調査、惣構堀復元整備に伴う確認調査〔金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2008a・2011b・2011c・2012d・2013b・2014c〕や市街地再開発等に伴う諸所の発掘調査等により、その姿を垣間見ることが可能となった。また平成23年4月1日には、第3図の赤線内の範囲が金沢城下町遺跡として周知された。（これにより遺跡名が金沢城下町遺跡〇〇地点、〇〇地区と改称された箇所もあり、以下では金沢城下町遺跡の内、名称変更された遺跡は金沢城下町遺跡を省略して、〇〇地点、〇〇地区と表記し、金沢城跡内については第3・4表の調査箇所名で表記する）。

金沢城周辺の最も古い遺跡は旧石器時代の遺跡で、城外縁の車橋、石川門前土橋、丸の内7番地点の調査で数点の石器が出土している。県内において数少ない当該期の遺跡のあり方を示すものとして注目される。縄文時代については、丸の内7番地点で草創期の有舌尖頭器が採取されている他、城内の幾つかの調査区で遺物の出土が確認されるとともに、城地北側の前田氏（長種系）屋敷跡地点で、後期の陥穴が検出されている。城下の調査でも、まとまった面積の調査が実施された地点では遺物の出土がみられ、今後その実態が明らかになることを期待したい。

弥生時代は、前田氏（長種系）屋敷跡地点で弥生時代後期後半～終末期の墳丘墓が確認され、広坂1丁目遺跡では中期の土器が出土し、後期後半の竪穴建物等が検出されている。古墳時代は、高岡町地点〔石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター 2002d、金沢市教育委員会（金沢市埋蔵文化財センター）2001a、金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2003b〕で前期の竪穴建物が確認され、下本多町遺跡〔金沢市埋蔵文化財センター 1999〕や彦三町一丁目地点〔金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2007a〕では中期の遺構が、広坂1丁目遺跡では前期、後期の土器の他、車輪石や勾玉等の遺物が出土しており、後に隆盛となる集落の母体が出来上がっていたものと考えられる。

古代では、城内の平成9年度の調査において8～9世紀代の掘立柱建物跡が検出された他、断片的ではあるが、幾つかの調査区で遺構、遺物が確認されている。城下では高岡町地点で7世紀後半の竪穴建物や、半瓦当を含む古式瓦、奈良、平安時代の掘立柱建物と、円面硯、帯金具、奈良三彩等



第3図 金沢城跡の位置と周辺の近世遺跡 (S=1/25,000)

第1表 周辺の近世遺跡地名表

No.	遺跡名	調査年度	遺跡の位置		文献
			主要地帯	特記事項	
1	金沢城跡	1906(1)	城郭	(国史)	(国史)
2	東ノ堀	1906(1)	堀跡	(国史)	(国史)
3	本ノ御遺跡(丸目寺遺跡)	88(1993)・89(1997)	寺院(墓所)	近世墓20基	福山1997, 金沢市埋蔵文化財センター2004
4	本ノ御遺跡	89(1993)	寺院(「聖徳」一室経塚跡・下級武家墓, 町人墓, 居住)	石造墓, 木造経塚(菅井戸・竹塚), 礎(礎・ふししろふ), 埋物箱(土蔵基盤, 木)	(財)石川市埋蔵文化財センター2005 金沢市埋蔵文化財センター2005
5	藤ノ井遺跡	87(1992)~89(1996)	石造地蔵・下級武家墓	奈良式(証之式)下級墓 木造, 木造経塚(竹塚・藤野)	金沢市埋蔵文化財センター2004 財)石川市埋蔵文化財センター2004
6	長沢町遺跡	88(1993)	下級武家墓		金沢市埋蔵文化財センター1998
7	塚崎町遺跡	88(1993)~87(1991)	町人墓・下級武家墓	延享3年(1817)穴瓦葺納土上, 高松原瓦葺土表の礎石	金沢市埋蔵文化財センター2001a・2003a・2004
8	本町一丁目遺跡(第1次)	87(1992)	町人墓	惣業土上, 礎石木製品多数	金沢市教育委員会1995
9	本町一丁目遺跡(第2次)	88(1993)	町人墓	礎石遺構	金沢市教育委員会1997b
10	本町一丁目遺跡(第3次)	89(1997)	町人墓		金沢市埋蔵文化財センター2003c
11	狐塚町遺跡	88(1993)	上級武家墓	奈良式(土壁式)土屋敷 埋物箱(土蔵物倉敷土)	金沢市教育委員会1991
12	笠江町遺跡	83(1983)~84(1982)	町人墓・中級武家墓	寛政彫刻(高松土上), 礎石木製品多数, 「墓石」(墓石付出土)	金沢市教育委員会1997a
13	金沢城下町遺跡(高ノ町地点)	81(1980)	中級武家墓		金沢市埋蔵文化財センター2002
14	三光町遺跡	83(1983)・88(1993)	石造佛一町人墓	道路・御蔵, 礎石納土, 銅人形かしら	(財)石川市埋蔵文化財センター2001・2007
15	三光町遺跡	88(1993)・81(1980)	石造佛一町人墓	石川公立埋蔵文化財センター1996	
16	穴本町遺跡	89(1993)	下級武家墓	高松瓦土屋敷	金沢市埋蔵文化財センター1994
17	金沢城下町遺跡(高松町地点)	88(1993)・81(1980)	上級町人墓, 本道	礎石礎物, 礎物箱, 惣業土上, 瓦葺(瓦葺土表及び遺構), 石瓦葺基盤, 埋物箱等	金沢市埋蔵文化財センター2001a・2003a (財)石川市埋蔵文化財センター2002a
18	金沢城下町遺跡(奈良式(長澤式)敷地地点)	88(1993)	町人墓一上級武家墓	奈良式以前(町屋遺構)	(財)石川市埋蔵文化財センター2002c
19	長沢町遺跡	88(1993)	中級武家墓		金沢市埋蔵文化財センター1998
20	山崎丁遺跡	88(1993)~81(1980) 84(1982)・87(1980)	中〜上級武家墓	礎石の穴六瓦葺納土, 大塼土塼(惣業土上, 地下等, 池等), 礎石器具, 惣物箱, 礎石木製品等の基層資料出土	金沢市埋蔵文化財センター2004b・2005b・2006a・2007c・2009a
21	下本多町遺跡	84(1982)	下級武家墓一上級武家墓	空室の穴六による穴瓦葺	金沢市埋蔵文化財センター1991
22	金沢城下町遺跡(本多土屋敷納土地点)	85(1983) 85(1984)	上級武家墓	礎, 礎石(地下等)土上, 礎	石川公立埋蔵文化財センター1992 赤田, 編113
23	金沢大学学舎遺跡(医学部旧敷地地点)	89(1993)~81(1980) 82(1981)	丁〜中級武家墓等	地下多室墓	金沢大学埋蔵文化財調査センター編2000 2002
24	金沢大学学舎遺跡(医学部保健学科敷地)	88(1993)・81(1980) 84(1982)	丁〜中級武家墓等		金沢大学埋蔵文化財調査センター編2000 2003
25	緒土台遺跡	89(1993)・81(1980)	寺院(墓所)・中級武家墓	近世僧坊の礎, 高松経塚, 礎物	(財)石川市埋蔵文化財センター2002c
26	野田山遺跡	81(1980)~81(1980) 84(1982)~89(1993) 83(1983)~82(1981)	遺構	塚主墓の礎石中柱と土葺遺構	金沢市埋蔵文化財センター2003a・2006b ・2012c
27	浜町二丁目遺跡	81(1980)・82(1981)	武家墓		金沢市埋蔵文化財センター2005a
28	御園寺門前遺跡	81(1980)	寺院, 墓所		金沢市埋蔵文化財センター2006a
29	本町一丁目遺跡(第4次)	81(1980)	野宮	御園寺遺構(欄干口, 欄干跡)	金沢市埋蔵文化財センター2006b
30	二堂寺遺跡	81(1980)	寺院, 墓所		金沢市埋蔵文化財センター2005d
31	金沢城下町遺跡(高ノ町一丁目地点)	84(1984)	武家墓	惣業土上	金沢市埋蔵文化財センター2007a
32	金沢城下町遺跡(下道・寺町町地点)	87(1985)	町人墓		金沢市埋蔵文化財センター2007b
33	金沢城下町遺跡(金沢城内外惣構築品敷地地点)	81(1980)・82(1980)	惣構	礎物当時の礎, 堀の改築状況 土葺遺土	金沢市埋蔵文化財センター2008a・2010a・2012b
34	金沢城下町遺跡(藤ノ井町地点 西ノ水ノ井敷地)	81(1980)・82(1981)	武家墓	礎, 石列	金沢市埋蔵文化財センター2007a
35	金沢城下町遺跡(金沢城内外惣構築品敷地北側地点)	81(1980)	惣構	堀の改築状況確認	金沢市埋蔵文化財センター2008a
36	金沢城下町遺跡(金沢城内外惣構築品敷地南側地点)	83(1983)~82(1981)	惣構	御園寺遺構・遺物(砂葺, 欄干口, 欄干跡等)	金沢市埋蔵文化財センター2010b
37	金沢城下町遺跡(金沢城内外惣構築品敷地東側地点)	83(1983)	惣構	高松の礎, 準切〜範囲前(御園寺遺構)	金沢市埋蔵文化財センター2011b
38	金沢城下町遺跡(金沢城内外惣構築品敷地西側地点)	82(1982)~82(1981)	惣構	礎, 井筒礎, 礎物箱	金沢市埋蔵文化財センター2008a・2010a・2011a・2012a
39	金沢城下町遺跡(本多町二丁目地点)	82(1982)	武家墓	礎物, 木塼(証之式木分)	金沢市埋蔵文化財センター2011a・2012b
40	金沢城下町遺跡(本多町土屋敷納土地点)	82(1982)・82(1981)	武家墓	本多町土屋敷, 礎石礎物, 門跡, 石列, 遺構	金沢市埋蔵文化財センター2010a・2011a・2012a
41	金沢城下町遺跡(西外惣構築品本町丁1丁目地点)	81(1980)	惣構(西外惣構築品点付)	礎, 土葺基盤	金沢市埋蔵文化財センター2010a・2012a
42	小土師丁一丁目遺跡(180天候別加賀藩本町家敷地内)	82(1982)	寺院, 墓所	堀	金沢市埋蔵文化財センター2011a
43	金沢城下町遺跡(丸の内ノ町地点)	82(1982)~82(1981)	武家墓(公事場, 堀)	礎石遺構(石蔵地敷遺構, 長石等)	(財)石川市埋蔵文化財センター2016a
44	小土師ノミナツ遺跡	82(1982)~82(1981)	武家墓	礎石付大塼土塼	(財)石川市埋蔵文化財センター2016b
45	屋上土屋敷跡	82(1982)~82(1981)	上級武家墓	高松土屋敷 礎物	金沢市埋蔵文化財センター2016c
46	高町二丁目遺跡(D遺構)	82(1981)	武家墓	地下室, 溝口, 礎物箱(石列基盤, 礎石), 木塼, 土上	金沢市埋蔵文化財センター2018a
47	金沢城下町遺跡(東本町土屋敷)	82(1982)~82(1981)	墓所	土塼(塼基盤, 木塼等), 石列, 墓石瓦葺	編2014・2015
48	金沢城下町遺跡(藤崎町3番地点)	82(1982)~82(1981)	武家墓	奈良式(長澤式), 高松瓦土屋敷 土葺(礎土瓦葺)	金沢市埋蔵文化財センター2014a・2015a
49	金沢城下町遺跡(金沢城内外惣構築品敷地北側地点)	81(1980)	惣構	堀	金沢市埋蔵文化財センター2014b
50	長山清水遺跡	81(1980)	本道		金沢市埋蔵文化財センター2009a

金沢市埋蔵文化財センター(2002年以降)金沢市(金沢市埋蔵文化財センター)
(2001年)金沢市教育委員会(金沢市埋蔵文化財センター)
(財)石川市埋蔵文化財センター(石川市教育委員会(財)石川市埋蔵文化財センター(2013年度)石川市埋蔵文化財センター)

が確認されている。県庁跡地（堂形）〔石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター 2010・2012、石川県教育委員会・（公財）石川県埋蔵文化財センター 2014c〕でも7世紀後半から10世紀初頭の遺物が出土し、竪穴建物、掘立柱建物等の遺構が確認されている。広坂1丁目遺跡では7世紀初め頃から11世紀の遺物が確認されるとともに、藤原官式、平城官式に準拠した大量の瓦、「佛」刻書土器、「寺」刻書瓦、仏器等が出土し、矩形の区画溝、掘立柱建物、竪穴建物等が確認され、古代寺院が造営されたと考えられている。また、前田氏（長種系）屋敷跡地点、丸の内7番地点でも古代の土器が出土し、城跡周辺では兼六園のある小立野台地側や、反対の尾山神社側等にまだ空白部はあるが、律令初期から金沢城跡を取り囲むように遺跡が展開していたと想定され、地域の拠点となっていたと考えられる。

中世では、広坂1丁目遺跡で区画溝や礎石建物、墓地等が確認され、13世紀後半頃～14世紀代に盛期を持つ居館、室町末～17世紀初頃は寺内町内の有力者の居住域か施設が想定されている。また、西側の県庁跡地（堂形）では、16世紀後半の館ないし寺院の区画施設と推定される溝、土塁が確認されている。一方、城の反対側に位置する丸の内7番地点では遺構は不明であるが13世紀頃から17世紀初頭の遺物が出土し、隣接する石川橋白鳥堀調査区では16世紀第3四半期頃に築造されたと考えられる鍛冶関連遺構が確認されている。高岡町地点では葉研堀状の溝が確認され館跡の一部と考えられている。

文献資料からは14世紀には現在の久保市乙剣宮付近に「山崎窪市」が成立し、天文15年（1546）には現在の城地に金沢御堂（金沢坊舎）が創建され寺内町が展開し、加賀地域における政治・宗教・経済の拠点として発展したとされている。遺跡からはまだまだ当時の様相を具体的に述べるほどの資料は得られていないものの、古代から引き続き、それらのベースとなった集落の展開がうかがわれる。やがて金沢御堂（金沢坊舎）は織田政権の前に陥落し、佐久間氏・前田氏など織豊政権の大名による支配が始まるが、この段階を遺跡ではうまく捉えきれていない。

徳川氏が幕府を創始し、豊臣氏を滅ぼして名実ともに統一政権を確立した慶長・元和期頃、金沢城周辺では大名前田氏の支配の下、城下町の整備が進行する。現在、市街各所で調査された城下町の遺跡地点数は50か所を数えるが（第3図・第1表）、まとまった量の遺構・遺物が見られるようになるのは、この頃以後のことである。なお慶長年間に築造された内・外惣構の一部についても発掘調査が行われており、当初の構造や、規模を縮小しつつ存続・再生が図られる変遷過程が判明している〔金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2008a・2011b・2011c・2012d・2014c、木越2013〕。城下町はその後度重なる火災等の災害（寛永8年（1631）・同12年（1635）の大火等）に見舞われ、また一方で計画的整備を繰り返しながら、寛文年間（1661～1672）までにほぼ骨格が整い、以後明治時代の初めまで、三都に次ぐ大都市として発展する。

先にもあげたが、城下中枢に位置する遺跡として広坂1丁目遺跡、前田氏（長種系）屋敷跡地点、丸の内7番地点がある。広坂1丁目遺跡は、17世紀前半における性格はなお検討の余地はあるものの、陶磁器の優品が多く出土し、また17世紀中頃以降は高級武家の屋敷として、多様な遺構・遺物が検出されている。城下町遺跡として最大の面積が調査されており、火災の比定等、今後基準となる所見が蓄積されている点も大きく評価できよう。前田氏（長種系）屋敷跡地点は、寛永16年（1639）以後、標記の重臣屋敷となったところであるが、これ以前の遺構・遺物が充実しており、初期城下町の屋敷跡と考えられている。丸の内7番地点では、16世紀後半～17世紀初頭の町屋→17世紀初頭～寛永8年大火頃の町屋→大火以降から万治2年の武家屋敷→万治2年以降の公事場・武家屋敷という城下町遺跡の成立、変遷が捉えられている。

これらの外側に位置する安江町・本町1丁目遺跡の各遺跡は、性格を異にするが、城下町の一般的な在り方を示す。安江町遺跡〔金沢市教育委員会1997a〕は中級藩士・町人居住地对が対象となる調査

であるが、町人の物質的な優位性が読み取れる、興味深いデータが得られた。本町一丁目遺跡〔金沢市教育委員会 1995〕は町人の居住地に該当し、富籤の突札等、生活臭の強い遺物が目を引く一方、建物・井戸・土坑（粘土採取坑・廃棄土坑）等の遺構配置から、屋敷地の空間構造も追究されている。木ノ新保（久昌寺含む）・三社町の各遺跡は、城下縁辺に所在する。久昌寺遺跡〔金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2004c〕では同名の曹洞宗寺院の墓地に該当する約 300 基に達する墓が調査され、城下の墓制を考える上で重要な成果をあげている。木ノ新保遺跡〔石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター 2002b〕では、墓地・農地から足軽・下級武士の屋敷地への変容を窺うことができ、三社町遺跡〔石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター 2007〕でも、農地から町人地への変化が遺構より捉えられている。いずれも城下縁辺における都市域の拡大を示す良好な事例である。

その他に城下町から離れるが、関連する遺跡として戸室石切丁場跡、野田山墓地、辰巳用水が挙げられる。戸室石切丁場跡〔石川県金沢城調査研究所 2008b・2013a〕は金沢市東部の戸室山・キゴ山周辺に広がる採石関連遺跡群であり、城内石垣の 9 割強を占める石材産地である。悉皆踏査により丁場の分布範囲と保存状態が確認され、戸室石の特性を踏まえた総合的な調査研究により丁場の構造と変遷、戸室石の石割技術など様々な点が明らかにされた。野田山墓地では、墓地移転に伴う山麓部分の調査や藩主前田家墓所の測量・試掘調査等が実施されている〔金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）



第 4 図 「御城中芯分基絵図」(横山隆昭家蔵)

2003d・2008b・2012c)。辰巳用水〔金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2009b〕は寛永9年（1632）に開削され、終着点である金沢城では堀や庭園の水源として利用された。調査でも導水管（木桶、石桶）が確認されている。上流部では用水法面を保護するための三段石垣や隧道など当時の土木技術を良好に留めた遺構が残る。

第2節 金沢城の沿革

金沢城の沿革については既刊の『金沢城跡埋蔵文化財確認調査報告書Ⅰ』〔石川県金沢城調査研究所 2008a〕が詳しく、また、『金沢城跡埋蔵文化財確認調査報告書Ⅱ』〔石川県金沢城調査研究所 2014c〕では初期金沢城の様相が詳細に述べられており参照されたい。ここでは、次頁の年表（第2表）をもって代え、若干の補足を付加しておきたい。年表では、金沢城の歴史を4期に区分し、造成・災害・修築等を中心に記載した。

4つの時期については、佐久間盛政の入城、そして前田家の居城となってから寛永の大火までを「初期金沢城」、寛永大火後の城内整備から宝暦の大火までを「寛永の大火後」、宝暦大火後の城内整備から廃藩までを「宝暦の大火後」、廃藩から現在までを「近代以降」とした。

初期金沢城については、その様相を窺うに足る絵図・文献は極めて少なく、埋蔵文化財調査の所見が重要となる。

画期となった災害のうち、寛永8年（1631）の大火は、金沢城の骨格を変える契機となった。それまでは本丸が中心であったが、大火を契機に二ノ丸が拡大され、ここに壮麗な御殿が営まれた。この二ノ丸を中心として定まった縄張りが、現在まで受け継がれることとなる。

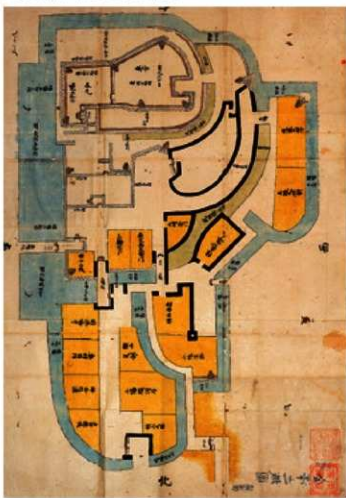
一方、宝暦9年（1759）の大火は、全盛期の終わりを象徴する災害で、三階櫓や辰巳櫓といった本丸の櫓群は、二度と再建されることなく、石川門・河北門・橋爪門のいわゆる三御門の内、石川門は30年、河北門は13年再建までに要している。また、二ノ丸については文化5年（1808）に再び火災に見舞われ焼失したものの、その後の再建は迅速で文化7年には再建がなされている。

廃藩後は、明治14年（1881）に二ノ丸御殿等が焼亡した他、あらたに城地を管轄した陸軍の手により旧来の建物は次々に撤去された。また、城の外堀・内堀の多くは埋め立てられる等した。戦後、金沢大学の敷地になってからも様々な改変を受けた。

金沢大学移転後、平成8年（1996）に県が跡地を取得し、都市公園とし整備が進められ、平成20年（2008）、国史跡に指定された。

第3節 鶴ノ丸・二ノ丸・新丸の沿革

金沢城は、天正8年（1580）佐久間盛政、天正11年（1583）前田利家入城により、金沢御堂（金沢坊舎）を基に城としての整備が



第5図 「加州金沢之城図」（東京大学総合図書館蔵）

第2表 金沢城の沿革

時期	年号	西暦	出来事
初期 金沢城	天文15年	(1546)	本願寺別院として金沢御堂（金沢坊舎・尾山御坊）を設置、金沢城の前身
	天正8年	(1580)	佐久間盛政が入城、土塁や堀を整備
	天正11年	(1583)	賤ヶ岳の合戦において佐久間盛政が敗北 前田利家が入城し、これ以後金沢城として前田家が14代にわたり統治
	天正14年	(1586)	天守構築、翌年に南部藩家臣北信愛が前田利家のもてなしを受け、天守をはじめ、城内の案内を されたとの記述（『北信愛覚書』）
	天正15年	(1587)	石垣職人の穴太源介に知行100俵を与え召抱える
	文禄元年	(1592)	戸室石を利用した本格的な石垣構築を開始、東ノ丸東面・北面、本丸西面の石垣を構築
	慶長7年	(1602)	落雷により天守焼失
	慶長期		本丸南面・三ノ丸北面・尾坂門の石垣を構築
	元和期		東ノ丸附段・百間堀縁などの石垣を構築
	元和6年	(1620)	本丸焼失、翌年本丸御殿などを再建
寛永の 大火後	寛永8年	(1631)	城下町から出火、辰巳櫓に飛び火し城内も延焼 【寛永の大火】 大火後の石垣構築・修築でほぼ現在の縄張りに近い状態に
	寛永9年	(1632)	樺川上流から取水する辰巳用水を施工、城内に引水され城内外の堀が水堀化
	寛永11年	(1634)	玉泉院丸に泉水や築山、御亭などを造成
	寛永17年	(1640)	20年間藩主不在、城内が荒廃
	万治3年	(1660)	
	寛文元年	(1661)	5代藩主綱紀がはじめて入国、城内のみならず城下町整備や新田開発など文化振興に寄与
	寛文2年	(1662)	城内の損傷著しい石垣箇所を修築。玉泉院丸色紙垣冊積み石垣もこの頃に構築か 鉤瓦が普及
	寛文11年	(1671)	
宝暦の 大火後	宝暦9年	(1759)	城下町で一万軒以上が焼失、金沢城内でも本丸・二ノ丸・三ノ丸などの主要部が全焼する被害 【宝暦の大火】
	宝暦10年	(1760)	幕府に城再建と石垣修築を願い出て、5万両を借り修築
	宝暦11年	(1761)	河北門石垣を修築
	宝暦12年	(1762)	橋爪門を再建
	宝暦13年	(1763)	五十間長屋石垣を修築、10代藩主重教二ノ丸御新殿に入る
	明和2年	(1765)	石川門石垣を修築
	安永元年	(1772)	河北門を再建
	天明8年	(1788)	五十間長屋や石川門などを再建 橋爪門礎台修理
	文化5年	(1808)	二ノ丸火災
	文化6年	(1809)	橋爪門を再建、12代藩主斉広二ノ丸御殿に移徙
	寛政11年	(1799)	
安政2年	(1855)	地震による石垣被害が大きく、石垣を修築	
安政5年	(1858)		
近代 以降	明治4年	(1871)	兵部省（のち陸軍省）の所轄となり、多くの建物が払い下げ
	明治9年	(1876)	河北門二ノ門の渡櫓や櫓台石垣を撤去するよう進達
	明治14年	(1881)	二ノ丸御殿から出火し、御殿の他、菱櫓・五十間長屋・橋爪門など焼失
	明治15年	(1882)	河北門一ノ門を解体、代わりに矢来門を設置
	明治40年	(1907)	辰巳櫓下の高石垣が崩落、石垣が幅200mに渡り上部2/3が取り壊され、現在残るように段を設け て改修
	昭和24年	(1949)	戦後、金沢大学の敷地として利用
	平成7年	(1995)	金沢大学の敷地を城外へ移転
	平成8年	(1996)	石川県が土地を取得し、金沢城公園として整備を開始
平成20年	(2008)	国史跡に指定	

開始され、天正14年(1586)には天守が造営されている。

本格的な整備は、文禄元年(1592)から始まる石垣整備とともに進められたと思われ(「三壺開書」、以後、慶長4年(1599)とされる新丸の造成(「越登賀三州志」、慶長7年(1602)の落雷による天守焼失後の三階櫓建設(「三壺開書」)等に係る造成、元和6年(1620)の本丸火災後の本丸拡張(「元和7年幕府老中奉書写」、寛永8年(1631)大火後の二ノ丸造成(「寛永8年幕府老中奉書写」)等を経て、現在残る郭構成が完成したとされている。しかしながらその状況を知りえる絵図はない。ただ、本丸付近については、確認調査等の成果からその様相がある程度うかがえるようになってきて

いる。鶴ノ丸は芳春院(前田利長母)がその地に鶴の下り居りたるを見て名づけられた、あるいは慶長期に利長の住む便殿が所在した等の逸話が「金沢古蹟志」に記載されるもののその真偽については明らかではない。

初期の金沢城を描いたとされる「加州金沢之城図」(東京大学総合図書館蔵)では、鶴ノ丸にあたる地点に三ノ丸とを画する内堀は見当たらず、石垣と門、櫓を備えた3つの区画が描かれている。

二ノ丸は、東側に食い違い虎口と平入門を持つ土居で囲まれた区画として描かれている。「三壺開書」には慶長7年ごろに、二ノ丸、三ノ丸に重臣が居住していたことをうかがわせる記載がある。

新丸は周囲を堀で囲まれ、北に土居で囲まれる左折れの枡形と門が、ちょうど尾坂門と考えられる位置にあり、内部には重臣の名前が記された敷地割り



第6図 「金沢城図」(横山隆昭家蔵)



第7図 「金沢城焼後御普請等被仰付候絵図」
(金沢市立玉川図書館蔵)

調査では屋敷地以前の町屋と考えられる遺構群が確認されている。

寛永8年(1631)の大火で城内の大半を焼失した。その後、拡張された二ノ丸には壮大な御殿が造営され、金沢城の中核として藩政時代を通じ整備が進められていく。

1720～1740年頃の姿を描くとされる「金沢城図」(横山隆昭家蔵)を見ると、鶴ノ丸は三ノ丸との間に堀と塀が構築され、その中央やや東寄りに郭入口となる南門が置かれている。さらにこの前面には塀と番所で構成された区画が設けられている。北西隅には二ノ丸御殿の正門となる橋爪門、厩、諸方土蔵等が設けられ、東南端には、百間堀側からの入口となる水ノ手門が置かれている。中央部分は空閑地となり、井戸が3基設けられている。寛永9年に引かれた辰巳用水は、暗渠で石川門から三ノ丸を通り、南門から鶴ノ丸を抜け二ノ丸へと至る。

二ノ丸は、当初西側の数寄屋屋敷に建物はなかったが、元禄10年(1697)までに部屋方が増設され、敷地いっぱい建物が建ち並ぶこととなった。

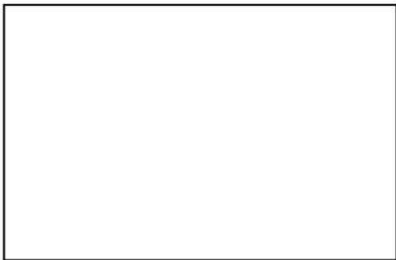
新丸は、入口の門、尾坂門が左折れの橋形へと変わっている。南側の河北門下西側を広場とし、尾坂門、西丁口門からの通路と、大手堀から分岐する堀により空間を東西方向に分割している。万治2年(1659)には重臣屋敷がなくなり、越後屋敷、作事所等の役所等が建ち並ぶ空間となり、時鐘も置かれた。宝暦7年(1757)、越後屋敷の長屋等が焼失している。

宝暦9年(1759)の大火は金沢城に多大な被害をもたらした(第7図)。鶴ノ丸、二ノ丸は全焼し、新丸は西側の割場、下御台所、会所等を除き焼失している。

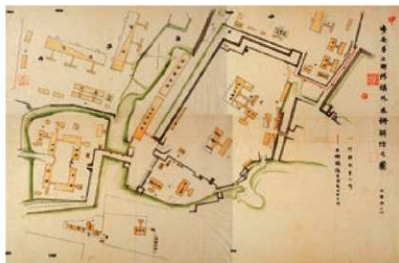
二ノ丸御殿は宝暦11年より再建が始まり、同13年には藩主重教が金谷御殿から新御殿に入っているが、御殿すべての工事が終わったわけではなく、また、その他の建物についても財政難のため再建が遅れ、五十間長屋や橋爪門統櫓の再建は天明8年(1788)まで遅れる。

鶴ノ丸、新丸の建物がいつ再建されたのか定かではないが、橋爪門は宝暦12年には再建され、新丸の時鐘は御宮へと移されている。

文化5年(1808)に二ノ丸は再び火災に襲われ、二ノ丸及び三ノ丸、鶴ノ丸の一部等が焼失した。この時の復興は速やかで、文化6年4月終わりには藩主斉広が、完成した二ノ丸御殿に移徙し、同7年7月末には再建のために置かれた御造営方役所が



第8図 「御城分間御絵図」((公財)前田育徳会蔵)



第9図 「歩兵第七連隊構外木柵解除之圖」

(防衛研究所戦史研究センター蔵)

解散、同8年2月に造営成就の盆正月がおこなわれている。また、同年、新丸の越後屋敷が再興されている。

橋爪門西側の厩については焼失の記録はないものの、「御造営方日並記」には、厩再建に係る記事がみられる。文化二ノ丸火災後の絵図（第4、8図）と宝暦大火以前の絵図とでは厩本体と馬洗場の位置が入れ替わっており、これがいつ変更になったのかは定かではないが、「御造営方日並記」に厩の地形の際に松を伐るという記載があることから、この時変更になったとも考えられる。

この後は、大きな火災等もなく、明治を迎えることとなる。

明治4年(1871)、城地が兵部省の所管となり同5年には兵部省が陸軍省へと変わった。明治8年、歩兵第7聯隊が二ノ丸に置かれ、新丸は、越後屋敷・作事所・割場・会所が取られ、第一大隊の兵営が新築された。

明治14年(1881)、営所となっていた御殿より出火し、二ノ丸の建物群がほぼ焼失している。翌年には、敷地造成がなされ、二ノ丸には師團司令部等の建物が置かれ、鶴ノ丸には兵舎等が新築されている（「建造物履歴表」）。

「歩兵第七連隊構外木柵解除之圖」（防衛研究所戦史研究センター蔵）（第9図）を見ると、明治32年までには鶴ノ丸前面の内堀は埋立られ、新丸と三ノ丸との間の堀もある程度埋められていることが確認できる。

大正15年(1926)までには鶴ノ丸西端に金沢衛戍拘禁所が建てられ、三ノ丸と新丸の間の堀はほぼ埋められてしまっている（第10図）。この後も建物の改変、増築は進む。

終戦を迎え、昭和24年(1949)に金沢大学の敷地となり、新たな改



第10図 「金澤旧城郭 第九師團司令部 歩兵第七聯隊
歩兵第六旅團司令部 第九師團城内被服庫 金澤憲兵隊配
置図」部分 階調を反転(防衛研究所戦史研究センター蔵)



第11図 「歩兵第七連隊図」（石川県立歴史博物館蔵）

変が始まるが、平成7年（1995）に金沢大学は金沢市角間地区への移転が完了し、変更は一応終焉を迎える。

平成8年、金沢大学移転の後、県が跡地を取得し、都市公園としての整備がスタートする。

平成13年（2001）、金沢城跡は、二ノ丸に菱櫓、五十間長屋、橋爪門統櫓を復元、鶴ノ丸には休憩所を設け、新丸を緑地広場として整備し、金沢城公園としてオープンしている。その後も整備は進み、平成20年（2008）の史跡指定後も同26年（2014）に橋爪門二ノ門等が復元され、現在に至っている。

第4節 既往の調査成果

金沢城内における埋蔵文化財調査の概要について、現在（平成27年度（2015））に至るまでの状況を第12図・第3・4表にまとめた。

金沢城跡における埋蔵文化財調査は昭和43年（1968）・同44年（1969）が金沢城跡の埋蔵文化財調査の端緒で、昭和43年は金沢大学金沢城学術調査委員会、44年は大学・石川県教育委員会が調査主体である。二ノ丸御殿、本丸三階櫓等、金沢城の中核域を対象とした極めて重要な調査であった。昭和50～61年には金沢大学が主体となり大学施設設置工事に伴う調査が実施された。

平成3年（1991）・同4年は、金沢御堂・金沢城調査委員会が組織され、主要遺構の綿密な踏査が行われた。平成4～6年には都市計画道路整備に伴い、石川県立埋蔵文化財センターが石川門前土橋、車橋門の一部で調査を実施している。

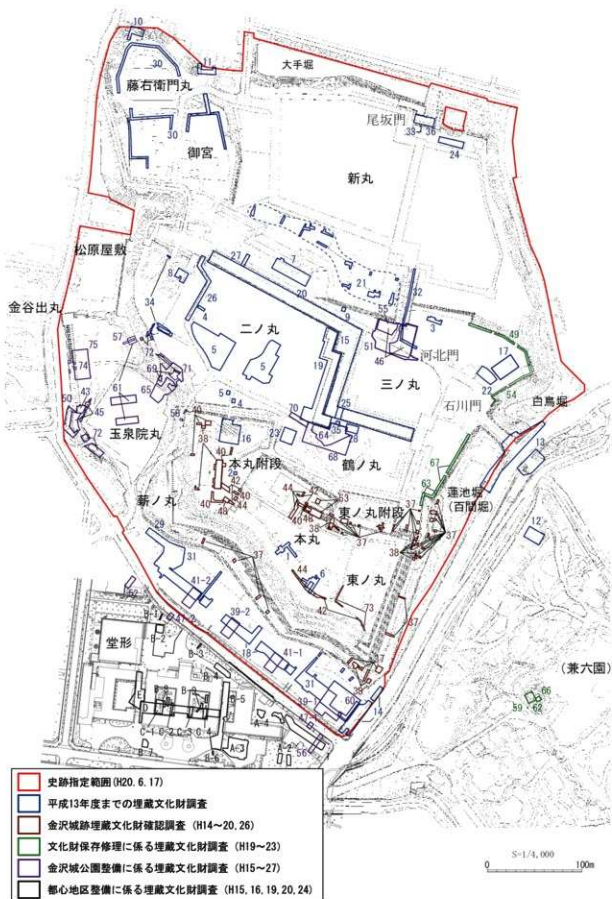
平成8年、石川県が金沢城跡の用地を国から取得し金沢城公園整備事業（第1期整備前半）が開始され、平成9～13年にかけて石川県立埋蔵文化財センター（平成10年以降は財団法人石川県埋蔵文化財センター）が、二ノ丸内堀・菱櫓・五十間長屋・橋爪門統櫓、本丸附段、三ノ丸等の調査を実施している。特に二ノ丸内堀・菱櫓・五十間長屋・橋爪門統櫓の調査は、現在まで受け継がれている金沢城の姿が、寛永8年（1631）の大火以後であることを明らかにした点、金沢城の石垣編年の基礎等、金沢城の調査史で大きな画期となった。今回報告する、新丸1次、鶴ノ丸1次、尾坂門、二ノ丸園路、数寄屋敷はこの頃調査されたものである。

平成13年、石川県教育委員会文化財課に金沢城研究調査室（平成19年度に石川県金沢城調査研究所に改組）が開設され、翌年より絵図・文献、埋蔵文化財、建造物、石垣等伝統技術の4分野から総合的な調査研究が開始された。埋蔵文化財確認調査事業は初期金沢城の解明を目的として平成14年度から継続的に実施されている。調査では本丸・東ノ丸を中心にして石垣の構築過程、本丸大手通路（虎口）の変遷過程、本丸の造成状況、庭園遺構の検出等多くの成果がある。

平成15年度以降、金沢城公園整備事業に係る調査が再開され、現在まで継続している。この他、都心地区整備推進事業（県庁跡地（堂形））・県教育委員会事業（石川門左右太鼓扉）に係る調査がある。以下に主な事業を挙げる。

- ・平成15・16・18・19年度 いもり堀確認調査
- ・平成17～19年度 玉泉院丸南西石垣の修築に係る調査
- ・平成18～20年度 河北門の復元整備に係る調査
- ・平成20～26年度 玉泉院丸の確認調査
- ・平成22～24年度 橋爪門の復元整備に係る調査
- ・平成15・16・20・21・24年度 県庁跡地（堂形）の調査
- ・平成19・20・22・23年度 石川門（附属太鼓扉）の調査
- ・平成25年度 玉泉院丸南石垣の修築に係る調査

これらは金沢城公園整備計画の第1期整備（平成8～17年）後半～第2期整備（平成18～26年）に係る調査である。現在は、第3期整備計画が策定中であり、これに係る鼠多門・鼠多門橋の確認調査が行われている。



第12図 金沢城跡発掘調査位置図(～平成27年度)

第3表 金沢城跡発掘調査一覧(1)

No.	調査箇所	調査年度	調査主体	調査内容	備考	文献
1	本丸	昭和43(1968)	金大金城調査会	学術調査	西園門・櫓石建物跡	井上1969・吉岡1985・樽山1999
2	本丸附設	昭和43(1968)	金大金城調査会	学術調査		井上1969・吉岡1985・樽山1999
3	三ノ丸	昭和43(1968)	金大金城調査会	学術調査	川原石石礎	井上1969・吉岡1985・樽山1999
4	二ノ丸	昭和43(1968)	金大金城調査会	学術調査	地舞台跡・台所跡・薬庫跡付石建物跡	井上1969・吉岡1985・樽山1999
5	二ノ丸	昭和44(1969)	県教委・金大	校舎増築	櫓倉跡・跡木施設・雨水池	県教委1970・吉岡1985・樽山1999
6	本丸	昭和44(1969)	県教委・金大	学術調査	三階櫓・三ノ丸長巻櫓	県教委1970・吉岡1985・樽山1999
7	四ノ丸長巻	昭和48(1973)	金大	学生会館拡張建設	長巻櫓6・櫓6層	上野1976・吉岡1985・樽山1999
8	二ノ丸	昭和52(1977)	金大	学術調査	明治14年遺失の銅砲跡	佐々木1981・吉岡1985・樽山1999
9	三ノ丸～四ノ丸長巻間通廊	昭和54(1979)	金大考古学研究室	無障アテナイ設置	大塀跡6	佐々木1980・吉岡1985・樽山1999
10	鐘門東門丸北側並面築基	昭和56(1981)	金大考古学研究室	櫓堂設置	6段外・瓦	吉岡1974・1986・樽山1999
11	櫓門横土御殿礎石	昭和64(1989)	金大考古学研究室	境界線部跡発掘工事	6段外・切石側溝、瓦	吉岡1974・1985
12	東三ノ丸(江ノ町指定地)	平成元年(1989)	県歴史センター	店舗改装	17世紀初期の遺構面(礎石建物跡)	県歴史センター1992
13	石川門土塼(4/70幅)	平成4(1992-94)	県歴史センター	道路整備	土塼の形成過程、16世紀後半の築込階遺構等	県歴史センター1992・1998
14	東櫓	平成6(1994)	県歴史センター	道路整備	6層	県歴史センター1996
15	内堀第1次・東櫓	平成8(1997)	県歴史センター	公園整備(復元整備)	櫓・櫓門(埋没された刀・櫓・銃)、東櫓跡6等	金沢城跡研究所2011a・2012a
16	本丸附設	平成10・12(1999・2000)	県歴史センター	公園整備(復元整備)	堀跡跡	成川1999、津原・土田1974・2001
17	三ノ丸第1次	平成10(1999)	県歴史センター	公園整備(施設建設)	櫓土塼(築込後遺構)、櫓土塼品	金沢城跡研究所2009a
18	三ノ丸第2次	平成10(1999)	県歴史センター	公園整備(復元整備)	天正～元和期の堀・土塼、元和以降の櫓・櫓台	三浦1999
19	三ノ丸長巻	平成10・11(1999-99)	県歴史センター	公園整備(復元整備)	6層内築造 櫓・長巻跡6、17世紀初期の遺構面	金沢城跡研究所2011a・2012a
20	内堀第2次	平成11(1999)	県歴史センター	公園整備(復元整備)	西三ノ丸櫓6の構造把握	金沢城跡研究所2011a・2012a
21	新丸第1次	平成11(1999)	県歴史センター	公園整備(築造整備)	近代に埋没した櫓の範囲確定	土田2000
22	三ノ丸第2次	平成11(1999)	県歴史センター	公園整備(施設建設)	櫓石建物(櫓土塼)、石礎品等	県歴史センター2002a
23	櫓ノ丸第1次	平成11(1999)	県歴史センター	公園整備(施設建設)	木櫓・石櫓(埋没利用)	土田2000
24	新丸第2次	平成11(1999)	県歴史センター	公園整備(施設建設)	16世紀後半～元和初期の遺構面	県歴史センター2002a
25	櫓ノ丸外堀櫓跡基礎	平成11(1999)	県歴史センター	公園整備(復元整備)	櫓跡基礎の構造把握	金沢城跡研究所2011a・2012a
26	二ノ丸附設	平成11(1999)	県歴史センター	公園整備(築造整備)	櫓6、6組遺構	
27	三ノ丸第3次	平成11(1999)	県歴史センター	公園整備(施設建設)	土塼	金沢城跡研究所2011a・2012a
28	櫓ノ丸第2次	平成12(2000)	県歴史センター	公園整備(復元整備)	16世紀末築造の遺構面	金沢城跡研究所2010
29	三ノ丸第3次	平成12(2000)	県歴史センター	公園整備(築造整備)	櫓長巻平4の元和年間6層	津原・土田2001
30	本ノ丸第1次	平成12(2000)	県歴史センター	公園整備(築造整備)	大塀遺構、空堀跡、6瓦等	津原・土田2001
31	三ノ丸第3次	平成12(2000)	県歴史センター	公園整備(築造整備)	元和以前の櫓・土塼・土塼設置 金庫瓦	津原・土田1974・2001
32	三ノ丸第4次	平成12(2000)	県歴史センター	公園整備(築造整備)	何北門6層付・櫓6、16世紀後半～天正の遺構面	金沢城跡研究所2010b
33	新丸第3次	平成12(2000)	県歴史センター	公園整備(築造整備)	何北門6段、16世紀後半～天正期の遺構面	津原・土田1974・2001
34	堀川口門等	平成12(2000)	県歴史センター	公園整備(築造整備)	6段、6組遺構	津原・津裡2002
35	櫓ノ丸櫓跡	平成12(2000)	県歴史センター	公園整備(築造整備)	土塼、ピット	金沢城跡研究所2010
36	堀川門	平成12(2000)	県歴史センター	公園整備(築造)	6組遺構、跡面	津原・津裡2002
37	本丸附設	平成14(2002)	金沢城跡調査会	学術調査	本丸虎口遺構の把握	金沢城跡研究所2009a
38	本丸附設	平成13(2001)	金沢城跡調査会	学術調査	三ノ丸長巻櫓付6層の遺構等	金沢城跡研究所2009a
39	三ノ丸櫓	平成13(2001)	金沢城跡調査会	公園整備(復元整備)	櫓跡櫓台の検出	金沢城跡研究所2009a
40	本丸附設	平成16(2004)	金沢城跡調査会	学術調査	寛永大天竺の2段の遺構面	金沢城跡研究所2009a

第4表 金沢城跡発掘調査一覧(2)

№	調査箇所	調査年度	調査主体	調査内容	備考	文献
41	小丸の堀	平成16(2004)	金沢城研究調査室	公開整備(復元整備)	堀城当初の堀の断面を確認	金沢城研究調査室2005a
42	本丸	平成17(2005)	金沢城研究調査室	学術調査	本丸三階櫓石階	金沢城研究調査室2014c
43	玉泉院丸	平成17(2005)	金沢城研究調査室	公開整備(6垣修築)	近代の改修、石垣上部の二重櫓の基礎構造の把握	金沢城研究調査室2010a
44	本丸	平成18(2006)	金沢城研究調査室	学術調査	元和期の大規模改修、初階金沢城の礎石建物	金沢城研究調査室2007a
45	玉泉院丸(南西6垣)	平成18(2006)	金沢城研究調査室	公開整備(6垣修築)	跡存修繕の把握、初階金沢城石垣	金沢城研究調査室2010a
46	河北門	平成18(2006)	金沢城研究調査室	公開整備(復元整備)	残存状況、規模、改修、築城時期の把握	金沢城研究調査室2011b
47	小丸の堀	平成18(2006)	金沢城研究調査室	公開整備(復元整備)	堀岸の位置確認	金沢城研究調査室2007a
48	本丸	平成19(2007)	金沢城研究調査室	学術調査	寛永8年大火以前の大型遺構	金沢城研究調査室2009c・2014c
49	石川門(左方土鉄橋)	平成19(2007)	金沢城研究調査室	文化財修繕(建造物)	障子縁の確認	金沢城研究調査室2014b
50	玉泉院丸(南西6垣)	平成19(2007)	金沢城研究調査室	公開整備(6垣修築)	古井築造時期、初階金沢城6垣の位置の確認	金沢城研究調査室2010a
51	河北門	平成19(2007)	金沢城研究調査室	公開整備(復元整備)	棟門前建物の礎石層以上の遺構確認	金沢城研究調査室2011b
52	小丸の堀	平成19(2007)	金沢城研究調査室	公開整備(復元整備)	堀岸の位置確認	金沢城研究調査室2006d
53	本丸	平成20(2008)	金沢城研究調査室	学術調査	寛永8年大火以前の大型遺構	金沢城研究調査室2014c
54	石川門(左方土鉄橋)	平成20(2008)	金沢城研究調査室	文化財修繕(建造物)	障子縁の確認	金沢城研究調査室2014b
55	河北門	平成20(2008)	金沢城研究調査室	公開整備(復元整備)	石垣解体調査(コナリ櫓台、一ノ門櫓台)	金沢城研究調査室2011b
56	小丸の堀	平成20(2008)	金沢城研究調査室	公開整備(復元整備)	堀の南岸、既に用水を蓄え遊池初期の石垣、石列塔	金沢城研究調査室2009b
57	玉泉院丸(基本)	平成20(2008)	金沢城研究調査室	公開整備(遺構確認)	基本土階の遺構確認	金沢城研究調査室2015c
58	玉泉院丸(小丸堀石垣)	平成20(2008)	金沢城研究調査室	公開整備(遺構確認)	石垣築造箇所を基礎部試掘	金沢城研究調査室2009d
59	藤丸(築山)	平成21(2009)	金沢城研究調査室	文化財修繕(6垣修築)	石垣解体調査	管理事務所・調査研究所2012
60	小丸の堀	平成21(2009)	金沢城研究調査室	公開整備(復元整備)	鯉橋台石垣東部の残存状況確認、一部解体	金沢城研究調査室2010d
61	玉泉院丸	平成21(2009)	金沢城研究調査室	公開整備(遺構確認)	基本中央部、土階の遺構確認(中島、出島、並石等)	金沢城研究調査室2015c
62	藤丸(築山)	平成22(2010)	金沢城研究調査室	文化財修繕(6垣修築)	石垣解体調査	金沢城研究調査室2011d・管理事務所・調査研究所2012
63	石川門(左方土鉄橋)	平成22(2010)	金沢城研究調査室	文化財修繕(建造物)	障子縁の確認	金沢城研究調査室2014c
64	橋爪門	平成22(2010)	金沢城研究調査室	公開整備(復元整備)	二ノ門礎石基礎瓦、6垣増築	金沢城研究調査室2012b
65	玉泉院丸	平成22(2010)	金沢城研究調査室	公開整備(遺構確認)	基本土階部の遺構確認(護岸石垣・並石等)	金沢城研究調査室2010c・2014d
66	藤丸(築山)	平成23(2011)	金沢城研究調査室	文化財修繕(6垣修築)	石垣・6垣建物の解体調査	管理事務所・調査研究所2012
67	石川門(左方土鉄橋)	平成23(2011)	金沢城研究調査室	文化財修繕(建造物)	障子縁の確認	金沢城研究調査室2014c
68	橋爪門	平成23(2011)	金沢城研究調査室	公開整備(復元整備)	二ノ門礎石基礎瓦、6垣増築、対称的築構	金沢城研究調査室2012b
69	玉泉院丸	平成23(2011)	金沢城研究調査室	公開整備(遺構確認・復元整備)	色紙瓦屋根6用下の遺構確認	金沢城研究調査室2011a・2012b
70	橋爪門	平成24(2012)	金沢城研究調査室	公開整備(復元整備)	6垣増築、石階台、障子踏臺	金沢城研究調査室2013b
71	玉泉院丸	平成24(2012)	金沢城研究調査室	公開整備(復元整備)	色紙瓦屋根6用瓦台と礎石上部の遺構確認	金沢城研究調査室2012d・2013b
72	玉泉院丸(南6垣)	平成25(2013)	金沢城研究調査室	公開整備(6垣修築・復元整備)	6垣の解体調査、石階初期の土階確認	金沢城研究調査室2014d
73	雫ノ丸	平成26(2014)	金沢城研究調査室	学術調査	雫ノ丸築造の遺構確認	金沢城研究調査室2015d
74	玉泉院丸	平成26(2014)	金沢城研究調査室	公開整備(遺構確認)	鼓門・鼓門階の遺構確認	金沢城研究調査室2015c
75	玉泉院丸	平成27(2015)	金沢城研究調査室	公開整備(遺構確認)	鼓門部の遺構確認	金沢城研究調査室2015c
A	雁行跡地(豊前)	平成15(2003)	雁行跡地センター	都心地区整備(確認調査)	豊前(豊前土蔵関連遺構)、近世初期土蔵遺構	(財)雁行センター-2010
B	雁行跡地(豊前)	平成16(2004)	雁行跡地センター	都心地区整備(確認調査)	近世豊前、豊前土蔵	(財)雁行センター-2010
C	雁行跡地(豊前)	平成19(2007)	雁行跡地センター	都心地区整備(確認調査)	古代・近世の遺構確認	(財)雁行センター-2012
D	雁行跡地(豊前)	平成20(2008)	雁行跡地センター	都心地区整備(確認調査)	空室建物、6垣、堀籠、古代・中世の遺構確認	(財)雁行センター-2012
E	雁行跡地(豊前)	平成24(2012)	雁行跡地センター	都心地区整備(確認調査)	石瓦、石組遺構	(258)雁行センター-2014c

調査者：石川県教育委員会 調査センター：石川県立学芸文化財センター
 金沢城跡発掘調査室：石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室
 管理事務所・調査研究所：石川県立学芸文化財センター

(財)雁行センター：石川県教育委員会(財)石川県学芸文化財センター(2013年度から公益財団法人)
 金沢城研究調査室：石川県立学芸文化財センター

第3章 鶴ノ丸第1次調査

第1節 調査の概要

1. 調査区と調査の概要（第13・14図）

鶴ノ丸・橋爪門周辺の調査は、平成9年（1997）から行われた公園整備事業に係る埋蔵文化財調査の一環として実施されたものである。本報告は、トイレ設置に係り実施された平成11年度の第1次調査によるものである。なお、鶴ノ丸第2次調査区については橋爪門枳形内に位置するものであるため、橋爪門発掘調査報告書〔石川県金沢城調査研究所 2015b〕において報告されている。

本調査区は、鶴ノ丸の西隣にあたり、本丸・本丸附段・二ノ丸・鶴ノ丸に囲まれた位置にある。絵図によると、ここは橋爪門の一角の「五正建御殿」が置かれた辺りで、江戸時代前期以降の絵図において、厩や馬洗場、辰巳用水、石垣、塀等が描かれてきた。この厩は三ノ丸から橋爪一ノ門・二ノ門を通り出入りできた。廃藩後の明治4年（1871）には兵部省（のちの陸軍省）の所管となり、改変を受け、本調査区の辺りには、衛戍拘禁所が置かれた。また、昭和24年（1949）の金沢大学の開学以降、本調査区の付近（東方）には教育学部が置かれた。

調査は重機掘削により近現代土層を取り除き、近世の遺構面を検出して行った。なお、近世の遺構は保護のため、部分的に断割を入れることで状況を確認したが、調査区全体で近現代の掘削を受けていることもあり、検出した近世の遺構は限定的であった。そのため、調査区全体にわたっての層序関係を把握しきれていない部分もある。

2. 基本層序

鶴ノ丸1次調査区では、調査区壁面を含む5か所で確認した土層断面を基に、大別してⅠ層とⅡ層に区分した。

Ⅰ層は表土を含む近現代層で、調査区の全域で確認している。金沢城公園・金沢大学期（Ⅰa層）と旧陸軍期（Ⅰb層）に細分した。Ⅰa層は、黒褐色土、灰色系土、褐色系等多様な色調の砂質土主体で、検出面の標高は約46.2～46.6mを測る。Ⅰb層は旧陸軍期造成土及びこれを基盤とする遺構埋土である。造成土は赤戸室石細片が顕著に含まれる層、明治14年火災に由来する焼土層、瓦を大量に含む黄色系・褐色系の砂質及び粘質土等から構成され、検出面の標高は約45.4～45.9mを測る。

Ⅱ層は近世の造成土及びこれを基盤とする遺構埋土で、Ⅱa～Ⅱc層に細分される。Ⅱa層は石垣台構築以後の造成土及びそれを基盤とする遺構埋土で、辰巳用水・馬洗場の基盤層及び掘方を含む。なお、上部は近代以後に削平されており、辰巳用水の作り替えに伴う整地の詳細については明らかでない。検出面の標高は約45.2～45.6mを測る。石垣台構築以前の層は、上位のⅡb層と下位のⅡc層に分けられ、Ⅱb層とⅡc層の境は硬化面により分けられる。Ⅱb層は硬化面より上の石垣基盤層と掘方の両者を含み、最上面は整地されていた。検出面の標高は約44.9～45.3mを測る。硬化面以下のⅡc層の標高は約44.7～44.8mを測る。地形は概して南側がやや高く、北に緩やかに傾斜する傾向にあるが、Ⅱb層は調査区北部の石垣台付近で厚くなっており、検出面の標高が高くなる状況が見られた。

第2節 遺構

1. 近代以後の遺構（第15～19図）

Ⅰa・Ⅰb層に属する近現代の遺構について、以下に述べる。

調査区北壁面の一部、及び東辺、南辺で衛戍拘禁所の塀の支柱穴と見られるピット（P01～P12）



第13図 鶴ノ丸第1次調査区 調査区位置図 (S=1/400)

第11区 和 / 大塚 / 安藤区 調査区・調査区 (S=17400)
地図：「御城分門御檢図」(公財) 前田實部念藏

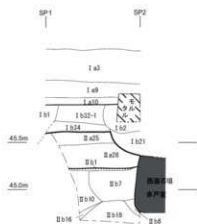
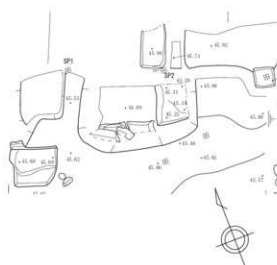
を検出した。各支柱穴の中心間距離は、216～234cm（平均223.4cm）を測る。また、調査区東辺と南辺において、衛戍拘禁所の塀が置かれた痕跡と見られる溝状遺構が支柱穴と重複して検出されている。土層断面の観察より、これらは後述する近世の石垣台撤去後に構築されたと考えられる。この溝状遺構は、幅31～56cm、検出面からの深さ3～23cm（底部の標高45.17～45.36m）を測る。このほか、調査区の各所で土坑状あるいは溝状、落込み状、ピット状の遺構（1～25号視孔）を検出している。これらの遺構の計測値等詳細については、第5・6表にまとめた。

第5表 鶴ノ丸第1次調査区 近代遺構計測表1

遺構名	埋土	平面形	長辺 (cm)	短辺 (cm)	深さ (cm)	主な出土遺物	備考
P01	にぶい暗褐色土	不明	不明	不明	31	磚瓦、軸瓦	〔第16図〕参照。右距離台後に構築された。東方にモルタル基礎あり。他の支柱穴と比べて底面の標高が高く、付近に壁跡の痕跡も確認できなかったため、存続の可能性もある。
P02	不明	楕丸長方形	160以上	87	50	磚瓦、軸瓦、礎、磁石、ガラス瓶	2号視孔と重複。薬石を切る。
P03	不明	楕丸長方形	148以上	82以上	48		番号なし近代遺構と重複
P04	不明	楕丸長方形	147以上	101以上	40		25号視孔と重複
P05	不明	楕丸長方形	124以上	94	39		底部河原石敷上にコンクリ基礎（長辺107cm以上×短辺29cm、高さ不明）および礎状の構造物（長辺901cm以上×短辺14cm、高さ不明）が設置される。
P06	不明	楕丸長方形	134以上	74	30		底部河原石敷上にコンクリ基礎（長辺114cm以上×短辺28cm、高さ不明）とその上に礎状の構造物（長辺77cm以上×短辺18cm、高さ不明）が設置される。
P07	黒褐色砂質土、円礫	楕丸長方形	169以上	74	69		〔第17図〕参照。道路に埋入および円礫層があり、この上に基礎が入ると思われるが、確認できなかったため、覆された可能性がある。朝顔内蔵敷の上に、石材不明の切石を1つ確認した。
P08	不明	楕丸長方形	128以上	71	72		埋土の部方と重複。8号視孔を切る。
P09	不明	楕丸長方形	116以上	90	73		底部河原石敷上にコンクリ基礎（長辺74cm以上×短辺30cm、高さ不明）および礎状の構造物（長辺62cm以上×短辺16cm、高さ不明）あり。複数の近代遺構を切る。
P10	褐色色および灰褐色系砂質土、円礫	不整形楕丸長方形					〔第18図〕参照。土層断面から、層方を2段階確認。古段階の最下層は確認できず、青戸室の切石が入る。新段階の層方にはモルタルや瓦片を含む円礫層が見られ、コンクリ基礎は見られず。落込み状の近代遺構および近世の河原石集中遺構（II-a）を切る。
P11	不明	長楕円形	150以上	96	71		落込み状の近代遺構および近世の河原石集中遺構（II-a）を切る。
P12	不明	楕丸長方形	126以上	89	37	ボタン（陶磁器）、軸瓦、骨製品	12号視孔・鉄巴排水部方と重複。底部河原石敷上にコンクリ基礎（長辺114cm以上×短辺36cm、高さ不明）とその上に礎状の構造物（長辺94cm×短辺16cm、高さ不明）が設置される。

第6表 鶴ノ丸第1次調査区 近代遺構計測表2

遺構名	埋土	平面形	長辺 (cm)	短辺 (cm)	深さ (cm)	主な出土遺物	備考
1号視孔	暗褐色土、褐色色土	方形	181	162	81	磚瓦	13号視孔と重複（切る）。
2号視孔	灰褐色土	不定形	740以上	446以上	13	ボタン（陶磁器）、磚瓦、軸瓦、鉄釘	〔第19図〕参照。3・25号視孔、陶瓦敷と重複
3号視孔	暗褐色土					軸瓦	2号視孔と重複
4号視孔	暗褐色土、褐色色土	不定形	487	437以上	109	磁器類、ボタン（陶磁器・金貨）、軸瓦、ガラス瓶	前日用水（粘土管本體）と重複
5号視孔	暗褐色土、褐色色土	方形	159	143	8	磁器類、磚瓦、軸瓦	
6号視孔	中々暗い褐色土	不定形	369	215	41	陶磁器	前日用水（粘土管本體）と重複
7号視孔	中々暗い褐色土	長楕円形?	143以上	90	24	磁器類、磁器蓋	前日用水（石管）と重複
8号視孔	暗褐色土	溝状	206以上	24～41	4	磁瓦、ガラス瓶	
9号視孔	砂灰褐色土	溝状	255以上	40～56	5	軸瓦、鉄釘	
10号視孔	灰褐色土	不明			12		11号視孔と重複
11号視孔	黒色酸化土	不明			8		10号視孔と重複
12号視孔	灰褐色土、明灰褐色粘質土	不定形	236	180	56	土師器類、ボタン（陶磁器）、軸瓦、礎、ガラス瓶	19号視孔と重複
13号視孔	褐色色土、暗褐色土	不定形	166	95以上	12	磚瓦、軸瓦、鉄釘、石板	1号視孔と重複
14号視孔	中々暗い褐色土	楕円形	48	43	21	磁瓦、軸瓦、磁瓦	
15号視孔	にぶい暗褐色土	溝状	340以上	95	78	磁器類、磁器蓋、土師土器、磚瓦、軸瓦、礎、ガラス瓶	〔第19図〕参照。近世遺構（II-a）と重複
16号視孔	暗褐色土	楕円形?	199	71以上	45	磚瓦	
17号視孔	中々暗い褐色土	不定形				軸瓦	2号視孔と重複。検出面までの掘り下げで消失
18号視孔	暗褐色土、暗褐色土	楕円形	50	31	不明	軸瓦、鉄釘、ガラス瓶	
19号視孔	褐色土、にぶい黄褐色粘質土	溝状	442	45～65	6	ボタン（陶磁器）、軸瓦	12号視孔と重複
20号視孔	中々暗い褐色土	楕円形	90	59以上	37	陶磁器、軸瓦	
21号視孔	不明	楕円形	72	66以上	10	陶器類、磁器蓋、陶器鉢、ボタン（陶磁器）、軸瓦、鉄釘、ガラス瓶	
22号視孔	不明	不明	不明	不明	不明	陶磁器、軸瓦	位置等詳細不明だが遺構出土遺物あり
23号視孔	不明	不明	不明	不明	不明	陶磁器、軸瓦	位置等詳細不明だが遺構出土遺物あり
24号視孔	不明	不定形	142以上	79以上	11	陶磁器、磚瓦、軸瓦、ガラス瓶	
25号視孔	黄褐色砂	99	84	93		磁器類、ボタン（陶磁器）、軸瓦、礎、ガラス瓶	P04と重複



I a層：近代以後造成土等（公園整備～金沢大学）

I a3 黄褐色砂

I a9 暗灰色土（炭化物・砂利を多く含む）

I a10 濃い緑褐色土（しまりあり 炭化物・砂利を含む）

I b層：近代以後造成土等（旧跡類）

I b1 黒褐色粘質土（炭・土・砂利を含む）

I b2 濃い緑褐色土（I a10層より明るい 炭化物含む P01）

I b3 栗石層（径5～10cmの栗石主体 褐色砂質土を含む 右相取収）

I b32-1 濃い褐色砂質土（径5～15cmの栗石を非常に多く含む 明治14年分）

I b34 暗黄褐色粘質土（径5～15cmの栗石・炭化物・砂利を少量含む 明治初め分）

II a層：近世遺構埋土・造成土（石垣台構築以後）

II a25 暗褐色粘質土（黄灰色粘土を多く含む）

II a28 暗褐色粘質土（II a25層より暗い 径5～10cmの円礫・砂利を多く含む）

II b層：近世造成土（石垣台構築以前（上））

II b1 褐色砂質土（しまりあり（緑化土） 砂利・炭化物を含む）

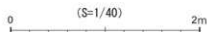
II b7 暗黄褐色砂質土（黄灰色粗砂を層状に含む 根切）

II b6 灰褐色砂質土（径3～5cmの礫を非常に多く含む、炭化物を少量含む 根切）

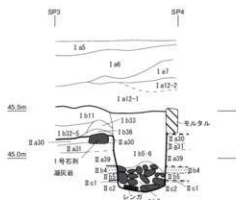
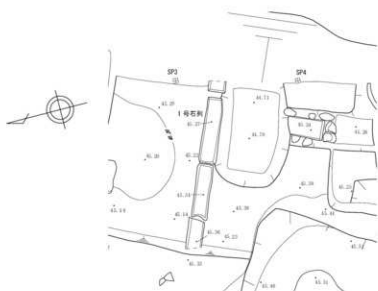
II b10 褐色砂質土（径5～10cmの円礫を含む）

II b16 灰黄褐色砂質土（炭化物と砂利を含む）

II b18 暗褐色粘質土（II a25層より暗い 黄灰色粘土を含む）



第16図 鶴ノ丸第1次調査区 調査区北壁中央部付近平面図・土層断面図 (S=1/40)



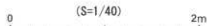
- I a 層：近代以後造成土等（公園整備～金沢大学）
 Ia5 灰褐色土（しまりなし、礫・砂を多く含む 黄土）
 Ia6 赤灰褐色砂（砂石を多く含む、公園あるいは金土）
 Ia7 赤灰青色土（粗砂・礫を多く含む）
 Ia12-1 環状土（凝灰岩片をブロック状に多く含む 円礫を含む 赤土）
 Ia12-2 凝灰岩集中部

- I b 層：近代以後造成土等（旧跡層）
 Ib5-6 黒褐色砂質土（しまりなし、径3～10cmの円礫・炭化物を含む P07）
 Ib7 円礫層（径10～20cmの円礫主体 粗砂を含む P07）
 Ib11 堆積灰色砂質土（炭化物・小礫・粗砂を多く含む 最下層に凝灰岩の砂石を多く含む）
 Ib30-5 赤褐色砂質土（粘土・黄褐色粘土粒を多く含む 炭化物・小礫を含む 明治14年火災層）
 Ib33 赤褐色砂質土（Ib30-5層より黄褐色粘土粒を多く含む）
 Ib36 濃い、堆積灰色砂質土

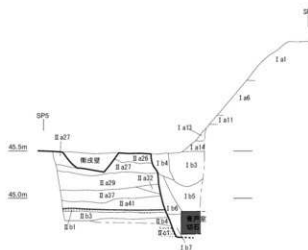
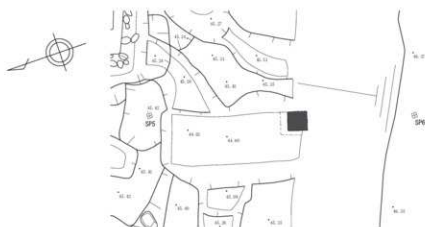
- II a 層：近世遺構土・造成土（石垣台構築以後）
 IIa30 濃い、堆積灰色砂質土（Ib36層より堆積）
 IIa31 濃い、堆積灰色砂質土（炭化物・粗砂を含む）
 IIa39 明褐色砂質土（灰黄褐色砂を3cmの層状に含む 小礫を含む）

- II b 層：近世造成土（石垣台構築以前（上））
 IIb4 黒褐色粘質土（膨灰色粘質土ブロック・砂を含む 上面硬化）
 IIb5 黄褐色砂質土（砂・砂利を含む）

- II c 層：近世造成土（石垣台構築以前（下））
 IIc1 堆積黄色砂質土（しまりあり 赤土質を多く含む 砂を含む 上面硬化）
 IIc2 環状土（黒褐色粘質土ブロックと黄灰色粘質土ブロックの混土 小砂利を少量含む）



第17図 鶴ノ丸第1次調査区 P07 平面図・土層断面図 (S=1/40)



I a 層：近代以後造成土等（公園整備～金沢大学）

- I a1 灰褐色砂質土
- I a6 主に灰褐色砂
- I a11 主に粘褐色粘質土（砂・礫含む）
- I a13 黒灰色土（腐～炭化物を多く含む）
- I a14 暗褐色砂質土（礫含む）

I b 層：近代以後造成土等（旧陸軍）

- I b3 円礫層（径10～20cmの円礫主体 モルタル片・瓦・暗褐色砂質土含む P10）
- I b4 暗褐色砂質土（炭化物・小礫含む P10）
- I b5 主に灰褐色砂質土（径10～15cmの円礫含む P10（古段階）のみ）
- I b6 灰褐色砂質土（粗砂・炭化物を少量含む P10（古段階）のみ）
- I b7 暗褐色砂質土（しりりあり 径5～10cmの円礫と小礫を非常に多く含む P10（古段階）のみ）

II a 層：近世遺構埋土・造成土（石垣台構築以後）

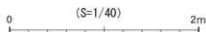
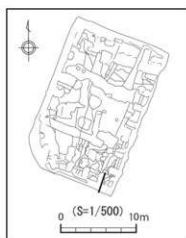
- II a26 主に暗褐色砂質土（径5～10cmの円礫・炭化物を含む）
- II a27 暗褐色砂質土（炭化物・粗砂を多く含む）
- II a29 暗褐色砂質土（粗砂・円礫を多く含む）
- II a32 明褐色砂質土（粗砂・小礫を多く含む）
- II a37 主に灰褐色砂質土（径2～5cmの円礫を多く含む 炭化物を含む）
- II a41 黄褐色砂質土（粗砂・小礫を多く含む）

II b 層：近世造成土（石垣台構築以前（上））

- II b1 砂利層（しりりあり（硬化面） 径1～3cmの（円）小砂利主体 黒褐色粘質土を含む）
- II b3 II a38層より堆積（II a38層と同質だがややしりりあり）
- II b4 黒褐色粘質土（黄褐色粗砂・暗褐色粘質土をパッチ状に含む）

II c 層：近世造成土（石垣台構築以前（下））

- II c1 黄褐色砂質土（小砂利を含む）



第18図 鶴ノ丸第1次調査区 P10平面図・土層断面図 (S=1/40)



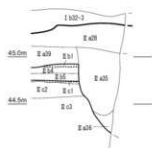
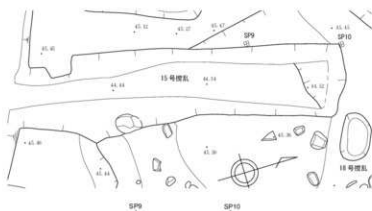
①トレンチ②

- I b層：近代以後造成土等（旧陸軍）
 I b12 赤戸室くず層
 I b13 赤灰黄色砂
 I b14 暗灰色粘質土（炭化物・径10cm大の礫・瓦を多く含む2号棟乱）

- II a層：近世遺構埋土・造成土（石垣台構築以後）
 II a28 灰褐色粘質土（小砂利と径5～10cmの円礫を多く含む）

- II b層：近世造成土（石垣台構築以前（上））
 II b10 暗灰色土（径5～10cmの円礫を多く含む。砂・炭化物を含む）

- II c層：近世造成土（石垣台構築以前（下））
 II c6 暗褐色粘質土（暗灰色粘質土をパッチ状に多く含む。小円礫を多く含む）
 II c7 暗褐色粘質土（上層より薄い。暗灰色粘質土較を多く含む。炭化物・円礫を少量含む）
 II c8 濃い褐色シルトブロック層（砂・灰色砂質土を含む）
 II c9 灰色砂質土（砂・円礫を含む。褐色シルトブロックを含む）
 II c10 灰白色シルト層（径3～5cmの円礫を含む）



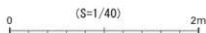
②15号棟乱

- I b層：近代以後造成土等（旧陸軍）
 I b32-3 濃い暗灰色土（炭化物・径5～10cmの円礫・砂利・瓦を多く含む。明治14年大火層か）

- II a層：近世遺構埋土・造成土（石垣台構築以後）
 II a28 暗灰色砂質土（径5～15cmの円礫を非常に多く含む）
 II a35 濃い暗灰色粘質土（炭化物・粗砂・小礫を含む）遺構埋土
 II a36 濃い暗灰色土（しりりあり。径5～10cmの円礫を非常に多く含む。遺構埋土）
 II a39 明褐色粘質土（灰黄褐色砂を3cmの層状に含む。小礫を含む）

- II b層：近世造成土（石垣台構築以前（上））
 II b1 砂利層（径1～3cmの小円礫（小砂利）主体。しりりあり。明褐色砂質土を含む上面硬化）
 II b4 黒褐色粘質土（暗灰色粘質土ブロック・砂を含む。上面硬化）
 II b5 黄褐色砂質土（砂・砂利を含む）

- II c層：近世造成土（石垣台構築以前（下））
 II c1 暗褐色粘質土（しりりあり。赤戸室くずを多く含む。砂を含む。上面硬化）
 II c2 暗灰色砂質土（黒褐色粘質土ブロックと黄褐色粘質土ブロックの混土。小砂利を少量含む）
 II c3 黒褐色粘質土（II b4層より薄い。暗灰色粘土と砂を含む）



第19図 鶴ノ丸第1次調査区 近代以降掘乱平面図・土層断面図 (S=1/40)

2. 近世の遺構

(1) 暗渠遺構 (第15・20～22図)

調査区南端から、ほぼ南北に軸を取る3条の暗渠遺構を確認した。それぞれ掘方内から石管、粘土を巻いた木樋(以下粘土巻木樋と表記)、木樋の3種類の導水管を検出しており、これらを順にSD01・SD02・SD03と呼称する。これらの流路は18世紀半ば以降の絵図に描かれた辰巳用水に相当すると考えられる。なお、これらについては遺構の保護のため、掘方の検出及び部分的な断面調査にとどめており、底部まで確認したのはトレンチ1の断面に限られる。掘方底の標高は、SD01で44.6m、SD02で44.5m、SD03で44.2mを測る。IIa層に属する遺構である。

a. SD01 (第15・20・21図)

調査区南西隅において検出し、方位は真北から13.1°西に振っている。掘方は延長約8.8mにわたり検出され、幅は最大で2.2m以上、検出面からの深さ68cmを測る。SD02と一部重複しており、切り合い関係からSD02より新しいことが明らかである。また、トレンチ1断面の精査より、少なくとも1度改修を受けた可能性がある(IIa1層)。出土遺物は多くはなく、掘方から19世紀代の陶磁器や釉薬瓦が出土したが、これらが改修前の層に属するのか改修後の層に属するのかなど、出土状況の詳細については明らかでない。

導水管である石管は、延長約8.0mにわたり8本分確認された。石管は現地において上面の観察を行い、調査終了後に埋め戻した。断面形は方形で、長さは確認できたもので91～99cm、幅37～38cmを測る。また、確認できた石管上面及び東側面には、細かいノミ加工が施されており、上面の両端部付近(小口から6～11cmの中央部)に、石管の連結を強固にするための締め合せ用と言われる長辺3～7cm、短辺2～5cm、深さ約2～4(平均3.4)cmの平面長方形の穴があけられていた。石管は掘方の底に直接据えるのではなく、底部を円礫層(IIa4層)で埋めてから設置している。また、石管の周囲は円礫を含む土(IIa2・3)で埋められていた。さらに、連結部においては、石管の下に沈下防止のためと見られる敷石が配置されていることが、調査区南端部とトレンチ1内の2か所の連結部において観察されている。石川門土橋の調査でも石管の連結部を敷石上に乗せ、石管の周囲及び下部に拳大の石を敷きつめた状況が確認されており、本例と類似する[石川県立埋蔵文化財センター1997]。

辰巳用水の導水管については、木樋では管自体の強度が弱く、空中や土中では腐食が進むということもあり、天保14(1843)～文久2(1862)年にかけて、より耐久性の高い金屋石(凝灰岩)製石管に替えられたことが文献資料により判明している[辰巳ダム関係文化財等調査団1983][庄川町1975]。また、これらの石管は、今までに発掘調査や工事中に発見されるなどして、金沢城内や兼六園、小立野石引通、広坂通、尾山神社等で確認されている。一辺40cm(約1尺3寸)前後・長さ70～120cmを測る角材で、導水孔は断面丸形で、径18cm(約6寸)前後を測り、小口には長さ約3.3cmの凸部と反対面に受部が掘られており、石管連結のための接着剤として松脂に混和剤を入れたものが使われていた。本調査区で検出された石管は上面と側面の一部の検出のみで、連結部や導水孔等の詳細について明らかではないが、これらと同様の構造を持つと考えられる。

b. SD02 (第15・20～22図)

調査区南西～北部にかけて延長約17.3mにわたり検出し、方位は真北から7.7°東に振っている。掘方の幅は約2.45m、検出面からの深さ77cmを測る。導水管である粘土巻木樋は調査区南西部から4号掘乱北壁まで断続的に検出されている。出土遺物の量は多くはないが、掘方からは主に18世紀中葉～後半の陶磁器や糠瓦、釉薬瓦が出土しているほか、重複するSD01や攪乱等からの混入と考えられる陶磁器や釉薬瓦も少量見られた。

導水管である粘土巻木樋は、断面丸形で、板を桶状に組んだ(土製品P062(後述)の観察より、

12枚程度と見られる)木製樋の周りに漏水防止のためと見られる小礫混じりの粘土を巻き付けたものである。粘土巻の内面には木樋を構成していた板が当たっていた痕跡が残るが、木質が腐食しており、材の厚さなどについては明らかでない。なお、粘土巻木樋の一部を取り上げ、観察を行ったところ、木樋同士の連結は、両端に作り出された凹部と凸部を組み合わせて行われたことが明らかとなった。また、設置する際は、掘方の底に直接据えるのではなく、底部を円礫や粗砂・砂利を多く含む層(Ⅱa8～11層)で埋めた上に設置してから、周囲を円礫や粗砂・砂利を含む土(Ⅱa7-1・7-2層)で埋めていた。

調査区南端部の断割において、粘土巻木樋の下に、沈下防止のためと見られる幅53cm、厚さ26cm以上を測る平らな河原石が置かれていたことから、この部分が連結部にあたると思われる。更に、この地点では、木樋と敷石の間で礫と瓦が検出されており、木樋の安定を図るために、木樋と敷石の間に礫や瓦をかませていたと考えられる。なお、瓦は軸葉瓦で、軸色は赤褐色の平瓦ないし棧瓦と見られるが、粘土巻木樋の下に延びていて取上げられなかったため、詳細は明らかでない。また、南端の連結部付近で、粘土製の支持受け部材を検出した(P061)。このように支持受け上に木樋本体を設置したり、木樋の連結部に沈下防止の河原石を置いたりする状況は、構築時期や木樋の構造は異なるが、石川門土樋でも確認されている。

なお、掘方の土層断面の観察(トレンチ1)により、粘土巻木樋の外形は約44cm(約1尺4寸5分)、内径は約20cm(約6寸6分)を測り、2度の改修が行われたと考えられる(最古段階:Ⅱa15層、古段階:Ⅱa12～Ⅱa14層、新段階:Ⅱa7-1～Ⅱa11層)。

c. SD03 (第15・21・22図)

調査区南西～北部でほぼSD02と重複しており、約13.0mにわたり検出されている。方位は真北から5.5°東に振っており、幅173cm以上、深さ112cmを測る。導水管は遺存状況が悪く、トレンチ1及び近代以降の1・12号攪乱の壁面で断面丸形の木樋の痕跡を確認しただけである。出土遺物は少なく、掘方からは18世紀代の陶磁器や燻瓦が出土したほか、重複する攪乱からの混入と考えられる軸葉瓦や旧陸軍時代の磁器小片が見られた。

切り合い関係からSD02より古いものであることが判明している。また、トレンチ1断面の精査より、少なくとも1度改修を受けている可能性がある(古段階:Ⅱa24層、新段階:Ⅱa16～Ⅱa23層)。また、導水管である木樋は、掘方の底に直接据えるのではなく、底部を円礫を含む層(Ⅱa22・23層)で埋めてから設置し、周囲を円礫や砂利を含む土(Ⅱa16・20層)で埋めていた。なお、SD03ではSD01・02で検出されたような沈下防止の敷石を確認できなかったが、断割による部分的な調査であったため、敷石が存在しなかったとは明言できない。

木樋の寸法について、トレンチ1及び12号攪乱北壁における土層断面の観察から、以下の2通りの解釈が考えられる。

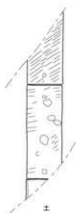
①トレンチ1のⅡa19層下部で検出された腐植土について、木樋を安定させるための構造物と評価すると、トレンチ1及び12号攪乱北壁のⅡa17層は崩壊部または水漏防止用土、トレンチ1及び12号攪乱北壁のⅡa18層は木樋の本体部分、トレンチ1及び12号攪乱北壁のⅡa19層は木樋を安定させるための構造と解釈できる。よって、木樋の寸法は、外径約23cm(約7寸6分)、内径不明と復元可能である。

②トレンチ1のⅡa19層下部の腐植土を木樋本体と評価すると、トレンチ1及び12号攪乱北壁のⅡa17層は木樋本体(上部)、トレンチ1及び12号攪乱北壁のⅡa18層は木樋の導水孔、トレンチ1及び12号攪乱北壁のⅡa19層は木樋本体(下部)と解釈できる。よって、木樋の寸法は外径約50cm(約1尺6寸5分)、内径約23cm(約7寸6分)と復元可能である。

既往の調査で検出・出土した辰巳用水木樋は、二ノ丸極楽橋付近の土層断面で確認された(1)断

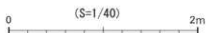


土



土

①石管検出状況



12号機庫



I b 層：近代以後造成土等（旧陸軍）

I b10 暗灰色土（炭化物を多く含む 円礫・砂利を含む 近代履版）

II a 層：近世遺構埋土・造成土（石垣台構築以後）

II a2-1 におい灰色土（炭化物・黄灰色粘土（粘土層）・褐色粘質土を含む S301）

II a3 におい灰色土（II a2 層より強い 炭化物・円礫・褐色粘質土を含む S301）

II a4 円礫層（径 10～15cm の円礫主体 粘土巻土ブロック・II a3 層を含む S301）

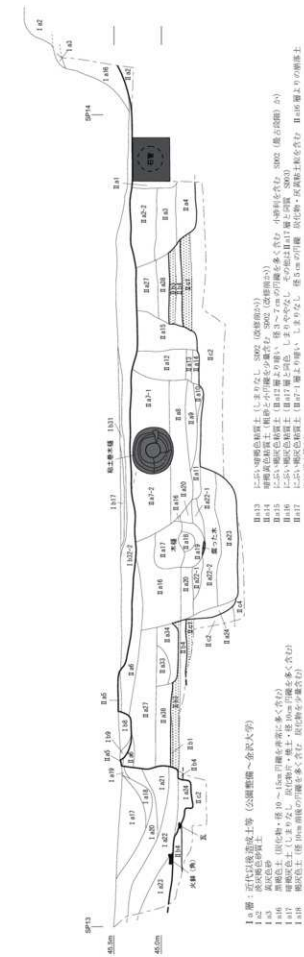
II a7-1 褐色粘質土（炭化物・円礫・小砂利を含む S302）

II a8 褐色粘質土（II a7-1 層よりやや明るく円礫が多い S302）

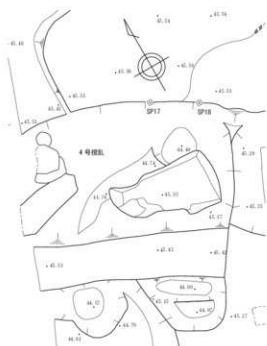
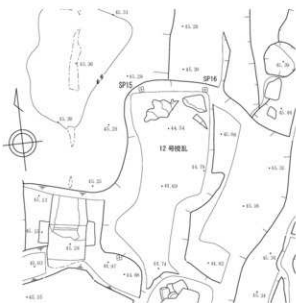
②調査区南西部石管・粘土巻木桶



第 20 図 鶴ノ丸第 1 次調査区 石管検出状況、調査区南西部石管・粘土巻木桶平面図・土層断面図 (S=1/40)

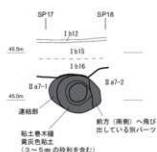


第21図 鶴ノ丸第1次調査区 トレンチ1南壁土層断面図 (S=1/40)



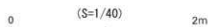
①12号掘乱北壁

- II a 層：近世遺構埋土・造成土（石垣台構築以後）
 II a7-2 に近い褐色粘質土（II a7-1層より汚穢多い）SD02
 II a8 に近い褐色粘質土（II a7-1層より灰く粗砂が多い）SD02
 II a16 に近い褐色粘質土（II a17層と同色）しりややなし。その中はII a17層と同質 SD03
 II a17 に近い褐色粘質土（II a7-1層より球い）しりやなし。径5cmの円礫・炭化物・灰黄粘土粒を含む。II a16層よりの崩落土 SD03導水管か
 II a18 に近い褐色粘土（しりやなし）シルト・砂を多く含む SD03導水管か
 II a19 明褐色粘質土（粗砂を含む）SD03導水管か
 II a21 褐色粘質土（しりやなし）凝結土層 SD03
 II a22-1 灰褐色粘質土（径5～10cmの円礫と炭化物を含む）SD03



②4号掘乱北壁

- I b 層：近代以後造成土等（田除草）
 I b12 赤戸重く平層（砂利を含む）
 I b15 に近い褐色粘質土
 I b16 に近い褐色粘質土（I b15層より明るく均質）
 II a 層：近世遺構埋土・造成土（石垣台構築以後）
 II a7-1 に近い褐色粘質土（赤粘土をブロック状を含む）SD02
 II a7-2 に近い褐色粘質土（II a7-1層より砂利多い）SD02



第22図 鶴ノ丸第1次調査区 12号掘乱・4号掘乱平面図・土層断面図 (S=1/40)

面丸形の木桶〔井上 1969〕、石川門土桶で確認された(2)底板・側板・蓋板の4枚の板を組み合わせたもの、あるいは堂形〔石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター 2010〕及び石引通〔辰巳ダム関係文化財等調査団 1983〕で確認された(3)一本の材木に凹型溝を彫り、上部に同じ幅の蓋板を合わせたもの、の3タイプが確認されているが、(1)は径が約10cm及び約5cmと本例に比べかなり小規模であり、また(2)(3)はともに断面方形の木桶で、本調査で確認したように木桶が断面丸形を呈しているのは様相を異にする。

また、文献史料では、安永4年(1775)の「上ヶ水樋図り帳」(穴太政洋家蔵)において、断面丸形の木桶についての記述があり、径1尺(30.3cm)、長さ2間(363.6cm)の松の木を2つ割りして内側を径6寸(18.18cm)にくり抜き、合わせ口に幅6分(1.818cm)の溝状のほぞを刻み、要所を銅輪で緊縛して合わせたものを高さ2尺2寸(66.66cm)、幅4尺5寸(136.35cm)、奥行1尺2寸(36.36cm)の箱型に径1尺(30.3cm)の孔を穿った継手で連結したことがうかがえる。なお、寸法や木材、端部付近の加工に相違が見られる(直径約18cm、内径約6cmの草横材、両端を角ばった形で狭める)が、高岡市の瑞龍寺出土木桶がこの文献に書かれたものと類似した構造を持つことが知られている〔高岡市水道史編纂委員会 1979〕。

本調査区で検出された木桶は、木質の腐食により土層断面のみでの部分的な検出にとどまっており、詳細が明らかでなく、既存の事例や文献とも相違する点があることから、寸法等詳細の解釈については、上述の①②の可能性のあることを指摘するとともにしておきたい。

(2) 馬洗場 (第23図)

調査区南東部において、南北約3.8m、東西約4.4mの範囲に及ぶ黄色系粘土の広がりが見出されており、その北東辺では、凝灰岩石列(1号石列)が見出された。これら一連の遺構は、概が描かれた各種絵図に見える「馬洗場」と考えられる。粘土は防水の役割を果たす、馬洗場の下部構造を構成するものと見られ、石列は、馬洗場周縁を囲う縁石と見られる。

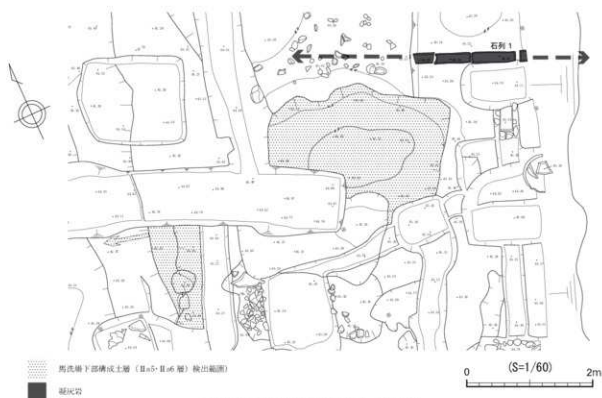
遺構は平面及び、トレンチ1での部分的な断割で確認した。IIa5層(淡灰黄色粘土ブロック層)及びIIa6層(明褐色砂質土(径5~10cmの円礫を多く含む))が該当し、検出面からの深さは26cmを測る。これらの土層が確認できた範囲は、長辺(北西-南東)5.6m(平面及び断面で確認できた範囲。平面のみなら4.4m)、短辺3.8mを測る。

また、本調査以前の平成11年4月21・26日に石川県教育委員会文化財課により実施された管路立会調査において、GL-80cmのレベルから、絵図に描かれた馬洗場南の井戸が確認されている。この井戸は金沢大学時代に板状のコンクリートで蓋をされていた。井戸枠の外側に金沢大学時代の攪乱土が及んでいたことから、明治以降には井戸枠が地表に出ていると考えられる。井戸枠は凝灰岩製で、厚さ約10cm、一段の高さ90~100cm、内径96cmを測る。また、井戸の深さは15mで、底には水が溜まっていなかったことが確認されたほか、井戸枠を積み重ねる接着剤として、漆喰状のものが観察されている。なお、立会調査後、井戸は再びコンクリートによる蓋を施したうえで、埋め戻されている。

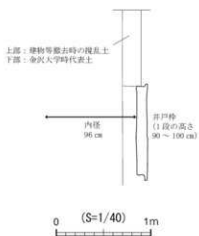
(3) 石垣台 (第24~26図)

調査区の北部において、宝暦大火(宝暦9=1759年)以前から絵図に描かれている二ノ丸への通路と極楽橋下の空堀を画する石垣台の南面(石垣ID:2330S)、及び西面(石垣ID:2330W)の根石の一部について、東西4.9m、南北2.5mの範囲で検出した。この石垣台の北方への延長部分は、平成10年度の橋爪門続櫓・二ノ丸階段調査区〔石川県金沢城調査研究所 2011c〕、及び平成24年度の橋爪門二ノ丸園路調査区〔石川県金沢城調査研究所 2015b〕において確認されており、復元規模は東西約7.8m、南北25.5m以上となる。なお、いずれの調査区でも、近代以後に上部が撤去されている。IIb層に属する。

確認された根石は、石垣台の南面西側及び西面南部に位置する。南面東側では根石が確認できな



①馬洗場下部構造粘土検出範囲 (S=1/60)



②馬洗場南井戸柱状図 (S=1/40)



井戸検出作業



井戸検出状況



井戸の内部



埋戻し後の井戸

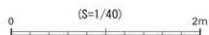
第23図 鶴ノ丸第1次調査区 馬洗場下部構造粘土検出範囲 (S=1/60)、管路立会調査検出井戸柱状図 (S=1/40)・写真



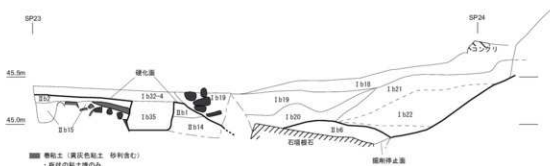
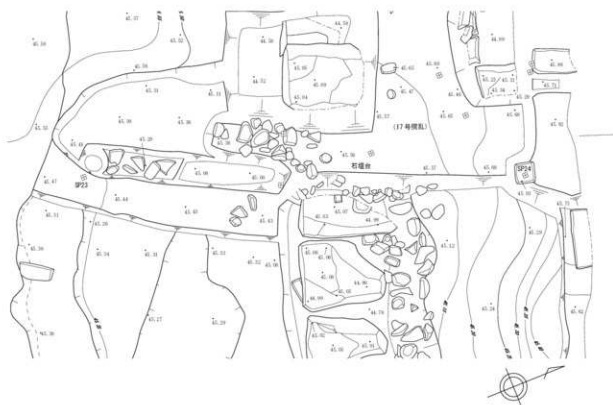
①南面 (2330S) 西端断面図



②西面 (2330W) 断面図



第25図 鶴ノ丸第1次調査区 石垣台 (2330S・2330W) 平面図・断面図 (S=1/40)



I b 層：近代以後造成土等 (田跡)

- I b18 緑褐色粘質土 (炭化物・径5~10cmの栗石を非常に多く含む。褐色粘土類を含む 石垣採取痕)
- I b19 栗石層 (径5~10cmの栗石 (円礫) 主体。褐色粘質土を含む。石垣採取痕)
- I b20 褐色粘土質土 (庫内庭と背戸基のくず屑 (2~3cm) を多く含む。径5~10cmの栗石を多く含む 石垣採取痕)
- I b21 栗石層 (径5~10cmの栗石主体。しまりのない褐色土を多く含む。石垣採取痕)
- I b22 栗石層 (径10~30cmの栗石主体。しまりのない褐色土を少量含む。石垣採取痕)
- I b22-4 緑褐色粘土質土 (炭化物・灰・径2~5cmの円礫を含む。明治14年大災害)
- I b25 緑褐色粘土質土 (I b22-4層より硬い。しまりなし。径5~15cmの円礫を多く含む。炭化物と粘粘土ブロック含む)

II b 層：近世造成土 (石垣台構築以前 (上))

- II b1 褐色粘土質土 (砂利と炭化物を少量含む。上面硬化)
- II b2 褐色粘土質土 (上面のみ硬化。砂利を含む)
- II b4 栗石層 (径10~20cmの栗石主体。最下層は径5~15cmの栗石主体)
- II b14 上記褐色土 (炭化物・礫を含む)
- II b15 II b1層と同色同質層 (形状の黄褐色粘土塊・礫を含む)



第26図 鶴ノ丸第1次調査区 石垣抜取痕付近平面図・土層断面図 (S=1/40)

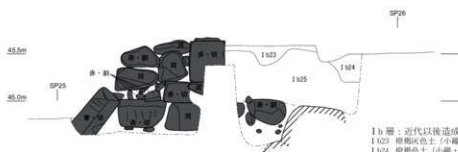
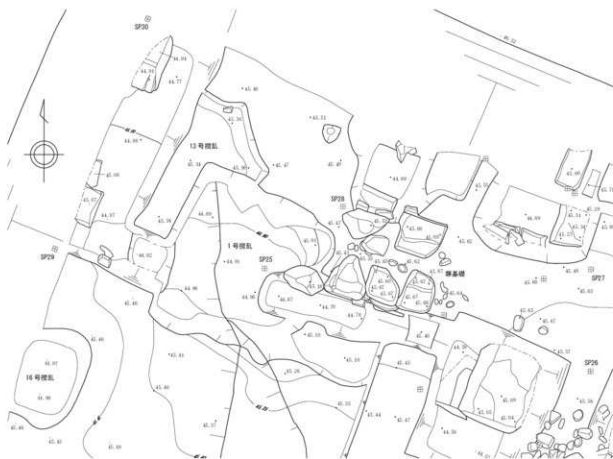
かったが、栗石層を形成していたと見られる河原石や小礫混じりの土の広がりや面的に確認されている。根石の上部及び前面には、石垣台の撤去により動いた栗石層（Ⅰb18～22層）が堆積している。前面の栗石層（Ⅰb19層）下には、明治14年の火災層（Ⅰb32-4層）、さらにその下には上面が硬化した砂利混じりの砂質土（Ⅱb1・2層）及び、板状の黄灰色粘土塊を含む層（Ⅰb35・Ⅱb15層）が堆積する。また、北壁中央部の土層断面において、Ⅱb10・Ⅱb16・Ⅱb18層からなる基盤層を根切（Ⅱb7・Ⅱb8層）して、石垣を据えた後、Ⅱb1層で整地した状況を確認した。基盤層は石垣台構築以前の造成、または石垣台構築工程における早い段階での造成の2つの可能性が想定されるが、遺物の出土が見られず、詳細は明確でない。

南面及び西面で確認した根石は7石あるが、南西及び西面の2石を除いて上面のみの検出にとどまる。面を確認できた2石はどちらも赤戸室石で、南西端の根石は控え長125cm、面は、縦43～49cm、横60cm以上を測り、全体にノミ加工が施された面に大型の刻印「 \ominus 」を有する。北西の根石は控え長35cm以上、面は縦59cm、横39cm以上を測り、全体にノミ加工が施された面に大型の刻印「 \circ 」を有する。2石とも粗加工石で、面に大型刻印が施されていたことから、金沢城石垣編年第4期（寛永年間）に属するものと考えられ、この石垣台が橋爪門続櫓台石垣と同時期に構築されたとする先行の報告と矛盾しない。なお、面を確認できなかった南面の5石については、面加工や刻印の有無等詳細については明らかでないが、根石上面の標高は約45.0mで、控え長は85～125cmを測る。

また、土層断面の観察より、石垣の抜取痕が明治14年の火災層を切っていることが確認できたことから、石垣が明治14年の火災以後に撤去されたと考えられる。

（4）塀基礎（第27・28図）

Ⅱb層に属する。石垣台西面に連結する塀の基礎石積の南面及び北面を検出した。上部構造は近代以降に失われたが、残りの良いところで3段分の石積を確認しており、検出した規模は最大長7.6m、最大幅23cm、最大高98cmを測る。また、塀南面での最下部レベルは44.7m、北面での最下部レベルは44.7mを測る。築石には戸室石（赤・青）の切石・粗加工石・割石及び河原石が使われており、中には転用材と見られる加工を施された石材もあったことから、塀の構築後に改修が行われた可能性も考えられる。また、裏込めには径5～20cm程度の円礫（栗石）と砂利が多く含まれていた。近代以降の攪乱により一部で確認できないが、調査区西壁北端土層断面において基礎石積の根石と見られる赤戸室石と青戸室石の粗加工石を検出した。南側の赤戸室石は原位置を保っているが、北側の青戸室石は石垣台及び塀の撤去時に原位置から動いたと見られる。また、Ⅱb12・13層は塀設置に関係する土層と考えられ、断割内では確認し切れなかったが、Ⅱb13層は塀基礎根石の掘方埋土の可能性もある。Ⅱb12層は塀構築時、根石を据えた後の整地層と考えられ、しまりがあり砂利を含むなど、石垣根石上部の整地層であるⅡb1層と類似した土質で、一連の造成と考えられることから、石垣台と塀が同時期に作られたと推定される。



①南面土層断面

1b層：近代以後造成土等（田跡層）
 1b23 橙褐色土（小礫・炭化物・径10cm位の礫を含む）
 1b24 橙褐色土（小礫・鉄を含む）
 1b25 黒石（径10～20cm）と暗灰褐色砂質土



②北面土層断面

1b層：近代以後造成土等（田跡層）
 1b25 橙褐色砂質土（径5～10cmの円礫と砂利を含む）
 IIb層：近世造成土（～石垣台構築）
 IIb19 暗灰褐色砂質土（炭化物と径5～10cmの円礫を多く含む）

0 (S=1/40) 2m



第27図 鶴ノ丸第1次調査区 堀基礎付近平面図・土層断面図 (S=1/40)

第3節 出土遺物

1. 概要

鶴ノ丸第1次調査区において出土した遺物は、陶磁器・瓦・石製品・骨製品・土製品等である。遺物はほとんどがI層から出土している。出土量も多く、遺存率の高い遺物も多い。II層については、発掘時において、辰巳用水等近世遺構の保護のために、掘方等の検出と部分的な断割のみに留めており、出土遺物は比較的少量である。このうち陶磁器については、出土地点ごとにまとめて記述し、それ以外のものは、器種を優先した上で、遺構ごとに記述している。

2. 土器・陶磁器 (第32～37図、第7～9表)

陶磁器の分類・年代観については、[九州近世陶磁学会2000]・[服部1993]・[石川県教委・(財)石川県埋蔵文化財センター2002b]・[石川県金沢城調査研究所2012a]・[石川県金沢城調査研究所2014e]等を参考にして記述した。また、土師器皿の器形・胎土分類、陶磁器の胎土分類については、[石川県金沢城調査研究所2014e]に依っている。

I層 (第32～36図)

I層は、金沢城公園・金沢大学期(Ia層)と旧陸軍期(Ib層)に細分されるが、遺物においてはIa・Ib層ともにほとんどが旧陸軍期のもので占められているので、まとめて記述していく。P001～P010、P012～P028は磁器、P011、P029～P037は陶器、P038～P045は土器である。

旧陸軍期の遺物のなかでも特徴的なのが、外側面に2本の圏線と1～3本1組の縦線と3つの区画を作り、その中にアラビア数字を描いている碗・皿である。既成の染付磁器の上から赤の後絵付で描いているものと、最初から染付製品として作られているものがある。P001～P004は前者の製品で、このうちP001・P002は瀬戸・美濃の端反碗で縦線は3本1組である。P001には「3」が外側面と高台内に描かれている。P002は区画線のみで数字は描かれていない。P003・P004は再興九谷の内面格子文の皿で、P004は口縁片のため不明であるがP003は蛇の目軸刺ぎをしている。縦線は3本1組、数字についてはP003は「1」で高台内にも描かれ、P004は「4」である。

P005～P007は最初から染付として作られた製品である。P005は端反碗で、縦線は3本1組、数字は「2」、内面には圏線と見込文様がある。P006・P007は皿で、P006は高台の幅が広く、縦線は3本1組で数字は「2」、P007は縦線が1本で数字は「3」である。いずれも陶器質の胎土で、再興九谷の製品であろう。P008は染付蛇の目凹型高台皿で、この製品は染付のみであるが、金沢城の他の地点では赤の後絵付で圏線・縦3本線・「1」を描いているものがある[石川県金沢城調査研究所2012a]。P009は瀬戸・美濃の白磁碗に青の上絵付で「第七聯隊」と描かれている。

P010～P016は染付の蛇の目軸刺ぎ皿である。直接旧陸軍との関連を示すものはないが、ほぼ同タイプの皿が多数出土していて、食堂等で使用した可能性を窺わせる。P010は灰色がかかった胎土で内側面には笹文、見込には鳥文が簡略化されて描かれている。P011は陶胎染付で、ごく薄く白泥を掛けた上に呉須で笹文と舟文を描き、透明釉を掛けている。釉も薄いので、胎土の浅黄橙色や細かい黒色の砂粒が透けて見えている。蛇の目軸刺ぎの部分に漆と思われるものが付着している。P012は形はP011に似ているが、淡黄色の陶器質の胎土で、P011より崩れた笹文が描かれている。畳付に黒く煤が付いていて、高台や外側面の貫入にも染み込んでいる。P013・P014は、淡黄色の陶器質の胎土に簡略化された笹文を施している。P015・P016は灰白色の胎土と緑色を帯びた透明釉で、半菊文と圏線が描かれているが、呉須は少し滲んでいる。

P017・P018は染付型紙摺りの鉢で、酸化コバルトを使っている。同一個体ではないが同タイプであり、同様の鉢が3個体以上ある。P019は瀬戸・美濃の染付端反碗で同様のものが7個体以上ある。

19世紀中葉の製品であり近世に生産されたものであるが、被熱による溶着物があるのは、明治14年(1881)の火災によると思われるので、廃棄されたのは旧陸軍期となる。

P020～P028は旧陸軍期以前に使用されたと思われる磁器である。P020は中国漳州窯の青花皿である。P021は再興九谷と見られる染付丸碗で胎土はやや陶器質、染付文様は見込に描かれた「紺」の文字だけである。旧陸軍期に下るかもしれない。P022～P027は肥前染付碗で、18世紀後半～19世紀初の製品である。P028は瀬戸・美濃染付の方形水滴である。

陶器では、碗・皿・鉢・灯明受皿・土瓶・徳利・播鉢・甕・壺等生活に伴う様々な器種がある。P029は京・信楽の灰釉碗で釉が一部白濁している。P030は肥前鉄釉碗で疊付に回転系切り痕が残っている。P031は灰釉鉢で、被熱によって釉が白濁している。P032は灰釉の灯明受皿で、油煙痕が1か所あることから、灯明皿として使われていたと思われる。P033は再興九谷の灰釉梅花文土瓶で、亀形つまみを付けた蓋(P034)と共に、全くの同形ではないが同様のものが7個体以上出土している。P035は6号攪乱から出土した山水土瓶の蓋で完形である。P036・P037は甕で、P036は灰釉に黒釉を掛け流している。再興九谷八幡若杉窯の製品と思われる。P037は外面は白釉に口縁から肩部にかけては緑釉を掛け、内面は透明釉を掛けている。一部釉が白濁しているのは被熱によるものであろう。

土器では12号攪乱からC1類の土師器皿(P038)が出土しているが、本来初期の遺構・整地層等に伴うものであろう。P039～P043は土器火鉢である。15号攪乱から出土した角形火鉢(P039)は、口縁を外側に肥厚させ、口縁と外側面は丁寧なヘラケズリできれいに仕上げ、内側面は強くナデ上げている。外底面には全体に砂敷きの跡が残っている。同様の火鉢は、15号攪乱以外からも多数出土している。全体の大きさのわかるものはないが、高さ16cm程度、縦横は18cm以上あると思われる。P040・P041は円筒型で、外面に墨が塗られているのは、漆塗りのための下塗りの可能性がある。P042・P043は外面赤彩の丸型火鉢である。P044は瓦質土器の香炉で板状脚を持ち外側面には菊花形の印花文がある。内面はヨコナデしているが、体部の一部に指頭圧痕が残っている。口唇部には敲打による欠損がみられ、灰吹きとしても使用されていたのであろう。P045は須恵器双耳瓶の耳部分である。9世紀後半の南加賀の製品である。

II層(第37図)

近世の土層であるが、近世の遺構は保護のためにほとんど掘り下げていないので、出土している遺物も少量である。

P046はSD01から出土した瀬戸・美濃磁器の染付碗で、東大福年のVIII d期(1850～60)の製品である。I層の第33図P019と同タイプであり旧陸軍期まで使用されていた可能性もあるが、混入でないとすれば遺構の年代を反映する可能性がある。

P047～P054はSD02の掘方から出土したもので、P047・P048は肥前磁器の染付碗、P049は褐色の釉の上から黒褐色の釉を掛け流している京・信楽系陶器碗である。陶器灰釉碗(P050)と共に18世紀中葉から後半のものである。P051は越前陶器播鉢で、よく使い込まれている。P052は肥前陶器壺の口縁である。陶磁器の年代に対して、土師器皿(P053・P054)は17世紀初頭から前半と古くなっているが、初期の遺構・土層等からの混入と思われる。

SD02の粘土巻木樋の中からは、再興九谷磁器染付碗(P055)や、図示していないが土師角形火鉢や陶器絵片、また、ごく小片ではあるが酸化コバルトを使用した磁器染付が出土している。酸化コバルトを使用した染付以外はSD01に替る直前の流入とも考えられるが、近代に攪乱を受けていることと、粘土巻木樋内が空洞であることから、これらについては攪乱からの流れ込みもとらえるのが妥当と思われる。

第37図P056～P058はSD03の掘方から出土したもので、P056は肥前磁器の染付碗、P057は同じく染付蓋、P058は肥前陶器鉄釉瓶の底部である。図示していないが、SD03の掘方からは肥前磁器染

付、陶器灰軸小片と共に「第」と青で上絵付された旧陸軍期の磁器端反碗の小片が1点出土している。SD03の使用年代とズレが生じているが、攪乱からの混入と思われる。

P059は馬洗場に伴う1号石列の下(第17図東壁断面図IIa31層)から出土した肥前磁器染付碗で、底部片のみであるが、やや内湾する三角高台で皿付を釉剥ぎしている。17世紀後半のものと思われる。P060は、15号攪乱の下の近世層から出土している土師器皿で、17世紀前半のものと考えられる。

3. 土製品(第38～43図、第9表)

辰巳用水の導水管のひとつである粘土巻木桶は、本来は木桶の周りを漏水防止のための小磯混じりの粘土で巻いた構造を取っていたが、検出時に木質が腐食によりほとんど残存していなかったため、ここでは土製品として紹介する。

P061は、粘土巻木桶の外周で検出された部材である。木桶を支える支持受け部材と考えられ、内径45cmを測る。2層の粘土巻からなると見られ、内側の層で、縄の上から竹を巻き付けて締め付けた痕跡を確認した。縄の間隔は割れ目部分で2～3cmを測る。

P062は粘土巻木桶の本管部分にあたり、外径45cm、内径24cm、厚さ約10cmを測る。腐食により粘土層の内側にあった木桶の木質は残っていないが、内面に木桶が当たっていた痕跡が残っており、12枚程度の板を桶状に組んでいたと見られる。材の厚みについては不明である。さらに、内面において木桶を箍で巻いたと見られる痕跡も確認できた。また、断面の観察により、木桶を覆う粘土巻は4層分確認でき、粘土巻の上から縄及び竹で巻いて締めていたことが判明した。縄は内側で約6cm間隔、外側で約9cm間隔で巻かれていた。

P063は粘土巻木桶の連結部と考えられる。断面観察の結果、大きく6つの部分に分かれていることを確認できた。すなわち、内側から木桶、粘土巻層(凸部)、凸部先端に巻かれた薄い板状の木質、混入物の少ないパテ状の粘土層、パテと接する側に滑らかな面を持つ粘土巻層(凹部)、継目の外周を巡る粘土巻層(外巻部)である。粘土巻層では他個体と同様に竹、縄、粘土による互層状構造をとる。外径は外巻部外周で46.7cm、凹部で41.8cm、内径は19cmを測り、連結部で径をやや狭めていた。また、厚さは、凹部の先端部で7.4cm、本管側で8.0～9.4cm、凸部は先端で3.2cm、先端根本で5.2cm、本管側で11.5cmを測り、先端部の方が値が小さくなる傾向にある。また、パテ状粘土と凸部の境目付近の内面に物が当たっていたようなくぼみ状の痕跡が巡っており、粘土層の内側の木桶を巻いた箍が当たった痕跡の可能性はある。なお、木桶の木質は腐食によりほとんどが失われており、粘土に残された圧痕等を確認した。

これらの状況を踏まえて復元した粘土巻木桶の構造(作り方)と連結の方法について、第42・43図で復元を試みた。粘土巻木桶は、桶状の木桶(外周径約24cm)を箍で巻き、その外周に粘土を巻き付けた上から約6cm間隔で縄でしめ、更に粘土を巻き付け、その上から約9cm間隔で縄でしめる。さらに、その上に幅約1.8cmに切った竹を表面を外に向け、裏面を内に向けて縦に通しあて、その上から更に竹を外周方向に巻き、周りに粘土を巻き付けて完成する。このように粘土等を巻いた後の外周径は約45cmを測る。

粘土巻木桶の連結は、端部に作りだされた凹部と凸部を組み合わせて行われた。連結の際に生じる隙間には、磯等の混入物の少ないパテ状の粘土が充填された。隙間からの漏水の防止と、接着剤的な役割を果たしたと考えられる。また、連結を容易にするためか、パテ状粘土と直接接する凸部先端外周には薄い板が巻かれ、凹部内面は滑らかに整えられていた。なお、連結に際しては、粘土巻部分では凸部を凹部で受けていたが、粘土巻内側の木桶部分では、パテ状粘土内面を巡る木桶を巻いた箍の痕跡から、箍により凸部内側の木桶が留められていたと推測されるため、粘土巻部分とは逆に、凹部内側の木桶を凸部内側の木桶で受けていたと考えられる。このように凹部と凸部を連結してから、更

に継目の上から本体と同質かつ裡で補強された粘土（外巻部）を巻き、水漏れを防いだと見られる。

4. 瓦（第44～52図、第10～16表）

出土した瓦は鉛瓦1点（M003）を除いてすべて粘土瓦であり、軒丸瓦・丸瓦・軒平瓦・平瓦・軒棧瓦・棧瓦・腰瓦・輪違い・棟瓦・熨斗瓦・面戸瓦を確認した。そのうちT001～T047の47点について図化した。また、図化には至らなかったが、多様な瓦当文様を持つ軒瓦や刻印を有する瓦を確認しており、これらについて瓦当及び刻印の拓本を掲載した（T048～T173）。なお、瓦の種類・瓦当分類、釉薬の色調、胎土分類等については、釉薬瓦を『金沢城跡石垣修築工事報告書-玉泉院丸南西石垣』[石川県金沢城調査研究所2010a]、煙瓦を『金沢城跡-河北門-』[石川県金沢城調査研究所2011b]・『金沢城跡埋蔵文化財確認調査報告書Ⅱ』[石川県金沢城調査研究所2014c]に拠った。

煙瓦の胎土は、A1類・A2類・B2類・C2類が見られた。全出土煙瓦では、B2類が最も多く、A2類・C2類も比較的多い。

釉薬瓦は、釉調が黒色系（黒色・黒褐色）を主体に、赤色系（赤色・暗赤色・赤褐色・暗赤褐色）や、わずかだが新しい時期に属する光沢の強い黒色も確認できる。胎土には色調の濃淡により明瞭な縞状を呈し緻密なものと、縞があまり明確でなく緻密なもの、縞のない緻密なもの及び空隙の多いものが見られた。また、越前赤瓦の出土はごく少数にとどまる。

(1) 軒丸瓦

T001～T005は軒丸瓦である。このうちT001以外は瓦当部のみの遺存である。T001は13号掘乱（I a層）出土の釉薬瓦。瓦当文様が梅鉢Ⅲ類で、外面にへら状工具によるナデ、内面に棒状工具による粘土掻き取りの痕跡が残る。また、体部に穿孔と見られる痕跡が1か所確認できた。T002は2号掘乱（I b層）出土の釉薬瓦。瓦当文様が梅鉢Ⅲ類で、刻印「㊦」を有する。T003は8号掘乱（I b層）

軒丸瓦 巴文分類表（棟）

分類名	珠文数	径 (cm)	巴の尾の向き	特記事項
I-1	12	16	左回り	
II-1a	14	14～15前半	右回り	中心に円形突起あり
II-1b	14	14～15前半	左回り	中心に円形突起あり
II-2a	14	14～15前半	右回り	
II-2b	14	14～15前半	左回り	尾が次の巴に繋がらないものを含む
III-1a	16	14後半～16	右回り	
III-1b	16	14後半～16	左回り	尾が次の巴に繋がらないものを含む
III-2	16	17～19	右回り	巴の間に鉤型や十字の突起あり
IV	不明	不明	左回り	巴の上面が平坦

軒丸瓦 巴文分類表（釉薬）

分類名	珠文	巴の尾の向き	特記事項
I	なし	左回り	
II-1a	あり	左回り	前の尾部が次の巴頭部までのもの
II-1b	あり	左回り	前の尾部が次の尾部の中程まで続くもの
II-1c	あり	左回り	前の尾部が2つ目の巴頭部まで続くもの
II-2a	あり	右回り	前の尾部が次の巴頭部までのもの
II-2b	あり	右回り	前の尾部が次の尾部の中程まで続くもの
II-2c	あり	右回り	前の尾部が2つ目の巴頭部まで続くもの

軒丸瓦 梅鉢文分類表

分類名	特記事項	
I-1a	軸無し	花弁と中心が同じ大きさ 花弁から中心までの距離短い
I-1b	軸無し	花弁と中心が同じ大きさ 花弁から中心までの距離長い
I-2	軸無し	花弁より中心が小さい
II-1	軸有り	花弁と中心が同じ大きさ
II-2	軸有り	花弁より中心が小さい
III	軸有り	中心側輪間に突起（刺）あり

圓瓦側辺中央部分分類表

タイプ	特徴	
	平面	側辺(断面)
円形凹A		
円形凹B		
円形凹C		
方形凹		

タイプ	特徴
円形凹A	底が平らに調整されている
円形凹B	Aのような調整なし
円形凹C	小型で断面は浅い皿状を呈する
方形凹	底が平らに調整されている

右回り



左回り



(石川県金沢城調査研究所2010a 第5-19図・同2011b 第76図・同2014c 第110図より作成)

第29図 軒丸・腰瓦分類

出土の越前瓦で、巴Ⅱ-2類。T004・T005は旧陸軍整地土（Ⅰb層）出土。T004は燻瓦で、瓦当文様は巴Ⅱ-2b類。T005は釉薬瓦で、瓦当文様は梅鉢Ⅲ類。瓦当面に釘穴が2か所見られた。

(2) 軒平瓦

T006～T008は軒平瓦で、いずれも燻瓦である。T006はトレンチ1（Ⅰa層）出土で、中心飾りの5枚の葉が下を向く垂下型五葉文である。T007は1号攪乱（Ⅰa層）出土で、瓦当文様は花文Ⅰ類である。T008はSD03出土で、瓦当文様は花文Ⅰ類である。

(3) 軒棧瓦

T009～T015は軒棧瓦である。T009は旧陸軍整地土（Ⅰb層）出土の燻瓦で、瓦当文様は、丸みの強い三つ葉のクローバー状の中心飾りと、左右両側に延びる唐草から構成され、唐草は上半部で上巻き、下半部で下巻きとなっており、先端部が肥大化している、これまで未分類のものである。T010は北東攪乱出土の釉薬瓦で、瓦当文様は玉Ⅲ類である。T011～T015は旧陸軍整地土（Ⅰb層）出土の釉薬瓦である。瓦当文様はT011・T012が菊Ⅳ類、T013は平部が玉Ⅲ類で、丸部が梅鉢Ⅲ類、T014は丸部のみの遺存で梅鉢Ⅲ類、T015は玉Ⅲ類である。T011は右上隅部を面取りしている。

(4) 丸瓦

T016～T024は丸瓦である。T016は14号攪乱出土の越前赤瓦で、内面には刺鍵痕と接合痕が見られる。T017は15号攪乱出土の釉薬瓦で、内面にコビキBの切り離し痕と棒状工具痕が見られる。また、刻印「△」と線刻「出」を有する。T018は17号攪乱出土の釉薬瓦で、内面にコビキBの切り離し痕と棒状工具痕が見られる。T019は北東攪乱出土の釉薬瓦で、内面にコビキBの切り離し痕と棒状工具による粘土掻き取り痕が見られる。また、刻印「◎」を有する。T020は5号攪乱出土の燻瓦で、内面に布圧痕が見られるが、切り離し痕については明確でない。また、刻印「回」を有する。T021・T022は旧陸軍整地土瓦溜（Ⅰb層）出土の釉薬瓦で、T021は内面に棒状工具による粘土掻き取り痕が見られる。T022は内面に布目痕が見られる。T023はSD02出土の燻瓦で、内面に筵状の布圧痕及びコビキBの切り離し痕が残る。T024はSD03出土の燻瓦で、内面に布圧痕と指頭圧痕が見られる。

(5) 平瓦

T025は17号攪乱及び石垣採取痕出土の釉薬瓦で、後側中央に1か所釘穴が見られる。T026はSD02（Ⅱa層）出土の燻瓦で、小片だが平瓦の可能性が高い。側面に指頭圧痕を残す。

(6) 棧瓦

T027～T034は棧瓦で、いずれも釉薬瓦である。T027は15号攪乱（Ⅰa層）出土で、後側に釘穴が1か所見られる。T028は2号攪乱（Ⅰb層）出土で、前部に接合のための溝が切られていた。T029～T031は旧陸軍整地土瓦溜（Ⅰb層）からの出土で、T029は重ね焼き痕が見られ、刻印「◎」を有する。T031は刻印「○」を有する。T032はSD01（Ⅱa層）からの出土で、T033・T034はSD02（Ⅱa層）からの出土である。T033は外面の一部で、部分的に釉が沸いたようになっており、剥離も見られる。T034は内面に成形台の圧痕を残す。

(7) 平瓦あるいは棧瓦

T035～T038は平瓦あるいは棧瓦と考えられる小片で、いずれも釉薬瓦である。T035はSD01（Ⅱa層）出土で、内面に成形台の圧痕が残る。T036・T037はSD02（Ⅱa層）出土である。T037は後側中央に1箇所釘穴がある。T038はSD03（Ⅰa層）出土であるが、重複する攪乱からの流れ込みの可能性もある。

(8) 道具瓦

T039・T040は釉薬瓦の鬼瓦である。T039はⅠa層出土で、T040は15号攪乱（Ⅰa層）出土である。いずれも小片で全形を窺い知ることはできない。T041～T043は燻瓦の腰瓦で、T041・T042はP02（Ⅰb層）から、T043は2号攪乱（Ⅰb層）から出土した。T042は側辺部中央凹部の形状が円形凹Aタイプで、側辺に「二つ巴」の刻印を持つ。T044～T046は釉薬瓦の熨斗瓦である。T044は2号攪乱（Ⅰb層）

軒平・軒棧瓦



(石川県立文化調査研究所 2010a: 第5-20図・同 2011b: 第77図・同 2014c: 第110図より作成)

第30図 軒平・軒棧瓦分類

出土で、軸の掛かり方は、外面は釘穴付近を残してほぼ全面施軸、内面はほぼ無軸であった。T045は旧陸軍整地土(1b層)出土で、内外面とも全面に施軸される。T046は石垣撤去の際に動いた栗石層(1b層)からの出土である。軸の掛かり方は外面は端部まで施軸されていたが、内面はほぼ無軸

であった。T047は釉薬瓦の棟瓦で、塀基礎南面埋土（I b層）からの出土である。釉は内外面とも全面に掛けられていた。また、釘穴は体部中央に2つあけられていた。

（9）瓦当文様・刻印

瓦当文様及び刻印の拓本を取った瓦について概観する。瓦当文様では、燻瓦の軒丸瓦で巴文（巴III-b類、巴右回り、巴左回り）を確認した。釉薬瓦では、軒丸瓦で確認された瓦当文様のほとんどを梅鉢文（III類）が占め、巴文（II類）はごくわずかである。軒平瓦は少なく、玉文（II・III類）及び梅鉢文（IIIあるいはIV類）を確認した。多くを占めた軒棧瓦では、平部の文様で菊文（I・IV）及び玉文（II・III・IV類）、桜I類が見られたが、特に菊IV類、玉III類が多くを占める。このほかに、菊文の一種と考えられる中心飾りが八弁花で、唐草部分が梅鉢III類に類似した文様が確認されている。また、丸部の文様では梅鉢III類及び巴I-2a類が確認されたが、そのほとんどを梅鉢III類が占める。

また、刻印を有する瓦の大半は釉薬瓦が占めており、燻瓦はごく少数にとどまる。最も多く見られた刻印は「㊦」で、軒棧・丸・平・棧・面戸・熨斗・棟瓦で確認されている。次いで数の多い刻印「○」は軒丸・軒棧・丸・平・棧瓦で見られた。これら2種の刻印が大半を占めるが、このほかに「㊧」（軒丸・軒棧・平・棧・輪違い・面戸・熨斗瓦）、「㊨」（平・棧・熨斗・棟瓦）、「㊩」（平・棟瓦）の刻印が、各数点確認されている。

5. 金属製品（第53図、第16表）

出土鉄製品の多くは釘（鉄釘、銅釘）であり、その他瓦を留めていた銅線等が出土している。そのうちM001～M004の4点を図化したのが、いずれもI b層からの出土である。M001は釘隠か。4つの部品が立体的に組み合わせられ、表面は鍍銀されていた。M002は不明鉄製品。先がU字状に二股に分かれた棒状具である。M003は鉛瓦。鉛瓦を木型に打ち留めるための銅釘が残っている。M004は鉄釘。全長11.1cmを測り、断面略方形の体部に略円形の頭部が付く。

6. 石製品（第54図、第16表）

石製品の出土量は少なく、小型品を主とする。そのうちS001～S005を図化した。いずれもI層からの出土である。S001～S004は硯である。いずれも墨が付着していた。S005は石板で、平滑に磨かれた表面には沈線が見られる。









7. 骨製品（第54図、第16表）

骨製の歯ブラシが数点出土しており、そのうちS006・S007を図化したのが、いずれも旧陸軍整地土（I b層）からの出土である。歯の清掃は、日本では19世紀後半頃までは、江戸時代以来の楊枝、房楊枝や爪楊枝によって行われたが、明治時代に入り、西洋文化の影響を受けるようになると、植え込み式の歯ブラシが製造・販売されるようになった。初期の歯ブラシは鯨の髭の柄に馬毛を植えたものであったが、明治15～16年（1882～1883）頃から牛骨が使われるようになったという。

S006は、頭部の一部を欠損するものの、28個の円形ないし楕円形の孔を確認した。孔内に残存物がなかったため、ブラシの毛の素材は不明であるが、孔は長径1.6～2.1mm、短径1.4～1.8mmで、形状が比較的均質であることから、柄の穿孔が機械化された明治17年（1884）以降のものと思われる。

S007は、頭部の大部分と把柄部下部を欠損する。頭部に残存する径1.3～1.4mmの2つの円形孔に、材質不明の櫛状のもの、及び豚と見られる動物の毛が詰まっていた。なお、日本国内でブラシに豚毛を使うようになったのは、関東大震災後で、それまで使われていた牛や馬の毛が不足したため、その代わりに使われるようになったとされる。

土師器皿 器形分類

A 在地系 京都系流行以前からの系統を引くもの				13 (文献1 Fig.307)	～16C末	
B 京都系 ・体部が開き気味に立ち上がる ・口縁部は緩やかに外反 ・口縁内面に陰面形成 ・内面「1」の字状ナデ (小型品) ・内面見込一方向ナデ→体部ヨコナデ (大型品) (「2」の字状ナデが典型)		(薄手)		P211 (文献2)	～17C初	
		(厚手)		P172 (文献2)		
C 京都系の要素が顕著でないもの	1 京都系と共伴 17世紀初期以後遺品 形状多様、細分の余地大きい			P181 (文献2)	17C初 慶長頃	
				P185 (文献2)		
	2 17世紀前半 以後→連続	I 1 底部平坦、体部 立ち上がり急、 口縁端内傾 17世紀前半以後 の主たる系統 (文献3: I 1類に相当)	a 底部内面 一方向条痕 底部外面 指押さえ痕		P120 (文献2)	17C初～ 元和頃
			b 底部内面 不定方向ナデ 底部外面 板(筵)目状 圧痕		P141 (文献2)	17C前半 寛永頃
	III 底部中央が凹んだへそ風風の土師器皿 体部の立ち上がり、口縁の調整はC2 I 1類 に類似。(文献3: III類に相当) 底部内面 圓線状ナデ強く、中央未調整 底部外面 指押さえ痕		P017 (文献4)	17C初～ 寛永頃		

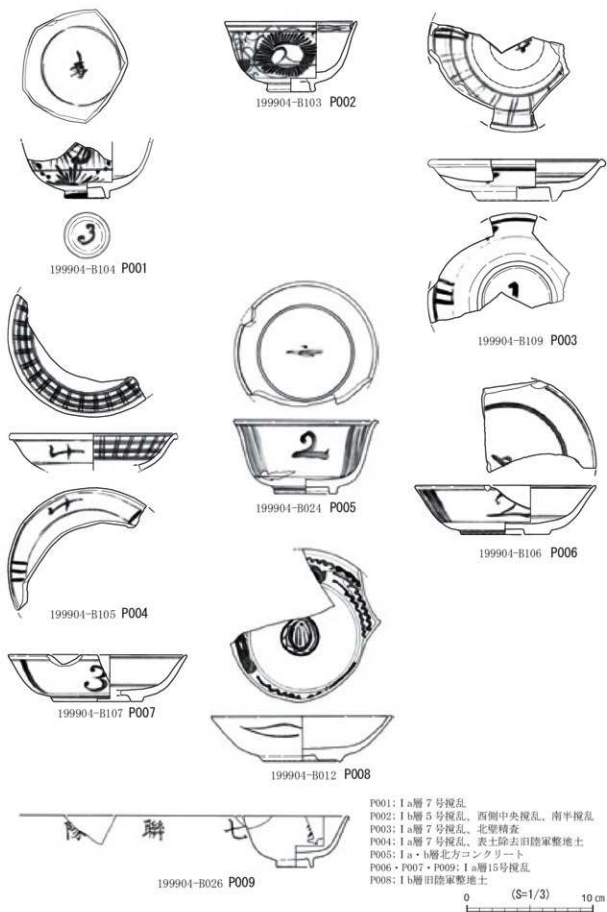
[61] 京大の縄文館研究部 『京大の縄文館文化財調査報告書1』2008
『京大の縄文館文化財調査報告書2』2012 未一頁
[62] 『京大の縄文館文化財調査報告書2』2012 未一頁
[63] 『京大の縄文館文化財調査報告書2』2012 未一頁
[64] 『京大の縄文館文化財調査報告書2』2012 未一頁
[65] 『京大の縄文館文化財調査報告書2』2012 未一頁
[66] 『京大の縄文館文化財調査報告書2』2012 未一頁
[67] 『京大の縄文館文化財調査報告書2』2012 未一頁

土師器皿 胎土分類

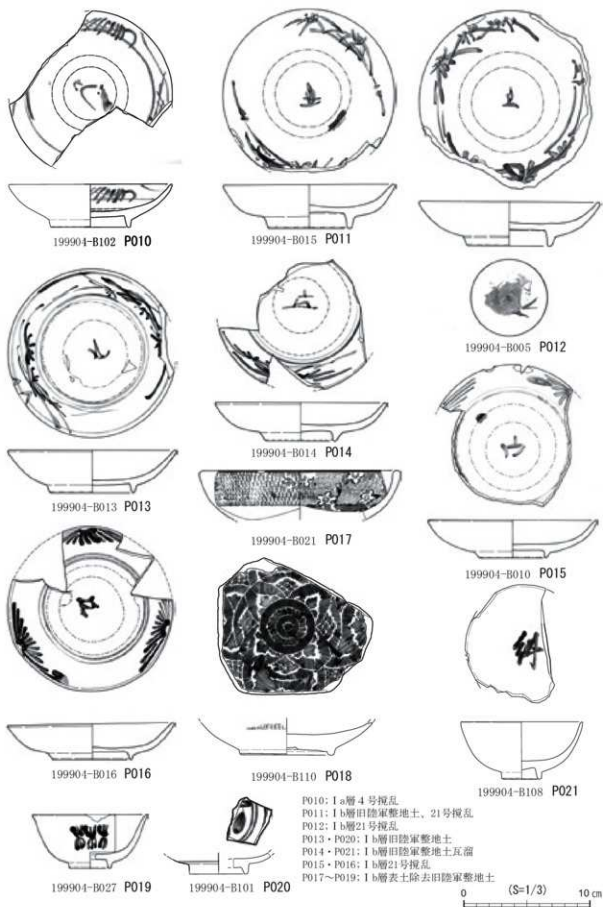
	特徴	主体を占める器形
A	中砂多い、粗砂・極粗砂・海綿骨片目立つ	B類の一部(能登産)
B	砂粒比較的少なく、均質(細分の余地大きい)	B類の一部(能登産以外)、C1類
C	砂粒ごく少ない、均質	B類の一部(能登産以外)、C1類
D	細砂多い、均質(粉質)	B類の一部(能登産以外)
E	1 礫含み、粗砂・細砂多い(含有量の程度差大きい)	C2 I類、C2 III類
	2 礫無～微、粗砂・細砂少ない (Bよりも粒子大きく、素地が粗い。E1より精良)	C2 I類、C2 III類

[68] 京大の縄文館研究部2014c

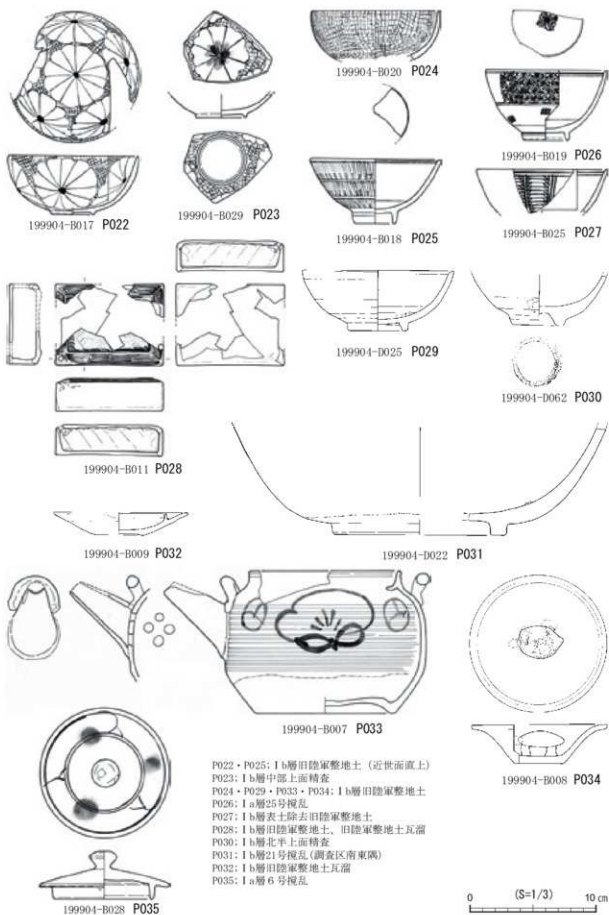
第31図 土師器皿の器形・胎土分類



第32図 鶴ノ丸第1次調査区 出土遺物実測図 土器・陶磁器1 (S=1/3)

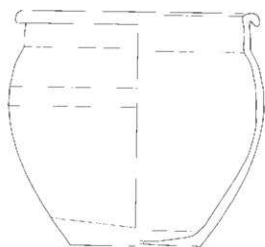


第33図 鶴ノ丸第1次調査区 出土遺物実測図 土器・陶磁器2 (S=1/3)

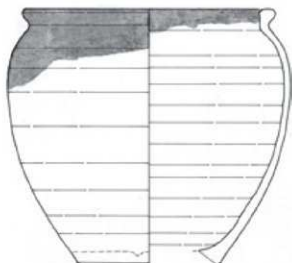


P022・P025: I b層旧陸軍整地土(近世面直上)
 P023: I b層中部上面精査
 P024・P029・P033・P034: I b層旧陸軍整地土
 P026: I a層25号視乱
 P027: I b層表土除去旧陸軍整地土
 P028: I b層旧陸軍整地土、旧陸軍整地土瓦溜
 P030: I b層北半上面精査
 P031: I b層21号視乱(調査区南東隅)
 P032: I b層旧陸軍整地土瓦溜
 P035: I a層6号視乱

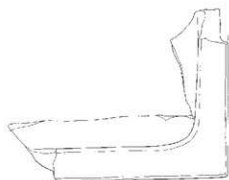
第34図 鶴ノ丸第1次調査区 出土遺物実測図 土器・陶磁器3 (S=1/3)



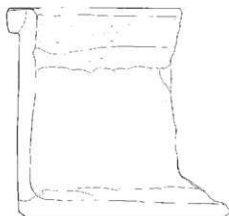
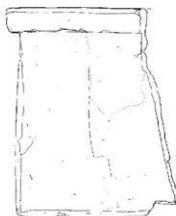
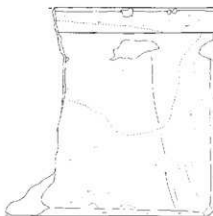
199904-D020 P036



199904-D021 P037



199904-D066 P038



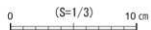
199904-D067 P039

P036: I b層旧陸軍整地土瓦溜

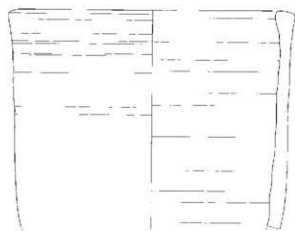
P037: I b層旧陸軍整地土

P038: I a層12号覆瓦

P039: I a層15号覆瓦



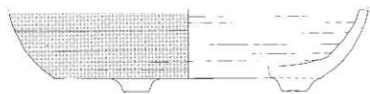
第35図 鶴ノ丸第1次調査区 出土遺物実測図 土器・陶磁器4 (S=1/3)



199904-D018 P040



199904-D065 P041



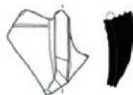
199904-D019 P042



199904-D064 P043



199904-D063 P044

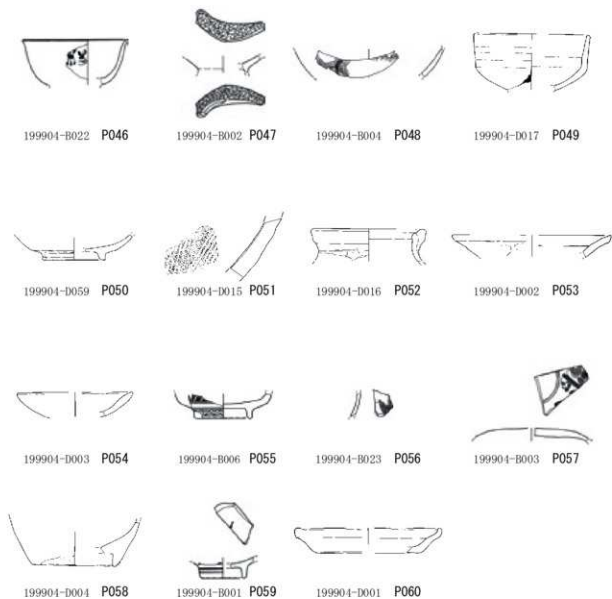


199904-D061 P045

P040: 1b層 旧隠軍整地土瓦溜
 P041: 1a層 壁面精査
 P042: 1b層 旧隠軍整地土
 P043・P044: 1a層 トレンチ 1
 P045: 1b層 南半精査

0 (S=1/3) 10 cm

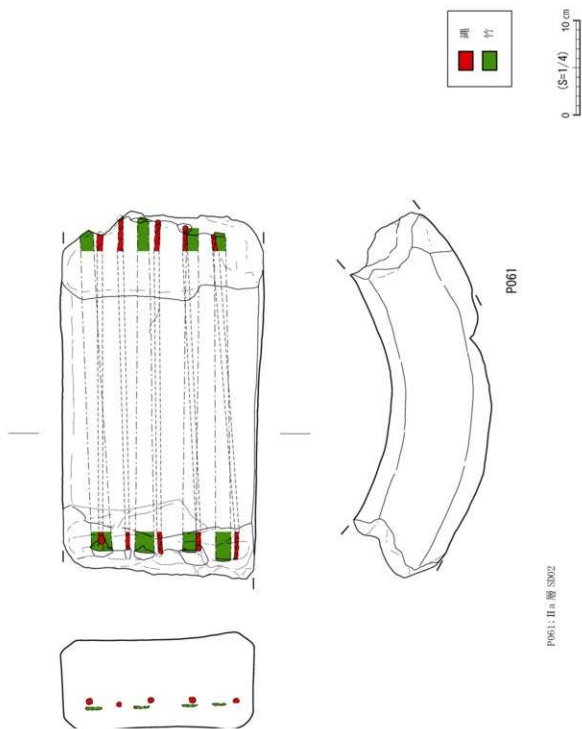
第36図 鶴ノ丸第1次調査区 出土遺物実測図 土器・陶磁器5 (S=1/3)



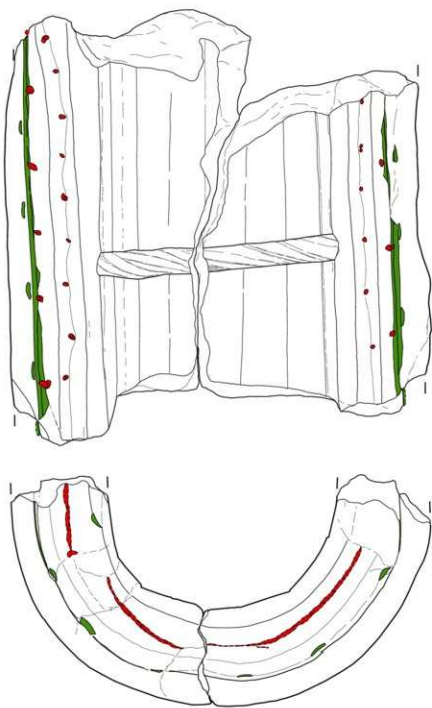
P046: IIa層SD01
P047・P054: IIa層南端部SD02掘方
P048～P053: IIa層南半部SD02掘方(周辺?) クレーン吊上分
P055: IIa層南半部SD02内
P056～P058: IIa層SD03掘方
P059: IIa層1号石列の下東壁IIa31層
P060: IIc層15号視乱下の近世盛土層

0 (S=1/3) 10 cm

第37図 鶴ノ丸第1次調査区 出土遺物実測図 土器・陶磁器6 (S=1/3)

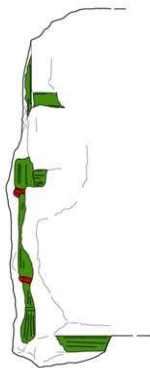


第 38 図 鶴ノ丸第 1 次調査区 出土遺物実測図 土製品 1 (S=1/4)



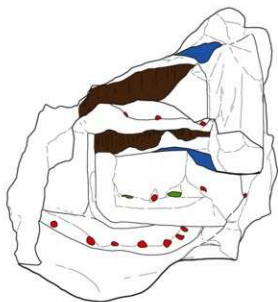
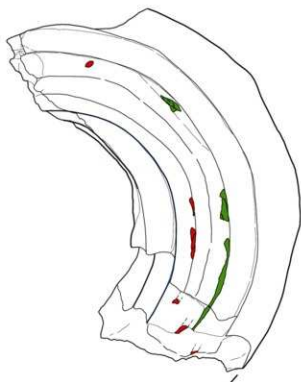
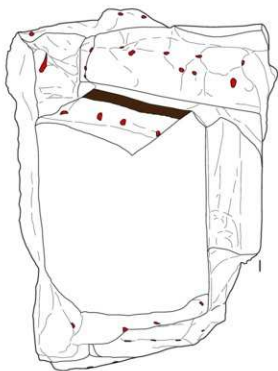
0 (S=1/4) 10 cm

P062

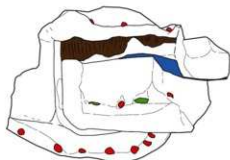


第 39 図 鶴ノ丸第 1 次調査区 出土遺物実測図 土製品 2 (S=1/4)

P062: II n 層 S02

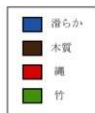


P063: IIa 層 SD02

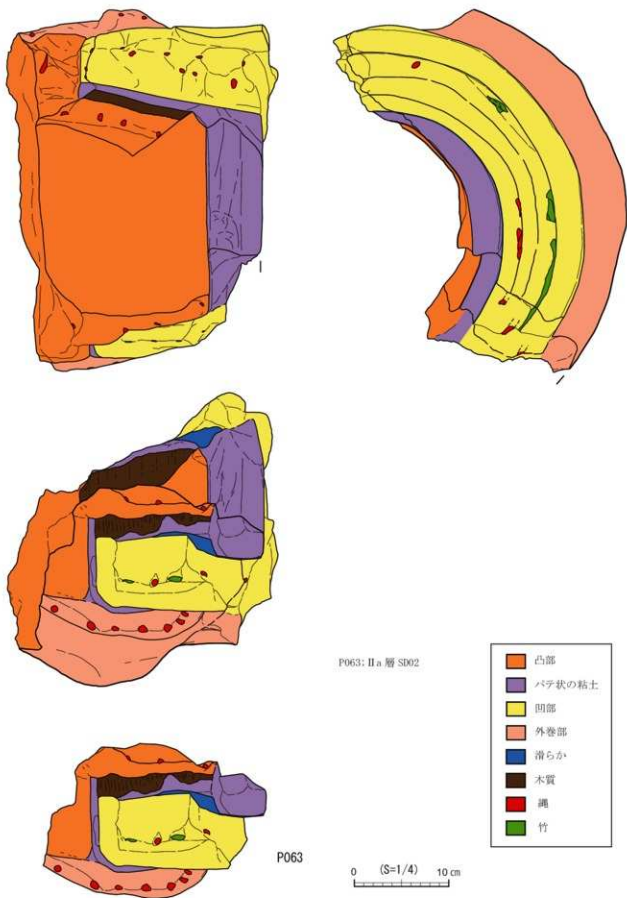


P063

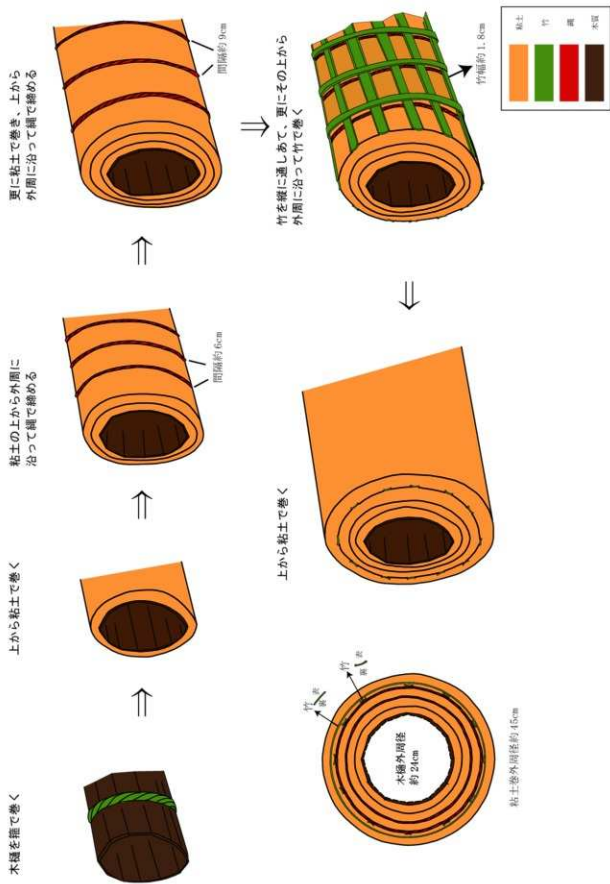
0 (S=1/4) 10 cm



第40図 鶴ノ丸第1次調査区 出土物実測図 土製品3 (S=1/4)

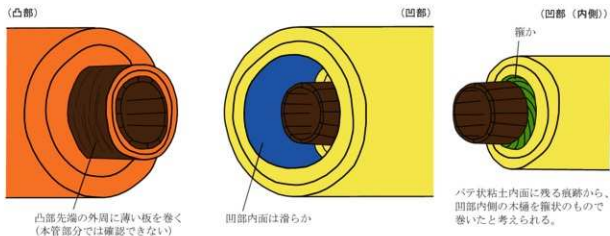


第41図 鶴ノ丸第1次調査区 出土遺物実測図 土製品3色分け (S=1/4)

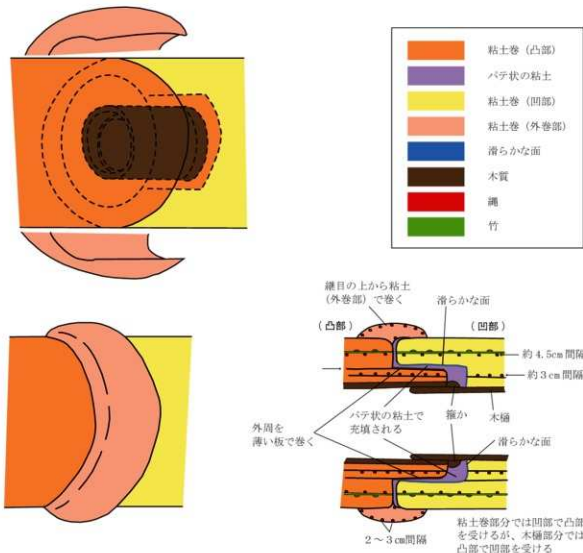


第 42 図 辰巳用水粘土巻木桶構造図（構造）

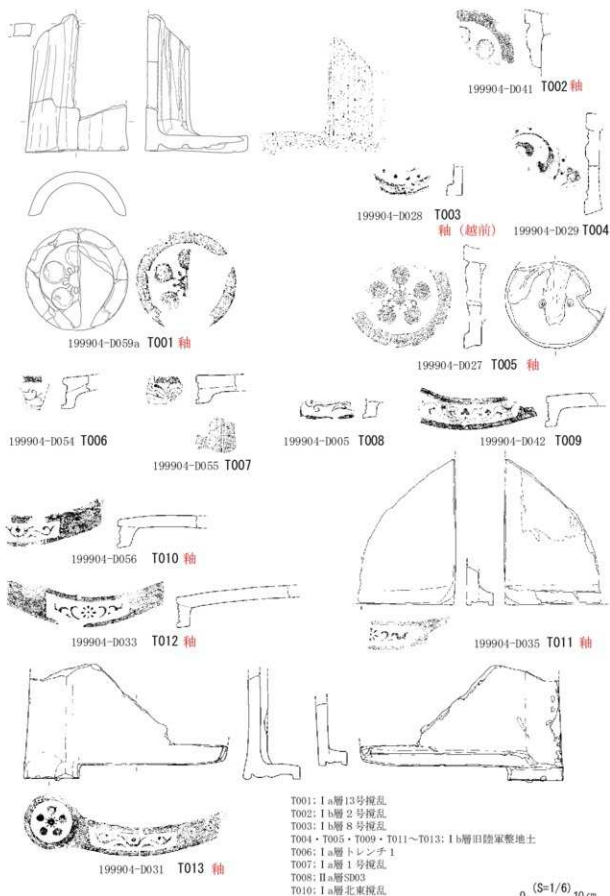
導水管（粘土巻木樋）は、木樋の上から粘土および縄・竹で巻いたもので、端部に凹部及び凸部を作り、連結する。連結の際生じる隙間には、パテ状の粘土が充填されている。パテ外面は凹部内側の滑らかな面に当たるため滑らかで、パテ内面には凸部外側に巻かれた木質痕が付く。



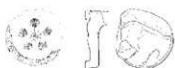
縄目の上から粘土（外巻部）で巻く



第 43 図 辰巳用水粘土巻木樋模式図（連結部）



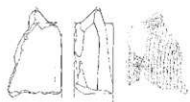
第44図 鶴ノ丸第1次調査区 出土遺物実測図 瓦1 (S=1/6)



199904-D036 T014 軸



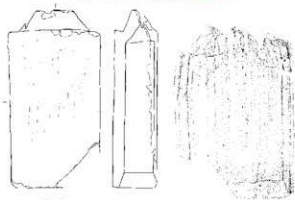
199904-D030 T015 軸



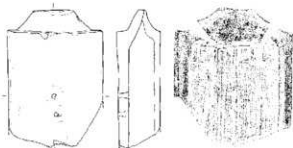
199904-D060 T016 軸(越前)



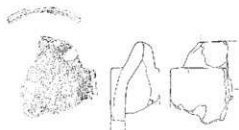
199904-D050 T017 軸



199904-D049 T018 軸



199904-D057 T019 軸

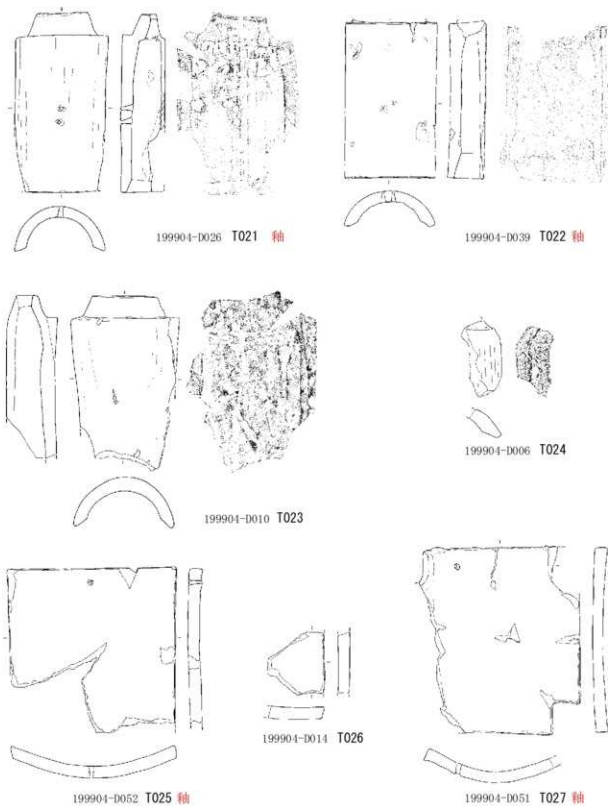


199904-D047 T020

T014・T015: 1b層旧陸軍整地土
 T016: 1a層14号複瓦
 T017: 1a層15号複瓦
 T018: 1a層17号複瓦
 T019: 1a層北東複瓦
 T020: 1b層5号複瓦

0 (S=1/6) 10 cm

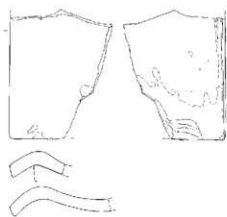
第45図 鶴ノ丸第1次調査区 出土遺物実測図 瓦2 (S=1/6)



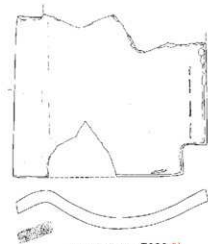
T021・T022: I b層田陸軍整地土瓦溜
 T023: II a層SD02
 T024: II a層SD03最北部
 T025: I b層17号複瓦・右垣抜取痕
 T026: II a層中央部SD02
 T027: I a層15号複瓦

0 (S=1/6) 10 cm

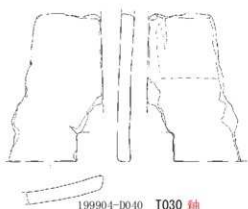
第46図 鶴ノ丸第1次調査区 出土遺物実測図 瓦3 (S=1/6)



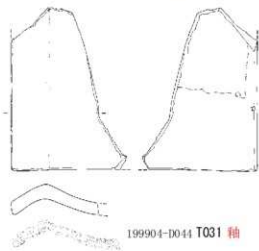
199904-D034 T028 袖



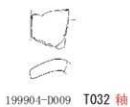
199904-D032 T029 袖



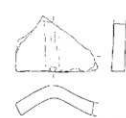
199904-D040 T030 袖



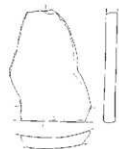
199904-D044 T031 袖



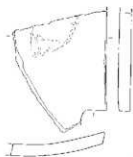
199904-D009 T032 袖



199904-D013 T034 袖



199904-D023 T036 袖



199904-D011 T033 袖

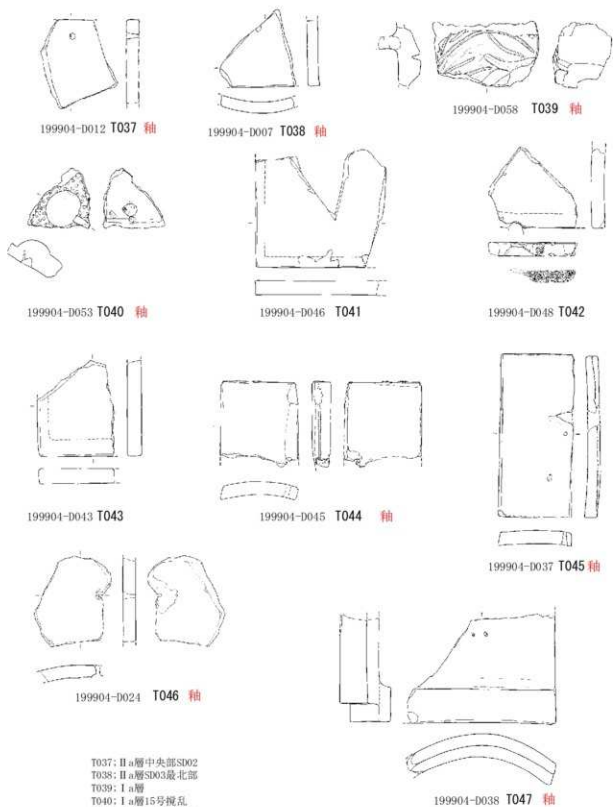


199904-D008 T035 袖

T028: I b層 2号視瓦
 T029~T031: I b層旧跡單整地土瓦葺
 T032・T035: II a層SD01
 T033・T034: II a層中央部 SD02
 T036: II a層南端部SD02



第 47 図 鶴ノ丸第 1 次調査区 出土遺物実測図 瓦 4 (S=1/6)



T037: II a層中央部SD02
 T038: II a層SD03最北部
 T039: I a層
 T040: I a層15号複瓦
 T041 - T042: I b層P02
 T043 - T044: I b層2号複瓦
 T045: I b層旧陸軍整地土
 T046: II b層梁石中
 T047: I b層明基礎南面埋土

第48図 鶴ノ丸第1次調査区 出土遺物実測図 瓦5 (S=1/6)



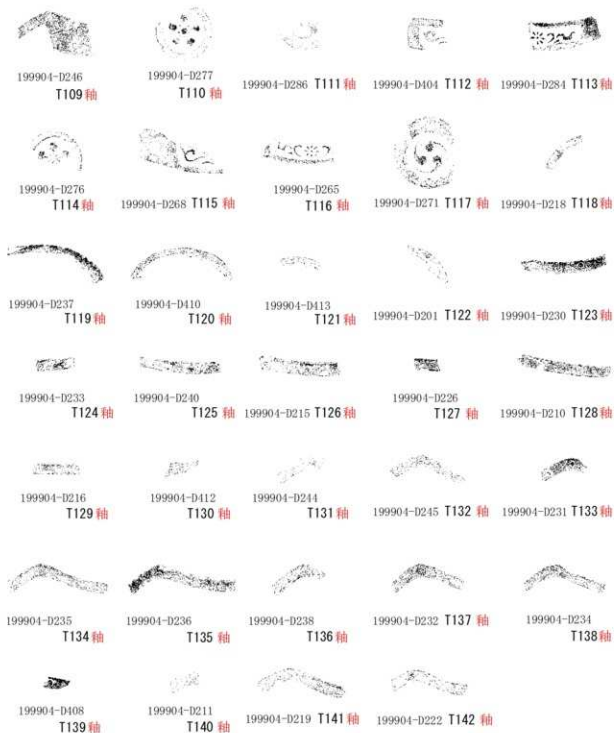
第49図 鶴ノ丸第1次調査区 出土遺物実測図 瓦 瓦当・刻印1 (S=1/6)



T079~T084: I a 層
 T085: I a 層 13 号覆乱
 T086: I a 層 13 号覆乱?
 T087: I a 層 14 号覆乱
 T089~T092: I a 層 15 号覆乱
 T093~T096: I a 層 南半覆乱
 T097: I b 層 P02?
 T098~T099: I b 層 東辺 衛戍 支柱 穴
 T100: I b 層 南辺 衛戍 支柱 穴
 T101~T102: I b 層 P12?
 T103: I b 層 2 号覆乱
 T104: I b 層 5 号覆乱
 T105: I b 層 20 号覆乱
 T106: I b 層 旧陸軍 整地土 衛戍 下
 T107~T108: I b 層 旧陸軍 整地土

0 (S=1/6) 10 cm

第 50 図 鶴ノ丸第 1 次調査区 出土遺物実測図 瓦 瓦当・刻印 2 (S=1/6)



T109: I b層東壁旧陸軍整地土
 T110~T114: I b層旧陸軍整地土
 T115・T116: I b層南半精査
 T117・T118: I a層15号攪乱
 T119: I a層南半攪乱
 T120: I b層基础礎前面埋土
 T121: I b層旧陸軍整地土瓦溜
 T122: I b層栗石上部

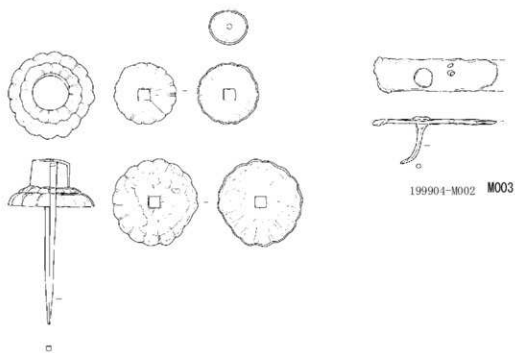
T123~T125: I a層13号攪乱
 T126: I a層15号攪乱
 T127: I b層P01?
 T128: I b層2号攪乱
 T129: I b層旧陸軍整地土甕戎下
 T130: II a層SD01
 T131~T138: I a層
 T139~T142: I a層4号攪乱

0 (S=1/6) 10 cm

第51図 鶴ノ丸第1次調査区 出土遺物実測図 瓦 瓦当・刻印3 (S=1/6)

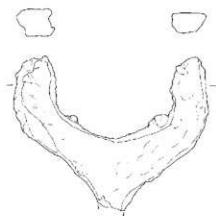


第52図 鶴ノ丸第1次調査区 出土遺物実測図 瓦 刻印4 (S=1/6)



199904-M001 M001

199904-M002 M003



199904-M003 M002

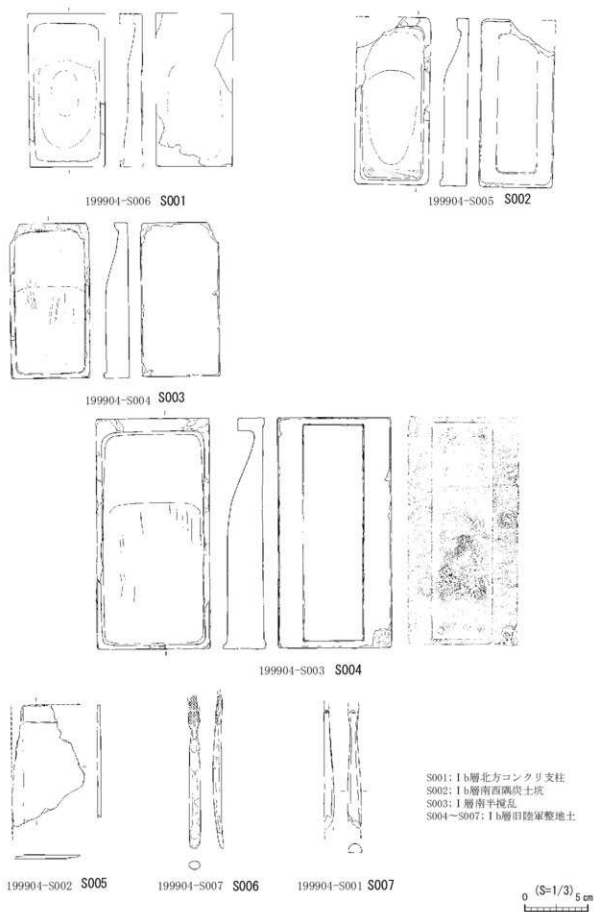


199904-M004 M004

M001: 1 b層北東部上面精査
M002~M004: 1 b層旧陸軍整地土

0 (S=1/2) 5 cm

第53図 鶴ノ丸第1次調査区 出土遺物実測図 金属製品 (S=1/2)



第54図 鶴ノ丸第1次調査区 出土遺物実測図 石製品・骨製品 (S=1/3)

第7表 鶴ノ丸第1次調査区 出土遺物観察表 土器・陶磁器1

図版 No.	類別	器種	出土地点		器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	底面形状	胎土・色調等	産地	形状特徴	所収庫番(号)	
			1層	2号層									
32	磁器	皿	1層	7号層瓦	3.6	4.6	1.7	13	白	瀬戸・美濃	外周上高台内に赤線繪付で「王」	199904-B104	
			1層	5号層瓦、高脚中外股瓦、溝中股瓦	3.9	3.6	1.7	13	白	瀬戸・美濃	赤線繪付で内縁に黒線と黒線と本丸はあるが底平なし、コバルト	199904-B103	
			1層	7号層瓦、左端輪装	6.4	3.3	1.7	13	灰白	丸唇	内縁、外周上高台内に赤線繪付で「王」	199904-B109	
			1層	7号層瓦、右土跡右口部裏面装束上	3.3	3.0	1.7	13	白	丸唇	外周上に赤線繪付で「王」	199904-B105	
			1層	1号層 北方コンクリート	5.0	3.9	1.7	13	灰白	丸唇	外周に「王」	199904-B024	
			1層	15号層瓦	3.3	7.1	3.9	1.7	13	灰白	丸唇	口部縁線有	199904-B106
			1層	15号層瓦	7.2	3.7	1.7	13	灰白	丸唇	内縁、外周上に「王」	199904-B107	
			1層	山田屋敷装束土	6.3	3.6	1.7	13	灰白	丸唇	丸口部高台付	199904-B012	
			1層	15号層瓦	2.9	4.1	1.7	13	白	瀬戸・美濃	明治8年(1873)口縁、岸上段で「王、キ、七郎様」	199904-B026	
			1層	4号層瓦	6.3	3.4	1.7	13	灰白	丸唇	丸口部縁線有	199904-B102	
33	磁器	皿	1層	山田屋敷装束土、21号層瓦	6.2	3.5	1.7	13	灰黒	丸唇	19C後半、輪線部分に黒い付着物あり(品名不明)	199904-B015	
			1層	21号層瓦	14.2	6.8	3.5	1.7	26	赤黒	丸口部縁線有、高台内、外、文、流汗に流汗有	199904-B005	
			1層	山田屋敷装束土	6.9	3.4	1.7	13	赤黒	丸唇	19C以降、底平不貞	199904-B013	
			1層	山田屋敷装束土、5号層瓦	5.7	3.1	1.7	13	赤黒	丸唇	19C後半平、陶器質	199904-B014	
			1層	21号層瓦	5.4	3.0	1.7	13	灰白	丸唇	近代、重ね地舌による磨書	199904-B010	
			1層	21号層瓦	6.4	3.0	1.7	13	灰白	丸唇	明治、重ね地舌による磨書	199904-B016	
			1層	山田屋敷装束土	3.4	3.5	1.7	13	灰白	丸唇	陶器質、内口と同タイプ	199904-B021	
			1層	赤土跡右口部裏面装束土	7.6	2.6	1.7	13	灰白	丸唇	陶器質、内口と同タイプ	199904-B110	
			1層	赤土跡右口部裏面装束土	3.4	4.3	1.7	13	灰白	丸唇	被燒、清瀬御子倉、口部彩色(明治明治47年式)	199904-B027	
			1層	山田屋敷装束土	4.6	1.6	1.7	13	灰白	丸唇	磨付～高台内無胎	199904-B101	
34	磁器	皿	1層	山田屋敷装束土	3.2	4.6	1.7	13	灰白	丸唇	見込に「王」	199904-B108	
			1層	山田屋敷装束土、5号層瓦	3.4	4.6	1.7	13	白	丸唇	19C付	199904-B017	
			1層	山田屋敷装束土(宮内道上)	3.2	3.4	1.7	13	灰白	丸唇	18C後半	199904-B029	
			1層	山田屋敷装束土	3.2	3.4	1.7	13	白	丸唇	18C後半	199904-B020	

()は庫番(号)

第8表 鶴ノ丸第1次調査区 出土遺物観察表 土器・陶磁器2

図版 No.	種類	器種	出土位置		口縁 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	成形・製作	釉薬・装飾等	胎土・色調等		産地	形状特徴	特記事項	出典(調査番号)	
			1層	2層						2層	白					
34	陶器	甕	1層	日田東御堂土(宮宮前道土)	19.2	3.3	5.1	口作り	染付		2層	白	肥前	小笠原形	18C末	199901-0018
			1層	25号塚瓦	9.4	3.7	3.6	口作り	染付		2層	白	肥前	小笠原形	18C以降	199901-0019
			1層	表土跡古日田東御堂土	10.3	(3.0)	口作り	染付			2層	白	肥前	小笠原形	199901-0020	
			1層	日田東御堂土、日田東御堂土瓦	8.6	4.2	4.6	口作り	外・染付内・無釉		2層	白	肥前	方部	底部内外とも灰白色	199901-0021
			1層	日田東御堂土	11.8	4.8	4.8	口作り	灰滑		1.2層	黄灰	空・信濃系	丸形	トチン根土カケ	199901-0022
			1層	北平上段焼瓦	4.0	(4.0)		口作り	灰滑		1.3層	にがい黄泥	肥前	丸形	17C	199901-0062
			1層	21号塚瓦(調査区南東隅)	13.9	(8.5)	口作り	灰滑			1.2層	にがい、暗			18C以降、トチン根土カケ、黄	199901-0022
			1層	日田東御堂土瓦	10.35 受部径7.4	3.8	3.8	口作り	灰滑		1.2層	灰白	空・信濃		外周黄釉、凹縁ケズリ、黄	199901-0059
			1層	日田東御堂土	11.8	11.2	11.4	口作り	外・灰滑、口縁・黄		1.2層	にがい、暗	九谷		19Cの身、沈積13〜10後	199901-0007
			1層	日田東御堂土	10.7	3.8	3.1	口作り、凹縁	灰滑		1.2層	にがい、暗	九谷		19C以降	199901-0058
			1層	6号塚瓦	10.3 小ぶり径7.6	8.5	3.8	口作り	土・灰滑、口縁・黄、 底・緑釉、 下・無釉		1.2層	灰黄緑	空部		19C以降	199901-0028
			1層	日田東御堂土瓦	18.5	10.2	18.6	口作り	灰滑、黄釉、染付、 外・緑釉、口縁・ 外・緑釉、口縁・ 黄、 内・緑釉、口縁・ 黄		1.2層	灰白	九谷		18C2/43以降、トチン根土カ ケ	199901-0029
			1層	日田東御堂土	19.4	(20.3)	口作り				1.1層	灰黄緑			被焼	199901-0021
			36	土器	土師器	1層	12号塚瓦	12.0	(2.0)	手づくね				B	にがい、黄泥〜黄泥	在焼
1層	15号塚瓦	(12.1)				16.5	タタ作り				D	にがい、黄泥 黄土地域含む	在焼	典型	底部黄釉(薄部)、流行着	199901-0067
1層	日田東御堂土瓦	22.7					17.3	輪縁カ〜凹 転行			D	にがい、黄泥 黄土地域含む	在焼	円形部	18C後半以降	199901-0018
1層	横田岳表	22.6				(5.0)	転行				B	にがい、黄泥	在焼	円形部、円柱状部	199901-0065	
1層	日田東御堂土	21.2				(6.3)	転行				D	にがい、黄泥 黄土地域含む	在焼	円柱状部	199901-0019	
1層	トレンチ1	20.6				(6.5)	転行				D	にがい、黄泥	在焼	丸形、円柱状部	199901-0064	
1層	トレンチ1	7.8				7.9	転行				E	黄泥部 外周黄泥	在焼	底部部	黄釉付部、口部黄釉部、 丸部	199901-0063

第9表 鶴ノ丸第1次調査区 出土遺物観察表 土器・陶磁器 土器・陶磁器

図版 No.	種類	器種	出土地点	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	成形・装飾	胎土・色調等	産地	形状特徴	備考事項	図(複製番号)
36	PS15	煎茶碗	反折橋	13φ	9φ	6.7	輪切かへ形 発行	1.37φ 褐色	保方瓦	9C後半 外折縁区	199004-0001	
37	PS16	煎茶碗	小坪	11φ	8.2	(3.6)	口タロ	発行,口縁	保方・美濃	9C後半 外折縁区	199004-0002	
PS17	煎茶碗	廣	11φ	1.3	口タロ	発行	2φ	白	保方・美濃	東八幡丁(180~60)	199004-0022	
PS18	煎茶碗	廣	11φ	1.3	口タロ	発行	2φ	白	肥前	成平塚形	199004-0002	
PS19	煎茶碗	廣	11φ	1.3	口タロ	発行	2φ	白	肥前	丸形	199004-0004	
PS20	煎茶碗	廣	11φ	1.3	口タロ	発行	2φ	白	肥前	丸形	199004-0004	
PS21	煎茶碗	廣	11φ	1.3	口タロ	発行	2φ	白	肥前	丸形	199004-0004	
PS22	煎茶碗	廣	11φ	1.3	口タロ	発行	2φ	白	肥前	丸形	199004-0004	
PS23	土器	土師器	1号石戸の下 東寄目山	11φ	3.6	(1.7)	口タロ	発行	肥前	高台に発行書	199004-0004	
PS24	土器	土師器	1号石戸の下 東寄目山	11φ	3.6	(1.7)	口タロ	発行	肥前	高台に発行書	199004-0001	
PS25	土器	土師器	1号石戸の下 東寄目山	11φ	3.6	(1.7)	口タロ	発行	肥前	高台に発行書	199004-0001	
PS26	土器	土師器	1号石戸の下 東寄目山	11φ	3.6	(1.7)	口タロ	発行	肥前	高台に発行書	199004-0001	
PS27	土器	土師器	1号石戸の下 東寄目山	11φ	3.6	(1.7)	口タロ	発行	肥前	高台に発行書	199004-0001	
PS28	土器	土師器	1号石戸の下 東寄目山	11φ	3.6	(1.7)	口タロ	発行	肥前	高台に発行書	199004-0001	
PS29	土器	土師器	1号石戸の下 東寄目山	11φ	3.6	(1.7)	口タロ	発行	肥前	高台に発行書	199004-0001	
PS30	土器	土師器	1号石戸の下 東寄目山	11φ	3.6	(1.7)	口タロ	発行	肥前	高台に発行書	199004-0001	
PS31	土器	土師器	1号石戸の下 東寄目山	11φ	3.6	(1.7)	口タロ	発行	肥前	高台に発行書	199004-0001	
PS32	土器	土師器	1号石戸の下 東寄目山	11φ	3.6	(1.7)	口タロ	発行	肥前	高台に発行書	199004-0001	
PS33	土器	土師器	1号石戸の下 東寄目山	11φ	3.6	(1.7)	口タロ	発行	肥前	高台に発行書	199004-0001	
PS34	土器	土師器	1号石戸の下 東寄目山	11φ	3.6	(1.7)	口タロ	発行	肥前	高台に発行書	199004-0001	
PS35	土器	土師器	1号石戸の下 東寄目山	11φ	3.6	(1.7)	口タロ	発行	肥前	高台に発行書	199004-0001	
PS36	土器	土師器	1号石戸の下 東寄目山	11φ	3.6	(1.7)	口タロ	発行	肥前	高台に発行書	199004-0001	
PS37	土器	土師器	1号石戸の下 東寄目山	11φ	3.6	(1.7)	口タロ	発行	肥前	高台に発行書	199004-0001	
PS38	土器	土師器	1号石戸の下 東寄目山	11φ	3.6	(1.7)	口タロ	発行	肥前	高台に発行書	199004-0001	
PS39	土器	土師器	1号石戸の下 東寄目山	11φ	3.6	(1.7)	口タロ	発行	肥前	高台に発行書	199004-0001	
PS40	土器	土師器	1号石戸の下 東寄目山	11φ	3.6	(1.7)	口タロ	発行	肥前	高台に発行書	199004-0001	
PS41	土器	土師器	1号石戸の下 東寄目山	11φ	3.6	(1.7)	口タロ	発行	肥前	高台に発行書	199004-0001	
PS42	土器	土師器	1号石戸の下 東寄目山	11φ	3.6	(1.7)	口タロ	発行	肥前	高台に発行書	199004-0001	
PS43	土器	土師器	1号石戸の下 東寄目山	11φ	3.6	(1.7)	口タロ	発行	肥前	高台に発行書	199004-0001	
PS44	土器	土師器	1号石戸の下 東寄目山	11φ	3.6	(1.7)	口タロ	発行	肥前	高台に発行書	199004-0001	
PS45	土器	土師器	1号石戸の下 東寄目山	11φ	3.6	(1.7)	口タロ	発行	肥前	高台に発行書	199004-0001	
PS46	土器	土師器	1号石戸の下 東寄目山	11φ	3.6	(1.7)	口タロ	発行	肥前	高台に発行書	199004-0001	
PS47	土器	土師器	1号石戸の下 東寄目山	11φ	3.6	(1.7)	口タロ	発行	肥前	高台に発行書	199004-0001	
PS48	土器	土師器	1号石戸の下 東寄目山	11φ	3.6	(1.7)	口タロ	発行	肥前	高台に発行書	199004-0001	
PS49	土器	土師器	1号石戸の下 東寄目山	11φ	3.6	(1.7)	口タロ	発行	肥前	高台に発行書	199004-0001	
PS50	土器	土師器	1号石戸の下 東寄目山	11φ	3.6	(1.7)	口タロ	発行	肥前	高台に発行書	199004-0001	
PS51	土器	土師器	1号石戸の下 東寄目山	11φ	3.6	(1.7)	口タロ	発行	肥前	高台に発行書	199004-0001	
PS52	土器	土師器	1号石戸の下 東寄目山	11φ	3.6	(1.7)	口タロ	発行	肥前	高台に発行書	199004-0001	
PS53	土器	土師器	1号石戸の下 東寄目山	11φ	3.6	(1.7)	口タロ	発行	肥前	高台に発行書	199004-0001	
PS54	土器	土師器	1号石戸の下 東寄目山	11φ	3.6	(1.7)	口タロ	発行	肥前	高台に発行書	199004-0001	
PS55	土器	土師器	1号石戸の下 東寄目山	11φ	3.6	(1.7)	口タロ	発行	肥前	高台に発行書	199004-0001	
PS56	土器	土師器	1号石戸の下 東寄目山	11φ	3.6	(1.7)	口タロ	発行	肥前	高台に発行書	199004-0001	
PS57	土器	土師器	1号石戸の下 東寄目山	11φ	3.6	(1.7)	口タロ	発行	肥前	高台に発行書	199004-0001	
PS58	土器	土師器	1号石戸の下 東寄目山	11φ	3.6	(1.7)	口タロ	発行	肥前	高台に発行書	199004-0001	
PS59	土器	土師器	1号石戸の下 東寄目山	11φ	3.6	(1.7)	口タロ	発行	肥前	高台に発行書	199004-0001	
PS60	土器	土師器	1号石戸の下 東寄目山	11φ	3.6	(1.7)	口タロ	発行	肥前	高台に発行書	199004-0001	

土製品

図版 No.	種類	器種	出土地点	全長 (cm)	全幅 (cm)	厚さ (cm)	備考事項	図(複製番号)
38	PS61	赤土製品	粘土赤土橋	500φ	21.6	16.6	内径15cm, 胴や付で巻いた痕跡が認められる	199004-A
39	PS62	赤土製品	粘土赤土橋	500φ	26.1	16.1	外径15cm, 内径14cm, 胴や付で巻いた痕跡が認められる	199004-B
40	PS63	赤土製品	粘土赤土橋	500φ	26.6	17.6	内径15cm, 胴や付で巻いた痕跡が認められる	199004-C

第10表 瀬ノ丸第1次調査区 出土遺物観察表 瓦1

軒平瓦

(1)は既存履【1は復元履】

図版 No.	記号	出土地点	表面 状態	寸法(瓦葺)										胎土	釉色	特記事項	出(復元)番号			
				a	b	c	d	e	f	g	h	i	j					k	l	
91	1001	軒平 1号	1号	19号軒瓦	6.3	31.8	10.6	2.1	(11.9)	16.2						5.6	1.9	胎土 白磁砂少 肥田灰白磁砂 灰-土黄(肥田灰) 白(土黄)灰(肥田灰) 白(土黄)灰(肥田灰)	表面へ平上瓦工による平上瓦 復元履 19001-0001a 裏面へ平上瓦工による平上瓦 復元履 19001-0001b 9001(0) 胎土黄 胎土黄(肥田灰)土黄(平上瓦)	19001-0001a 19001-0001b
1002	軒平 1号	1号	2号軒瓦	6.4	31.5	11.5												胎土 白磁砂少 肥田灰白磁砂 灰-土黄(肥田灰) 白(土黄)灰(肥田灰)	胎土黄 胎土黄(肥田灰)土黄(平上瓦)	19001-0002
1003	軒平 1号	1号	0号軒瓦	6.7	31.6	12.0												胎土 白磁砂少 肥田灰白磁砂 灰-土黄(肥田灰) 白(土黄)灰(肥田灰)	胎土黄 胎土黄(肥田灰)土黄(平上瓦)	19001-0003
1004	軒平 1号	1号	1号	1号	11.0	11.0	16.0											胎土 白磁砂少 肥田灰白磁砂 灰-土黄(肥田灰) 白(土黄)灰(肥田灰)	胎土黄 胎土黄(肥田灰)土黄(平上瓦)	19001-0004
1005	軒平 1号	1号	1号	1号	12.0	12.0												胎土 白磁砂少 肥田灰白磁砂 灰-土黄(肥田灰) 白(土黄)灰(肥田灰)	胎土黄 胎土黄(肥田灰)土黄(平上瓦)	19001-0005

軒平瓦

図版 No.	記号	出土地点	表面 状態	寸法(瓦葺)										胎土	釉色	特記事項	出(復元)番号			
				a	b	c	d	e	f	g	h	i	j					k	l	
91	1006	軒平 1号	1号	1号	11.0	11.0	12.0											胎土 白磁砂少 肥田灰白磁砂 灰-土黄(肥田灰) 白(土黄)灰(肥田灰)	胎土黄 胎土黄(肥田灰)土黄(平上瓦)	19001-0006
1007	軒平 1号	1号	1号	1号	12.0	12.0												胎土 白磁砂少 肥田灰白磁砂 灰-土黄(肥田灰) 白(土黄)灰(肥田灰)	胎土黄 胎土黄(肥田灰)土黄(平上瓦)	19001-0007
1008	軒平 1号	1号	1号	1号	12.0	12.0												胎土 白磁砂少 肥田灰白磁砂 灰-土黄(肥田灰) 白(土黄)灰(肥田灰)	胎土黄 胎土黄(肥田灰)土黄(平上瓦)	19001-0008

軒平瓦

図版 No.	記号	出土地点	表面 状態	寸法(瓦葺)										胎土	釉色	特記事項	出(復元)番号			
				a	b	c	d	e	f	g	h	i	j					k	l	
91	1009	軒平 1号	1号	1号	11.0	11.0	12.0											胎土 白磁砂少 肥田灰白磁砂 灰-土黄(肥田灰) 白(土黄)灰(肥田灰)	胎土黄 胎土黄(肥田灰)土黄(平上瓦)	19001-0009
1010	軒平 1号	1号	1号	1号	11.0	11.0	12.0											胎土 白磁砂少 肥田灰白磁砂 灰-土黄(肥田灰) 白(土黄)灰(肥田灰)	胎土黄 胎土黄(肥田灰)土黄(平上瓦)	19001-0010
1011	軒平 1号	1号	1号	1号	11.0	11.0	12.0											胎土 白磁砂少 肥田灰白磁砂 灰-土黄(肥田灰) 白(土黄)灰(肥田灰)	胎土黄 胎土黄(肥田灰)土黄(平上瓦)	19001-0011
1012	軒平 1号	1号	1号	1号	11.0	11.0	12.0											胎土 白磁砂少 肥田灰白磁砂 灰-土黄(肥田灰) 白(土黄)灰(肥田灰)	胎土黄 胎土黄(肥田灰)土黄(平上瓦)	19001-0012
1013	軒平 1号	1号	1号	1号	11.0	11.0	12.0											胎土 白磁砂少 肥田灰白磁砂 灰-土黄(肥田灰) 白(土黄)灰(肥田灰)	胎土黄 胎土黄(肥田灰)土黄(平上瓦)	19001-0013
1014	軒平 1号	1号	1号	1号	11.0	11.0	12.0											胎土 白磁砂少 肥田灰白磁砂 灰-土黄(肥田灰) 白(土黄)灰(肥田灰)	胎土黄 胎土黄(肥田灰)土黄(平上瓦)	19001-0014
1015	軒平 1号	1号	1号	1号	11.0	11.0	12.0											胎土 白磁砂少 肥田灰白磁砂 灰-土黄(肥田灰) 白(土黄)灰(肥田灰)	胎土黄 胎土黄(肥田灰)土黄(平上瓦)	19001-0015

丸瓦

図版 No.	記号	出土地点	表面 状態	寸法(瓦葺)										胎土	釉色	特記事項	出(復元)番号			
				a	b	c	d	e	f	g	h	i	j					k	l	
91	1016	丸 1号	1号	1号	13.0	16.0	13.0	12.2										胎土 白磁砂少 肥田灰白磁砂 灰-土黄(肥田灰) 白(土黄)灰(肥田灰)	胎土黄 胎土黄(肥田灰)土黄(平上瓦)	19001-0016
1017	丸 1号	1号	1号	1号	13.0	16.0	13.0	12.2										胎土 白磁砂少 肥田灰白磁砂 灰-土黄(肥田灰) 白(土黄)灰(肥田灰)	胎土黄 胎土黄(肥田灰)土黄(平上瓦)	19001-0017
1018	丸 1号	1号	1号	1号	13.0	16.0	13.0	12.2										胎土 白磁砂少 肥田灰白磁砂 灰-土黄(肥田灰) 白(土黄)灰(肥田灰)	胎土黄 胎土黄(肥田灰)土黄(平上瓦)	19001-0018
1019	丸 1号	1号	1号	1号	13.0	16.0	13.0	12.2										胎土 白磁砂少 肥田灰白磁砂 灰-土黄(肥田灰) 白(土黄)灰(肥田灰)	胎土黄 胎土黄(肥田灰)土黄(平上瓦)	19001-0019
1020	丸 1号	1号	1号	1号	13.0	16.0	13.0	12.2										胎土 白磁砂少 肥田灰白磁砂 灰-土黄(肥田灰) 白(土黄)灰(肥田灰)	胎土黄 胎土黄(肥田灰)土黄(平上瓦)	19001-0020
1021	丸 1号	1号	1号	1号	13.0	16.0	13.0	12.2										胎土 白磁砂少 肥田灰白磁砂 灰-土黄(肥田灰) 白(土黄)灰(肥田灰)	胎土黄 胎土黄(肥田灰)土黄(平上瓦)	19001-0021
1022	丸 1号	1号	1号	1号	13.0	16.0	13.0	12.2										胎土 白磁砂少 肥田灰白磁砂 灰-土黄(肥田灰) 白(土黄)灰(肥田灰)	胎土黄 胎土黄(肥田灰)土黄(平上瓦)	19001-0022
1023	丸 1号	1号	1号	1号	13.0	16.0	13.0	12.2										胎土 白磁砂少 肥田灰白磁砂 灰-土黄(肥田灰) 白(土黄)灰(肥田灰)	胎土黄 胎土黄(肥田灰)土黄(平上瓦)	19001-0023
1024	丸 1号	1号	1号	1号	13.0	16.0	13.0	12.2										胎土 白磁砂少 肥田灰白磁砂 灰-土黄(肥田灰) 白(土黄)灰(肥田灰)	胎土黄 胎土黄(肥田灰)土黄(平上瓦)	19001-0024

第11表 瀬ノ丸第1次調査区 出土遺物観察表 表2

平瓦

(1)は保存庫【1】は写真機

図版 No.	図例	出土地点	表面処理		寸法(単位:cm)										胎色	特記事項	出(収)庫番号	
			a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l				
1001	平	1号棟 1号瓦葺い土葺き御影瓦	黒	26.2	37.0		3.2	1.9									小形、軒瓦葺い土葺き御影瓦	199901-0002
1002	平	2号棟 平瓦葺き御影瓦	黒	33.0	38.11			1.4									細形、平葺き土葺き御影瓦、胎色に黒色斑	199901-0011

枕瓦

図版 No.	図例	出土地点	表面処理		寸法(単位:cm)										胎色	特記事項	出(収)庫番号	
			a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l				
1003	枕	1号棟 15号瓦葺	黒	29.9	103.0	6.8	4.2	3.1					13.0	1.8			黒色、軒瓦葺い土葺き御影瓦	199901-0011
1004	枕	1号棟 2号瓦葺	黒	32.0	108.7												胎色に黒色斑	199901-0011
1005	枕	1号棟 御影瓦葺き土葺き	黒	25.0	30.9	3.8	4.9	3.1	4.1	5.1	5.1						胎色に黒色斑	199901-0012
1006	枕	1号棟 御影瓦葺き土葺き	黒	22.0	14.0	0.0	14.0										胎色に黒色斑	199901-0010
1007	枕	1号棟 御影瓦葺き土葺き	黒	25.0	18.0												胎色に黒色斑	199901-0014
1008	枕	2号棟 5001	黒	16.0	10.0												胎色に黒色斑	199901-0009
1009	枕	2号棟 平瓦葺き御影瓦	黒	19.0	21.0	13.0	3.0										本瓦葺き、軒瓦葺き土葺き御影瓦、胎色に黒色斑	199901-0011
1010	枕	2号棟 平瓦葺き御影瓦	黒	18.0	12.0				12.0								胎色に黒色斑	199901-0012

平瓦あるいは枕瓦

図版 No.	図例	出土地点	表面処理		寸法(単位:cm)										胎色	特記事項	出(収)庫番号	
			a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l				
1011	平	5号棟 5001	黒	15.0	9.0												胎色に黒色斑	199901-0008
1012	平	5号棟 5002	黒	17.0	10.0												胎色に黒色斑	199901-0023
1013	平	5号棟 平瓦葺き御影瓦	黒	14.0	18.0												胎色に黒色斑	199901-0012
1014	平	5001並之瓦	黒	17.0	11.0												胎色に黒色斑	199901-0007

通瓦

図版 No.	図例	出土地点	表面処理		寸法(単位:cm)										胎色	特記事項	出(収)庫番号	
			a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l				
1015	通	1号棟 15号瓦葺	黒	14.0	42.0	6.0	4.0	3.0									胎色に黒色斑	199901-0008
1016	通	1号棟 15号瓦葺	黒	19.0	40.0	6.0	4.0	3.0									胎色に黒色斑	199901-0003
1017	通	1号棟 15号瓦葺	黒	18.0	42.0	6.0	4.0	3.0									胎色に黒色斑	199901-0016
1018	通	1号棟 15号瓦葺	黒	14.0	42.0	6.0	4.0	3.0									胎色に黒色斑	199901-0018
1019	通	1号棟 2号瓦葺	黒	13.0	42.0	6.0	4.0	3.0									胎色に黒色斑	199901-0013
1020	通	1号棟 2号瓦葺	黒	13.0	42.0	6.0	4.0	3.0									胎色に黒色斑	199901-0015
1021	通	1号棟 御影瓦葺き土葺き	黒	11.0	42.0	6.0	4.0	3.0									胎色に黒色斑	199901-0017
1022	通	1号棟 御影瓦葺き土葺き	黒	11.0	42.0	6.0	4.0	3.0									胎色に黒色斑	199901-0024
1023	通	1号棟 御影瓦葺き土葺き	黒	17.0	42.0	6.0	4.0	3.0									胎色に黒色斑	199901-0019

第14表 瀬ノ丸第1次調査区 出土遺物観察表 丸5

軒杖瓦 (拓本)

(1) 保存状態 (2) 調査年度

図版 No.	図種	出土地点	寸法(瓦当)										寸法(体高)										胎土	特色	特記事項	10(瓦当番号)			
			a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r	s	t					u	v	
50	T106	軒杖 1.8m	同調査区東上段下層	80.7	(11.2)	(10.6)																			1.8	上・中・下層 白・褐色粘赤多量	第12(上)19(下)	199904-0274	
	T107	軒杖 1.8m	同調査区東上段	80.9	(6.0)	(6.0)																				1.8	上・中・下層 白・褐色粘赤多量	第12(上)19(下)	199904-0280
	T108	軒杖 1.8m	同調査区東上段	81.8	(17.0)	(16.0)																				1.8	上・中・下層 白・褐色粘赤多量	第12(上)19(下)	199904-0283
51	T109	軒杖 1.8m	同調査区東上段	80.6	(10.8)	(6.0)																				1.8	上・中・下層 白・褐色粘赤多量	第12(上)19(下)	199904-0286
	T110	軒杖 1.8m	同調査区東上段	80.9	6.8	2.1																				1.8	上・中・下層 白・褐色粘赤多量	第12(上)19(下)	199904-0277
	T111	軒杖 1.8m	同調査区東上段	81.8	(11.4)	(10.5)																				1.8	上・中・下層 白・褐色粘赤多量	第12(上)19(下)	199904-0286
	T112	軒杖 1.8m	同調査区東上段	80.9	(6.0)	(6.0)																				1.8	上・中・下層 白・褐色粘赤多量	第12(上)19(下)	199904-0284
	T114	軒杖 1.8m	同調査区東上段	80.7	(9.7)	(10.7)																				1.8	上・中・下層 白・褐色粘赤多量	第12(上)19(下)	199904-0276
	T115	軒杖 1.8m	同調査区東上段	81.8	(6.0)	(6.0)																				1.8	上・中・下層 白・褐色粘赤多量	第12(上)19(下)	199904-0288
	T116	軒杖 1.8m	同調査区東上段	80.9	(10.2)	(11.2)																				1.8	上・中・下層 白・褐色粘赤多量	第12(上)19(下)	199904-0285

鳥龕 (拓本)

図版 No.	図種	出土地点	瓦当	寸法(瓦当)										寸法(体高)										胎土	特色	特記事項	10(瓦当番号)		
				a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r	s	t					u	v
52	T117	鳥龕 1.8m	同調査区	81.8	6.9	6.2																				1.8	上・中・下層 白・褐色粘赤多量	全面	199904-0271

丸瓦 (拓本)

図版 No.	図種	出土地点	瓦当	寸法(瓦当)										寸法(体高)										胎土	特色	特記事項	10(瓦当番号)		
				a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r	s	t					u	v
53	T118	丸瓦 1.8m	同調査区	80.0	(8.0)	(8.0)																				1.8	上・中・下層 白・褐色粘赤多量	全面	199904-0218
	T119	丸瓦 1.8m	同調査区	18.1	(13.0)	(14.0)																				1.8	上・中・下層 白・褐色粘赤多量	全面	199904-0237
	T120	丸瓦 1.8m	同調査区東上段	20.2	13.8	6.0																				1.8	上・中・下層 白・褐色粘赤多量	全面	199904-0419
	T121	丸瓦 1.8m	同調査区東上段	18.0	(8.0)	(8.0)																				1.8	上・中・下層 白・褐色粘赤多量	全面	199904-0413
	T122	丸瓦 1.8m	同調査区東上段	18.7	(8.0)	(8.0)																				1.8	上・中・下層 白・褐色粘赤多量	全面	199904-0291

平瓦 (拓本)

図版 No.	図種	出土地点	瓦当	寸法(瓦当)										寸法(体高)										胎土	特色	特記事項	10(瓦当番号)		
				a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r	s	t					u	v
54	T123	平瓦 1.8m	同調査区	18.0	(11.0)	(11.0)																				1.8	上・中・下層 白・褐色粘赤多量	全面	199904-0230
	T124	平瓦 1.8m	同調査区	18.2	(6.0)	(6.0)																				1.8	上・中・下層 白・褐色粘赤多量	全面	199904-0233
	T125	平瓦 1.8m	同調査区	13.9	(13.0)	(13.0)																				1.8	上・中・下層 白・褐色粘赤多量	全面	199904-0240
	T126	平瓦 1.8m	同調査区	13.9	(13.0)	(13.0)																				1.8	上・中・下層 白・褐色粘赤多量	全面	199904-0215
	T127	平瓦 1.8m	同調査区東上段下層	18.0	(6.0)	(6.0)																				1.8	上・中・下層 白・褐色粘赤多量	全面	199904-0226
	T128	平瓦 1.8m	同調査区東上段下層	18.0	(6.0)	(6.0)																				1.8	上・中・下層 白・褐色粘赤多量	全面	199904-0216
	T129	平瓦 1.8m	同調査区東上段下層	18.0	(6.0)	(6.0)																				1.8	上・中・下層 白・褐色粘赤多量	全面	199904-0216
	T130	平瓦 1.8m	同調査区東上段下層	18.0	(6.0)	(6.0)																				1.8	上・中・下層 白・褐色粘赤多量	全面	199904-0412

第15表 鶴ノ丸第1次調査区 出土遺物観察表 瓦6

表瓦 (拓本)

図版 No.	部類	出土地点	系図 処理	寸法(体積)											胎土	顔色	特記事項	図(参照番号)
				a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k				
T131	瓦 1.6葎		胎	(12.1)	(7.2)									1.9	焼青・白・褐色色胎砂多 褐色色胎砂少 褐色	黒(にぶい)瓦状	斜印(逆)	19904-0244
T132	瓦 1.6葎		胎	(13.0)	(13.1)									1.9	焼青・白・褐色色胎砂多 褐色色胎砂少 褐色	黒(にぶい)瓦状	斜印(正)	行着物あり
T133	瓦 1.6葎		胎	(12.0)	(8.3)									2.0	にぶい焼青・白・褐色色胎砂多 褐色 空胎少	褐色(瓦状あり)	斜印(正)	19904-0245
T134	瓦 1.6葎		胎	(28.0)	(15.5)									1.8	褐色色胎砂多	褐色(にぶい)瓦状	斜印(正)	19904-0251
T135	瓦 1.6葎		胎	(25.1)	(16.9)									1.8	褐色(にぶい)焼青 白色胎砂多 褐色色胎砂少 白・青黄緑色胎砂 褐色	黒(瓦状あり)	斜印(正)	19904-0236
T136	瓦 1.6葎		胎	(11.0)	(8.3)									2.0	にぶい焼青 白色胎砂多 褐色 空胎少 扁状	黒(にぶい)瓦状	斜印(逆)	19904-0238
T137	瓦 1.6葎		胎	(28.2)	(16.9)									2.0	明赤胎砂 白色胎砂多 白色胎砂 褐色 空胎少	褐色(にぶい)瓦状	斜印(正)	19904-0232
T138	瓦 1.6葎		胎	(13.7)	(13.2)									1.8	明赤胎砂 褐色色胎砂	赤褐色(瓦状あり)	斜印(正)	19904-0234
T139	瓦 1.6葎	4号塚瓦	胎	(3.0)	(2.6)									1.9	にぶい焼青 白色胎砂 褐色色胎砂 褐色 空胎少	斜印(正)	19904-0208	
T140	瓦 1.6葎	4号塚瓦	胎	(7.9)	(7.2)									1.8	焼青・白・褐色色胎砂 褐色色胎砂 褐色 空胎少	黒(にぶい)瓦状	斜印(逆)	19904-0211
T141	瓦 1.6葎	4号塚瓦	胎	(12.0)	(14.2)									2.0	にぶい焼青・褐色 白色胎砂多 褐色 扁状	黒(にぶい)瓦状	斜印(逆)	19904-0219
T142	瓦 1.6葎	4号塚瓦	胎	(11.2)	(13.6)									2.0	にぶい焼青 白色胎砂 白色胎砂多 褐色 扁状	黒(にぶい)瓦状	斜印(逆)	19904-0222
T143	瓦 1.6葎	15号塚瓦	胎	(6.3)	(32.8)									1.6	褐色(にぶい)焼青 白色胎砂多 褐色 空胎少 扁状	黒(にぶい)瓦状	斜印(逆)・?	19904-0247
T144	瓦 1.6葎	15号塚瓦	胎	(11.7)	(17.0)									2.8	褐色(にぶい)焼青 白色胎砂多 褐色 扁状	黒(瓦状あり)	斜印(正)	19904-0209
T145	瓦 1.6葎	南平塚瓦	胎	(2.7)	(7.5)									2.1	にぶい焼青 白色胎砂 褐色色胎砂 褐色 扁状	黒(にぶい)瓦状	斜印(逆)	19904-0210
T146	瓦 1.6葎	2号塚瓦	胎	(15.2)	(18.3)									1.9	焼青・明赤胎砂 白・褐色色胎砂 白色胎砂少 空胎少	黒(にぶい)瓦状	斜印(逆)	19904-0205
T147	瓦 1.6葎	2号塚瓦	胎	(9.1)	(6.0)									2.1	焼青・明赤胎砂 褐色色胎砂 褐色 空胎少	黒(にぶい)瓦状	斜印(逆)	19904-0206
T148	瓦 1.6葎	21号塚瓦	胎	(4.1)	(5.0)									1.9	焼青・明赤胎砂 白色胎砂多 褐色 空胎少	黒(瓦状あり)	斜印(正)	19904-0204
T149	瓦 1.6葎	旧跡家尊土瓦(反下)	胎	(7.6)	(6.4)									1.2	にぶい焼青 白色胎砂多 褐色 扁状	黒(にぶい)瓦状	斜印(逆)・?	19904-0209
T150	瓦 1.6葎	旧跡家尊土瓦	胎	(12.0)	(23.1)									2.1	焼青・明赤胎砂 白・褐色色胎砂 褐色色胎砂 褐色 扁状	黒(にぶい)瓦状	斜印(逆)・? 一部焼痕 行着物あり	19904-0207
T151	瓦 1.6葎	旧跡家尊土瓦	胎	(22.0)	(16.3)									1.8	焼青・にぶい焼青 白・褐色色胎砂多 褐色色胎砂 褐色	黒(にぶい)瓦状	斜印(正)	19904-0401
T152	瓦 1.6葎	旧跡家尊土瓦(覆)	胎	(26.0)	(16.1)									2.2	明赤胎砂 白色胎砂多 白色胎砂少 空胎少	赤褐色(にぶい)瓦状	斜印(正)・逆	19904-0202
T153	瓦 1.6葎	旧跡家尊土瓦(覆)	胎	(30.5)	(20.3)									1.8	焼青・明赤胎砂 褐色色胎砂 褐色 扁状	黒(にぶい)瓦状	斜印(逆) 新穴1つ (赤・黒)瓦(黄・赤)	19904-0209
T154	瓦 1.6葎	旧跡家尊土瓦(覆)	胎	(14.9)	(13.3)									1.8	にぶい焼青・褐色 白色胎砂少 褐色土質少	黒(にぶい)瓦状	斜印(逆)	19904-0208
T155	瓦 1.6葎	旧跡家尊土瓦(覆)	胎	(9.1)	(7.6)									2.0	厚薄胎砂 白色胎砂・褐色胎砂 比較的褐色	赤褐色(にぶい)瓦状	斜印(正)	19904-0409
T156	瓦 1.6葎	旧跡家尊土瓦(覆)	胎	(10.6)	(6.0)									1.8	にぶい焼青 白色胎砂少 褐色 ツブツブあり	赤(にぶい)瓦状	斜印(正)	19904-0414
T157	瓦 1.6葎	旧跡家尊土瓦	胎	(16.1)	(13.3)									1.9	にぶい焼青・褐色 白・褐色色胎砂少 白色胎砂多 褐色	黒(にぶい)瓦状	斜印(正)	19904-0403

(1)は焼痕

第4節 小結

1. 検出遺構の時期と主な遺構

検出遺構は大きく近現代（Ⅰ層）・近世（Ⅱ層）の2時期に分けられる。さらにⅠ層は金沢城公園・金沢大学期（Ⅰa層）と旧陸軍期（Ⅰb層）に細分され、Ⅱ層も石垣台構築後（Ⅱa層）、石垣台構築以前（Ⅱb層・Ⅱc層）に細分できる。

Ⅰ層では溝状や土坑状の遺構が検出されているが、特筆すべき遺構として、旧陸軍期の衛戍拘禁所の塀跡とその支柱穴があげられる。

Ⅱ層の遺構は近現代の擾乱により、検出された遺構は限定的であった。主な遺構として、暗渠遺構（辰巳用水）、馬洗場、石垣台、塀基礎があげられる。

2. 衛戍拘禁所関連遺構

調査区東辺及び南辺で、衛戍拘禁所の塀跡とみられる浅い溝状の遺構が検出された。塀の支柱穴と見られるピット（P01～P12）は同範囲に塀跡と重複して検出されている。また、支柱穴の中には掘方底部を礎や河原石で埋め、コンクリートあるいはモルタルの基礎を置いた上に壁状の構造物を伴うものも見られた。調査区北部での土層断面の観察により、支柱穴の掘方が石垣台の栗石層を切っていたことが確認されたことから、石垣台の撤去（明治14年（1881）火災後）後に塀が設置されたと考えられる。旧陸軍期の絵図でも、大正15年以後のものに、それ以前の絵図で空地として表示されていた五正建御殿跡地に「金澤衛戍拘禁所」と注記された建物が描かれるようになり、調査成果を裏付けている。

3. 辰巳用水

調査区南端からほぼ南北方向に延びる暗渠遺構を3条（SD01～SD03）確認した。それぞれの掘方からは、石管（SD01）・粘土巻木樋（SD02）・木樋（SD03）の導水管が検出され、切り合い関係から、SD03→SD02→SD01の順に構築されたことが明らかとなった。また、導水管は設置時に周囲を円礫を含む土で埋められており、特に石管や粘土巻木樋では、連結部の下に敷石を置いて沈下を防ぐ工夫が見られた。第56・57図で行った絵図との比較により、これらの遺構は、18世紀半ば以降の辰巳用水に対応すると考えられる。なお、絵図との照合にあたっては、現存石垣を定点としつつ、1/200現況地形測量図と遺構図、及び絵図を重ね合わせて行っている。

SD01は、掘方の土層断面から改修を1度受けていることが判明しており、導水管として石管が検出されている。石管は1辺約40cmの断面方形を呈し、長さ約1mを一単位として8本分確認した。

第2節でも述べたとおり、辰巳用水の導水管は、文献史料から、天保14年（1843）から文久2年（1862）頃までの約20年にわたり、随時木樋から金谷石製の石管へ取替えられていったことが知られており、SD01の石管もこの期間に設置されたものと考えられる。掘方からの出土遺物も幕末期を下限とするものであり、その内容と矛盾しない。また、SD01の流路と、嘉永3年（1850）に作成された「御城分間御絵図」（公財）前田育徳会蔵）に描かれた流路を照合したところ、ほぼ重なることを確認した。更に、石管導入以前の天保元年（1830）に作成された「御城内壱分基絵図」（天保3年に水路を追記、横山隆昭家蔵）とも比較したが、同様に流路がほぼ重なったことから、石管SD01の流路が天保期まで遡る流路を踏襲した可能性があり、土層断面で確認された改修痕は石管以前の導水管（木樋？）から石管への転換を反映したものと推定される。

SD02とSD03は溝底レベルに違いがあるものの、その流路はほとんど重複して検出された。SD02の導水管の粘土巻木樋は、板を桶状に組んだ木製樋の周りに漏水防止のためと見られる小礫混じりの

粘土を巻き付けたもので、掘方の土層断面から2度の改修を受けていることが判明している。また、SD03の導水管は木樋と考えられるが、腐食のためその痕跡が一部の土層断面で確認されたのみで、木樋本体は遺存していなかったが、断面丸形の形状であったと推定される。なお、掘方の土層断面から1度改修を受けていることが判明している。

五正建御厩付近で辰巳用水の流路が描かれるのは、宝暦大火以前(18世紀前半)の「金沢城図」(金沢市立玉川図書館蔵)が最も古い。この図における辰巳用水は、本調査での検出状況と異なり、厩エリアの南から、本丸階段に沿って直角に曲がり、二ノ丸御殿へと延びるルートを取る。辰巳用水の流路が検出状況と同様に厩エリアを斜めに横切るように描かれるのは、1750年(寛延3)頃に作図されたとされる「金沢城御殿絵図」(金沢市立玉川図書館蔵)以降の絵図であることから、厩エリア内を通る最古段階の辰巳用水流路であるSD03の年代の上限は、1750年頃まで遡ることができる。また、上記絵図に加えて、文化4年(1807)の景観を描いている「石川門から二ノ丸まで水廻樋之図」(石川県立博物館蔵)とSD02・SD03流路についても照合を行ったところ、完全には一致しなかったが、諸方土蔵の南を迂回した後厩エリアを斜めに横切るような流路を持つ点で、類似が見られた。

文献史料では、後藤彦三郎が著した「文禄年中以来等之旧記」に「丸松木ヲ中織シテ、上水無滞通シ候ハ明和之比ニ而候歟。」とあり、これに類した内容の記述が同じく後藤彦三郎著の「金城深秘録」、「落葉集」でも見られることから、明和年間(1764～1772)に、辰巳用水の導水管として丸松木をくり抜いた樋が使われ始めたと考えられる。また、これに続く安永4年(1775)の「上ヶ水樋図り帳」(穴太政洋家蔵)でも、松の木を2つ割りして内側を丸くくり抜いて合わせた断面丸形の木樋(文中で「丸樋」と呼ばれる)についての記述が見られる。さらに、上記の「石川門から二ノ丸まで水廻樋之図」の中には、文化3～4年に取り換えられた樋に関する注記があり、そのうち二ノ丸御殿台所南(「此所樋三本、内三本卯三月入替、但角樋」)、諸方土蔵の南(「是ヨリ四本くり樋入ル、寅三月」)、南御門の南(「くり樋入、寅三月」)の3か所で、樋の種類を表すと見られる「角樋」「くり樋」という名称を確認した。「角樋」は断面方形の樋と考えられ、城内では寛永の辰巳用水創建時のものとされる石川門土樋出土の底板・側板・蓋板の4枚の板を組み合わせたものや、天保元年以前とされる堂形出土の角材に溝を彫り、上部に蓋板をかぶせたものの2種類が確認されており、耐漏性の点から前者から後者へと改善されたとされる。「くり樋」は上記の文献史料で言及されているような丸木を繰り抜いて作った木樋のことを指すと考えられる。

これらの記述はいずれも直接的に厩エリアにおける辰巳用水導水管について言及したものではないが、城内の辰巳用水導水管としては、断面丸形の木樋が少なくとも明和年間～文化4年には存在したと見られ、「石川門から二ノ丸まで水廻樋之図」に描かれた流路が断面丸形木樋段階のSD03の流路を示す可能性も考えられる。一方、「くり樋」と粘土巻木樋は、その製法から別種の樋と考えられるため、同図の辰巳用水流路は、SD02で最も新しい段階の導水管である粘土巻木樋が機能していた時の流路を反映したものとは考えにくい。SD02が2度の改修を経ていることから、粘土巻木樋に改修する以前の状況を描いた可能性は残る。粘土巻木樋がいつ導入されたのか、その具体的な年代は明らかではないが、「くり樋」の記述以後の文化5年から「御城中壘分基絵図」に水路が追記された天保3年以前に絞り込めよう。粘土巻木樋は、木や石以外の素材が使用された導水管であるという点で、特異性が見られるが、検出地点以外での出土例や関連の文献史料も見られず、詳細を明らかにできたとはいえないため、今後の類例や史料の増加に期待したい。

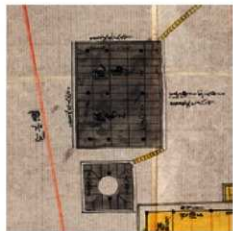
4. 馬洗場

調査区南東部で、黄色系の粘土敷面と凝灰岩の石列(1号石列)を検出した。また、その南側で県文化財課により実施された本調査に先立つ立会調査により、井戸が確認されている。これらは近世後

期の絵図との対比により、馬洗場の一部及びその南側に付属する井戸と考えられる。

調査では、遺構の切り合い関係から、馬洗場がSD03より新しい時期のものであることが確認できた。SD03最終段階の導水管の設置時期は、前述のとおり、明和以後と推定される。この頃の厩内の詳細を描いた絵図は知られていないが、宝暦大火（宝暦9年=1759）直前の宝暦5年（1755）の絵図（「金沢城図」）では、馬洗場は検出地点とは異なる位置に描かれており、井戸も見られない。よって、18世紀後半以降に馬洗場の移転と井戸の構築が行われたと考えられる。一方、文献では、「御造営方日記」において、文化6～7年（1809～1810）にかけての五正建御厩再建と厩内の井戸に関する記事が見られる。馬洗場自体に関する記述はないが、文化再建期以降の絵図に描かれた馬洗場と井戸が、検出遺構の位置とおおむね一致していることから、厩・井戸と時期を同じくして馬洗場も検出地点の位置に再建されたと考えることが妥当であろう。

なお、その頃に描かれたと考えられる「二之御丸五正建御厩絵図」（松井建設蔵）には、馬洗場及びその南に伴う井戸について詳しく表現されており、両者が石敷の床面を持っていたことが窺える。また、馬洗場及び井戸の内部に柱穴が描かれていることから、何らかの建物を伴っていたようである。更に周囲には溝が巡らされ、橋爪門番所側に排水されていたことが窺える。石敷の詳細等は描かれていないが、「御城分間御絵図」でも、馬洗場及び井戸が石敷であることや馬洗場内部に建物を有することなどが表現されていた。ただし、本調査及び立会調査では、絵図に描かれた石敷及び溝や建物等の構造物は確認できなかった。これらは既に失われていたと推測され、本調査区で検出された粘土敷と1号石列は、それぞれ石敷の下部構造及び石敷周囲を囲った縁石に対応する可能性がある。



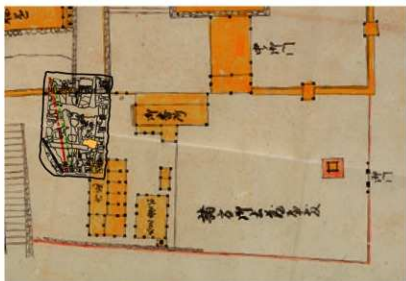
第55図 「二之御丸五正建御厩絵図」部分（松井建設蔵）

5. 石垣台・塀基礎

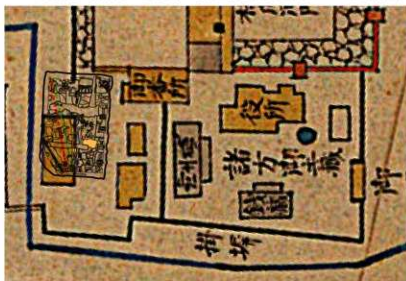
調査区北部において、二ノ丸への通路と極楽橋下の空堀を画する石垣台の南面（石垣ID:2330S）及び西面（石垣ID:2330W）の一部の根石と、石垣台西面に連結する塀の基礎部分を確認している。

石垣台の根石は戸室の粗加工石で、全体にノミ加工が施された面に大型刻印を有する特徴から、金沢城石垣編年第4期（寛永年間）に属すると見られ、創建期のものと考えられる。塀基礎を構成する石には一部に転用材が見られることから、塀が改修を受けた可能性があるが、石垣台と塀基礎の根石設置時の整地の状況から、石垣台と塀は同時期に作られたと考えられる。また、石垣台の撤去は抜取痕付近の土層観察により、旧陸軍期の明治14年以後に行われたと見られる。塀の撤去についても土層等明確な裏付けが得られなかったが、おそらく石垣台と同時期に行われたと考えるのが妥当だとと思われる。

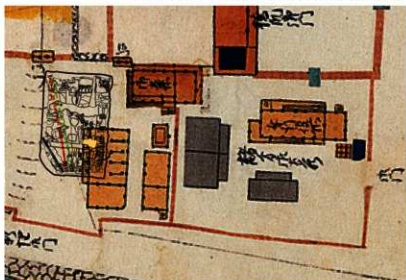
なお、平成10年度橋爪門統槽・二ノ丸階段調査区及び平成24年度橋爪門二ノ丸園路調査区で、石垣台北側の延長部分が確認されている。橋爪門統槽・二ノ丸階段調査区では、加工の特徴から東側に位置する寛永期の橋爪門統槽台下部と同時期に作られたと見られる切石積部分を検出した。また、橋爪門二ノ丸園路調査区では、宝暦大火後の改修石垣及び寛永期の創建時石垣を検出した。寛永期石垣の前では基盤層および掘方を確認したが、鶴ノ丸第1次調査区で確認されたような掘方上位の整地面（IIb1層）や基盤層・掘方下の硬化面（IIc1層）に対応する面は確認されていない。これら2調査区を合わせた石垣台の復元規模は、東西約7.8m、南北25.5m以上となる。



寛文元～元禄元：「金沢城二之丸座舖之園」（金沢市立玉川図書館蔵）



18世紀前半：「金沢城園」（金沢市立玉川図書館蔵）

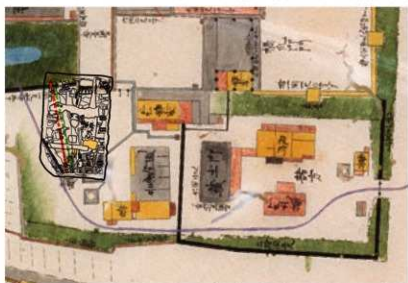


1750年頃：「金沢城御殿絵園」（金沢市立玉川図書館蔵）

第56図 鶴ノ丸第1次調査区 五正建御殿付近の絵園（近世前期・近世後期1）



文化4年(1807):「石川門から二ノ丸まで水廻桶之図」(石川県立歴史博物館蔵)



天保元(1830)年:「御城中老分碁絵図」(横山隆昭家蔵)



嘉永3(1850)年:「御城分間御絵図」((公財)前田育徳会蔵)

第57図 鶴ノ丸第1次調査区 五正建御廩付近の絵図(近世後期2)

第4章 新丸第1次調査

第1節 調査の概要

1. 調査区と調査の状況

新丸第1次調査区は新丸の南側に位置しており、金沢城を描いた絵図において、一貫して堀（三ノ丸北堀）が描かれていた地点に相当する。

平成9年（1997）から行われた金沢城公園整備事業に伴い、当地点に湿生園を整備することになり、遺構の保護及び三ノ丸北堀の範囲確認を目的とした発掘調査を実施した。調査開始前の段階では堀の痕跡を確認することはできず、堀は近代以降に埋立てられた状況であった。

近世後期の景観を描いた絵図を基に、三ノ丸北堀北辺の推定範囲及びその周辺に、1～12までの通し番号（ただしトレンチ7は欠番とする）を振り分けたトレンチを設定し、調査を行った（第58図）。その結果、トレンチ1～10の各地点で三ノ丸北堀に関する遺構・土層などを確認した。

2. 基本層序

検出した各土層の特徴と標高は以下のとおりである。

I 層 近現代の土層。大学期・旧陸軍期の層に細別できる。

I a層：大学期の土層。金沢大学期にテニスコートが造成されており、その造成以降に相当する土層。

黄色系の砂を主体とし、検出面の標高は約33.3～34.1mを測る。

I b層：大学期の土層。金沢大学へ移管した後の整備に伴う整地層。褐色系の土を主体とし、検出面の

標高は約32.9～33.6mを測る。鉄管・ヒューム管等の掘方が多く、礫や瓦などを含む。

I c層：旧陸軍期の土層。三ノ丸北堀埋立て後の整地層。黒褐～褐色系の粘砂質土を主体とし、小礫を

含む。検出面の標高は約32.5～33.2mを測り、鉄管や石管掘方等を確認している。

I d層：旧陸軍期の土層。三ノ丸北堀の埋立てに伴う整地層で三ノ丸北堀が窪地化する。褐色系の砂質土を主体とし、検出面の標高は約32.4～33.4mを測る。

I e層：旧陸軍期の土層。旧陸軍へ移管した後の整備に伴う整地層で、土羽前面に近代石垣を構築する。

裏込め層は淡黄灰～暗褐色粘質土を主体とし、検出面の標高は約32.6mを測る。

II 層 近世～近代初期の土層。

II a1層：堀堆積層。三ノ丸北堀内部において近代石垣が構築されるまでに堆積した土層。黒～褐色の粘質土を主体とし、検出面の標高は約31.1mを測る。底ざらえを受けていたと見られ、部分的に検出されるのみである。

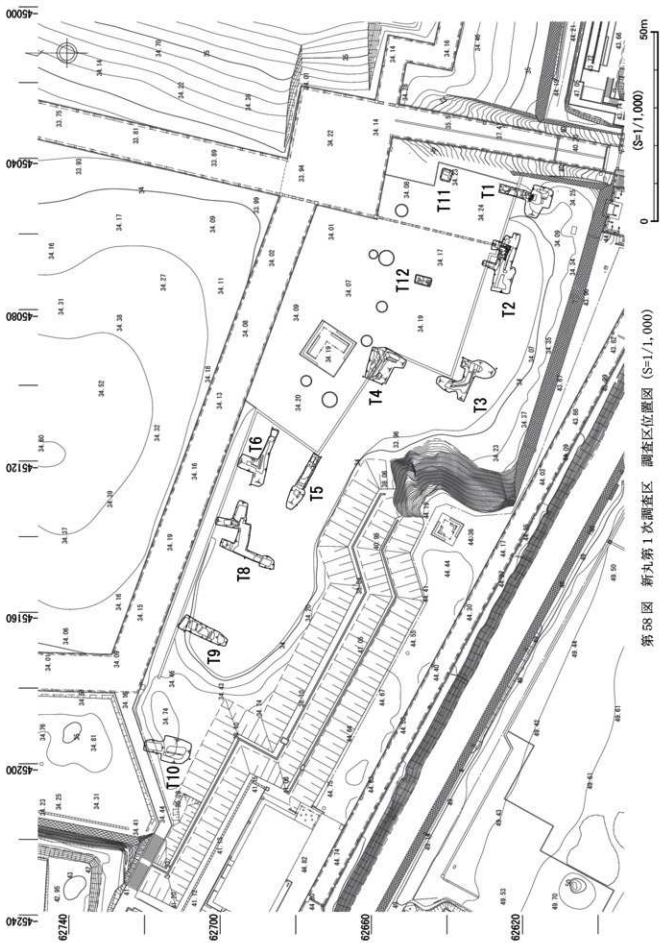
II a2層：近世整地層等。調査区の東側で確認された整地層及び遺構埋土等。黒～褐色系の粘質土を主体とし、検出面の標高は約33.1mを測る。

II b1層：近世石垣裏込め層等。三ノ丸北堀造成時、近世石垣の構築に伴う裏込め層で、検出面の標高は約33.0mを測る。

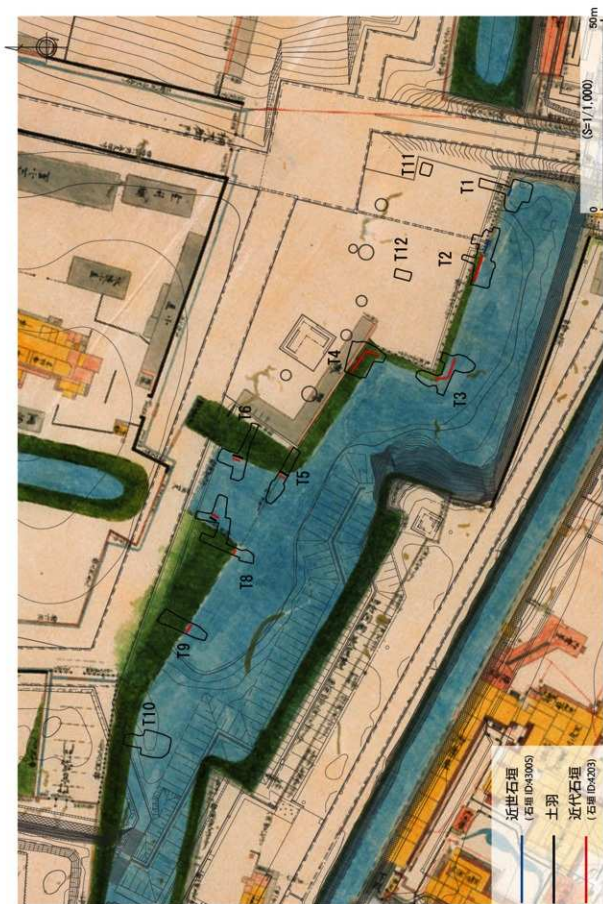
II b2層：近世造成層等。新丸造成に伴う土層及びこれを基盤とする遺構埋土などで、主に調査区の西側で確認している。褐色系の粘質土を主体とし、検出面の標高は約32.7mを測る。

III 層 地山。

黄色系の土を主体とする。調査区の東側から西側にむけて傾斜しているものとみられ、検出面の標高は東側では約33.1mを測るが、西側では31.2m以下と推定される。



第 58 図 新丸第 1 次調査区 調査区位置図 (S=1/1,000)



第2節 遺構

三ノ丸北堀北辺に関する遺構（石垣・土羽等）については、複数のトレンチにまたがって検出しており、本節ではまずトレンチごとに状況を説明し、遺構の詳細については節の末尾において記述する。

1. トレンチ

トレンチ1（第60～62図）

調査区東端、河北坂西側に位置する。三ノ丸北堀北辺確認の為、東西約8.5m・南北約14.5mの範囲（面積約57㎡）にトレンチを設定した（平成8年度試掘調査地点と重複）。トレンチ南側で三ノ丸北堀北辺を構成する三ノ丸北堀北岸石垣（石垣ID:4300S）を、トレンチ北側でSK01・SK02を検出した。

【三ノ丸北堀の状況】

近世の状況

三ノ丸北堀北辺法面の基盤は大部分がⅢ層（地山）である。堀の外側（北側）では標高約33.4mを測るが、上面は平坦で一部階段状の凹凸が見られ、また近代の整地層（I d層）に直接覆われている。このことや、隣接する河北坂西面石垣（石垣ID:3250W）の高さ（標高38m前後）から見ても、I d層の造成以前に近世土層ごと削平されたと考えられ、堀本来の掘り込み面は検出地山面より5m程度高かったと推定される。

堀法面には護岸として三ノ丸北堀北岸石垣（石垣ID:4300S）が築かれている（第61図）。本トレンチでは、高さ約2.5m（5段分）を確認した。検出上面は背後のⅢ層（地山）より80cm程低く、全体的な削平の後に攪乱を受けていると見られる。根石及び堀底については未確認であり、また堀内の堆積層は近代以後のものである。ただし後述するトレンチ3の状況から、発掘停止面は堀底に近いと推測される。石垣の裏込めは攪乱を受けた上部において状況を窺うことができ、背後の基盤を急角度に切り下げ、栗石を充填しているものと見られ、これら石材及び積み方などの特徴から金沢城石垣編年2期新段階（慶長後期頃）に属すると見られる。

石垣検出最上部から南の三ノ丸北面石垣（石垣ID:3500N）までの距離（幅幅）は約18mを測る。

近代以後の状況

周辺のトレンチ状況から、三ノ丸北堀及び三ノ丸北堀北岸石垣（石垣ID:4300S）は近代に入った後もしばらくは存続するものと考えられる（I e層段階）。その後、トレンチ周辺が整地され、堀は徐々に埋立てられていき、I c層段階の頃には堀の名残である窪みはおおむね埋まる。なお三ノ丸北堀北岸石垣の上部に見える抜取痕は、この段階における何らかの掘り込みによるものと考えられる。

【SK01】

SK01は平面が楕円形で、断面は深い箱形を呈する。長軸約2.4m・短軸約1.6m、深さは約80cmを測る。地山（Ⅲ層）上面、標高約32.7mの高さから検出しているが、近代以後に削平を受けた可能性が考えられる。

遺構は北側から黒褐～黒灰色の粘質土により埋められており、遺物は出土していない。上面が削平を受けていることから、正確な年代及び遺構の性格については判然としない。

【SK02】

SK02は平面形が隅丸方形で、SK01と同様に断面は深い箱形を呈する。長軸約2m、短軸約1.2m、深さ約1.2mを測る。地山（Ⅲ層）上面、標高約32.9mの高さから検出しているが、近代以後に削平を受けた可能性が考えられる。

埋土は黒～黒褐色粘質土を主体としており、南端では一度埋められた後に掘り返しを受けているように見え、2つの遺構が重複している可能性が考えられる（第61図）。遺物は出土しておらず、また上面が削平を受けていることもあり、正確な年代及び遺構の性格については判然としない。

トレンチ 2 (第63・64図)

調査区東部、トレンチ 1 から約 5 m 西に位置する。東西約 16 m・南北約 9 m の範囲(面積約 52 m²)にトレンチを設定した。トレンチ南側で三ノ丸北堀北岸石垣(石垣 ID: 4300S)、近代石垣(石垣 ID: 4203S)を検出した。

〔三ノ丸北堀の状況〕

近世の状況

三ノ丸北堀北辺法面の基盤は大部分がⅢ層(地山)である(第 64 図①)。堀の外側(北側)では標高約 32.9 m を測るが、上面は比較的平坦で直上に近代の整地層(I d 層)に直接覆われており、I d 層造成以前に近世土層ごと削平されたと考えられる。本来の堀の掘り込み面はより上位であったと推定される。

堀法面東側には、護岸として三ノ丸北堀北岸石垣(石垣 ID: 4300S)が構築されている。トレンチ 1 で確認された石垣の延長部にあたり、本トレンチでは上部 2 段分を検出した。西側では近代石垣(石垣 ID: 4203S)が構築されているが、近世においては土羽の状態だったと見られる。

なお「御城中巻分基絵図」(第 59 図)等では、三ノ丸北堀北岸石垣西端に隅角部が表現されているが、検出遺構からは判然としない。

三ノ丸北堀北岸石垣上面の標高は、約 33.3 m を測る。根石及び基盤面となる堀底は未確認であるが、堀内下部で確認したⅡa1 層は、近世段階の堆積層と見られる。トレンチ 1 検出部と同じく、金沢城石垣幅年 2 期新段階(慶長後期頃)に属する(第 64 図②)。

石垣検出上部から南の三ノ丸北面石垣(石垣 ID: 3500N)までの距離(堀幅)は約 18 ~ 19 m を測る。

近代以後の状況

堀及び三ノ丸北堀北岸石垣(石垣 ID: 4300S)は近代に入った後もしばらく存続するものと見られる。一方でこの西側では土羽を切込み、堀底堆積層(Ⅱa1 層)を地盤として近代石垣(石垣 ID: 4203S)が構築される(I e 層段階)。検出面の標高は約 32.8 m を測る。

その後、削平と堀内部の埋立で段階的に行われていくと見られるが、トレンチ 1 とは様相が異なり、トレンチ 2 では、金沢大学の造成まで窪地が残っていたと見られる。

トレンチ 3 (第65図)

調査区東部、トレンチ 2 から約 20 m 西に位置する。トレンチ 2 から続く三ノ丸北堀が北側へ屈曲する地点に相当し、堀の北辺及び屈曲部の東辺確認のため、東西約 11.5 m・南北約 14 m の範囲(面積約 95 m²)にトレンチを設定した。本トレンチでは近代石垣(石垣 ID: 4203S・4203E)を検出した。

〔三ノ丸北堀の状況〕

近世の状況

三ノ丸北堀北辺法面の基盤は大部分がⅢ層(地山)である。堀の外側(北側)では標高約 33.1 m を測るが、上面は近代の整地層(I d 層及び I e 層)に直接覆われている。I d 層の造成前に近世土層ごと削平されたと見られ、本来の掘り込み面はより上位であったと推定される。

堀法面については全体に近代石垣(石垣 ID: 4203S・4203E)が構築されているが、近世においては土羽の状態だったと見られる。また、本トレンチでは堀底(Ⅲ層)を確認した。標高 30.3 m を測る。上面に近世の堆積層が見られず、近代石垣が立ち上がっている。

近世に築かれた土羽の痕跡を確認できなかったため、近代に構築された石垣の検出最上部を基準とすると、南の三ノ丸北面石垣(石垣 ID: 3500N)までの距離(堀幅)は約 20 m を測る。

近代以後の状況

堀は近代に入った後もしばらく存続していたものと見られ、近代に入ると土羽が切込まれ、地山層(Ⅲ層)を地盤として近代石垣(石垣 ID: 4203S・4203E)が構築される(I e 層段階)。堀の平面形を反映し、

鈍角となる出角(約120°)をもって屈曲している。その後Ⅰd層段階に堀内部下半が埋立てられると同時期に、近代石垣上半が切石積みで修築される。検出面の高さは約33.0mを測る。

Ⅰc層の段階になると、トレンチ北側での造成を確認するのみで堀内部上半は埋立てなどをうけておらず、トレンチ1・2とは若干様相が異なる。トレンチ3においても、金沢大学の造成まで窪みが残っていたと見られる。

トレンチ4 (第66図)

調査区東部、トレンチ3から約8m北に位置する。トレンチ3から続く三ノ丸北堀が西側へ屈曲する地点に相当し、堀の屈曲部東辺及び北辺確認のため、東西約9.5m・南北約10mの範囲(面積約72㎡)にトレンチを設定した。本トレンチでは近代石垣(石垣ID:4203S・4203E)を検出した。

【三ノ丸北堀の状況】

近世の状況

本トレンチで確認した三ノ丸北堀法面の基盤はⅡb2層(近世盛土層)である。トレンチ北隅で検出しており、標高約32.8mを測る。上面は近代の整地層(Ⅰd層)に直接覆われており、造成前に削平を受けたと考えられる。

堀法面については、全体に近代石垣(石垣ID:4203S・4203E)が構築されているが、近世においては土羽の状態だったと推定される。また、確認できた堀内の堆積層は近代以後のものである。

近世土羽の痕跡を確認できなかったため、北辺については近代に構築された石垣の検出最上部を基準とすると南の三ノ丸北面石垣(石垣ID:3500N)までの距離は約42mを測る。

近代以後の状況

三ノ丸北堀は近代に入った後もしばらく存続していたものと見られ、Ⅰe層段階では土羽が切り込まれ近代石垣(石垣ID:4203S・4203E)が構築される。石垣は近世の絵図に見られる堀の平面形を反映し、入角を持って屈曲する。石垣上面の標高は約32.8mを測る。

その後堀は埋立てられていくが、本トレンチでは石垣の前面において、埋立て過程で敷設されたと考えられる石組溝及び石管を検出した。石管は上半・下半に分割されるもので、石組溝の直上にあり、下半は石組溝開口部に収められている。石組溝と石管が一体的にはなく新旧関係にあるとすれば、堀埋立土としたⅠd層は段階的に施工されたものと考えられ、Ⅰd-3層の上面がある時期の地盤に比定されることとなる。他のトレンチで同様の状況は確認できておらず確定は困難であるが、Ⅰd層は二大別される可能性が考えられる。

なお、入角部付近には東北方向に延びる石積みが見られる。調査時では十分な検討ができなかったが、上記の石組溝や石管と関連する水路遺構と考えられる。

トレンチ5 (第67図)

調査区西部、トレンチ4から約25m西に位置する。絵図ではこの地点で北側に堀の一部が突出して描かれており、三ノ丸北堀突出部東辺確認のため、東西約16m・南北約4mの範囲(面積約56㎡)にトレンチを設定した。トレンチ西側で三ノ丸北堀東辺を構成する土羽及び近代石垣(石垣ID:4203W)を検出した。

【三ノ丸北堀の状況】

近世の状況

三ノ丸北堀法面の基盤はⅡb2層(近世盛土層)である。堀外側(東側)では、標高約32.7mを測るが近代の整地層(Ⅰc層)に直接覆われており、造成前に近世前期以後の土層と併せて上面を削平された可能性がある。

堀法面については、近代石垣(石垣ID:4203W)の東側約2mの所で、Ⅱb2層の西側への落ち込みを

確認し、土羽上部に相当すると判断した。下部は未確認であるが、石垣との間隔が大きく、土羽の斜面は遺存しているものと推定される。本トレンチ帯では、地山(Ⅲ層)の上に盛土(Ⅱb2層)を施し、その後これを削り、土羽を形成したものと考えられる。堀底(Ⅲ層)は標高30.8m付近で確認した。

なお、堀突出部の対岸が確認できないため、堀幅については不明である。

近代以後の状況

三ノ丸北堀は近代に入った後もしばらく存続していたものと見られ、Ie層段階には土羽の前面に盛土が施されることと一体的に近代石垣(石垣ID:4203W)が構築される。検出面の標高は約32.6mを測る。Id層段階には堀突出部は埋立てられ、Ie層段階には造成が行われた結果、金沢大学の造成時には堀の痕跡は認められなかったものと考えられる。

【その他の遺構】

堀外側(東側)のⅡb2層上面において、複数の遺構(掘り込み)が認められるが、検出のみにとどめたため、時期・性格などについては判然としない。

トレンチ6 (第68図)

調査区西部、トレンチ5から約10m北に位置する。絵図では堀の一部が北側に突出して描かれる地点に相当しており、この突出部の東辺確認のため、東西約16m・南北約9.5mの範囲(面積約63㎡)にトレンチを設定した。トレンチ中央部で三ノ丸北堀東辺を構成する土羽及び近代石垣(石垣ID:4203W)を検出した。

【三ノ丸北堀の状況】

近世の状況

三ノ丸北堀法面の基盤はⅡb2層(近世盛土層)である。堀の外側(東側)では標高約32.8mを測る。ただし、上面は近代の整地層(Ie~Ie層)に直接覆われており、造成前に近世前期以後の土層とあわせ、上部を削平された可能性がある。

堀法面についてはトレンチ中央部、近代石垣(石垣ID:4203W)から約2.5m東で、Ⅱb2層の西側(堀底)への落ち込みを確認しており、土羽の肩と判断した。近代の鉄管掘方を整形した断割により、土羽斜面は約25°の勾配で緩やかに傾斜していることが判明した。検出した法面長は4m、高さは1.7mを測る。土羽の構築については、基盤層であるⅡb2層(近世盛土層)が堀内部に向かって下降しており、一見三ノ丸北堀の構築を意識して施工されているようにも見えるが、ほかのトレンチではこれと同様の盛土を確認することができず、Ⅱb2層(近世盛土層)を削り、土羽を構築した可能性が考えられる。堀底は未確認であるが、トレンチ最下部で近世段階の堀内堆積層を検出した。また、堀の対岸がトレンチ8に相当しており、堀幅については後述する。

近代以後の状況

三ノ丸北堀は近代に入った後もしばらくは存続していたものと見られ、Ie層段階には土羽の前面に盛土が施されることと一体的に、堀底堆積層(Ⅱa1層)を地盤として近代石垣(石垣ID:4203W)が構築される。その後のId層段階に、堀突出部は埋立てられる。この時、鉄管が石垣と斜交するように敷設されており、石垣は標高約32.2mまでを残し、上段は抜取られたものと考えられる。その後も造成が行われており、金沢大学の造成時には堀の痕跡は認められなかったものと考えられる。

トレンチ8 (第69図)

調査区西部、トレンチ6から約5m西に位置する。絵図では堀の一部が北側に突出して描かれる地点に相当しており、この突出部の西辺及び北辺確認のため、東西約14.5m・南北約18.5mの範囲(面積約99㎡)にトレンチを設定した。トレンチ南部で三ノ丸北堀北辺を構成する土羽を、トレンチ北部及び南部で近代石垣(石垣ID:4203E)を検出した。

〔三ノ丸北堀の状況〕

近世の状況

三ノ丸北堀法面の基盤は近世盛土層(Ⅱb2層)である。トレンチ北部及び南部で検出しており、上部は標高約32.7mを測る。上面は近代の整地層(Ⅰc層)に直接覆われ、造成前に近世前期以後の土層とあわせて上部を削平された可能性がある。

堀法面は、トレンチ南部では石垣の北約1.7mで、南に傾斜する土羽上部を確認した。なお土羽斜面は約34°の勾配で緩やかに傾斜しており、検出した法面長は1m、高さは60cmを測る。トレンチ北部では、土羽斜面は近代石垣(石垣ID:4203E)と重複していると見られ、この改変のため明瞭ではない。本トレンチ付近では地山(Ⅲ層)の上に盛土(Ⅱb2層)を施しており、その後これを削り土羽の形成をしたものと考えられる。

本トレンチでは2か所から堀の痕跡が確認されており、トレンチ北部では先述したトレンチ6と対応するように向かい合う石垣を確認している。両トレンチ間の石垣検出最上部の幅(東西幅)は約15mを測るが、南北幅については、対岸の位置が明確ではなく判然としない。

近代以後の状況

三ノ丸北堀は近代に入った後も存続していたものと見られ、Ⅰe層段階に入るとトレンチ北部では土羽が削られ、また南部では土羽の前面に盛土が施されることと一体的に近代石垣(石垣ID:4203E)が構築される。Ⅰd層段階には石垣上部が抜取られ、堀は埋立てられる。金沢大学の造成時には堀の痕跡は認められなかったものと考えられる。

トレンチ9 (第70図)

調査区西部、トレンチ8から約20m西に位置する。三ノ丸北堀北辺確認のため、東西約4.5m・南北約13.5mの範囲(面積約47㎡)にトレンチを設定した。本トレンチでは近代石垣(石垣ID:4203S)を検出した。

〔三ノ丸北堀の状況〕

近世の状況

三ノ丸北堀法面の基盤はⅡb2層(近世盛土層)である。堀の外側(北側)では標高約32.7mを測り、上面は凹凸が著しく近代の整地層(Ⅰd層・Ⅰb層)に先立ち大きく削平を受けている。

堀法面については、土羽であったと見られるが、近代石垣(石垣ID:4203S)と重複しており、改変を受けている。堀幅については対岸が確認できていないため、不明である。

近代以後の状況

三ノ丸北堀は近代に入った後もしばらく存続していたものと見られ、Ⅰe層段階には土羽が削られ石垣が構築される。その後Ⅰd層段階には石垣上部が抜取られ、堀は埋立てられる。金沢大学の造成時(Ⅰb層)には、堀の痕跡は認められなかったものと見られる。

トレンチ10 (第71図)

調査区西部、トレンチ9から約27m西に位置する。三ノ丸北堀北辺確認のため、東西約7m・南北約12.5mの範囲(面積約64㎡)にトレンチを設定した。本トレンチでは三ノ丸北堀の堆積土を検出した。

〔三ノ丸北堀の状況〕

近世の状況

本トレンチの最下層であるⅡa1層は堀内堆積層であり、トレンチ南部で検出した。上面の標高は約31.0mを測る。北側には地山(Ⅲ層)ないし近世盛土(Ⅱb2層)による土羽の存在が推定されるが、Ⅰb層に反映される大規模な削平を受けており、その痕跡は判然としない。

近代以後の状況

本トレンチでは近現代の削平により三ノ丸北堀に関する遺構が明瞭ではないが、周辺トレンチの状況から、堀は近代に入った後も存続し、I e 層段階で、土羽の前面に石垣が構築され、I d 層段階に埋立てられた可能性が考えられる。その後 I b 層に反映される金沢大学による造成時に大規模な削平が行われ、三ノ丸北堀北辺に関する遺構は失われたものと見られる。

トレンチ11 (第72図①・②)

調査区東部、トレンチ1から約13m北に位置しており、河北坂から新丸へ降りた地点に相当する。三ノ丸北堀北辺からはやや離れているが、堀周辺の状況確認のため、東西約3.5m・南北約3mの範囲(面積約10m²)にトレンチを設定した。

近代の掘り込みが著しく、トレンチの大部分で地山(III層)まで達していたが、部分的に近世の土層(II a2層)が遺存していた。地山面との境は標高約32.9mを測り、トレンチ1・2における削平を受けた地山面より低いことが注意されている。ここでは地山面が北に向かって下降していることを示すものにとらえておきたい。なお、一帯は三ノ丸北堀の埋立てと同時期に整地されている。

トレンチ12 (第72図③・④)

調査区東部、トレンチ2から約12m北に位置する。トレンチ11と同様に三ノ丸北堀北辺からはやや離れているが、堀周辺の状況確認のため、東西約2.3m・南北約4.5mの範囲(面積約11m²)にトレンチを設定した。

近代の掘り込みが著しく地山面まで達しており、近世の土層は遺存していなかった。地山面の標高は約32.7mを測る。なお一帯は三ノ丸北堀の埋立てと同時期に整地されている。

2. 三ノ丸北堀北辺に関する遺構

(1) 三ノ丸北堀

三ノ丸北堀は、新丸の南縁・三ノ丸北面石垣の直下に位置する東西方向の堀である。今回確認調査の対象となったのは河北坂以西、直線距離にして約180mの範囲を測る。この範囲に設定したトレンチ9か所において堀に関する遺構を検出した。

堀は東西に長い形状をしており、中央付近で一度北にクラックする。また、新丸中央を南北に縦断する堀と接するように、一部北側に突出する箇所が存在する。

堀幅は、対岸にある三ノ丸北堀北面石垣(石垣ID:3500N)までの距離が明確である調査区東側で計測すると、約18mを測るが、西側については対岸が未調査かつ改変を受けているため不明である。

【法面及び堀底の状況】

三ノ丸北堀の法面については、トレンチ1及び2中央以東が三ノ丸北堀北岸石垣(石垣ID:4300S)、以西が土羽となっている。

土羽法面はトレンチ5・6・8の3地点でのみ検出しており(第67～69図)、最も高い地点(トレンチ8)で標高約32.8mを測る。検出高からの深さはトレンチ6で約80cm、法面長は約4m、土羽勾配は3地点の平均として約31°と、石垣と比べて緩やかなものとなっている。

トレンチ8では土羽法面の上下で勾配が異なり、下半部で約45°・上半部で約14°となっている。トレンチ5・6では同じような勾配の変化は確認できなかったが、上部が近代の攪乱を受けていることから、トレンチ8と同様に勾配の変化があったものと考えられる。

なお、土羽の前面には近代石垣(石垣ID:4203E・4203W・4203S)が構築されている。トレンチ2～4(第63～66図)及びトレンチ9(第70図①)では両者が接近し、石垣により土羽法面が削り込まれている

と判断されるが、トレンチ5～8(第67～69図)では両者の間隔が広く、土羽法面はあまり改変されず遺存している。

堀の深さについては法面上面が削平されており、本来の規模は不明であるが、トレンチ3及び5(第65・67図)では堀底を検出している。法面検出面からの深さはそれぞれ約2.5m・約1.9mを測る。

【堀内堆積状況】

三ノ丸北堀内では、近代石垣が構築されるまでの間に堆積した堀底堆積層(IIa層)をトレンチ2・6・10(第64①・68・71図)において確認した。堀底が確認されても堆積層が見られないトレンチもあり幾度となく底ざらえが行われた可能性が考えられる。

近代石垣が構築された後は堀の東側と西側で堀内の堆積状況がやや異なる。東側では1d層段階に堀の下半が埋立てられて以降、金沢大学の造成が開始されるまで堀の痕跡が窪地となって残っていたと見られる。対する西側では同じ1d層により(トレンチ4に見られるように、二段階に分かれていた可能性はあるが)堀がほぼ完全に埋立てられており、金沢大学の造成が行われる頃には東側で見られたような窪地は存在しなかったものと考えられる。

(2) 三ノ丸北堀北岸石垣(石垣ID:4300S、第60～64図)

三ノ丸北堀北岸石垣は堀の北辺に位置し、堀の東端部・河北坂下より西側へ約22mの範囲に構築されている。今回の確認調査によりトレンチ1及びトレンチ2の東側で石垣の一部を検出した。

石垣は最も遺存している部分で標高約33.3mを測るが、上部は攪乱を受けており、隣接する河北坂西面石垣(石垣ID:3250W)との関係から、本来の上面の標高は38m前後と考えられる。堀底まで5、6段分(約3m)まで確認したが、失われた部分を含めると、高さ8m前後と推定される。

【石材・積み方等】

石垣に使用されている石材は戸室石(角閃石安山岩)の割石を主体とし、積み方は横目地を通さない乱積みである。石材の大きさは平均して縦42cm・横52cmである。石の正面や側面にやや小ぶりの刻印を有する材が多く認められ、また戸室石の細片や栗石が間詰め石として用いられている。今回検出した部分では、勾配は約59°となっている。

【裏込め・内部構造】

トレンチ1では攪乱を受けた上部において内部構造を窺うことができ、背後にある地山層(III層)を急角度に切り下げ、裏込めの栗石を充填しているものと見られる。

【年代】

石材及び石の積み方などの特徴から、金沢城石垣編年2期新段階(慶長後期頃)[石川県金沢城調査研究所2012c]に属すると見られる。

(3) 近代石垣(石垣ID:4203E・4203W・4203S、第63～70図)

近代石垣は三ノ丸北堀北辺に展開し、先述した三ノ丸北堀北岸石垣(石垣ID:4300S)の西端と接するようにトレンチ2以西の堀の北辺に構築されている。範囲は東西約150mにわたり、検出高は最も高い地点で約32.8mを測る。トレンチ2(第64図①)・トレンチ5(第67図①)では基底部までの10段分を確認しており、高さは約1.7mを測るが、上部1～2段程度は後世の攪乱により抜取られている場合が多いと見られる。

なお、後述するように大部分は川原石積みであるが、トレンチ3(第65図③)では上部4段分が切石積みとなっている。この部分は下部に対してやや前面にせり出すように構築されている。検出高は約33.0m程と、周辺のトレンチと比較してもさほど変わらず、また背後の基盤面の高さから見ても、新たに付加されたものとは考えにくいことから、本石垣(石垣ID:4203S)の上部を修築したものと考えられる。

【石材・積み方等】

本石垣に使用されている石材は修築部分を除き主に川原石を使用しており、小口部を打ち欠いて割面としたものが多い。積み方は小口部を正面に向けた布積みで、石垣勾配は約 57° を測り、三ノ丸北堀北岸石垣(石垣 ID:4300S)とほぼ同じ勾配となる。

トレンチ3の修築部分では戸室石が主体の切石積みであるが、調整痕等が統一されておらず、転用材を多く用いた布積みとなっている。石垣勾配は約 80° と、三ノ丸北堀北岸石垣(石垣 ID:4300S)及び下部の川原石積み部分よりも急勾配となっている。

【裏込め・内部構造】

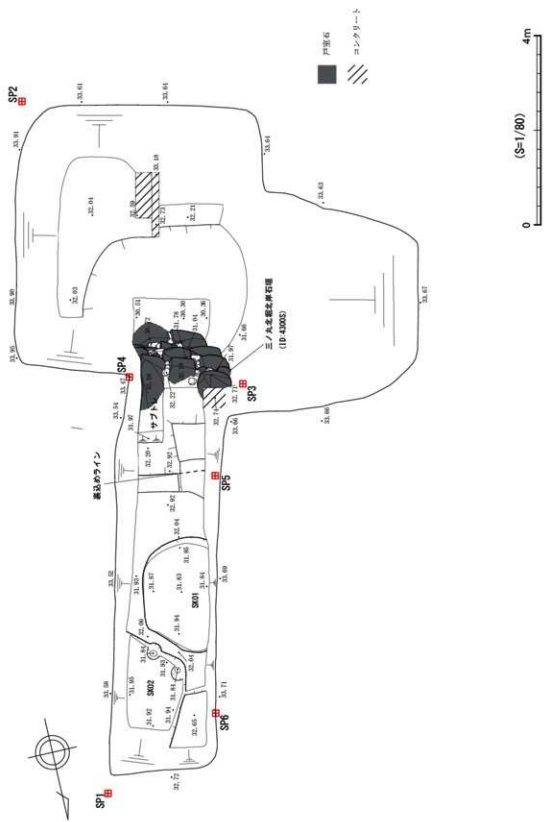
調査区の東側と西側で内部構造が異なり、東側では、トレンチ2で検出された三ノ丸北堀北岸石垣(石垣 ID:4300S)と連続するように勾配などを合わせて構築するため、その背面に存在していたであろう土羽との間隔が狭く、土羽法面を急角度に切り下げ、裏込めの栗石を充填している。

西側では、同様に土羽の前面に本石垣を構築しているものの、石垣と土羽との間隔が広くとられており、土羽法面の上に盛土(Ie層)を施し、裏込めの栗石を充填している。

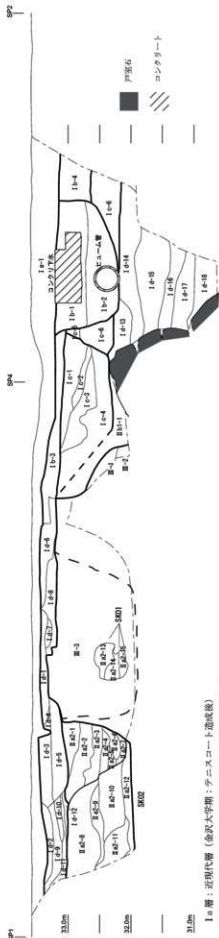
【年代】

明治15年(1882)の図(「金澤城内六百分ノ一圖」、第75図①)では、トレンチ2付近は近世石垣(石垣 ID:4300S)のみが見られる。一方で明治32年(1899)の図(「歩兵第七聯隊構外木柵解除之圖」、第75図②)では、堀の北側突出部(トレンチ5～8付近)が見られず、この時点では既に埋立てられていると推測される。従って本石垣は、明治15年(1882)～明治32年(1899)の間に構築されたとみられる。

なお、切石積み部分については、付近一帯が大正15年(1926)の図(「歩兵第七聯隊建物使用状況要図」、第75図③)に描かれた頃までには構築されていたと思われるが、明確ではない。



第60図 新丸第1次調査区 トレンチ1 平面図 (S=1/80)



1a-15 灰白色粘土ブロック層 (厚5.0mの厚層・褐色色粘土層・褐色粘土を含む)
 1b-15 灰白色粘土ブロック層 (厚10.0mの厚層・褐色色粘土層・褐色粘土を含む)
 1c-17 灰褐色粘質土 (厚約2.0mの厚層・灰・(砂・礫)を多く含む、灰褐色土ブロックを含む)
 1d-18 土間・褐色色粘土層 (細粒質粘土を多く含む、中層層を多く含む)

目録層：近世層

- 目録-1 明褐色粘土層
- 目録-2 黒褐色粘土層 (褐色色ブロックを多く含む)
- 目録-3 黒褐色粘土層 (褐色色ブロックを含む)
- 目録-4 灰褐色砂質土 (硬結じり)
- 目録-5 灰褐色砂質土
- 目録-6 明褐色粘土層 (褐色色粘土層)
- 目録-7 褐色粘土層 (明褐色粘土層の上)
- 目録-8 褐色粘土層 (砂・礫を含む、褐色色粘土層の上)
- 目録-9 褐色粘土層 (褐色色粘土層の上)
- 目録-10 明褐色粘土層 (褐色色粘土層の上)
- 目録-11 褐色粘土層 (褐色色粘土層の上、約5.0mの小基を少し含む、褐色色粘土層の上)
- 目録-12 褐色粘土層 (褐色色粘土層の上、褐色色粘土層を含む、3001のオーバーハングした部分)
- 目録-13 褐色粘土層 (硬結じり、褐色色粘土層を含む、約5.0mの小基を少し含む、3001のオーバーハングした部分)
- 目録-14 灰褐色粘質土 (厚5.0mの厚層、しまり難い、3001のオーバーハングした部分)
- 目録-15 褐色粘質土 (褐色色粘土層の上、3001のオーバーハングした部分)

目録層：近世層 (近世石層露出部)

- 目録-1 露出

目録層：地山

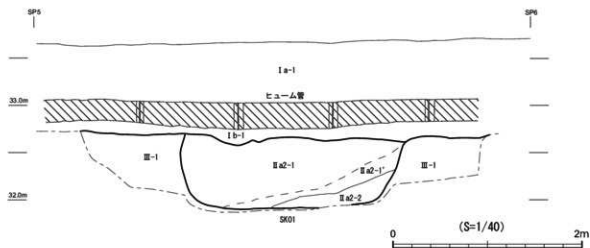
- 目録-1 灰褐色粘質土 (厚5.0mの厚層、しまり難い)
- 目録-2 灰褐色粘質土 (厚5.0mの厚層を含む)
- 目録-3 明褐色粘質土 (シルト下流)

目録層

- 1a層：近現代層 (金沢大学期：テニスコート造成前)
- 1b層：近現代層 (金沢大学期：テニスコート造成後)
- 1c層：近現代層 (金沢大学期：テニスコート造成前)
- 1d層：近現代層 (金沢大学期：テニスコート造成後)
- 1e層：近現代層 (金沢大学期：テニスコート造成前)
- 1f層：近現代層 (金沢大学期：テニスコート造成後)

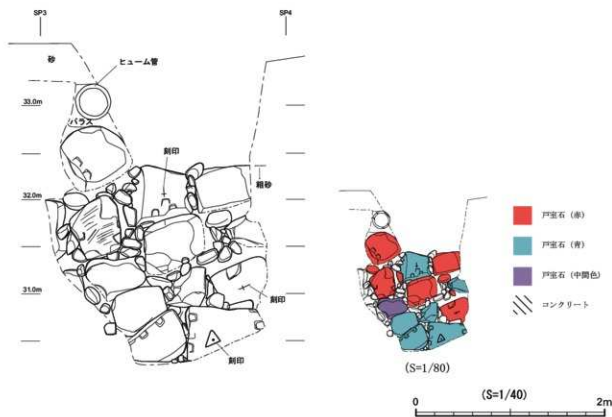
- 1a-1 褐色粘土層 (硬結じり)
- 1a-2 褐色粘土層
- 1a-3 褐色粘質土 (しまりなし)
- 1a-4 褐色粘質土 (しまりなし、2~3.0m厚の厚層層状を多く含む、地山 (明褐色粘質土) を露出部に多く含む)
- 1b-1 褐色粘質土 (硬結立峰)
- 1b-2 褐色粘質土 (明褐色粘質土層・15.0m厚の厚層を多く含む、近世石層露出部)
- 1b-3 褐色粘質土 (近世石層露出部)
- 1b-4 明褐色粘質土 (小層・15.0m厚の厚層を含む、近世石層露出部)
- 1b-5 褐色粘質土 (厚5.0mの厚層・砂・褐色色粘質土を含む、近世石層露出部)
- 1b-6 褐色粘質土 (厚5.0mの厚層・砂・褐色色粘質土を含む)
- 1b-7 褐色粘質土 (厚5.0mの厚層・褐色粘質土を含む)
- 1b-8 褐色粘質土 (厚5.0mの厚層・褐色粘質土を含む)
- 1b-9 褐色粘質土 (厚5.0mの厚層・褐色粘質土を含む)
- 1b-10 褐色粘質土 (厚5.0mの厚層・褐色粘質土を含む)
- 1b-11 褐色粘質土 (厚5.0mの厚層・褐色粘質土を含む)
- 1b-12 褐色粘質土 (厚5.0mの厚層・褐色粘質土を含む)
- 1b-13 褐色粘質土 (厚5.0mの厚層・褐色粘質土を含む)
- 1b-14 褐色粘質土 (厚5.0mの厚層・褐色粘質土を含む)

第61図 新丸第1次調査区 トレンチ1 東壁土層断面図 (S=1/60)



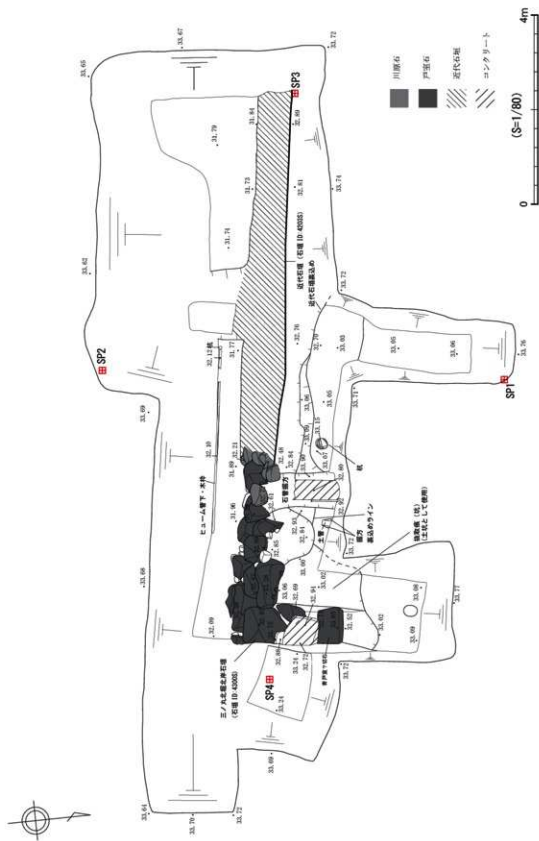
- I a 層：近現代層（金沢大学期：テニスコート造成後）
 I a-1 テニスコートクレー（上層）・バラス（中層）・砂（下層）の3層（テニスコート）東壁 I a-1層と同一層
- I b 層：近現代層（金沢大学期：テニスコート造成前）
 I b-1 深い黒灰色土（黒灰色粘質土と砂利を多く含む 管掘方）
- II a2 層：近世層
 II a2-1 深い黒灰色土（灰黄色砂礫点状に含む、粘土・炭化物を多く含む SK01）
 II a2-1' 黒灰色粘質土（炭化物片と灰黄色砂を埋点状に含む SK01）
 II a2-2 黒褐色粘質土（灰黄色砂をブロック状に含む、黒ボク質も層状に含む SK01）
- III 層：埋山
 III-1 明黄色粘質土（シルト含む）東壁 III-3層と同一層

①西壁土層断面図 (S=1/40)

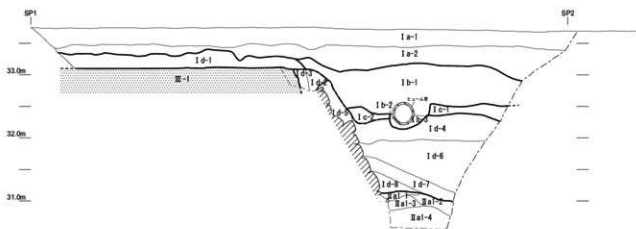


②三ノ丸北壁北岸石垣 (4300S) 立面図 (S=1/40)

第 62 図 新丸第 1 次調査区 トレンチ 1 西壁土層断面図・石垣立面図 (S=1/40)



第 63 図 新丸第 1 次調査区 トレンチ 2 平面図 (S=1/80)



I a 層：近現代層（金沢大学期：テニスコート造成後）

I a-1 テニスコートの砂

I a-2 におい黄砂 淡褐色砂

I b 層：近現代層（金沢大学期：テニスコート造成前）

I b-1 褐色土（礫・小石多く含む コンクリ管下方）

I b-2 黒茶褐色土

I b-3 灰～暗灰茶褐色土（小石多く含む）

I c 層：近現代層（旧跡家期：埋立後）

I c-1 暗褐色土（ガラス他多く含む）

I c-2 黄灰色粘質シルト

I d 層：近現代層（旧跡家期：埋立時）

I d-1 黒褐色～緑褐色土（礫・小石多く含む）

I d-2 褐色～淡褐色シルト

I d-3 黒褐色～暗褐色土（黒褐色土・黄褐色土細ブロック少量含む）

I d-4 黒褐色～暗茶褐色土

I d-5 褐色～茶褐色粘質シルト

I d-6 灰黄褐色～茶褐色土（小石・黄褐色砂ブロック・小礫含む）

I d-7 オリーブ黒～暗褐色土（礫含む）

I d-8 黄灰～灰褐色土

II a1 層：近世～近代初期層（埋堆積層）

II a1-1 灰オリーブ～黄褐色砂

II a1-2 暗黄褐色細砂

II a1-3 灰～淡灰黄色細砂

II a1-4 灰オリーブ～灰褐色粗砂

III 層：地山

III-1 褐～明褐色粘質シルト

0 (S=1/60) 2m

Ⅰ 戸室石（赤）

Ⅱ 戸室石（青）

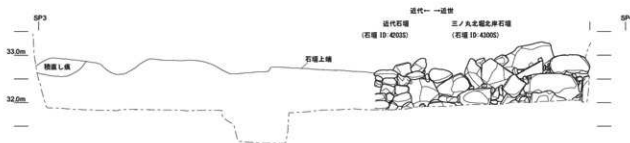
Ⅲ 戸室石（中間色）

土羽系土（III層）

石垣

コンクリート

①東壁土層断面図 (S=1/60)



0 (S=1/80) 2m

戸室石色調

1 煤付者、砂岩種、東側面に「十」の刻印

2 煤付者、砂岩種

3 煤付者

4 煤付者

5 煤付者

6 割石間詰

7 煤付者

8 煤付者、砂岩種

9 煤付者

10 砂岩種

11 砂岩種

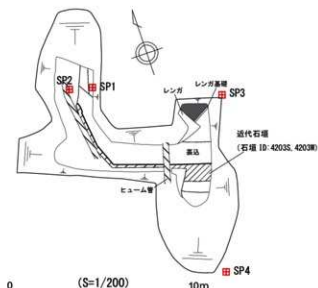
12 割石間詰

13 煤付者（覆土の影響を受けていない）

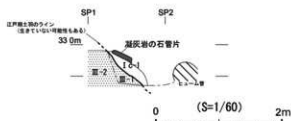
14 煤付者（覆土の影響を受けていない）

②石垣立面図 (S=1/80)

第64図 新九第1次調査区 トレンチ2 東壁土層断面図 (S=1/60)・石垣立面図 (S=1/80)



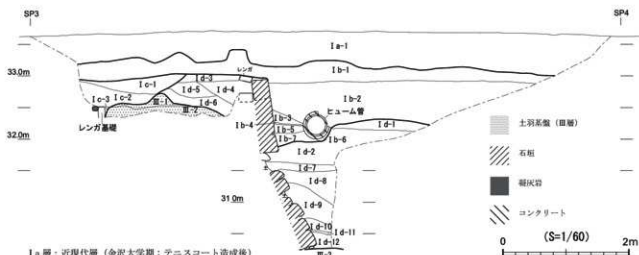
①平面図 (S=1/200)



I c 層：近現代層（旧陸軍期：埋立後）
I e-1 暗褐色土（炭化物片・粗砂を含む、しまりややなし）

層層：地山
層-1 黄灰色砂礫層（3～50cm 台の円礫と粗砂が主体、暗褐色粘質土を含む）
層-2 暗褐色粘質土（粗砂を少量含む）東壁層-1と同層

②北壁土層断面図 (S=1/60)



I a 層：近現代層（金沢大学期：テニスコート造成後）
I a-1 明黄褐色砂質土（テニスコート土）

I b 層：近現代層（金沢大学期：テニスコート造成前）
I b-1 暗褐色粘質土（炭化物片・小礫・砂を含む）
I b-2 暗褐色粘質土（礫を多く含む、糠瓦・レンガ片・ガラス・木くずを少量含む）
I b-3 灰褐色粘質土（粗砂、小礫を含む）
I b-4 灰色粘土（近代後期埋立）
I b-5 暗灰色粘質土（木片及びビニールを含む）
I b-6 灰色砂質土（近代後期埋立土）
I b-7 灰色シルト（小礫及び炭化物を少量含む）

I c 層：近現代層（旧陸軍期：埋立後）
I c-1 にぶい灰褐色土（炭化物片・小礫・レンガ片を多く含む）
I c-2 暗褐色粘質土（上層と暗灰色粘質土（地山）の混土、レンガ片を多く含む）
I c-3 暗褐色粘質土（レンガ片を多く含む）

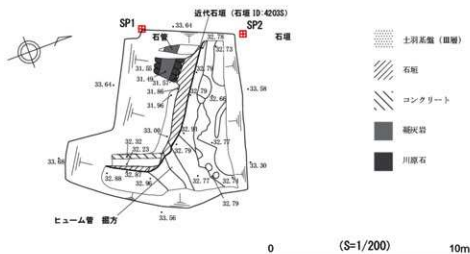
I d 層：近現代層（旧陸軍期：埋立時）
I d-1 灰褐色粘質土（炭化物・木くずを多く含む）
I d-2 暗灰色砂質土（1cm 未満の小礫を多く含む）
I d-3 にぶい暗褐色粘質土（黄灰色粘質土を斑点状に含む）
I d-4 礫層（1片 15～30cm 程度の凝灰岩・戸室石片、及び円礫（河原石用石垣人頭大）が主体、褐色土（しまりなし）を含む）
I d-5 黒褐色粘質土（炭化物・小礫・暗褐色地山粒を少量含む）
I d-6 暗褐色粘質土（炭化物・円礫・粗砂を少量含む、暗褐色地山粒を層状に含む）
I d-7 淡灰褐色粘質土（粗砂を層状に含む炭化物と礫を少量含む）

I d-8 黒褐色粘質土（しまりなし、粗砂及び有機物を含む）
I d-9 暗褐色粘質土（木片を非常に多く含む、礫・粗砂・有機物を含む）
I d-10 淡灰褐色砂礫
I d-11 淡灰青色粘土
I d-12 淡灰褐色砂礫

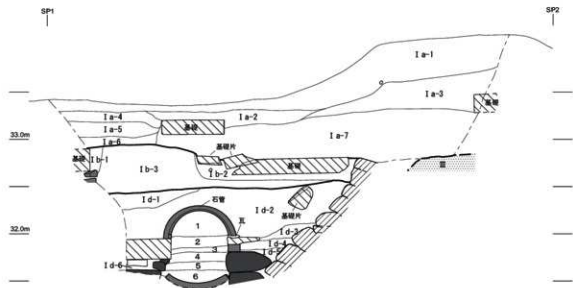
層層：地山
層-1 暗褐色粘質土（白色粘土粒を少量含む）北壁層-2と同層
層-2 円礫層（白色粘土粒と粗砂を少量、10cm の円礫が主体）
層-3 淡青褐色砂礫（しまりあり）

③東壁土層断面図 (S=1/60)

第 65 図 新九第 1 次調査区 トレンチ 3 平面図 (S=1/200)・北壁・東壁土層断面図 (S=1/60)



①平面図 (S=1/200)



1a層：近代層（金沢大学期：テニスコート造成後）

- 1a-1 灰褐色砂（表土）
- 1a-2 灰黄灰色砂（底土）
- 1a-3 赤黄色砂（埋褐色砂質土を層状に含む）
- 1a-4 明黄色砂（テニスコート敷地土）
- 1a-5 埋灰色砂石（テニスコート敷地土）
- 1a-6 淡灰黄色砂（テニスコート敷地土）
- 1a-7 灰黄色砂（灰色粘土を埋点状に、埋褐色砂質土を層状に含む）

1b層：近代層（金沢大学期：テニスコート造成前）

- 1b-1 褐色砂質土（小礫含む）
- 1b-2 埋褐色砂質土（炭灰物片と5cm大の円礫含む）
- 1b-3 埋褐色砂質土（炭灰物を層状に含む、コンタリ（モルタル）片と礫を含む）

1d層：近代層（旧陸軍期：埋立時）

- 1d-1 埋褐色砂質土（3～5cmの円礫を多く含む）
- 1d-2 埋灰色砂質土（煉瓦瓦を大量に含む）
- 1d-3 埋褐色粘質土（砂を含む）
- 1d-4 埋灰色粘質土（1d-2層より暗い、炭灰物を多く含む、焼土を少量含む）

1d-5 明灰色砂質土（埋褐色粘質土を層状に含む）

1d-6 1d-4層と同色同質

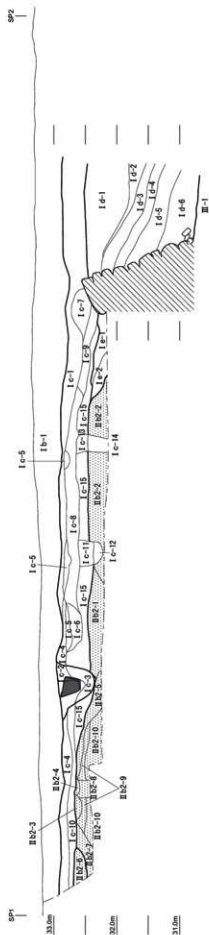
1d層以降

- 1 埋褐色粘土
- 2 灰色粘土
- 3 淡灰色粘土
- 4 埋褐色粘土
- 5 淡灰色砂礫
- 6 埋褐色砂

埋層：地山

②西壁土層断面図 (S=1/40)

第66図 新九第1次調査区 トレンチ4 平面図 (S=1/200)・西壁土層断面図 (S=1/40)



1b層：近現代層（金沢大学期：テニスコート造成前）
 1b-1 黒褐色砂、黒灰色粘質土（砂利を多く含む、所々に固くしまる）、赤灰黄色砂

- 1c層：近現代層（旧陸軍期：堀溝立時）
 1c-1 黒褐色粘質土（砂利を多く含む、塊土を含む）
 1c-2 黒褐色粘質土（5～10cm位の戸塚石を含む）
 1c-3 黒褐色粘質土（小礫・砂を含む、塊土を含む）
 1c-4 中々硬い、暗灰色粘質土（小礫・砂を含む、しまりあり）
 1c-5 灰黄色粘質土
 1c-6 暗灰色粘質土（シット、10～25cmの礫を多く含む）
 1c-7 暗灰色粘質土（小礫・砂を含む、しまりあり）
 1c-8 暗褐色粘質土（黒色粘質土・アロクタを含む）
 1c-9 暗褐色粘質土（灰化物・礫を含む）
 1c-10 暗褐色粘質土（灰化物・礫を含む）
 1c-11 暗褐色粘質土（灰化物・礫・黄色粘土を含む）
 1c-12 黒色土（礫を含む）
 1c-13 暗褐色粘質土（礫を少量含む、黒褐色粘質土をブロック状を含む）
 1c-14 暗褐色粘質土（礫・灰化物を少量含む）
 1c-15 暗褐色粘質土

- 1d層：近現代層（旧陸軍期：堀溝立時）
 1d-1 中々硬い、黒褐色粘質土（小礫・10～20cm位の戸塚を多く含む）
 1d-2 灰黄色粘質土（3～10cm位の戸塚を多く含む）
 1d-3 中々硬い、暗褐色粘質土（黒褐色粘土を多く含む）
 1d-4 暗褐色粘質土（灰化物・礫を多く含む）
 1d-5 ニニ、暗褐色粘質土（灰褐色粘質土を多く含む、灰化物・砂を多く含む）
 1d-6 暗褐色粘質土（暗褐色粘質土と灰色粘質土の混土）

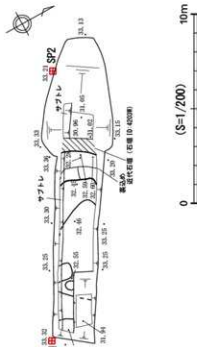
- 1e層：近現代層（旧陸軍期：近代石炭構築時）
 1e-1 暗褐色粘質土（礫を少量含む、5cm位の戸塚を含む）
 1e-2 黒褐色粘質土（灰褐色のアロクタを含む）

- IIb2層：近世層（新木道成）
 IIb2-1 暗褐色粘質土（礫を多く含む、灰化物を含む）
 IIb2-2 灰褐色粘質土（灰化物・砂を含む、礫を多く含む）

- IIb2-3 ニニ、暗褐色粘質土（砂を含む）
 IIb2-4 中々硬い、暗褐色粘質土（小礫を含む）
 IIb2-5 暗褐色粘質土（暗褐色粘質土を多く含む）
 IIb2-6 暗褐色粘質土（灰褐色粘質土を多く含む）
 IIb2-7 暗褐色粘質土（灰化物・暗褐色粘質土を多く含む）
 IIb2-8 暗褐色粘質土（灰化物・暗褐色粘質土を多く含む）
 IIb2-9 暗褐色粘質土（小礫・灰褐色粘土を多く含む）
 IIb2-10 中々硬い、灰褐色粘質土（粗砂を多く含む、灰化物を含む、しまりあり）

II層：埋土
 II-1 埋土砂

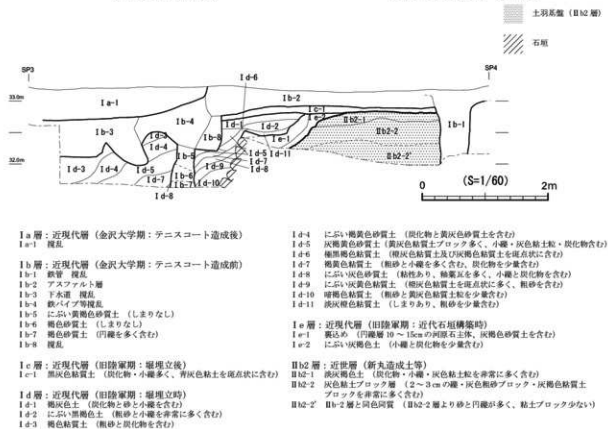
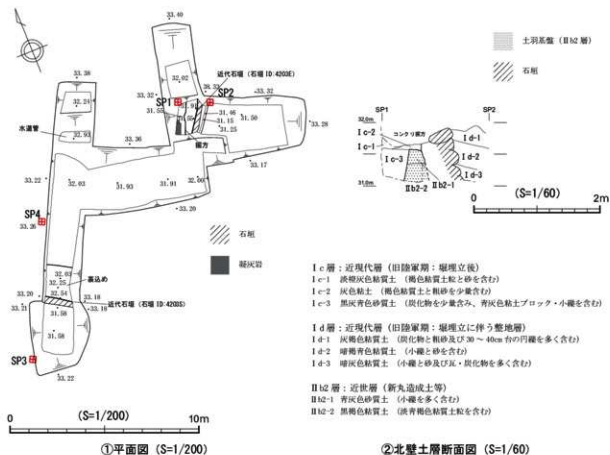
0 (S=1/60) 2m



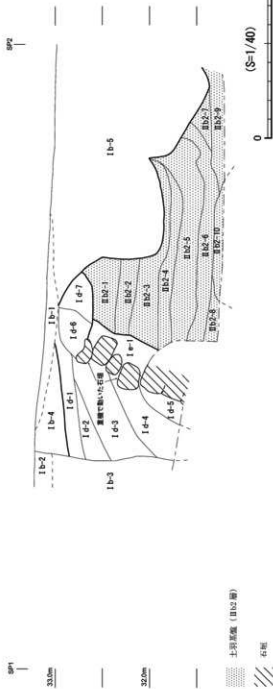
②平面図 (S=1/200)

①南壁土層断面図 (S=1/60)

第 67 図 新丸第 1 次調査区 トレンチ 5 平面図 (S=1/200)・南壁土層断面図 (S=1/60)



第69図 新丸第1次調査区 トレンチ8 平面図 (S=1/200)・北壁・西壁土層断面図 (S=1/60)



1b層：近現代層（金沢大学側：テニスコート造成前）

1b-1 大字の礎石

1b-2 大字の礎石

1b-3 礎石（鉄管の継ぎ）

1b-4 礎石

1b-5 大字の礎石

1d層：近現代層（旧跡遺構：東屋立時）

1d-1 暗灰色粘質土（小礫・砂・炭化物が多含む）

1d-2 灰白色粘質土（小礫・炭化物を含む、灰白色粘土層面点状を含む、灰化跡もを含む）

1d-3 暗灰色粘質土（炭化物・暗灰色粘質土、埋山面を点状に多く含む、小礫もを含む）

1d-4 暗灰色粘質土（炭化物・暗灰色粘質土、埋山面を点状に多く含む、小礫もを含む）

1d-5 暗灰色粘質土（炭化物・暗灰色粘質土、埋山面を点状に多く含む、小礫もを含む）

1d-6 暗灰色粘質土（炭化物・暗灰色粘質土、埋山面を点状に多く含む、小礫もを含む）

1d-7 暗灰色粘質土（炭化物・暗灰色粘質土、埋山面を点状に多く含む、小礫もを含む）

BB2層：近現代層（旧跡遺構：近代石匠層(瓦片)）

BB2-1 白濁層（5～10cmの白濁土体、灰褐色粘質土を含む）

BB2層：近現代層（新永造成土）

BB2-1 暗灰色粘質土（炭化物・炭化物が多含む、細砂もを含む）

BB2-2 暗灰色粘質土（炭化物・炭化物が多含む、細砂もを含む）

BB2-3 暗灰色粘質土（炭化物・炭化物が多含む、細砂もを含む）

BB2-4 暗灰色粘質土（炭化物・炭化物が多含む、細砂もを含む）

BB2-5 暗灰色粘質土（炭化物・炭化物が多含む、細砂もを含む）

BB2-6 暗灰色粘質土（炭化物・炭化物が多含む、細砂もを含む）

BB2-7 暗灰色粘質土（炭化物・炭化物が多含む、細砂もを含む）

BB2-8 暗灰色粘質土（炭化物・炭化物が多含む、細砂もを含む）

BB2-9 暗灰色粘質土（炭化物・炭化物が多含む、細砂もを含む）

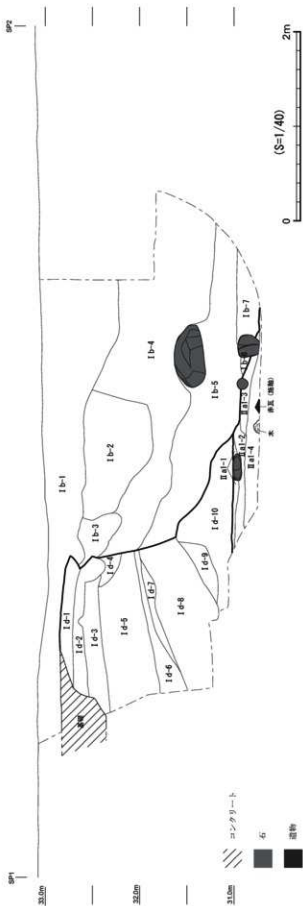
BB2-10 暗灰色粘質土（炭化物・炭化物が多含む、細砂もを含む）



①西壁土層断面図 (S=1/40)

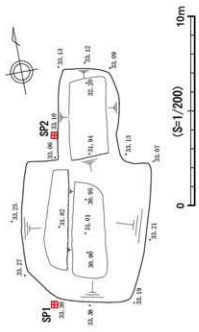
②平面図 (S=1/200)

第70図 新丸第1次調査区 トレンチ9 平面図 (S=1/200)・西壁土層断面図 (S=1/40)



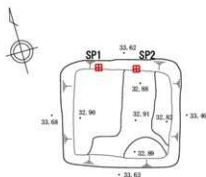
- 1b層：近現代層（金沢大学層）：クニスコスト造成前）
 1b-1 赤褐色土（10～30cmの層、柳針葉、コンタリを含む）
 1b-2 赤褐色土（10～30cmの層を多く含む、コンタリ片を含む）
 1b-3 赤褐色土（10～30cmの層を多く含む、コンタリ片を含む）
 1b-4 灰褐色土（小石～30cmの層及びコンタリ片を含む）
 1b-5 灰褐色土（約10cmの層を多く含む、コンタリ片を含む）
 1b-6 濃い灰褐色土
 1b-7 灰褐色土（細小石を非常に多く含む）
- 1d層：近現代層（旧跡層）：築屋同時）
 1d-1 黒褐色土（礫を含む）
 1d-2 黒褐色土（礫を含む）
 1d-3 明褐色土（礫を含む）
 1d-4 明褐色土（礫を含む）
 1d-5 明褐色土（小石～15cmの層及び黒褐色土を伴う）
 1d-6 明褐色土（礫を少量含む）
 1d-7 灰褐色土
 1d-8 灰褐色土（しりぞき、瓦（柳葉・柳葉）を多く含む、小石～10cm位の礫を多く含む）
 1d-9 明褐色土（明褐色土のブロック、礫、約10cmの層、黒褐色土を伴う）
 1d-10 明褐色土（明褐色土のブロック、礫、約10cmの層、黒褐色土を伴う）
- IIa層：近世～近代初期層（築屋後）
 IIa-1 赤褐色土（床下を非常に多く含む）
 IIa-2 赤褐色土（床下を非常に多く含む）
 IIa-3 黒褐色土（床下を非常に多く含む）
 IIa-4 黒褐色土（床下を非常に多く含む）
 IIa-5 黒褐色土（床下を非常に多く含む）
 IIa-6 黒褐色土（床下を非常に多く含む）
 IIa-7 黒褐色土（床下を非常に多く含む）
 IIa-8 黒褐色土（床下を非常に多く含む）
 IIa-9 黒褐色土（床下を非常に多く含む）
 IIa-10 黒褐色土（床下を非常に多く含む）

①西壁土層断面図 (S=1/40)

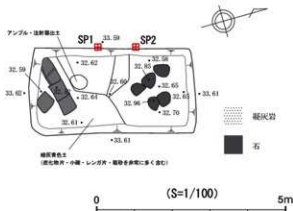


②平面図 (S=1/200)

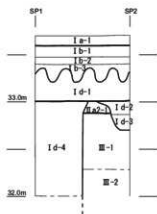
第71図 新丸第1次調査 トレンチ10 平面図 (S=1/200)・西壁土層断面図 (S=1/40)



①トレンチ 11 平面図 (S=1/100)

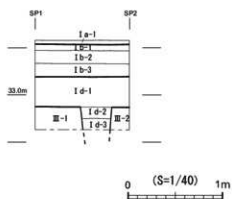


③トレンチ 12 平面図 (S=1/100)



- I a 層：近現代層（金沢大学期：テニスコート造成後）**
 I a-1 明褐色粗砂、しまりあり（テニスコートタレー）
- I b 層：近現代層（金沢大学期：テニスコート造成前）**
 I b-1 淡黄灰色粗砂
 I b-2 パラス
 I b-3 淡灰褐色砂
- I d 層：近現代層（旧陸軍期：埋立時）**
 I d-1 暗灰色土（地山ブロック及び炭化物、礫を多く含む）
 I d-2 黄褐色砂質土（地山を埋立時に多く含む）（しまりなし）
 I d-3 灰褐色土（地山を埋立時及び炭化物片を多く含む、しまりなし）
 I d-4 暗灰色粘質シルト（炭化物と3~5cmの礫を多く含む）
- II 層：近世層**
 II a-1 暗褐色粘質シルト（地山を層状に多く含む）
- III 層：地山**
 III-1 地山 鉄黄褐色シルト（褐色の粘土類を少量含む）
 III-2 地山（礫を多く含む）

②トレンチ 11 北壁土層断面図 (S=1/40)



- I a 層：近現代層（金沢大学期：テニスコート造成後）**
 I a-1 明褐色粗砂（しまりあり テニスコートタレー）
- I b 層：近現代層（金沢大学期：テニスコート造成前）**
 I b-1 淡黄灰色粗砂
 I b-2 パラス
 I b-3 淡灰褐色砂
- I d 層：近現代層（旧陸軍期：埋立時）**
 I d-1 暗灰色砂質土（炭化物、礫、砂を多く含む）
 I d-2 暗灰色土（径5cmの礫を非常に多く含む）
 I d-3 暗褐色粘質土（砂と小礫を少量含む）
- III 層：地山**
 III-1 暗褐色粘質土（暗褐色粘質シルト・ブロック粗砂等を含む、上部は酸化鉄土をはみ還元により灰色を呈す）

④トレンチ 12 西壁土層断面図 (1/40)

第3節 出土遺物

1. 概要

新丸第1次調査区からは、土器・陶磁器・瓦・金属製品・石製品・ガラス製品などが出土している。土器・陶磁器はトレンチごとに、そのほかについては、器種を優先して記述していく。

土器・陶磁器・瓦の器形・胎土分類、年代観については、鶴ノ丸第1次調査区に準じている（第29～31図）。

2. 土器・陶磁器（第73図 P064～P075、第17表）

新丸第1次調査区では遺物の量も少なく、小片が多い。また近世の遺物であっても、トレンチ掘り下げ中に一括して取り上げた遺物が主体であり、II層（近世土層）から出土したことが明確な遺物は少ない。以下、トレンチごとに、図示していない遺物も含めて記述していく。

トレンチ1 19世紀以降の陶磁器が主であるが、図示した P064 は堀埋土（I d層）から出土した中国景德鎮窯の磁器青花鉢の体部片である。そのほかに、近世の遺構である SK01 からは越前陶器甕の体部小片が、SK02 からは炉壁と思われる小片が出土している。

トレンチ2 図示していないが、旧陸軍で使われた染付磁器に赤の後絵付を施す皿が出土している。

トレンチ3 P065 は見込の二重圏線内に人物が描かれた中国景德鎮窯の磁器青花小杯で、高台内には「福」の文字の銘がある。内面には胎土に含まれる鉄分が茶色の斑点状に滲み出ている。P066 は瀬戸・美濃磁器の内外壺芝文の染付碗で、蛇の目高台で畳付は釉剥ぎされている。1か所大きな気泡があり、内面が膨らんでいる。P067・P068 は土師器皿である。P067 は内面が黒色で、さらに内面の広範囲に油煙が付着している。17世紀前半のものである。

トレンチ4 旧陸軍・金沢大学期のものが混じっているが、図示した P069 は中国景德鎮窯の磁器青花碗である。

トレンチ5 P070 は瀬戸・美濃陶器の鉄軸の天目茶碗の口縁である。やや茶色い透明感のない釉が掛かっている。

トレンチ6 P071・P072 は肥前磁器染付碗で、P071 には草花文、P072 は花唐草文が丁寧に描かれている。18世紀前半のものであろう。P073 は産地不明であるが、陶器壺の底部で、外底面は回転糸切りされている。外側面には強いナデ調整が残り、薄い鉄軸が掛かっている。ほかに旧陸軍期の区画線と数字の描かれた碗も出土している。

トレンチ8 P074 は近代石垣の裏込め土から出土した肥前陶器播鉢である。底部付近のため内外面とも無釉で、内面には重ね焼きの溶着があり、降灰が見られる。外底面には細かい回転糸切り痕が残っている。胎土は内面側が還元によって灰色に、外面側は赤褐色になっている。P075 の土師器皿は1mm前後の砂粒を含み、内面と口縁外面はヨコナデしているが外側面に刷毛調整の痕跡が残っている。口縁には油煙が付着している。17世紀初頭の製品（C1類）の可能性はある。

トレンチ10 図示していないが、瀬戸・美濃磁器染付端反碗、肥前陶器播鉢小片が出土している。

3. 瓦（第74図、第18表）

出土した瓦は全て粘土瓦であり、軒丸瓦、軒棧瓦、丸瓦、棧瓦、熨斗瓦を確認したが、全体的に出土点数は少ない。このうち T174～T183 の10点について図化を行った。また、図化には至らなかったが、T184 について、刻印の拓本を掲載している。

燻瓦の胎土は、A1類及びA2類、B1類、B2類、C1類、C2類が見られた。全出土燻瓦では、C2類・B2類で大半を占め、C1類も一定数見られたが、A1・2類、B1類は非常に少ない。

釉葉瓦は、釉調が黒色系（黒色・黒褐色）を主体に、赤色系（赤色・赤褐色）や、少数だが新しい時期に属する光沢の強い黒色やオリーブグリーン色も確認できる。胎土には色調の濃淡により明瞭な縞状を呈すものと縞のないものがあり、それぞれに緻密なもの、空隙の多いものが見られた。

(1) 軒丸瓦

T174・T175は燻瓦の軒丸瓦である。いずれもトレンチ1のI層から出土した。瓦当文様はT174が巴I-1類、T175が巴III-2類である。

(2) 軒棧瓦

T176は釉葉瓦の軒棧瓦である。トレンチ4のI層からの出土で、釉葉は光沢のある黒色で、内外面とも全面に掛けられていた。軒部分が欠損しているため、瓦当文様は不明である。

(3) 丸瓦

T177・T178は燻瓦の丸瓦である。トレンチ1出土で、層位はI層。T177は内面にコビキBの切り離し痕が残る。T178は内面にタキキ痕、棒状工具痕とコビキBの切り離し痕が残る。

(4) 棧瓦

T179～T181は釉葉瓦の棧瓦である。T179はトレンチ1出土で、出土層位はI層。釉葉は光沢のある暗赤褐色で、掛かり方はI類。棧部切込付近に釘穴を1か所有する。T180はトレンチ10出土で、出土層位はI d層。釉葉は光沢のある黒色で、内外面とも全面に掛けられていた。T181はトレンチ1のI c層から出土した。釉葉は光沢のない黒褐色で、内外面とも全面に掛けられていた。刻印「◎」を有する。

(5) 道具瓦

T182・T183は熨斗瓦である。T182はトレンチ8堀埋土（I d層）出土の燻瓦で、外面にクシ状工具による調整痕が見られた。T183は釉葉瓦（出土トレンチ番号不明）である。釉葉は光沢のない黒色で、全面に掛けられている。刻印「○」を有する。

(6) 瓦当文様・刻印

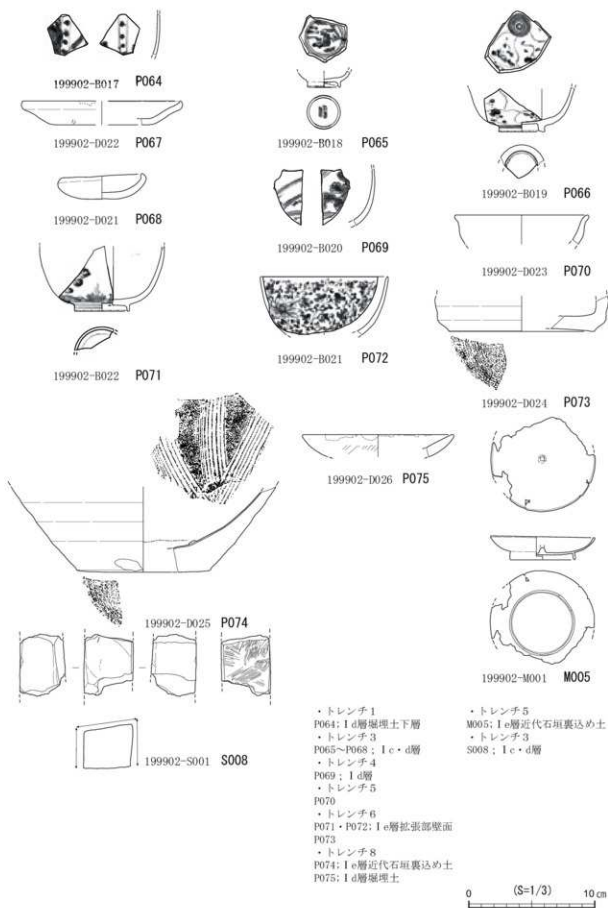
新九第1次調査区から出土した瓦は少なく、軒瓦や刻印を有する瓦もごく少数であった。図化せず拓本のみをとった瓦がT184の1点にとどまるため、ここでは実測遺物も含めて瓦当文様・刻印について記述する。軒瓦の瓦当文様では、燻軒丸瓦で巴文（巴I-1類、巴III-2類）を確認した。また、刻印を有する瓦は、釉葉棧瓦で「◎」・「○」、釉葉熨斗瓦で「○」が確認された。

4. 金属製品（第73図M005、第17表）

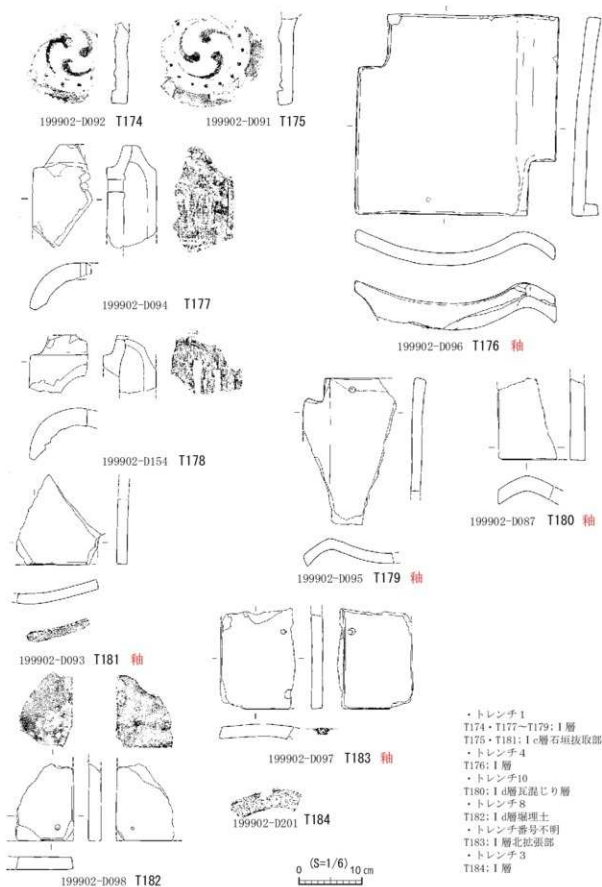
トレンチ5の近代石垣裏込め土から銅製の燭台が出土している（M005）。高台のある皿状の製品で、ロウソク立ては欠損している。

5. 石製品（第73図S008、第17表）

S008はトレンチ3から出土した砥石である。破片のため全体の形は不明であるが、3面は平滑でそのうち2面は特に平滑になっているが、残りの1面には製作時の工具による擦痕が残っている。火を受けていると思われ、煤が付着している。



第 73 図 新九第 1 次調査区 出土遺物実測図 土器・陶磁器・金属製品・石製品 (S=1/3)



第74図 新丸第1次調査区 出土遺物実測図 瓦 (S=1/6)

第17表 新丸第1次調査区 出土遺物観察表 土器・陶磁器・金属製品・石器・石製品

土器・陶磁器

(1)は現在庫 (2)は復元庫

図号	No.	器種	部様	出土地点	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	成形・装飾	胎土・胎地等	産地	形状特徴	特記事項	10(天目番号)
73	F064	磁器	鉢	1・4層 トレンチ1 盛壇土下層	(3.2)	コナロ	25x	青花	白	中国(遼東朝陽)			1999C-8017
	F065	磁器	小杯	1・4層 トレンチ3	2.6	コナロ	24x	青花	白	中国(遼東朝陽)			1999C-8018
	F066	磁器	鉢	1・4層 トレンチ3	3.7	(3.3)	コナロ	染付	白	瀬戸・美濃	肥の目高台		1999C-8019
	F067	土器	土師器蓋	1・4層 トレンチ3	[14.6]	8.3	1.9	平づくね	灰黄緑+黄灰	在庫	(2)1層	内面の上部等に割理痕	1999C-1022
	F068	土器	土師器蓋	1・4層 トレンチ3	6.4		2.0	平づくね	灰黄	在庫		口縁部に赤みあり	1999C-1021
	F069	磁器	碗	1・6層 トレンチ4		(4.4)	コナロ	青花	白	中国(遼東朝陽)			1999C-1020
	F070	陶器	不目茶碗	トレンチ5	10.6	(2.3)	コナロ	影絵	1.24x	瀬戸・美濃			1999C-1023
	F071	磁器	碗	1・4層 トレンチ6 総器部露出	(4.4)	(3.13)	コナロ	染付	25x	肥前		18°C痕平	1999C-1022
	F072	磁器	碗	1・4層 トレンチ6 総器部露出	10.1	(4.6)	コナロ	染付	25x	肥前		18°C痕平	1999C-1021
	F073	陶器	甕	トレンチ6	(11.6)	(2.8)		外・影絵、一部白高橋 内・無繪	1.20x				1999C-1024
	F074	陶器	鉢鉢	トレンチ6 近代石原露出区土	10.6	(6.8)		外・無繪 内・無繪、染灰	1.20x	に赤み帯脚元、焼土塊含む	肥前		1999C-1025
	F075	土器	土師器蓋	1・6層 トレンチ6 盛壇土	11.9	(1.72)	平づくね		灰黄緑、焼土塊含む	在庫			1999C-1026

金属製品

図号	No.	器種	出土地点	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	重量(g)	材質	重量(mm)	10(天目番号)
73	M035	銅付	1・4層 トレンチ5 近代石原露出区土	8.1	5.1	1.0	(26.3)	銅		1999C-8001

石製品

図号	No.	器種	出土地点	口径(cm)	底径(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	重量(mm)	材質	重量(mm)	10(天目番号)
73	S008	66.6	1・4層 トレンチ3	(4.08)	3.02	(3.6)	(69.8)	黄灰	組立石		1999C-5001

第4節 小結

新丸第1次調査は、湿生園の整備に伴い、遺構の保護及び三ノ丸北堀の範囲確認を目的として行ったもので、その結果三ノ丸北堀の北辺を構成する近世の石垣や土羽・近代の石垣などを検出し、近世から近代に至る三ノ丸北堀周辺の遺構について確認することができた。

1. 近世の三ノ丸北堀

近世の三ノ丸北堀北辺は、東端部を石垣(石垣ID:4300S)、それより西側を土羽で構成している。東端部の石垣(石垣ID:4300S)については、第2節のトレンチ1の項でも触れたように、慶長後期頃(金沢城石垣編年2期新段階)に構築されたもので、三ノ丸北面や河北坂西面等、周辺に露呈している石垣と同様の特徴を持つ。また石垣の位置・範囲などについては「御城中巻分基絵図」(横山隆昭家蔵、第59図)等の絵図とおおむね符合する。ただし上部は大きく失われていると考えられ、西側の土羽部分との取付きや高低差についても、近世当時の状況は判然としない。

土羽も近代の石垣などによる改変を受けた部分が多く、比較的形状が明瞭であったのは、トレンチ5・6・8の3地点のみである。絵図と照合すると堀の輪郭を窺うことができるものの、土羽の検出箇所は堀の内側に入り込んでおり、土羽の上部は近代以降の改変を受けているものと見られる。

トレンチ5・6・8の3地点で確認された土羽の傾斜を、検出地点から絵図に見られる土羽の肩部まで伸ばし、土羽の高さの復元を試みた。その結果、復元した土羽の高さは現地表より約2～3m高い結果となった。近世における一帯の地盤高は不明だが、土羽上部は検出した傾斜から緩やかなものに推移している可能性も考えられる。

三ノ丸北堀の基盤層は調査区の東西で異なり、東側では地山層(Ⅲ層)、西側では近世盛土層(Ⅱb2層)となっている。このことから旧地形は、東から新丸中央部へ向けて傾斜していたと推測される。

調査区西側で確認されている近世盛土層(Ⅱb2層)は、三ノ丸北堀構築以前、新丸造成時にこの傾斜を埋立てた際のものと考えられる。

2. 近代の三ノ丸北堀

近代の三ノ丸北堀は、旧陸軍による改変により土羽が削られ、近代石垣(石垣ID:4203S・4203W・4203E)が構築される等の変化があったものの、当初は堀の形状をおおむね維持していた(Ie層段階)が、次に埋立てられていった(I d層段階)ことが、本調査の結果から窺うことができる。

第75図の①～③は旧陸軍期の図で、このうち①・②では図にあわせて近代石垣の凡その位置(赤線部)を示している。これを見ると、明治15年(1882)の「金澤城内六百分一ノ圖」(第75図①)では、近世段階と変わらない堀の状況が描かれている。明治32年(1899)の「歩兵第七連隊構外木柵解除之圖」(第75図②)には、堀北側の突出部が認められず、また北辺沿いの一部に水路(第75図②拡大図)があることから、この時点で堀はある程度埋立てられていると見られる。明治41年(1908)の「金澤旧城廓之図」では、堀の西側相当部分が空白となっているが、描写の省略の可能性があり、判然としない。一方大正15年(1926)の「歩兵第七聯隊建物使用状況要図」(第75図③)では、元の堀の部分の東側だけが窪地となっている。

これらのことから、Ie層段階は明治15年(1882)～明治32年(1899)の間に収まると見られる。I d層段階については、第2節のトレンチ4の項で記したとおり、大別二段階に分かれる可能性があるが、その場合それぞれ明治32年(1899)・大正15年(1926)の図の状況に対応するように見受けられる。

明治 15 年 (1882)



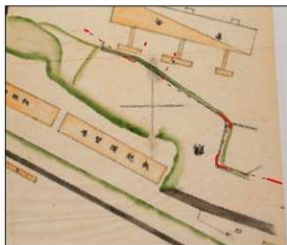
①「金澤城内六百分一ノ圖」

(防衛研究所戦史研究センター蔵)

明治 32 年 (1899)



水路部拡大図

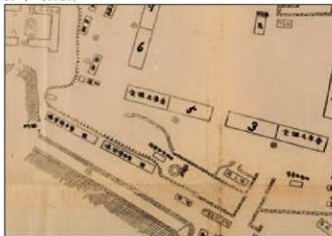


②「歩兵第七連隊構外木柵解除之圖」

(防衛研究所戦史研究センター蔵)

*①②赤線部：近代石垣位置

大正 15 年 (1926)



③「歩兵第七聯隊建物使用状況要図」

(防衛研究所戦史研究センター蔵)

第 75 図 近代以後の三ノ丸北堀の変遷

第5章 尾坂門調査

第1節 調査の概要

1. 調査区と調査の概要 (第76～78図)

金沢城公園の北部に位置する金沢城の正門である尾坂門は、前田利家の入城後、大手堀等外堀が整備された頃、現在の位置に設置されたと考えられている。尾坂門調査区の調査は、平成9年(1997)から行われた金沢城址公園整備事業に係る埋蔵文化財調査の一環として実施されたもので、園路整備に伴い、金沢城公園の北部に位置する金沢城の正門である尾坂門(門前の坂道(尾坂)を含む)において、平成12・13年の2か年にわたり実施された。調査当時は新丸第3次調査・新丸第4次調査とも呼称されていたが、本報告では全体を尾坂門調査区と統一的に呼称し、2000-1・2001-1～6地点に細分して報告する。なお、調査地点が坂の上下で設定されているため、調査地点各所で高低差を有し、最高所と最低所の標高差は約4mに達する。

調査は2000-1地点・2001-1～4地点においては、重機掘削により近現代土層を取り除き、近世路面と見られる遺構面を検出して遺構検出及び掘削を行った。2001-6地点では、表土鋤取り工により検出された切石列周辺の精査を行い、部分的に断割を入れて土層観察をおこなった。2001-5地点ではトレンチ掘削による断面精査を行った。2000-1地点は中央部が近現代の暗渠排水や管・溜槽により大きく攪乱されていたため、周辺部以外で近世以前の遺構は検出できなかった。また、2001-1～6地点でも、近世以前の遺構は近現代の造成等による削平・攪乱を受けたため、限定的な検出にとどまっている。

2. 基本層序

調査区壁面で取った土層断面を基に、大別4層に区分した。

I層は表土を含む近現代層で、金沢城公園・金沢大学期(Ia層)、旧陸軍後期(Ib層)、旧陸軍前期(Ic層)で細分した。検出面の標高はIa層で約28.3～32.5m、Ib層で約28.1～32.4m、Ic層で約28.0～31.6mを測る。

II層は近世(尾坂門設置以後)の土層だが、近代に路面改修等に伴う削平を受けているため、2000-1地点及び2001-2～5地点において部分的に検出されるにとどまる。検出面の標高は約27.9～31.5mを測る。

III層は尾坂門設置以前の土層(中世末～近世初頭)で、2000-1地点及び2001-4地点において部分的に検出された。焼土や炭化物を多く含み、竈羽口や鉄滓等の鍛冶関連遺物が出土する。検出面の標高は約29.5～30.9mを測る。検出された遺構基盤面には地山面(IV層)あるいは地山面を基盤とする遺構の上部に施された盛土層があり、更に細分できる可能性がある。

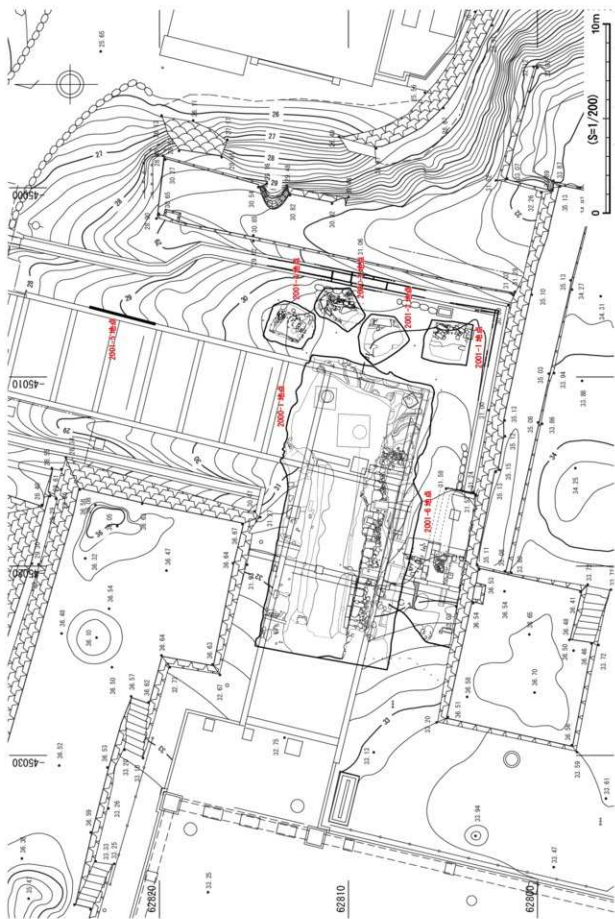
IV層は地山で、2000-1地点及び2001-1・2・4地点で部分的に検出した。黄色系土から構成される。検出面の標高は約29.5～30.3mを測る。

第2節 遺構

1. 旧陸軍後期の遺構

(1) 路面1 (第79～81・83・85・86・88～90図)

2000-1地点、2001-2・4～6地点の平面及び土層断面で検出した。2000-1地点では、北西部、南壁、東壁で部分的に検出した。北西部ではIb1・10・11・16層上面に対応し、標高31.67～32.35mを測る。

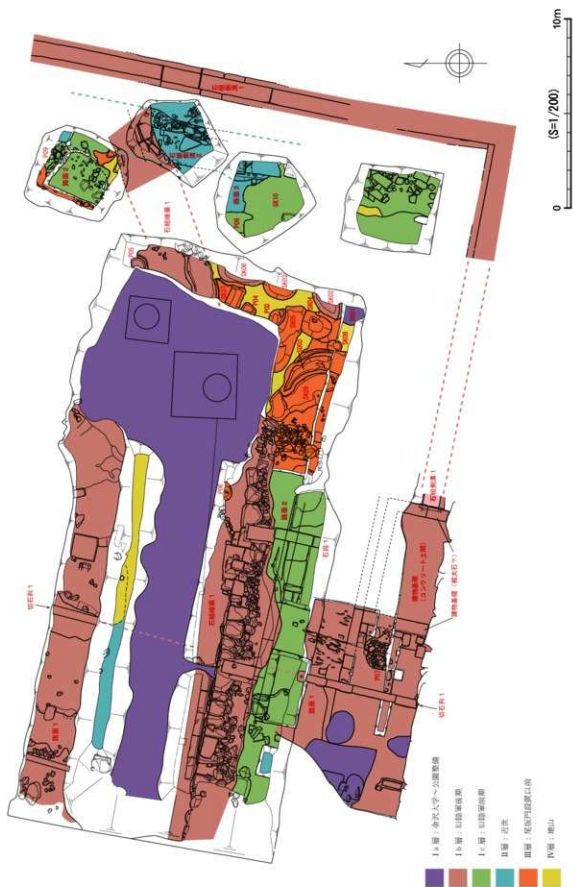


第76図 尾坂門調査区 調査区位置図 (S=1/200)



絵図：「御城分郡御絵図」（公財）前田青徳会蔵

第77図 尾坂門調査区 調査区・絵図照合図 (S-1/200)



第78図 尾坂門調査区 検出面色分付図 (S=1/100)

南壁ではI b4層上面に対応し、標高31.31～32.24mを測る。また、路面の下部で、軸葉瓦を縦に埋め込んだ路盤層（I b18層）を検出している。東壁ではI b5層上面に対応し、標高30.21～30.68mを測る。

2001-6地点では、I b2・3・24層上面に対応し、標高31.61～32.17mを測る。また、北トレンチ及び北トレンチの東側で、2000-1地点南壁I b18層に対応すると見られる瓦を縦に埋め込んだ路盤層（I b30層）を検出している。

2001-2地点では、北壁のI b6層上面に対応し、標高30.22～30.34mを測る。

2001-4地点では南壁の標高30.2m付近で確認された玉砂利敷の路面に対応する。また、路面直下に黄褐色粘質土の整地土層が確認された。

2001-5地点では、I b7層上面に対応し、標高28.11～28.44mを測る。

(2) 切石列1（第79・80・89・90図）

2000-1地点北部及び2001-6地点で検出した赤戸室石及び凝灰岩で構成された石列で、攪乱等の一部検出できなかったが、切石の標高値と位置関係からかんがみ一連のものと考えた。

方位は真北から14.6°東へ振っている。2000-1地点南壁及び2001-6地点では、盛土（I b19・22・23・27・82・83・86・94～97層）の上に瓦を縦に埋め込んだ路面1の路盤層（I b18・30層）を形成した後、赤戸室石及び凝灰岩による切石列1を設置し、黄褐色シルト（I b2層）で整地し仕上げた状況が確認できた。また、2000-1地点南壁I b13・14層で確認された上面に柄穴のある石（S02）も一連のものと考えられる。この切石列は、門ないし塀の基礎に関係する遺構となる可能性がある。

なお、切石列1を構成する石材の計測値等詳細については、第19表にまとめた。

第19表 尾坂門調査区 切石列1構成切石計測表

石No.	石加工	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	厚 (cm)	石上面 標高 (m)	備考
501	切石	赤戸室	123以上	22	16	31.66～31.70	
502	切石	青戸室	(29)	25	20	31.85	上面に柄穴を持つ礎石
503	切石	赤戸室	55	24	13	31.84～31.85	
504	切石	赤戸室	61	23	-	31.85～31.88	
505	切石	赤戸室	115	21	10	31.88～31.91	西辺は打ち欠かれて面が揃っていない。
506	切石	緑色凝灰岩	59	23	-	31.91～31.92	

(3) 建物基礎（第89・90図）

2001-6地点南東部の石垣沿いで検出した。コンクリート土間及びその周囲を囲う赤戸室切石からなるが、コンクリートは追加で改修された可能性がある。切石基礎の中心線から復元した建物規模は、東西約3.1m、南北約1.6m、面積約4.96㎡（約1.5坪）を測る。建物は土間うちの衛兵番所と考えられようか。

なお、建物基礎を構成する切石の計測値等詳細について、第20表にまとめた。

第20表 尾坂門調査区 建物基礎構成切石計測表

石No.	石加工	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	厚 (cm)	石上面 標高 (m)	備考
507	切石	赤戸室	176	36	24	31.56～31.57	上面西辺に幅3cm程度の周溝ハツリの痕跡が見られる。
508	切石	赤戸室	60以上	32	-	31.62	下に板状の青戸室切石、赤戸室切石が15平方メートル、さらにその下に10cm程度奥まった位置で切石（石材不明、高さ29～32cm）が確認された。近代の石組側面はこの最下段の切石に接続する。
509	切石	赤戸室	58	28	-	31.58～31.59	下にはほぼ側面を揃えて板状の赤戸室切石が、さらにその下に10cm程度奥まった位置で切石（石材不明、高さ29～32cm）が確認された。近代の石組側面はこの最下段の切石に接続する。

(4) 石組暗渠 1 (第79・82・83・86・87図)

2000-1地点南部から北東部にかけてと、2001-4地点南部及び2001-3地点北部で検出した。調査当時は、それぞれに遺構番号が与えられていたが、同一遺構と考えられるため、石組暗渠 1 としてまとめて報告する。また、2000-1地点では北岸の大半が現代の管により攪乱されていたため、確認できなかった。後述する旧陸軍前期の路面 2 の上を盛土造成した際に構築された暗渠で、掘方と側面の石垣及び石組を検出した。また、暗渠の上部には上面玉砂利敷きの黄橙褐色粘質土で整地された路面 1 が形成された。なお、路面 1、石組暗渠 1 及び路面 2 が一体的に観察された2001-3地点北から2001-4地点南にかけての地点における路面 1・2 の高低差は、約35cmを測る。方位は2000-1地点南部で真北から79° 東、2000-1地点北東部で真北から69.5° 東、2001-1地点・2001-2地点で真北から71.2° 東へ振り、後述する石組側溝 1 に連続する。

石組の状況は、2000-1地点南部では壁面に戸室石(赤・青、切石または割石)及び河原石で構築された石垣が積まれる。なお、石垣の西側は河原石及び戸室石の割石、東側は戸室切石から構成されており、河原石部分で3～4段、戸室切石部分で1～2段確認した。2000-1地点北東部では戸室切石(赤・青)の側石、2001-1地点・2001-2地点では、赤戸室石及び河原石の側石を確認したが、いずれにおいても底石は確認できなかった。

掘方の幅は2000-2地点では約2.0m、2001-3・4地点で約1.2mを測り、掘方底の標高は、2000-1地点南部で約30.50m(アゼ部分。検出面からの深さは119cm)、2000-1地点北東部で29.86m(東壁断面。検出面からの深さは24cm、壁面での深さは54cm)、2001-4地点南壁で29.68m(南壁断面。検出面からの深さ17cm、壁面での深さは43cm)を測る。

尾坂門調査区における出土遺物の大半がこの遺構からのもので、17世紀初頭～明治期の土器・陶磁器や瓦、金属製品、石製品等が見られた。

(5) 石組暗渠 2 (第80図)

2000-1地点北部土層断面で確認した。北に位置する石垣沿いの側溝に連続すると見られる。

底石は赤戸室切石、側石は青戸室切石及び凝灰岩切石、蓋石は凝灰岩切石で構築されていた。材の厚さは底石8～10cm、側石(青戸室)8～13cm、側石(凝灰岩)12～15cm、蓋石6cmで、暗渠底の幅42cm、深さ22cm(底の標高30.05m)、掘方の幅1.66mを測る。

(6) 石組側溝 1 (第84・86・89・90図)

旧陸軍期の図にも描かれている切石組の現存側溝で、2001-6地点南端の石垣沿いから、2001-4地点南、尾坂の東端(2001-1～4地点東)を経て、尾坂の下まで連続する。一連のものであるため、ここでまとめて報告する。

2001-6地点では、側溝が底石(色不明戸室)と側石(赤戸室)から構成され、溝底の幅39cm、側溝の深さ29～32cm、側石の上面幅13～15cmを測る。前述の建物基礎の下を10cm西へもぐった所で切石に当たって止まっていることが確認された。

また、尾坂東端では、側溝は赤戸室石の切石主体で、板状の底石の上に下部を切り欠いた板状の側石を乗せて構築しており、内幅45cm(約15寸)、深さ30cm(約10寸)、材の厚さ15～16cm(約5寸)、底石の長さ75～110cmを測り、側石の上面、内法面、底石の上面には丁寧なノミ加工が施されていたことを確認した。なお、石材には、納穴等転用材と確認できる痕跡が見られず、構築にあたり新材を使用した可能性がある。

(7) 道路緑石 (第89図)

2001-6地点中央部で、建物基礎に沿って切石列1東辺に接続すると見られる路面1に伴う道路緑石で、青戸室切石及び赤戸室切石からなる。なお、緑石を構成する戸室石の計測値等詳細については、第21表にまとめた。また、その西側で切石列1西辺に接続する緑石の痕跡も検出したが、既に緑石

は抜き取られており、基礎の川砂層が露出していた。

第21表 尾坂門調査区 道路縁石構成切石計測表

石 No.	石加工	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	厚 (cm)	石上面 標高 (m)
S10	切石	青戸室	36以上	27	-	31.74～31.80
S11	切石	赤戸室	92以上	26	-	31.52～31.65

(8) SK01 (第79・81・83図)

2000-1地点南東隅部で検出された金沢大学時代の鉄柱基礎掘方。SK02と重複する(切る)。径48cm以上、検出面からの深さ20cm以上(断面図では83cm以上。底の標高30.08m(発掘停止面))。近世及び近代の陶磁器、ガラス瓶等が出土している。

(9) SK02 (第79・83図)

SK01と隣接しており、SK01に切られる。掘方内は礫が詰まっており、路面1の路盤整備に伴う排水施設としての機能が考えられる。長径83cm以上、短径48cm以上、検出面からの深さ21cm(断面図では52cm、底の標高30.07m)を測る。陶磁器及びガラス製品が出土している。

(10) SK06 (第79・83図)

2000-1地点東部で確認された、SK02と同様の礫の詰まった土坑であり、路盤整備に伴う排水施設としての機能が考えられる。長径131cm以上、短径35cm以上、検出面からの深さ17cm(平面。断面図では60cm、底レベル29.83m)を測る。肥前陶器播鉢(P107)、釉薬瓦等が出土した。

(11) P07 (第89・90図)

2001-6地点中央南側で確認された。平面形不整形円形。長径95cm以上、短径64cm以上、検出面からの深さ25cm(底の標高31.54m)を測る。土層断面の観察より、建物より新しい時期の遺構と見られる。埋土は軟質の黒褐色土で、径4～20cmの円礫及び河原石が集中して含まれている。

2. 旧陸軍前期の遺構

(1) 路面2・石段1 (第79～90図)

路面2は、2000-1地点、2001-2・4～6地点の平面及び土層断面で確認された。2000-1地点ではIc1～4・6・7層の上面、2001-2地点ではIc8層の上面、2001-4地点ではIc9層の上面、2001-5地点ではIc9層の上面、2001-6地点ではIc5層の上面がこれに対応する。なお、2001-1地点では、路面自体の検出ではなく、路面下の路盤層(Ic7層)が土層断面から確認されている。

2000-1地点、及び2001-6地点北トレンチ底部では、土層断面や検出面での精査により、西から東へ緩く下る段差の低いスロープ状であったと推定され、標高は30.48～31.56mを測る。その他の地点における標高は、2001-1地点で30.53～30.61m、2001-2地点で30.17～30.28m、2001-4地点西壁で29.75～29.98m、同北壁で29.68～29.90m、2001-5地点で28.22～28.34mを測る。

路面2は近世の遺構である路面3を切り下げ、また石組側溝2を取り壊して造成されていた。このため、一部の調査地点では近世の地盤が失われており、2001-1地点では、路面2直下で尾坂門設置以前の遺構が検出されている。また、路面2の下では、部分的に大粒の栗石を土坑状の掘方内に詰め込んだ、近代前期の路盤改良と見られる痕跡が検出されている。なお、旧陸軍後期には、前述のとおり路面2の上に盛土造成が行われ、石組暗渠1や路面1が構築された。

石段1は、路面2に伴って一列に配された石段で、2000-1地点南部中央付近において2石分を検出した。方位は真北から11.7°東へ振っている。石段の石材は青戸室切石で、上面と東面の上部3分の1以外は地中に埋まっていたと考えられる。なお、個々の切石の寸法等詳細については、第22表にまとめた。

路面2及び石段1は、調査当初近世後期～末の所産と考えられていたが、2001-6地点において、近世絵図との対比から尾坂門の門礎（南側）の位置と推定される地点で断割を入れ、調査を行ったところ（北トレンチ）、路面の広がりが確認されただけで、門礎の痕跡を確認できなかった。このことから、路面2は旧陸軍前期の所産となると考えられる。

第22表 尾坂門調査区 石段1構成切石計測表

石 No.	石加工	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	厚 (cm)	石上面 標高 (m)
S12	切石	普戸室	103	30	30	31.07～31.10
S13	切石	普戸室	19以上	28	-	31.10

(2) SK10 (第85図)

2001-2地点で一部を検出した。平面不整形長方形か。長辺180cm以上、短辺124cm以上。掘方内には径10cm以下の玉砂利が充填され、近世面以下まで掘り下げられている。P08に切られる。

(3) P08 (第85図)

2001-2地点で一部を検出した。平面不定形で、長径72cm以上、短径56cm、深さ12cm以上を測る。掘方内に径15～20cmの河原石が集中しており、前述した路面2の路盤改良痕と考えられる。

(4) P09 (第87図)

2001-4地点で一部を検出した。平面楕円形か。長径101cm以上、短径32cm以上を測る。掘方内には径15～20cmの河原石及び径10cm以内の玉砂利が多く含まれていた。石組暗渠2を切る。

3. 近世（尾坂門設置以後）の遺構

(1) 路面3 (第80・82・85・88図)

近世後期の路面と考えられるが、近代以後に受けた削平や攪乱により、2001-2地点で面的に検出された以外では、土層断面での部分的な確認にとどまる。対応層は、2000-1地点でII1～5層上面、2001-2地点ではII6層上面、2001-5地点ではII7層上面である。また、標高は2000-1地点で30.93～31.36m、2001-2地点で30.10～30.18m、2001-5地点で27.87～28.11mを測る。

(2) 路面4・5 (第80図)

2000-1地点北部の土層断面で、路面3の下、標高31.04m及び30.61～30.70m地点で、近世の路面の可能性のある硬化面II16（路面4）・II37層（路面5）を確認している。ごく部分的な検出であるため、これらの面の時期等詳細は明らかでない。

(3) 石組側溝2 (第84～87図)

2001-1～4地点で検出し、方位は真北から11°東へ振っている。側溝は後世の路面改修等で破壊され、溝底付近を残すのみであったが、黄褐色凝灰岩切石の平積み側壁と戸室切石（赤・青）の底石で構成された石組側溝であることが明らかとなった。近世後期の絵図に見られる尾坂東縁の側溝に対応すると見られる。また、検出した蓋石の寸法（S14：長95cm、幅40cm以上、厚7cm、S15：幅42cm、S16：幅42cm）を考慮すると、内法幅30～40cm（約10～13寸）程度になると考えられる。なお、蓋石の加工は上面から側面にかけて仕上げ調整、下面に粗いノミ加工を施されていた。

4. 尾坂門設置以前の遺構（中世末～近世初頭）

(1) 河原石群と河原石群下部の盛土 (第79・81図)

2000-1地点南東部のSK09の西側で、南北約1m、東西約0.7mの範囲で、南北方向に不規則に並んだ河原石群が検出された。河原石の大きさも一定せず、規則性は見られない。この河原石群下部の盛土（III24層）より16世紀末の中国（漳州窯）磁器碗P119が出土していることから、この盛土が

文禄年間以降のものであり、かつ尾坂門設置以前のもと考えられるが、尾坂門設置に関する年代確定にまで至らず、下限となる年代については明らかではない。ただし、上限は土層断面の観察により、後述する鍛冶関連遺構群の後であることが確認されている。

(2) SD03 (第79・81図)

北西-南東方向に軸を持ち、西方に膨らんだ平面形を呈し、最大幅38cm、検出面からの深さ13cm(底レベル30.18m)を測る。埋土は焼土や炭化物を含む。上述した河原石群の上位から掘り込まれていることから、少なくともこれよりは新しく、かつ尾坂門設置以前の時期の遺構であると考えられるが、遺構の時期を推定できる遺物の出土が見られなかったため、詳細な年代については明らかでない。

(3) 2001-4 地点検出の尾坂門設置以前の遺構 (第87図)

2001-4 地点北部の近代路面直下において、掘り込み面を確認できなかったが、周辺遺構との比較により、尾坂門設置以前の遺構埋土の可能性のある土層(III10層)を検出した。土質は炭化物粒を多く含む灰褐色土であるが、部分的な検出であり、旧陸軍前期のP09に切られていたため、遺構の形状・規模等は明らかでない。なお、本遺構の付近においては、近世層(II層)は路面2の造成により失われたと見られる。

(4) 鍛冶関連遺構 (第79・81図)

2000-1 地点南東部において、尾坂門設置以前の土坑やピットを検出した。土坑やピットは地山を切り込んでおり、その埋土や上層の包含層は、炭化物を含んだ焼土層であった。焼土層からは16世紀後半～末の陶磁器数点や、鞆羽口・炉壁の小片が出土していることから、これらの土坑やピットは中世末～近世初頭に存在した鍛冶関連の遺構と考えられる。なお、個別の遺構については以下に記述する。

a. SK03

平面楕円形で、長径89cm、短径31cm以上、検出面からの深さ27cm(断面図では56cm、底レベル30.0m)を測る。埋土は焼土と炭を非常に多く含む暗橙褐色土で、炉壁が出土している。SK06に切られる。

b. SK04

SK02及びSK08に切られる。平面隅丸長方形か。長辺98cm以上、短辺56cm、検出面からの深さ62cm(底レベル29.63m)を測る。埋土は淡暗褐色礫混土。炉壁や17世紀後半以降と見られる肥前磁器小片、被熱した瓦、銅釘(M007)等が出土するが、肥前磁器は隣接する撓乱からの混入である可能性がある。

c. SK05

遺構北部は近代以降に撓乱を受ける。平面長楕円形か。長径191cm以上、短径59cm、検出面からの深さ19cm(底レベル30.08m)を測る。埋土は焼土と炭を非常に多く含む暗橙褐色土で、燻平瓦が出土している。

d. SK07

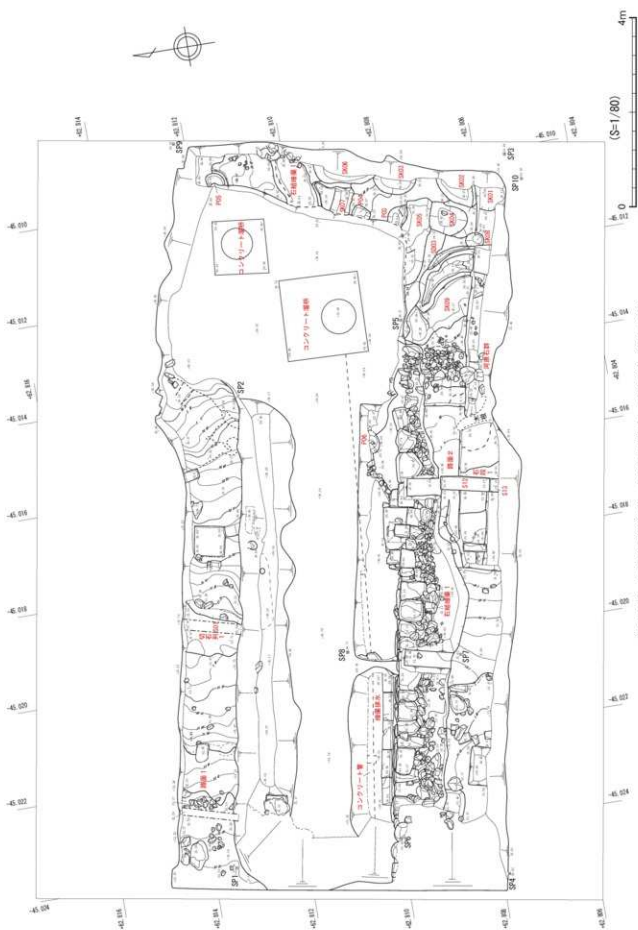
遺構西部は近代以降に撓乱を受け、北部を石組暗渠1、西部をSK06に切られる。平面不整形方形か。遺構北部はテラス状の平坦面を持ち、南部は溝状の落ち込みが見られる。長辺90cm以上、短辺67cm以上、検出面からの深さ27cm(底レベル29.98m)を測る。遺構埋土は礫を多く含む濁灰色シルト質土で、炉壁及び16世紀中葉の瀬戸美濃灰釉陶器皿(P123)、須志器坏(P124)が出土している。

e. SK08

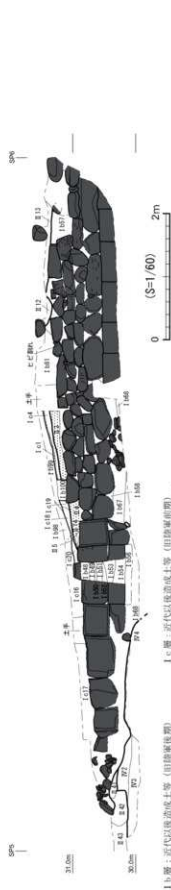
平面楕円形。長径39cm、短径29cm、検出面からの深さ40cm(底レベル29.87m)を測る。埋土に焼土や炭化物を含み、炉壁及び中国磁器碗(P125)が出土している。

f. SK09

本来の掘り込み面は削平されている。また、遺構南部が調査区外に延びるため、全形は不明である。



第79図 尾坂門調査区 2000-1地点 平面図 (S=1/80)



1.0層：近代以後造成土等（旧除家後期）

- 1.01 暗褐色土（上部硬質化）
- 1.02 暗褐色土
- 1.03 暗褐色土
- 1.04 暗褐色土
- 1.05 暗褐色土
- 1.06 暗褐色土
- 1.07 暗褐色土
- 1.08 暗褐色土
- 1.09 暗褐色土
- 1.10 暗褐色土
- 1.11 暗褐色土
- 1.12 暗褐色土
- 1.13 暗褐色土
- 1.14 暗褐色土
- 1.15 暗褐色土
- 1.16 暗褐色土
- 1.17 暗褐色土
- 1.18 暗褐色土

II層：近世遺構土等（旧除家後期）

- II.01 暗褐色土
- II.02 暗褐色土
- II.03 暗褐色土
- II.04 暗褐色土
- II.05 暗褐色土
- II.06 暗褐色土
- II.07 暗褐色土
- II.08 暗褐色土
- II.09 暗褐色土
- II.10 暗褐色土
- II.11 暗褐色土
- II.12 暗褐色土
- II.13 暗褐色土
- II.14 暗褐色土
- II.15 暗褐色土
- II.16 暗褐色土
- II.17 暗褐色土
- II.18 暗褐色土

III層：近代以後造成土等（旧除家後期）

- III.01 暗褐色土
- III.02 暗褐色土
- III.03 暗褐色土
- III.04 暗褐色土
- III.05 暗褐色土
- III.06 暗褐色土
- III.07 暗褐色土
- III.08 暗褐色土
- III.09 暗褐色土
- III.10 暗褐色土
- III.11 暗褐色土
- III.12 暗褐色土
- III.13 暗褐色土
- III.14 暗褐色土
- III.15 暗褐色土
- III.16 暗褐色土
- III.17 暗褐色土
- III.18 暗褐色土

IV層：築山

- IV.01 暗褐色土
- IV.02 暗褐色土
- IV.03 暗褐色土
- IV.04 暗褐色土

1.0層：近代以後造成土等（旧除家後期）

- 1.01 暗褐色土
- 1.02 暗褐色土
- 1.03 暗褐色土
- 1.04 暗褐色土
- 1.05 暗褐色土
- 1.06 暗褐色土
- 1.07 暗褐色土
- 1.08 暗褐色土
- 1.09 暗褐色土
- 1.10 暗褐色土
- 1.11 暗褐色土
- 1.12 暗褐色土
- 1.13 暗褐色土
- 1.14 暗褐色土
- 1.15 暗褐色土
- 1.16 暗褐色土
- 1.17 暗褐色土
- 1.18 暗褐色土

II層：近世遺構土等（旧除家後期）

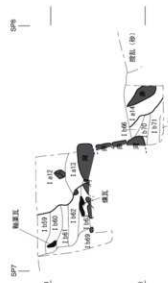
- II.01 暗褐色土
- II.02 暗褐色土
- II.03 暗褐色土
- II.04 暗褐色土
- II.05 暗褐色土
- II.06 暗褐色土
- II.07 暗褐色土
- II.08 暗褐色土
- II.09 暗褐色土
- II.10 暗褐色土
- II.11 暗褐色土
- II.12 暗褐色土
- II.13 暗褐色土
- II.14 暗褐色土
- II.15 暗褐色土
- II.16 暗褐色土
- II.17 暗褐色土
- II.18 暗褐色土

III層：近代以後造成土等（旧除家後期）

- III.01 暗褐色土
- III.02 暗褐色土
- III.03 暗褐色土
- III.04 暗褐色土
- III.05 暗褐色土
- III.06 暗褐色土
- III.07 暗褐色土
- III.08 暗褐色土
- III.09 暗褐色土
- III.10 暗褐色土
- III.11 暗褐色土
- III.12 暗褐色土
- III.13 暗褐色土
- III.14 暗褐色土
- III.15 暗褐色土
- III.16 暗褐色土
- III.17 暗褐色土
- III.18 暗褐色土

IV層：築山

- IV.01 暗褐色土
- IV.02 暗褐色土
- IV.03 暗褐色土
- IV.04 暗褐色土



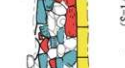
- 1.0層：近代以後造成土等（旧除家後期）
- 1.01 暗褐色土
- 1.02 暗褐色土
- 1.03 暗褐色土
- 1.04 暗褐色土
- 1.05 暗褐色土
- 1.06 暗褐色土
- 1.07 暗褐色土
- 1.08 暗褐色土
- 1.09 暗褐色土
- 1.10 暗褐色土
- 1.11 暗褐色土
- 1.12 暗褐色土
- 1.13 暗褐色土
- 1.14 暗褐色土
- 1.15 暗褐色土

II層：近世遺構土等（旧除家後期）

- II.01 暗褐色土
- II.02 暗褐色土
- II.03 暗褐色土
- II.04 暗褐色土
- II.05 暗褐色土
- II.06 暗褐色土
- II.07 暗褐色土
- II.08 暗褐色土
- II.09 暗褐色土
- II.10 暗褐色土
- II.11 暗褐色土
- II.12 暗褐色土
- II.13 暗褐色土
- II.14 暗褐色土
- II.15 暗褐色土

III層：近代以後造成土等（旧除家後期）

- III.01 暗褐色土
- III.02 暗褐色土
- III.03 暗褐色土
- III.04 暗褐色土
- III.05 暗褐色土
- III.06 暗褐色土
- III.07 暗褐色土
- III.08 暗褐色土
- III.09 暗褐色土
- III.10 暗褐色土
- III.11 暗褐色土
- III.12 暗褐色土
- III.13 暗褐色土
- III.14 暗褐色土
- III.15 暗褐色土

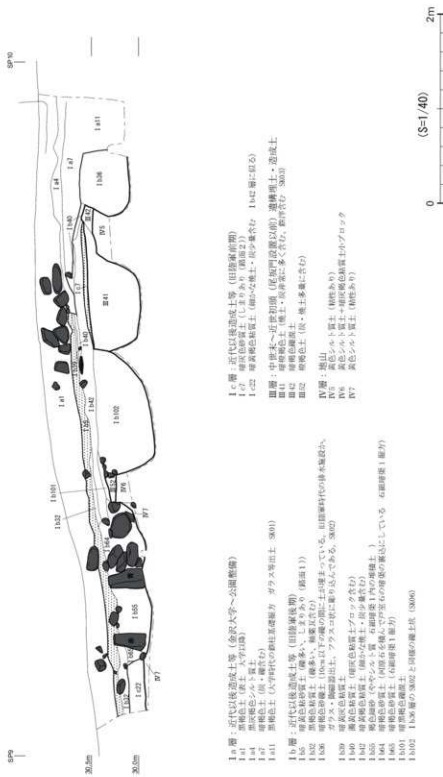


③西土手土層断面 (S=1/40)

②石垣面石材色分け (S=1/80)

①石垣面土層断面 (S=1/60)

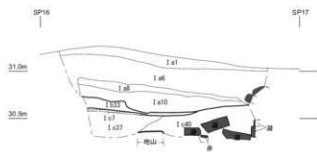
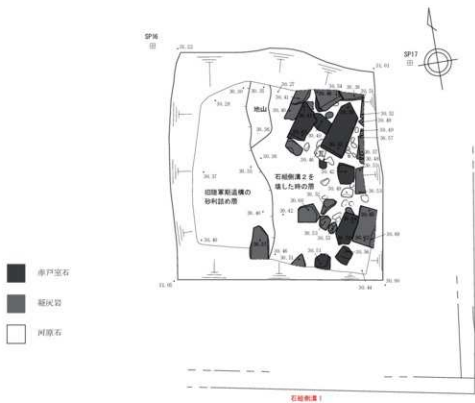
第82図 坂尾門調査区 2001-1 地点 石組暗渠 I 石垣面土層断面図 (S=1/80)・石垣面石材色分け図 (S=1/60)・西土手土層断面図 (S=1/40)



- 1a層：近代以後造成土等（金沢大学～公園整備）
 1a1 黒褐色土（底土・字引路）
 1a2 黒褐色土（底・敷き土）
 1a3 黒褐色土（大字時代の粘土層厚部）
 1a4 黒褐色土（底・敷き土）
 1a5 黒褐色土（底・敷き土）
 1a6 黒褐色土（底・敷き土）
 1a7 黒褐色土（底・敷き土）
- 1b層：近代以後造成土等（旧跡東側部）
 1b1 黒褐色土（底土）
 1b2 黒褐色土（底土）
 1b3 黒褐色土（底土）
 1b4 黒褐色土（底土）
 1b5 黒褐色土（底土）
 1b6 黒褐色土（底土）
 1b7 黒褐色土（底土）

- 1c層：近代以後造成土等（旧跡南側部）
 1c1 黒褐色土（底土）
 1c2 黒褐色土（底土）
- IV層：築山
 IV1 黒色シルト質土（埋込あり）
 IV2 黒色シルト質土（埋込あり）
 IV3 黒色シルト質土（埋込あり）
 IV4 黒色シルト質土（埋込あり）

第 83 図 尾坂門調査区 2000-1 地点 調査地点東壁土層断面図 (S=1/40)



1a層：近代以後造成土等（金沢大学～公園整備）

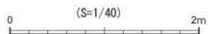
- 1a1 黒褐色土（表土）
- 1a6 葎戻褐色土（大学時代の盛土か）
- 1a8 灰褐色砂
- 1a10 球黄褐色粘質土（石を多く含む）

1b層：近代以後造成土等（旧陸軍後期）

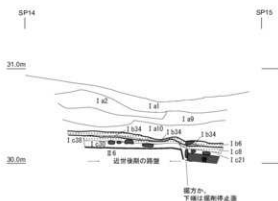
- 1b3 球褐色土（石を多く含む、焼土若干入る）

1c層：近代以後造成土等（旧陸軍前期）

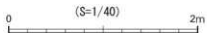
- 1c7 球褐色土（よくしまっている 高さ2の路盤か）
- 1c27 雑草（1～5cm程の砂利が詰められている。球褐色土を含む、陶磁器・ガラス含む 遺構小）
- 1c80 球褐色土（2～3cm程の砂利を含む、粘葉玉・糠玉・陶磁器含む 旧陸軍期に北世の石組築造2を破壊した礎瓦土 石組築造2は側壁に葎戻石、表石に戸室石を使用していたと思われる）



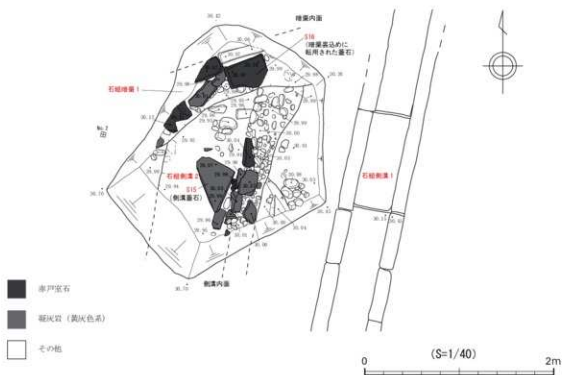
第84図 尾坂門調査区 2001-1地点 平面図・調査地点北壁土層断面図 (S=1/40)



- I a 層：近代以後造成土等（金沢大学～公園整備）**
 I a1 黄褐色土（表土）
 I a2 次層土
 I a9 礫状褐色土
 I a10 球黄褐色粘質土（石多く含む。2001-1地点のI a10層と同じ層と思われる）
- I b 層：近代以後造成土等（旧陸軍後期）**
 I b6 暗灰色粘砂質土（若干焼土含む）上面硬化（路面1） 下部は路面1の路盤
 I b34 黄色～黄白色シルト質土（路盤層（I b6層）の下に敷いた土）
- I c 層：近代以後造成土等（旧陸軍前期）**
 I c8 灰褐色粘砂質土（黄褐色シルト質土ブロック、1～2cmの礫含む）上面硬化（路面2） 下部は路面2の路盤
 I c21 褐色土（細かく砂質、石多く含む）
 I c30 次層粘砂土（12～16cmの石多く含む、焼土含む）
 I c8 礫暗褐色土（15～20cmの石多く含む）
- II 層：近世遺構埋土・造成土**
 II 6 暗灰色砂質土（2～4cmの石多く含む）上面硬化（路面3） 下部は路面3の路盤
 ※II 6層下は地山（球黄褐色シルト質土）



第 85 図 尾坂門調査区 2001-2 地点 平面図・調査地点北壁断面図 (S=1/40)

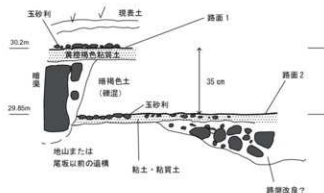


①2001-3 地点平面図



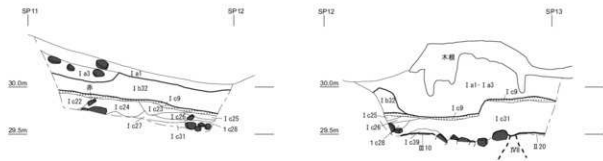
石材は赤戸室切石主体
 材の厚さ 15 ~ 16 cm (毎 5 寸)
 内幅 45 cm (毎 15 寸)
 深さ 30 cm (毎 10 寸)
 底石長 : 75 ~ 110 cm、板状

②石組側溝 1 模式図



③路面 1・2 模式図

第 86 図 尾坂門調査区 2001-3 地点平面図 (S=1/40)・石組側溝 1 模式図・2001-4 地点路面 1・2 模式図



I a 層：近代以後造成土等（金沢大学～公園整備）

I a1 埋藏土（粗砂・砂・砂利含む 現地表土）

I a3 埋藏灰土（小礫・河原石・砂利・炭化物と焼土を含む 現地表下遺土）

I b 層：近代以後造成土等（旧陸軍後期）

I b32 埋藏土（小礫・縦5～10cm・炭化物と焼土を含む。褐色土と黄褐色粘土ブロックが点々と入る 旧陸軍後期 盛土）

I c 層：近代以後造成土等（旧陸軍前期）

I c9 灰褐色土（砂・小礫含む 固くしまる 上面硬化（路面2）下部は路面2の路盤）

I c22 埋藏褐色土（炭化物の粒が入る。焼土の粒が多く入る 路面2路盤下遺土）

I c23 明黄灰色粘質土（明黄灰色の粘土が主体 小礫含む 路面2路盤下遺土）

I c24 埋藏褐色土（20 cm以内の河原石が入る 路面2路盤下遺土）

I c25 明黄灰色土（明黄灰色の粘土を多く含む、小礫含む 路面2路盤下遺土）

I c26 不勻質・埋藏褐色土（炭化物と焼土を含む、小礫を少し含む 路面2路盤下遺土）

I c27 黄褐色土（炭化物と焼土の粒を含む 路面2路盤下遺土）

I c28 埋藏褐色土（炭化物と焼土の粒を含む、小礫を少量含む 路面2路盤下遺土）

I c1 褐色土（砂利が主体、河原石も少し入る 路面2路盤下遺土）

I c9 埋藏灰土（炭化物の粒を含む 路面2路盤下遺土）

II 層：近世遺構埋土・造成土

II 29 埋藏土（小礫・粗砂含む 石積溝溝2の廻り込み）

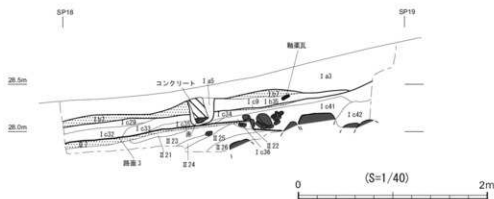
III 層：中世末～近世初頭（尾坂門設置以前）遺構埋土・造成土

III 10 灰褐色土（炭化物の粒を多く含む 近世以前の遺構5等）

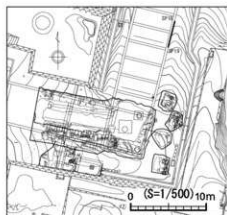
IV 層：尾山

IV 8 明黄灰色土

第 87 図 尾坂門調査区 2001-4 地点 平面図・調査地点西・北壁土層断面図 (S=1/40)



- I a 層：近代以後造成土等（金沢大学～公園整備）
 I a3 暗褐色土（粗砂・礫含む 埋込土）
 I a5 暗褐色土（礫・コンクリ・コンクリ土台に準ずる 覆土）
- I b 層：近代以後造成土等（旧除軍後期）
 I b7 明黄褐色土（礫含む 上面硬化（路面1） 下部は路面1路盤）
 I b55 暗黄褐色土（礫5～10cmが多くなる、粗砂・礫混入する 路面1路盤下盛土）
- I c 層：近代以後造成土等（旧除軍前期）
 I c9 灰褐色土（固くしまる、小さい礫含む 上面硬化（路面2） 下部は路面2路盤）
 I c29 暗褐色土（小礫・焼土・炭化物の粒少量入る 路面2路盤下盛土）
 I c32 黄褐色土（小礫・礫5～10cm・炭化物の粒・明黄褐色土の小さいブロック少量入る 路面2路盤下盛土）
 I c33 黄褐色土（黄褐色粘土を多く含む、小礫含む 路面2路盤下盛土）
 I c34 やや暗い暗褐色土（小礫・焼土・炭化物の粒少量入る 路面2路盤下盛土）
 I c35 暗褐色土（小礫・焼土・炭化物の粒入る 路面2路盤下盛土）
 I c36 黄褐色土（黄褐色粘土を多く含む、小礫含む 路面2路盤下盛土）
 I c41 暗黄褐色土（小礫・礫3～30cm・焼土の粒入る 路面2路盤下盛土）
 I c42 暗黄褐色土（小礫・粗砂含む 路面2路盤下盛土）
- II 層：近世遺構土・造成土
 II 7 暗褐色土（固くしまる、小礫含む 上面硬化（路面3） 下部は路面3路盤）
 II 21 明黄褐色土（小礫・明黄褐色土含む 路面3路盤下盛土）
 II 22 黄褐色土（しまりなし、粗砂・礫10cm含む 路面3路盤下盛土）
 II 23 明黄褐色土（黄褐色粘土を多く含む、小礫・焼土が散在する 路面3路盤下盛土）
 II 24 明黄褐色土（粗砂・小礫含む 路面3路盤下盛土）
 II 25 明黄褐色土（黄褐色粘土を多く含む、粗砂含む、小礫少量含む、褐色土が少量入る 路面3路盤下盛土）
 II 26 暗黄褐色土（炭化物・焼土・小礫・礫10～30cm含む 路面3路盤下盛土）



第 88 図 尾坂門調査区 2001-5 地点 調査地点東壁土層断面図 (S=1/40)

長径 264cm 以上、短径 130cm 以上、検出面からの深さ 56cm 以上（断面では 78cm 以上。発掘停止面での底レベル 29.84m）を測る。土層断面の観察より、焼土層の上には被熱した硬化面が形成されており（III 29 層上部）、下部に粘土層を固めた層（III 39 層）が見られることから、炉床とその下部の除湿施設の可能性がある。炉壁や鉄滓、陶磁器や C2 I 1 類と見られる土師器皿等が出土している。

g. P03

遺構東部は近代以降に攪乱を受け、南部は SK05 に切られている。平面楕円形か。長径 47cm 以上、短径 38cm 以上、遺構検出面からの深さ 21cm（底レベル 30.04m）を測る。埋土は炭粒、礫を含む濁暗灰色粘質土である。

h. P04

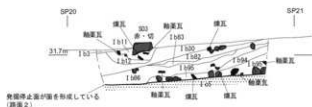
遺構西部は近代以降の攪乱を受けている。平面方形か。長辺 37cm、短辺 26cm 以上、遺構検出面からの深さ 37cm（底レベル 29.87m）を測る。埋土は炭・焼土粒及び礫を含む濁暗灰色土で、輪辋口（P126）や炉壁が出土する。

i. P06

近代以降の攪乱により遺構の南半部のみ検出されている。平面形は楕円形か。長径 49cm、短径 21cm 以上を測る。炉壁及び白磁小片が出土している。



第 89 図 尾坂門調査区 2001-6 地点 平面図 (S-1/40)



1 b 層：近代以後造成土等（旧除家後期）

1 b3 堆積色土（小礫・礫3～10cm・軸葉瓦が入るきたない土 路面1形成に伴う土層）

1 b11 堆積色土（小礫・粗砂・炭化物含む、右列の壁方埋土 切石列1層方）

1 b12 炭褐色土（粗砂が非常に多く入る、小礫含む、右列の壁方埋土 切石列1層方内）

1 b30 黄褐色土（炭化物・焼土粒・小礫・礫を含む）

1 b82 堆積褐色土（炭化物・小礫・黄色粘土ブロック3～5cm含む）

1 b83 炭褐色土（炭化物・粗砂・焼土粒・小礫・磁器含む）

1 b86 堆積褐色土（炭化物・焼土粒・小礫・焼瓦・軸葉瓦含む）

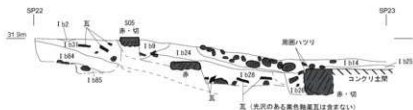
1 b94 黄褐色土（炭化物・粗砂・小礫含む）

1 b95 堆積灰色土（炭化物・小礫・礫約10cm・焼瓦・軸葉瓦・黄褐色粘土ブロック約7cm含む）

1 c 層：近代以後造成土等（旧除家前期）

1 c5 焼灰色土（粗砂・小礫・礫1～5cm含む 上面が路面2、下部が路面1）

①北トレンチ土層断面図



1 b 層：近代以後造成土等（旧除家後期）

1 b2 黄褐色シルト（路面1仕上げ土）

1 b9 堆積黄色土（切石列1層方）

1 b14 黄褐色土（磁質 円礫混在 PQT）

1 b24 茶褐色土（黄色ブロック混 粗い山風化粘土 路面1軟地土）

1 b25 茶褐色砂質土（川砂汚れた層）

1 b26 茶褐色土（硬質、しまり弱 礫物混在層方）

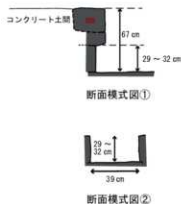
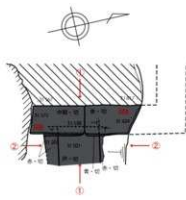
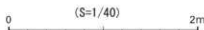
1 b28 堆積黄色土（しまりから中～大 上層は黒人礫・瓦少ない、礫物混在に伴う盛土）

1 b31 茶褐色～堆積褐色土（しまり中 盛土）

1 b4 堆積色土 瓦混（黒結葉を含む）

1 b85 茶褐色土（礫多い、盛土）

②南トレンチ土層断面図



③石組側溝1断面模式図

第90図 2001-6 地点 調査地点土層断面図（北・南トレンチ）(S=1/40)・石組側溝1断面模式図

第3節 出土遺物

1. 概要

尾坂門調査区から出土した遺物は、陶磁器・土器・瓦・金属製品・石製品・炉壁等である。土器・陶磁器については層位を優先した上で、遺構、器種ごとに記述し、それ以外のものについては、器種を優先して記述していく。

2. 土器・陶磁器（第91・92図、第23～25表）

基本層序に基づいて記述していく。また、土器・陶磁器の器形・胎土分類、年代観については、鶴ノ丸第1次調査区に準じている。（第29～31図）

I層（第91図、第92図P104～P116）

石組暗渠 1 Ib層に属する。P076～P079は埋土から出土したもので、P076・P077は19世紀末～20世紀初頭に盛行する磁器染付型紙摺り碗で、酸化コバルトを用いている。P076は直線的に開く体部に、みじん唐草と梅花で3つに区画された中に釣った魚を持つ人物が描かれている。型紙の織ぎ目は少しずれている。P077はやや丸みを持った体部に「福寿」の文字、花、建物等が3組描かれている。やはり型紙の織ぎ目は少しずれ、空白が出来ている。P076より細かい絵で織ぎ目以外は滲みも少ない。P078は20世紀に入って生産されるようになった硬質陶器で、内面に赤の上絵で目盛りが描かれている。計量カップであろうか。P079は肥前陶器鉢の口縁片で灰赤色の緻密な胎土に鉄軸が薄く掛かっている。卸目は欠損しているが播鉢と思われる、同一個体片がSK06から出土している。

掘方からは磁器染付型紙摺り・銅版転写、硬質陶器の碗・皿・大皿等のほか、肥前、瀬戸・美濃の陶磁器、珠洲焼、越前焼、土師器皿等が出土している。P080～P088は磁器、P089～P103は陶器、P104～P106は土器である。

P080～P083は瀬戸・美濃の染付である。P080は酸化コバルトによる型紙摺りの皿で、蛇の目回型高台であるが、高台内全体が無軸になっていて高台の内側には砂が付着している。P081は折縁皿の口縁片である。P082・P083は碗で、焼継をしている。P082は外面に「寿」の文字が描かれた端反碗である。P083は高台の欠損部分を粘土と白玉（焼継材）を充填して焼継をすることによって補修している。P084～P086は肥前染付碗である。P084は外面から内面にかけて龍と雲を描いた碗で、18世紀後半から19世紀前半のものである。P087は小片であるが、肥前染付雨垂文の小碗か仏飯器である。P088は中国景德鎮窯の染付端反鉢の口縁片で、17世紀初めのものである。

P089は肥前陶胎染付碗で、下に塗った白泥はムラになっているが、軸は透明感がある。内面に降灰による溶着物がある。P090は内外面とも鉄軸が掛かった肥前の碗である。P091・P092は瀬戸・美濃の製品である。P091は掛け分け碗で、外面の軸は被熱のためかやや白濁している。P092は厚くかかった長石釉に粗い貫入が入った志野の碗である。P093～P095は皿である。P093は瀬戸・美濃の銅緑釉製品（織部）で、内面に沈線が2条巡っている。P094は銅緑釉が掛かった産地不明の製品で、被熱している。P095は瀬戸大窯II期の灰釉皿で、軸は透明感があり粗い貫入が入っている。P096～P100は肥前陶器である。P096は、白泥で波状文を描くいわゆる刷毛目唐津の鉢口縁である。P097は播鉢の口縁片であるが、胎土は外面側は還元により2～5mmの幅で暗灰色を呈し、内面側は明赤褐色を呈している。卸目は6本以上ある。卸目はすり減っていないが、口唇部は平滑になっているので、よく使われていたものであろう。P098は鉢の片口部分で、卸目は残っていないが播鉢と思われる。18世紀以降のものである。P099は小片であるが、水指の口縁と思われる。P100は鉄軸の壺底部で、外面は平行叩きが施されている。底面には砂が付着している。P101は産地不明の甕頸部付近である。外面にはカキ目があるが、灰釉が白濁しているため分りにくい。P102は珠洲焼の甕体部片である。

P103 は須恵器の口縁片で、鉢かと思われる。

P104 は土師器皿で、細かく均質な胎土で口縁は緩く外反し見込に圏線がある。P105 は均質な胎土の土師器皿で、外反した体部から口縁端部が内側へ小さく折曲がっている。P106 は土器火鉢の底部である。円柱状の脚を持ち、内面はヨコナデだが外面の立ち上がり部分はケズリを施している。外面は赤彩されている。

SK06 I b 層に属する。P107 は P079 と同一個体の肥前陶器播鉢片である。

遺構外 P108 は I a 層から出土した肥前磁器染付蓋物の蓋である。胎土は白色で緻密、呉須の発色も良く釉の透明感もある。

I b 層からは P109 ～ P114 が出土している。P109・P110 は肥前磁器染付碗である。P109 は線描きで草と葉の文様を描いている。18 世紀末から 19 世紀初のものであろう。P110 は鶴と菊花のコンニャク印判を施した 18 世紀の製品である。P111・P112 は肥前陶胎染付碗で、18 世紀前半のものである。P113 は陶器の灰軸小壺だが、被熱により内外面とも釉が沸いている。P114 は土器火鉢で円柱状の脚を 3 個持つと思われる。内面はヨコナデのままであるが外底面は丁寧なナデを施し、外側面は磨いている。

I c 層からは P115・P116 が出土している。P115 は白磁の大瓶であるが、釉は透明感に欠けていて、欠損している上半部に染付が施されている可能性がある。P116 は土師器皿で、口縁はやや外反し端部をわずかに摘み上げている。17 世紀後半のものである。

II 層 (第 92 図 P117・P118)

P117 は肥前陶胎染付の碗で、白泥は施されず灰色の胎土に直接染付している。P118 は京・信楽系陶器碗の体部片で、外面下半は飛び鉋を施した上に鉄軸を掛け、それ以外の部分は灰軸を掛けている。どちらも 18 世紀前半のものと思われる。

III 層 (第 92 図 P119 ～ P126)

河原石群と河原石群下部の盛土 P119 は中国漳州窯の磁器青花平碗である。陶器質の胎土で釉はやや白濁している。見込は釉剥ぎされていて、高台付近も無釉であり、16 世紀末の製品である。P120 は底部片であるが同様の青花碗であらう。P121 は朝鮮陶器碗で、にぶい黄橙色の胎土に薄い暗オリーブ色の釉が掛かり、見込と畳付にそれぞれ 2 か所、目跡が残っている。16 世紀後半のものと考えられる。P122 は瀬戸・美濃陶器天目茶碗の底部で、内面には透明感のある鉄軸が掛かり、高台は鉄化粧している。高台は削り出しているが中央からずれているので幅が均一になっていない。P119 は盛土から出土したことが明らかであるが、P120 ～ P122 については、重複する遺構であり同じく III 層に属する SK09 の遺物である可能性も否定しきれない。

SK07 P123 は瀬戸・美濃陶器灰軸皿である。全体に透明感のある灰オリーブ色の釉が掛かっていて、特に見込と高台の脇は釉が厚く溜まっているため深い緑色になっている。見込には菊花の印花文があるが、釉が厚いためにはっきり見えていない。高台内に輪トチンの溶着痕がある。16 世紀中葉の製品である。P124 は 9 世紀前半の金沢市末窯産の須恵器有台で、古い層からの混入と思われる。

SK08 P125 は中国磁器の青花碗で、呉須の発色は良いが透明釉は気泡を多く含んでいる。

P04 P126 は輪羽口である。P04 からは炉壁の破片も出土している。

層位不明 (第 92 図 P127・P128)

P127 は尾坂門の工事中に出土した肥前陶器の灰軸皿である。高台は削り出していて、回転ケズリが体部下半まで続いているが、高台内側のケズリが片寄っているため高台の幅が不均等になっている。一部釉が白濁している。P128 は須恵器の蓋である。灰色の比較的精良な胎土で、上面は降灰している。9 世紀前半の南加賀の製品である。

3. 瓦 (第93・94図、第26・27表)

出土した瓦は、すべて粘土瓦であり、軒丸瓦・丸瓦・軒平瓦・平瓦・軒棧瓦・棧瓦・腰瓦・輪違い・棟瓦を確認した。出土瓦の大半はⅠ層からのもので、Ⅱ層からのものは少量にとどまり、Ⅲ層からはなかった。そのうちT185～T216の32点について図化を行った。また、図化には至らなかったが、T217～T232の16点について、瓦当文様及び刻印の拓本を掲載している。

燻瓦の胎土は、A1・A2・B1・B2・C1・C2類が見られたが、全出土燻瓦では、B2類が多数を占め、A2類・B1類も比較的多く見られた。その他の胎土のものはあまり多くない。

釉瓦の釉調は、主に黒色系(黒色・黒褐色)や赤色系(赤色・赤褐色・暗赤褐色)が見られるほか、わずかだがオリーブグリーン系や新しい時期に属する光沢の強い黒色も確認できる。胎土には色調の濃淡により明瞭な縞状を呈するものと、縞のないものがあり、それぞれに緻密なものと同隙が多いものが見られるが、縞がなく緻密なものが多数を占める。また、少数だが越前瓦も出土する。

(1) 軒丸瓦

T185～T188は軒丸瓦で、すべて瓦当部のみで遺存である。T185は2000-1地点Ⅰ層出土の越前瓦で、瓦当文様は巴Ⅱ-2類。外縁部に指頭圧痕が見られる。T186・T187は2000-1地点石組暗渠Ⅰ出土の燻瓦。T186は巴Ⅲ-1a類。T187は梅鉢文。T188は2000-1地点南部(Ⅰc層)出土の燻瓦で、瓦当文様は巴Ⅲ-1a類である。

(2) 軒平瓦

T189～T200は軒平瓦である。T189は燻瓦で、2000-1地点南壁Ⅰb17層から出土した。瓦当文様は軸葉瓦の菊Ⅰ類と類似するが、中心飾りの花卉が9枚になっている点が相違する。T190～T199は2000-1地点石組暗渠Ⅰから出土した。このうちT190～T195は燻瓦で、T196～T199は軸葉瓦である。T190は三葉文である。T191は梅鉢Ⅱ-Ⅰ類で、瓦当表面にキラ砂をまぶす。T192の瓦当文様は、軸葉瓦の菊Ⅱと同系である。T193の瓦当文様は三葉文Vか。T194・T195は花文か。T195は上端部を面取りし、瓦当表面にキラ砂をまぶす。T196～T200は瓦当文様が梅鉢ⅢまたはⅣ類と見られる。T200は2000-1地点南部断割(Ⅱ層)出土の軸葉瓦で、瓦当文様は梅鉢Ⅳ類。

(3) 軒棧瓦

T201・T202は軸葉瓦の軒棧瓦で、2000-1地点石組暗渠Ⅰ(Ⅰb層)から出土した。T202は丸部の文様が梅鉢Ⅲ類であった。

(4) 丸瓦

T203～T209は丸瓦である。T203は2000-1地点北部(Ⅰb層)出土の越前赤瓦で、内面にコビキBの切り離し痕が見られる。T204・T205は燻瓦で、2000-1地点石組暗渠Ⅰ(Ⅰb層)から出土した。T204は内面に布目痕が残る。T205は内面にコビキBの切り離し痕が見られる。T206は2000-1地点南部(Ⅰc層)から出土した越前赤瓦である。T207～T209は2000-1地点南部断割(Ⅱ層)から出土した。T207は軸葉瓦で、内面にコビキBの切り離し痕がある。T208は燻瓦で、内面にコビキBの切り離し痕と、王縁先端に指押しえ痕が残る。T209は越前赤瓦で、内面にコビキBの切り離し痕が見られる。

(5) 棧瓦

T210は2000-1地点石組暗渠Ⅰ(Ⅰb層)から出土した燻瓦の棧瓦である。

(6) 道具瓦

T211～T213は腰瓦である。T211・T212は2000-1地点石組暗渠Ⅰ(Ⅰb層)から出土した。壁面に取り付けさせるためと見られる青海波様の刻線が認められた。T213は尾坂門西での工事立会の際出土した。出土状況等の詳細は不明である。

T214・T215は燻瓦の輪違いである。T214は内面にコビキBの切り離し痕が見られ、T215の内面に

は布目痕が見られる。

T216は燧瓦の棟瓦である。内面に接合のための凹痕跡が帯状に見られる。

(7) 瓦当文様・刻印

瓦当文様及び刻印の拓本を取った瓦について記述する。

瓦当文様では、燧瓦の軒丸瓦で巴文（左回り）、軒平瓦で三葉文IV類を確認した。釉葉瓦では、軒丸瓦で巴II類（II-1・2類）、軒平瓦で梅鉢文（III或いはIV類）、分類不明文（唐草部分の一部のみ確認）、釉葉軒棧瓦で玉III類及び、中心飾りの花卉がクローバー形の五弁花で、葉が横方向に広がる五弁花文を確認した。

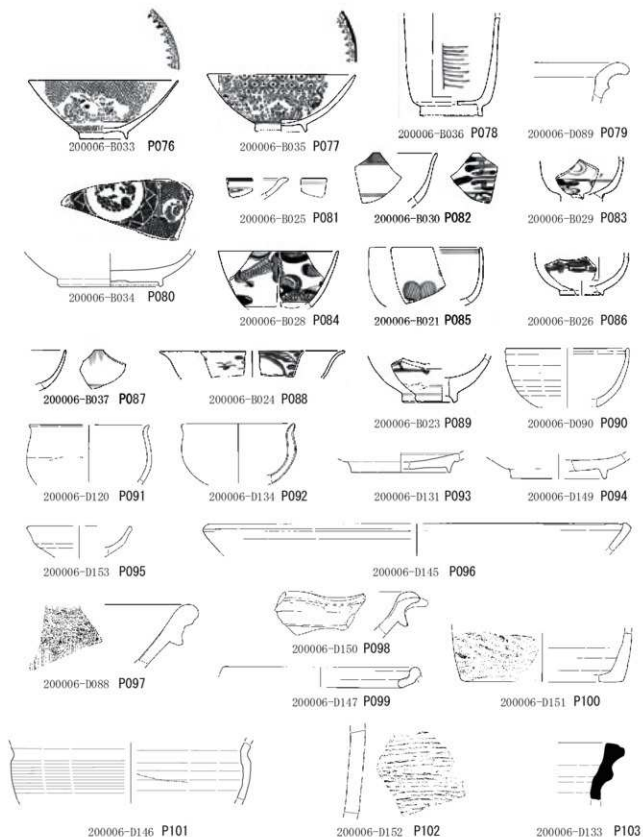
また、刻印を有する瓦は少なく、燧瓦の平瓦で「〇」、釉葉瓦の棧瓦で「㊟」、「〇」、「㊠」を確認するにとどまる。

4. 金属製品（第113図、第27表）

M006～M008は銅釘である。M006は2000-1地点石組暗渠1（Ib層）からの出土で、全長3.4cmを測り、断面長方形の体部に隅丸長方形の頭部が付く。M007は2000-1地点南部断割（II層）からの出土で、全長0.85cmを測り、断面楕円形の体部に略円形の頭部が付く。M008はSK04（III層）出土で、全長1.85cmを測り、断面台形の体部に略円形の頭部が付く。ただし、銅釘が主に鉛瓦や銅板等の打ち付けに用いられることから、周辺からの流れ込みの可能性を否定できない。

5. 石製品（第113図、第27表）

S009は2000-1地点石組暗渠1（Ib層）出土の砥石である。全面に擦痕が見られる。



200006-D146 P101

200006-D152 P102

200006-D133 P103

・2000-1地点

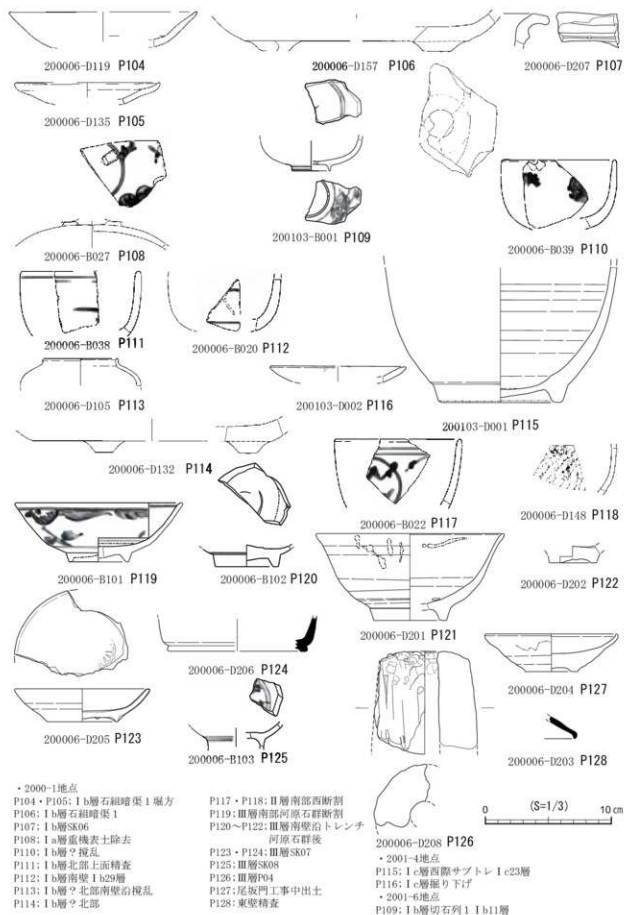
P076～P079: I b層石組暗渠1埋土

P080～P082・P084～P090・P092・P093・P095～P097・P099～P103: I b層石組暗渠1堀方

P083・P091・P094・P098: I b層石組暗渠1

0 (S=1/3) 10 cm

第91図 尾坂門調査区 出土遺物実測図 土器・陶磁器1 (S=1/3)



第92図 尾坂門調査区 出土遺物実測図 土器・陶磁器2 (S=1/3)



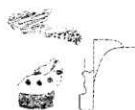
200006-D129 T185 釉(越前)



200006-D103 T186



200006-D108 T187



200006-D127 T188



200006-D125 T189



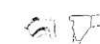
200006-D115 T190



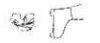
200006-D110 T191



200006-D112 T192



200006-D113 T193



200006-D114 T194



200006-D118 T195



200006-D099 T196 釉



200006-D100 T197 釉



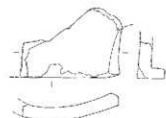
200006-D101 T198 釉



200006-D106 T199 釉



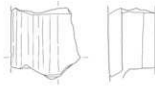
200006-D122 T200 釉



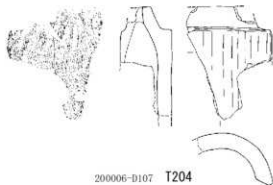
200006-D102 T201 釉



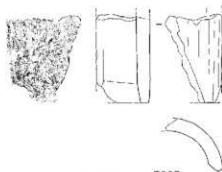
200006-D117 T202 釉



200006-D130 T203 釉(越前)



200006-D107 T204



20006-D156 T205

・2000-1地点

T185: 1a層

T186・T187・T191~T195・T197~T199・T201・T202: 1b層石組暗渠1掘方

T188: 1c層南部遺構検出

T189: 1b層南壁 1 b17層

T190: 1b層石組暗渠1埋土

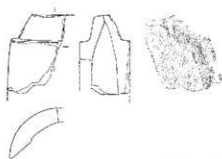
T196・T204・T205: 1b層石組暗渠1

T200: 1b層南部西断割

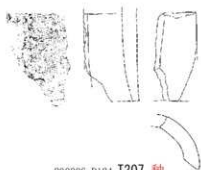
T203: 1b層北部上面積査

第93図 尾坂門調査区 出土遺物実測図 瓦1 (S=1/6)

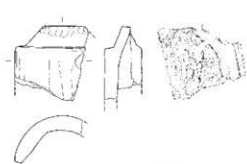
0 (S=1/6) 10 cm



200006-D128 T206 軸(越前)



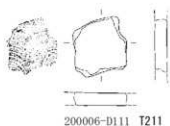
200006-D124 T207 軸



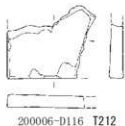
200006-D121 T208



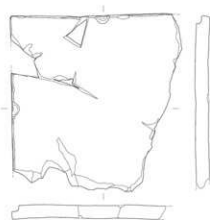
200006-D123 T209 軸(越前) 200006-D109 T210



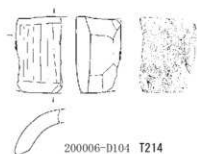
200006-D111 T211



200006-D116 T212



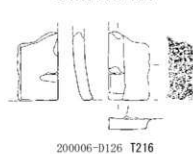
200006-D040 T213



200006-D104 T214



200006-D155 T215

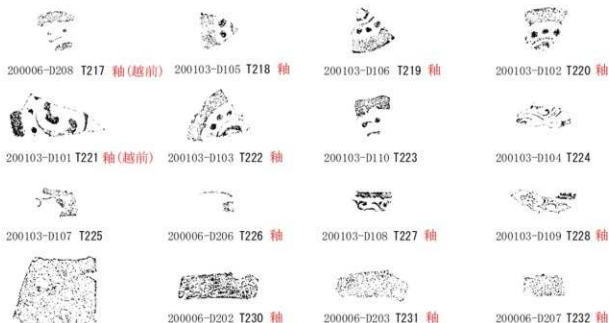


200006-D126 T216

・2000-1地点
 T206: I c層南部遺構検出
 T207~T209: II層南部西断割
 T210~T212・T214・T215: I b層石組暗渠1掘方
 T213: 尾坂門西工事立会い
 T216: I c層南部遺構検出

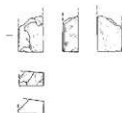
0 (S=1/6) 10 cm

第94図 尾坂門調査区 出土遺物実測図 瓦2 (S=1/6)



・2000-1地点
 T217・T229・T231・T232: I b層石組暗渠1掘方
 T226: II層南部西断割
 T230: I b層石組暗渠1埋土
 ・2001-1地点
 T220・T221: I c層側溝掘乱
 T222・T225: I c層上面精査
 T227・T228: I a層表面除去
 ・2001-4地点
 T223: I c層上面精査
 ・2001-6地点
 T218・T224: I b層北トレンチ
 T219: I b層南トレンチ

0 (S=1/6) 10 cm



0 (S=1/2) 10 cm

・2000-1地点
 M006: I b層石組暗渠1掘方
 M007: II層南部西断割
 M008: III層SK04
 S009: I b層石組暗渠1

0 (S=1/3) 10 cm

第95図 尾坂門調査区 出土遺物実測図 瓦拓本・金属製品・石製品 (金属S=1/2、石S=1/3、瓦S=1/6)

第23表 尾坂門調査区 出土遺物種別表 土器・陶磁器1

図版 No.	種類	器種	出土地点		数量 (個)	高さ (cm)	口径 (cm)	成形・彫形	釉薬・灰釉等	胎土・色調等	産地	形状特徴	特記事項	出土調査番号
			1層	2層										
F91	陶器	碗	2009-1	1層	6面母葉1里上	11.9	3.9	4.7	19号口	白	瀬戸・美濃?	平底	19C末~20C初, 西尾器? , コノ6, ト	20006-B033
F97	陶器	碗	2009-1	1層	6面母葉1里上	11.6	4.2	4.6	19号口	白	瀬戸・美濃?	平底	19C末~20C初, 西尾器? , コノ6, ト	20006-B035
F98	陶器	計量器	2009-1	1層	6面母葉1里上	3.0	17.6	19号口	外, 白粉繪 内, 灰粉繪, 赤灰(白磁)	1.25a	灰白	横置筒形, 20C, 1日高10a程度	20006-B036	
F99	陶器	酒杯	2009-1	1層	6面母葉1里上	12.6	12.6	19号口十字	鉄繪	1.25a	灰青	18C以降, 即日文調 F102と同 - 胴体	20006-B039	
F98	陶器	皿	2009-1	1層	6面母葉1里上	8.4	12.7	19号口	変付	20b	白	底の目印即高台名	20006-B034	
F99	陶器	皿	2009-1	1層	6面母葉1里上		14.6	19号口	変付	10a	白	瀬戸・美濃?	20006-B035	
F99	陶器	皿	2009-1	1層	6面母葉1里上		14.6	19号口	変付	20b	白	瀬戸・美濃?	20006-B036	
F99	陶器	皿	2009-1	1層	6面母葉1里上		13.1	19号口	変付	10a	白	瀬戸・美濃?	20006-B039	
F98	陶器	碗	2009-1	1層	6面母葉1里上	4.3	19号口	変付	20b	白	瀬戸・美濃?	19C, 高台大皿部を地盤で覆脚	20006-B028	
F98	陶器	碗	2009-1	1層	6面母葉1里上	8.7	14.6	19号口	変付	20b	白	瀬戸・美濃?	20006-B021	
F98	陶器	碗	2009-1	1層	6面母葉1里上		13.6	19号口	変付	20b	白	瀬戸・美濃?	20006-B026	
F97	陶器	仏壇土	2009-1	1層	6面母葉1里上		13.1	19号口	変付	20a	灰白	20006-B027	20006-B027	
F98	陶器	鉢	2009-1	1層	6面母葉1里上		12.1	19号口	青花	20b	白	中国(雲南)産	20006-B024	
F99	陶器	碗	2009-1	1層	6面母葉1里上	4.4	13.9	19号口	細粒変付	20a	刷灰	瀬戸・美濃?	20006-B023	
F99	陶器	碗	2009-1	1層	6面母葉1里上		14.7	19号口	鉄繪	1.20a	灰		20006-B099	
F99	陶器	碗	2009-1	1層	6面母葉1里上		14.1	19号口	外, 灰繪(上部赤繪(十字線)) 内, 灰繪	20b	灰黄緑		20006-B120	
F99	陶器	碗	2009-1	1層	6面母葉1里上	8.8	14.7	19号口	長石繪	20a	灰黄		20006-B114	
F99	陶器	皿	2009-1	1層	6面母葉1里上	7.8	11.3	19号口	外, 灰繪 内, 細粒繪	20b	灰黄緑		20006-B111	
F99	陶器	皿	2009-1	1層	6面母葉1里上		17.4	19号口	細粒繪	20a	灰白		20006-B149	

()は調査番号

第24表 尾坂門調査区 出土遺物種別表 土器・陶磁器2

(1)は埋蔵品 (2)は出土品

図版 No.	種別	器種	出土地点		位置 (m)	数量 (個)	形状・彫形	材質・装飾等	胎土・土質等		産地	形状特徴	特定事項	出土調査番号	
			1	2					目録No	説明					
91	陶器	皿	2009-1	1号	石組母屋1東方	[8.0]	12.0	19.5	灰質	2.3a	灰質	瀬戸	形状特徴	人形皿(130-1)出	20006-013
			2009-1	1号	石組母屋1東方	[24.0]	12.3	19.5	外-淡青緑 内-白灰質(白)	2.3a	こいい焼	肥前	形状特徴	17C 浅平口皿	20006-014
			2009-1	1号	石組母屋1東方		14.7	19.5	外-鉄緑 内-鉄緑	1.3b	内-淡青緑 外-灰質	肥前	形状特徴	18C 口縁, 使用により口縁部平薄	20006-008
			2009-1	1号	石組母屋1		13.0	19.5	鉄緑	1.3b	こいい焼	肥前	形状特徴	種別片口皿, 18C口縁	20006-010
			2009-1	1号	石組母屋1東方		14.6	19.5	うのふ焼?	1.2a	灰	肥前	形状特徴		20006-0147
			2009-1	1号	石組母屋1東方	[14.8]	13.9		輪郭み-浮彫 台ヤタタキ	1.3a	灰質	肥前	形状特徴	志原外道に準行書	20006-0151
			2009-1	1号	石組母屋1東方		14.0	19.5	外-鉄緑 内-鉄緑	1.3a	こいい灰質	肥前	形状特徴	鉄焼	20006-0146
			2009-1	1号	石組母屋1東方		16.7		輪郭み-浮彫 台ヤタタキ	1.3b	灰質	佐賀	形状特徴	内道平薄	20006-0152
			2009-1	1号	石組母屋1東方		14.1		輪郭み-浮彫 台	1.3b	灰質	由緒賀	形状特徴	陶質	20006-0133
			2009-1	1号	石組母屋1東方	14.6	12.8	多づく4		C	こいい灰質 鉄赤 層(底部)	在産	形状特徴		20006-0119
			2009-1	1号	石組母屋1東方	11.4	11.7	多づく4		E2	こいい灰質	在産	形状特徴		20006-0135
			2009-1	1号	石組母屋1		13.0		外道準型	A.2	灰質, 青色配欠心	在産	形状特徴	行住区部	20006-0137
			2009-1	1号	306		12.7	19.9	鉄緑	1.2a	灰赤	肥前	形状特徴	P19-2号 胴体	20006-0207
92	陶器	皿	2009-1	1号	重徳表土押去		12.2	19.9	灰付	2b	白	肥前	形状特徴	20006-0027	
			2009-6	1号	切石内1 1号11層	3.1	12.0	19.9	灰付	2b	白	肥前	形状特徴	20006-0027	
			2009-1	1号	覆土	[3.8]	14.0	19.9	灰付	2b	灰白-淡青緑	肥前	形状特徴	20113-0001	
			2009-1	1号	北原土器精査	[3.3]	14.0	19.9	陶胎灰付	1.3b	陶質	肥前	形状特徴	18C 浅平 口縁に平白溝	20006-0039
			2009-1	1号	浅原1号2層		14.0	19.9	陶胎灰付	1.2a	陶質	肥前	形状特徴	18C 浅平	20006-0020
			2009-1	1号	北原土器白腹皿	4.0	12.2	19.9	灰緑?	1.2a	灰白	肥前	形状特徴	鉄焼	20006-0105

第25表 尾坂門調査区 出土遺物種別表 土器・陶磁器3

(1)は保存箱 (1)は保存箱

図版 No.	器形	器種	出土部位		数量 (個)	重量 (g)	形状・形状	柄・文様等	土・心調等	目	色	産地	形状特徴	特記事項	ID(保存番号)
			13層?	北部											
P114	土器	六枚	2009-1	13層?	北部	1	10.0	(2.7)	輪郭不明				可住状態		20006-0132
P115	磁器	瓶	2001-4	14層	西側オプト 1-23層	9.9	(10.6)		白	灰白	肥田		高台に附着, 底辺縁状あり		200103-001
P116	土器	土師器皿	2001-4	14層	東側下付	[10.6]	(1.2)		白	白	肥田		17C後半? 割理面		200103-002
P117	陶器	甕	2009-1	13層	南西部割	[9.9]	(5.2)		1.20a	褐色	肥田		18C前半		20006-0022
P118	陶器	甕	2009-1	13層	南西部割		(3.3)?		1.20a	灰黄	赤・信濃		18C前半, 外周縁面		20006-0148
P119	磁器	甕	2009-1	13層	南側河原石割割	13.2	4.7		20b	淡黄	中国(清州産)	平形	16C末, 底辺及び高付石は割割		20006-0101
P120	磁器	甕	2009-1	13層	南側河原石割割 原石割後	5.0	(1.7)		20b	灰白	中国(清州産)		割割及び割割縁面, 高台割口ナシ		20006-0102
P121	陶器	甕	2009-1	13層	南側河原石割割 原石割後	14.8	5.8	6.9	1.20a	白	肥田	福反形	18C後半, 底辺と高付にそれぞれ各自 縁二つ成る		20006-0201
P122	陶器	天目茶碗	2009-1	13層	南側河原石割割 原石割後	3.8	(1.3)		1.20b	灰白	瀬戸・美濃		斜付縁入幅1.1cm, 最小幅0.5cm		20006-0202
P123	陶器	甕	2009-1	13層	307	10.6	5.5	2.6	1.20b	褐色	瀬戸・美濃		大塚貫刺(1330~1410), 高付内に輪 トナリ痕あり		20006-0203
P124	瓦器	片	2009-1	13層	307	[11.0]	(2.6)		1.20a	灰	末		0°C前半		20006-0206
P125	磁器	甕	2009-1	13層	308		(1.8)		20b	白	中国		20006-0103		
P126	土器	輪付口	2009-1	13層	南側河原石割割 原石割後	外径 乳厚 胎心径 8.4 2.2 (8.10)			白	外灰白 内は白	肥田		外周は割で割取り部に割っている		20006-0208
P127	陶器	甕	2009-1	13層	尾側河原石割割出土	10.4	4.1	2.0	1.20a	白	肥田		17C割割, 高付縁面平切等		20006-0204
P128	瓦器	甕	2009-1	13層	307	12.5cm 以上?	(1.3)		1.20a	灰白	胎加質	付蓋	0°C前半		20006-0205

第4節 小結

1. 検出遺構の時期

検出遺構は大きく近現代（Ⅰ層）・近世（Ⅱ層）・近世以前（Ⅲ層）の3時期に分けられる。なお、Ⅰ層は更に金沢城公園・金沢大学期（Ⅰa層）、旧陸軍後期（Ⅰb層）、旧陸軍前期（Ⅰc層）に細分可能である。

2. 絵図との照合

第96・97図は、近世絵図及び近代における旧陸軍期の図との照合図である。照合にあたっては、近世絵図は18世紀前半「金沢城図」（金沢市立玉川図書館蔵、嘉永3年（1850）「御城分間御絵図」（（公財）前田育徳会蔵）、旧陸軍期の図は明治40年（1907）「金沢旧城廓之図」（防衛研究所戦史研究センター蔵）、昭和20年（1945）「歩兵第百七聯隊図」（石川県立歴史博物館蔵）を使用した。なお、照合については、現存石垣を定点としつつ、1/200 現況地形測量図と遺構図及び絵図を重ね合わせて行った。

3. 近代以降の遺構

上述の通り、近現代の遺構は3段階に細分でき、特に旧陸軍期（後期（Ⅰb層）・前期（Ⅰc層）に細分）のものが顕著である。

Ⅰb層に属する主な遺構として、路面（路面1）、門ないし塀基礎にかかわる切石列（切石列1）、石組暗渠（石組暗渠1・2）と開渠（石組側溝1）、戸室切石の根太とコンクリート土間による建物基礎、道路緑石等があげられる。

また、Ⅰc層の主な遺構として、路面（路面2）、路面に伴う石段（石段1）、路盤改良のためと考えられる河原石集中ピット（P08）等があげられる。

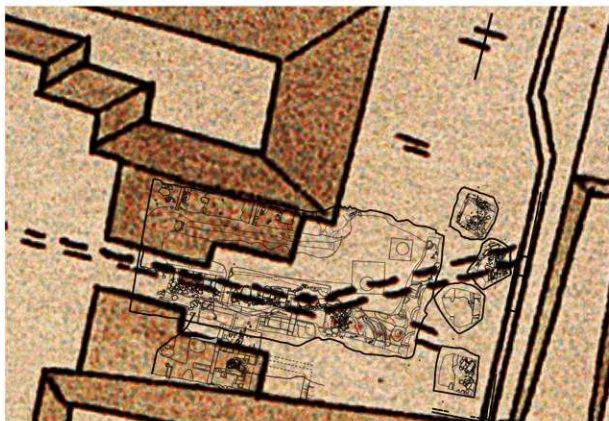
旧陸軍期の路面は前・後期の2面（路面1・2）確認された。旧陸軍前期の路面2は、近世後期の路面3を切り下げ、かつ石組側溝2を取り壊して造成されていた。この造成により、近世層の大半が失われたと考えられ、2001-4地点では、路面2の直下に尾坂門として整備される以前の遺構が確認されている。旧陸軍後期の路面1は、路面2上に約35cm盛土を施した上に造成されていた。石積暗渠1は、この盛土造成時に構築されたと考えられる。また、石組暗渠1は、尾坂東端に現存する石組側溝1に接続していた。

旧陸軍期の図との照合の結果（第96図）、明治40年図において、石組暗渠1が石組側溝1に接続する遺構検出状況に対応する流路が描かれていることが確認された。昭和20年図では石組側溝1はそのまま存続しているが、石組暗渠1の流路に変化が見られ、石組側溝1に連結せずに、直角に折れて坂下に続く流路を取っている。この流路については、2000-1地点中央～北部で確認された暗渠排水攪乱路と概ね合致することが判明した。

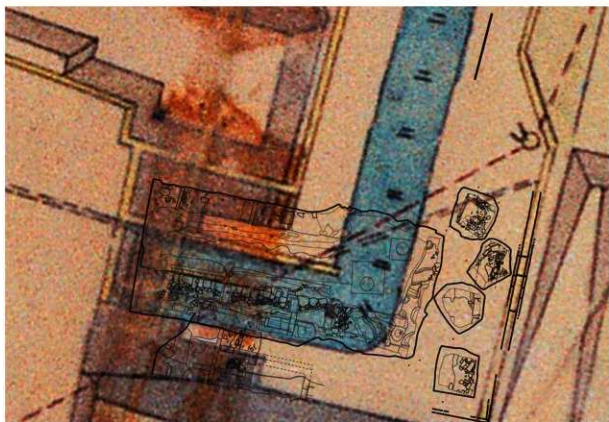
4. 近世（尾坂門設置以後）の遺構

尾坂門調査区において検出された近世遺構の密度は薄く、尾坂門前面に展開する路面（路面3～5）・尾坂東端の石組側溝（石組側溝2）が部分的に確認されたのみで、多くは近代以降の削平・攪乱により、失われたと考えられる。

近世絵図と照合したところ（第97図）、「御城分間御絵図」で描かれた尾坂東端の側溝は、石組側溝2にほぼ合致することが確認できた。この傾向はその他の高精度な近世後期の絵図（文政8～13年（1825～30）「金沢御城之図」（（公財）前田育徳会蔵）、天保元年（1830）「御城中壘分基絵図」（横山隆昭家蔵）、天保5～9年（1834～38）「金沢御城内御建物図」（（公財）前田育徳会蔵））でも同



明治 40 年：「金沢旧城廓之図」（防衛研究所戦史研究センター蔵）



昭和 20 年：「歩兵第七聯隊図」（石川県立歴史博物館蔵）

第 96 図 尾坂門調査区 尾坂門付近の絵図（近代以降）



18世紀前半：「金沢城図」（金沢市立玉川図書館蔵）



嘉永3年（1850）：「御城分間御絵図」（（公財）前田育徳会蔵）

第97図 尾坂門調査区 尾坂門付近の絵図（近世）

様である。「金沢城図」でも尾坂東端に側溝が描かれているが、石組側溝2とやや位置にずれが生じている。このずれは、絵図の精度が要因となっているとも考えられ、そうであるならば、この溝の上限は18世紀前半まで遡ることができよう。また、調査では絵図から想定される尾坂門の門礎の推定位置において、その痕跡を確認することができなかったが、近代以降の削平・攪乱によるものと考えられる。

5. 尾坂門設置以前（中世末～近世初頭）の遺構

2000-1地点南東部及び2001-4地点西・南東部において、部分的ながら旧陸軍前期に属する路面2直下で、尾坂門設置以前と考えられるⅢ層に属する遺構群が展開することが確認された。検出面の標高は、2000-1地点で約30.7～30.9m、2001-4地点で約29.5～29.8mを測る。遺構は地山を切り込んでおり、その埋土及び上層の包含層は、炭化物を含む焼土層からなる。焼土層からは輪羽口や炉壁、鉾滓といった金属生産に関係する遺物が出土していることから、これらの遺構は鍛冶関連遺構と推定される。このほか焼土層からは、16世紀後半～末を主体とする陶磁器も出土している。確実に1600年以降と考えられる遺物が見られなかったことから、17世紀初頭に尾坂門設置にかかわる路面の整備が行われた可能性があるが、出土遺物が僅少であるため、慎重な検討が必要である。また、この段階の遺構は調査区全体においてはごく部分的な検出にとどまるが、遺構検出地点ではビットや土坑、溝などが複数切り合うなど、比較的密に見られ、精査してみると、一面ではなく、複数の面から構成されている可能性がある。

なお、調査区の東方約30mの地点に位置する新丸第2次調査区下面（標高31.9～32.2mで検出）〔石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化センター2002〕でもこれと類似した状況が見られる（第98図）。すなわち、①遺構の切り合いが著しく遺構密度が高い、②遺構面が細かく見れば一面ではなく複数の整地面から構成されている可能性がある、③出土遺物が16世紀後半～末に属する陶磁器が主体を占めるほか、輪羽口・埴塙・鉾滓等の金属製品生産関係遺物の出土も見られたことである。ただし、本調査区では新丸第2次調査区のように地割を反映した区画溝は検出されておらず、遺構の方位についても明確でないため、地割（新丸第2次調査区では調査区北側の崖線に直交する地割を持つ）と方位等で共通性があるかは明確でないが、遺物組成、遺構検出状況の類似性から、新丸第2次調査区下部遺構面検出遺構とⅢ層検出の遺構群は一連のものと考えられ、尾坂門が現在地に設置される以前の町屋の一角であった可能性がある。



第98図 尾坂門調査区・新丸第2次調査区合成 (S=1/300)

第6章 二ノ丸園路調査

第1節 調査の概要

二ノ丸園路の調査は、平成11年(1999)に公園整備事業の一環で行われた園路整備に伴い実施した。調査区の位置は、二ノ丸北西部に現存する裏口門西石垣(石垣ID:2710E)、裏口門東石垣(石垣ID:2700W)間を南東方向へ上がる大学時代以来の道路部分にあたる(第99図)。現況では裏口門東西石垣間で約6m、東へ鉤状に折れてからは約5mの幅員をもつ園路として機能している。この園路は二ノ丸西石垣(石垣ID:2720W)から約20mの位置に、石垣とほぼ平行に設計されており、整備に伴う発掘調査区は最長部南北52m、東西18m、調査区幅3~3.5mを測る。調査当時の地表面標高は、裏口門付近で46.5~47.0m、二ノ丸西石垣に沿った部分では北側で48.0m、南側で49.5mと、南へ向けて上がってゆく。第7章でも記載する二ノ丸西縁の数寄屋屋敷では概ね46.2mと、二ノ丸西石垣を境に現況で約3mの段差がある。公園整備事業に伴う工事は、遺構面保護のためその上面までの掘削に限定することとし、これに伴い、調査は近世と思われる遺構や整地層を上面で確認するに留めた。地表からの掘削深度は裏口門付近で35~70cm、南北軸では30~40cm程度である。調査区は、園路部分を本体とし、他に園路側溝設置箇所についてもトレンチを入れている。また、裏口門・土橋門の石垣裾部でも園路側溝の改修により石垣下部が一部露呈したため、写真撮影・立面略図作成を行っている。調査面積は約220㎡である。

絵図では奥向の御広式に位置し、文化5年(1808)の二ノ丸火災以後は一部御居間廻りの一画にも組み込まれている。裏口門については主に「裏御門」「裏口御門」等と表記され、二ノ丸における表向き橋爪門に対して裏側にあたるという位置的な意味合いが窺える。また、宝暦9年(1759)、文化5年の火災に際しては門が焼失したという絵図表記も確認できる。

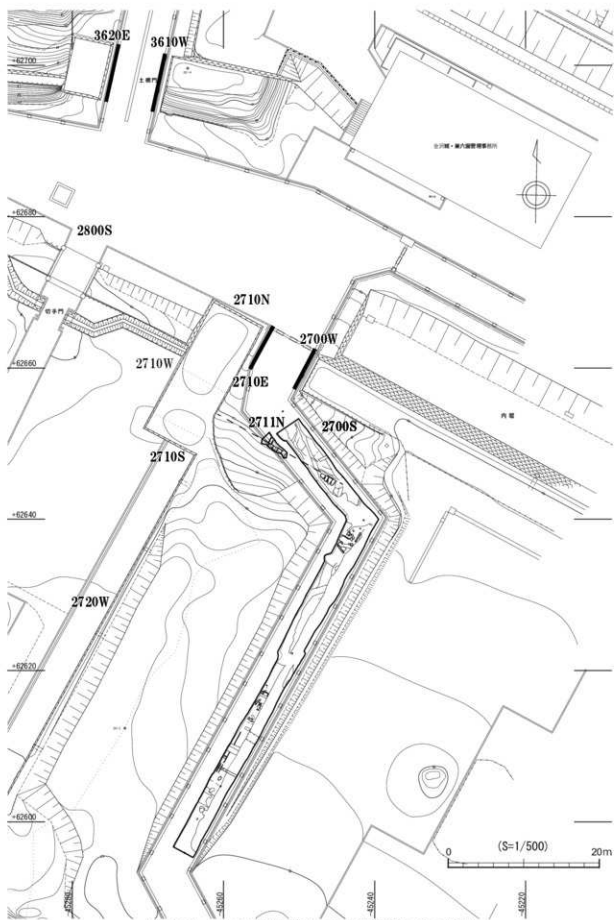
付近の発掘調査としては、昭和44年(1969)に石川県教育委員会と金沢大学が主体となって行われた二ノ丸南半部の緊急調査が挙げられ、二ノ丸御殿の礎石や石室、排水施設等が確認されている[石川県教育委員会1970]。いずれも二ノ丸園路調査区の東側にあたる。

本調査の主な調査成果として、裏口門南石垣(石垣ID:2711N)とその基礎、礎石、ピット、溝状遺構、溜枋状遺構等を確認した。いずれの遺構も調査の性質上年代を特定することは難しいが、火災痕跡が見られる土層に覆われていることから明治14年(1881)の二ノ丸御殿焼失時まで機能していた可能性がある。土層の状況を記録した部分については、基本土層は大別2層に区分した(第103・108・110図)。大別層は近現代層(I層)と近世の可能性のある層(II層)を確認し、地山は検出していない。

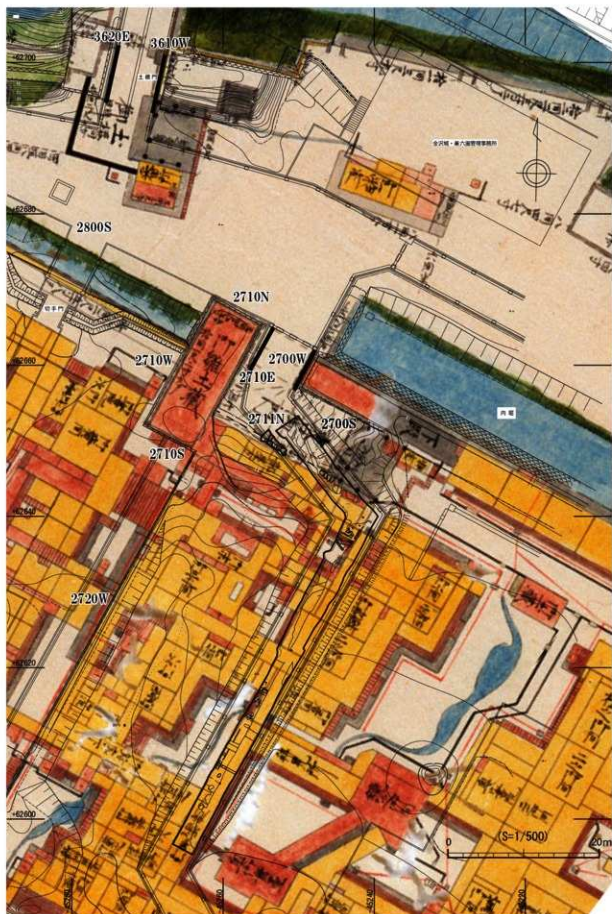
第2節 遺構

1. 裏口門南石垣(第101・102・105・106図 石垣ID:2711N)

調査着手以前の状況では、裏口門に関わる遺構は東石垣(西面)、西石垣(東面)が現存し、南石垣(北面)は近代以後の改変により破却され地上にその痕跡は認められなかった。本調査では、園路本体のトレンチと園路側溝トレンチ内で南石垣を検出し、以下遺構名としてはそれぞれ石垣1・石垣2と呼び分ける(第101・102図)。石垣1と石垣2の延長線から、裏口門南石垣の面は、裏口門西石垣の北東隅からおおよそ13.0m南の地点に接することが推測でき、また、裏口門東石垣の南西隅との間隔は約8.0mを測る。

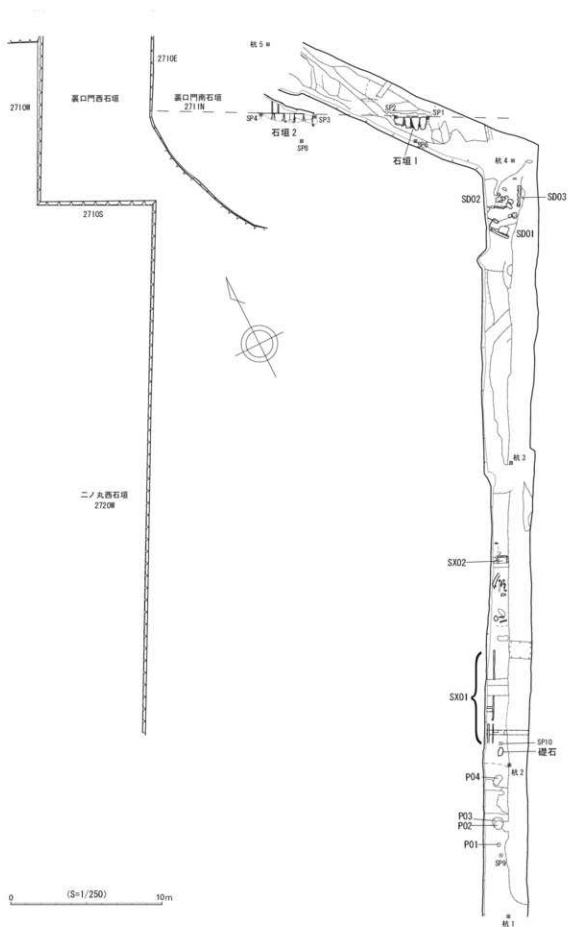


第99図 二ノ丸路調査区 調査区位置図 (S=1/500)

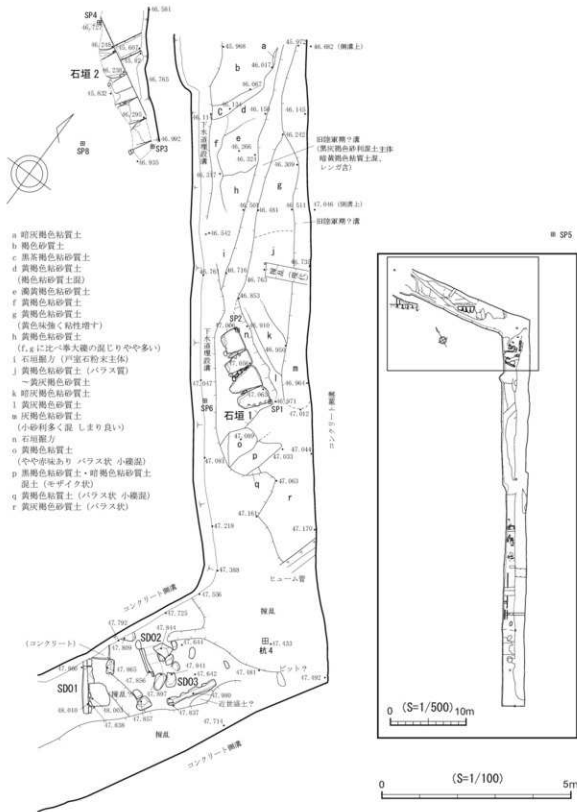


絵図：「御城中老分基絵図」（横山隆昭家蔵）

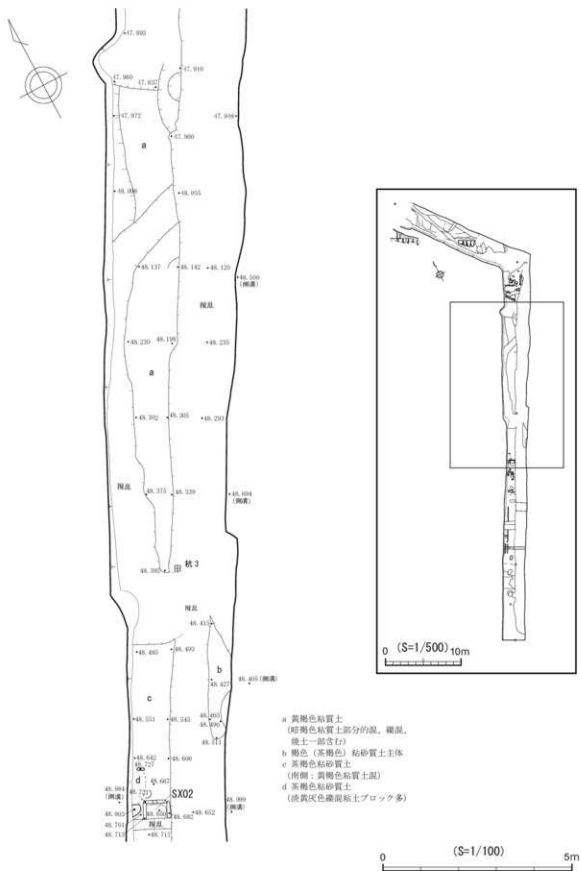
第100図 二ノ丸園路調査区 調査区・絵図照合図 (S=1/500)



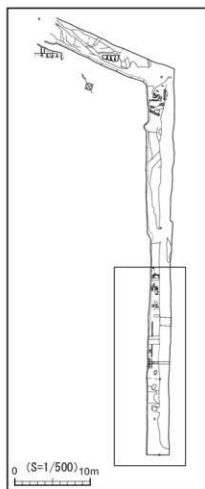
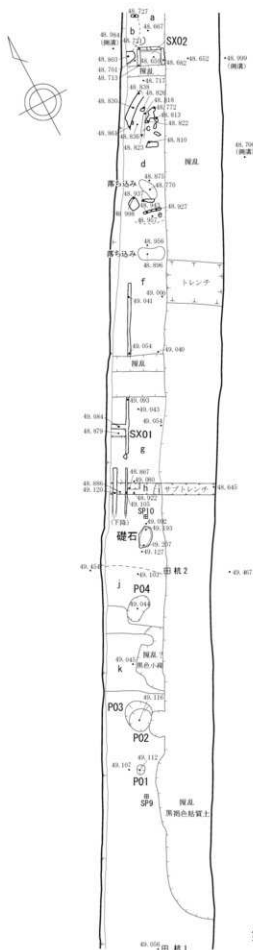
第 101 図 二ノ丸園路調査区 平面図 (S=1/250)



第 102 図 二ノ丸園路調査区 裏口門周辺平面図 (S=1/100)



第 103 図 ニノ丸園路調査区 中央部平面図 (S=1/100)



- SX01 暗褐色砂質土（黄土層）等
- SX02 上面炭化物層等
- P01 黒褐色粘質土
- P02 暗褐色粘質土（瓦・埴土混）
- P03 黄褐色粘質土主体（雑多含）
- P04 暗褐色粘質土（瓦・埴土混）
- a 茶褐色粘砂質土（南側；黄褐色系粘質土混）
- b 茶褐色粘砂質土（灰黄灰色雜混粘土ブロック多）
- c 白色泥
- d 黄褐色粘砂質土主体
- e 黄褐色粘質土主体
- f 茶褐色粘砂質土主体
- g 茶褐色粘砂質土主体
- h 黄褐色粘質土（小礫混）
- i 茶褐色粘質土（遺構?）
- j 黄褐色粘質土主体
- k 暗褐色土
- l 黄褐色土粘質土主体

第104図 ニノ丸園路調査区 南部平面図 (S=1/100)

裏口門南石垣の特徴（第105～107図）

裏口門南石垣前面の通路は、絵図表記から階段状に緩やかに東へ上がる様子が窺える。この高低差により、石垣1は石垣2より検出高が高いにもかかわらず、面が粗加工に留まり石垣基礎石の特徴を持つ。以下に各々の特徴を記載する。

第28表 二ノ丸園路調査区 石垣1・2（S1～S11）計測表

遺構	石番号	石加工	石材	面幅(cm)	面上面標高(m)	控え上面標高(m)	面加工特徴 他
石垣1	S 1	切石	戸室石	48	47.05～47.06	46.99	基礎石 粗加工 控え上面に矢穴4
	S 2	切石	戸室石	51	47.03～47.06	46.86	基礎石 粗加工
	S 3	切石	戸室石	41	47.04～47.05	46.97	基礎石 粗加工 控え上面に矢穴3
	S 4	切石	戸室石	62	47.00～47.04	46.99	基礎石 粗加工
石垣2	S 5	切石	戸室石(青)	(30)	46.24	46.18	ノミ加工
	S 6	切石	戸室石(青)	(50)	46.28	46.22	ノミ加工
	S 7	切石	戸室石(赤)	59	46.27～46.29	46.22	ノミ加工
	S 8	切石	戸室石(赤)	68	46.25～46.26	46.17～46.24	ノミ加工
	S 9	切石	戸室石(赤-青)	53	46.20～46.23	46.14～46.17	ノミ加工
	S 10	切石	戸室石(赤)	80	46.24	46.17	ノミ加工 東側上面切欠
	S 11	切石	戸室石(赤)	(20)	46.18	—	ノミ加工

石垣1（第105・106図、第28表）

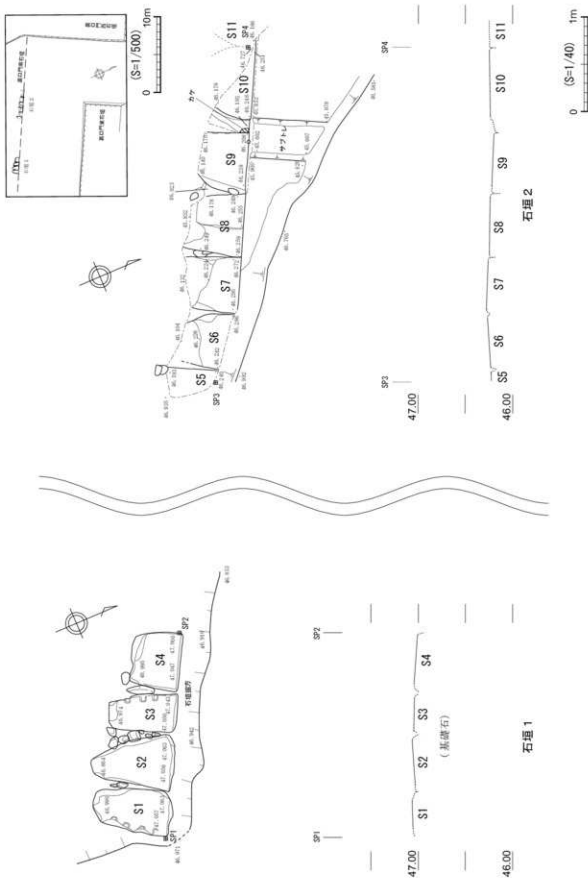
裏口門南石垣の東側で検出した。西端で裏口門西石垣から約16mを測る。石垣石は下水管の掘乱や煉瓦を含む近代以後の溝等の下で東西2.2m、南北0.9mの範囲で4石確認した（東からS1～S4）。各石垣石の計測値等は第28表に記載している。石垣石前面に25～30cm幅の設置時掘方を確認しており、面にノミ加工を施さず粗加工で留めていることから、地中に埋もれる基礎部分であると判断した。根石であるかどうかは不明である。掘方内は戸室石の加工で発生する屑や粉末を主体とし、5～15cmの河原石が充填されている。石垣石の控え部分にも同様の河原石が裏込めの栗石として確認できる。石垣石の上面は標高47.00～47.06mと、西から東へ僅かに高くなっている。

石垣2（第105・106図、第28表）

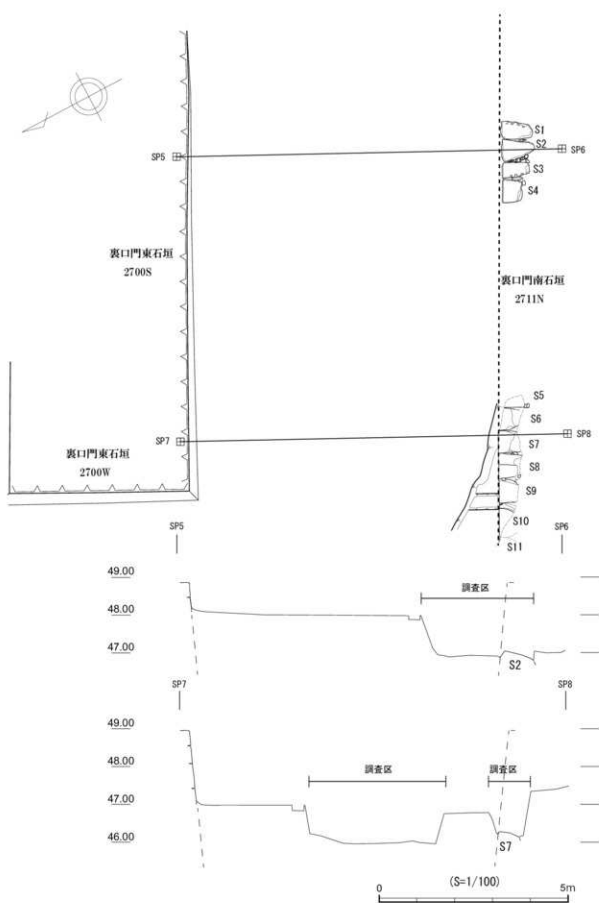
裏口門南石垣の西側で検出した。西端で裏口門西石垣から約7mを測る。石垣石は近代以後の掘乱土直下で東西3.8m、南北0.6～1.3mの範囲で7石確認した（東からS5～S11）。石垣石前面に設置時掘方は確認していない。面の加工については詳細な観察ができなかったが全て戸室石の切石で、全面的に均一なノミ加工が施されているように見受けられる。石材は赤戸室石と青戸室石、赤・青混合が混ざっている。石垣石の控え末端部分は未確認であるが、各石垣石の計測値等は第28表に記載している。S10は東側上面に切欠がなされる。石垣石の上面は標高46.18～46.28mと、西から東へと僅かに高くなっている。石垣1の石垣石上面レベルと比較することで、裏口門南石垣は根石の標高が西から東へ上がっていることが窺える。

2. 裏口門及び土橋門石垣掘部（第107図）

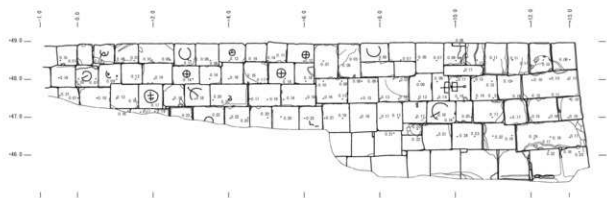
二ノ丸園路周辺では、公園整備に伴う園路側溝及び排水溜槽の敷設を原因として、裏口門東・西石垣及び土橋門東・西石垣の前面についてもトレンチを入れ、近代以後の土層を掘り下げた。その際、露出した各石垣基礎部分について写真撮影及び立面略図作成を実施した。本報告では、この略図を合成し作成された平成13年度の写真測量図を掲載する。



第105図 二ノ丸園路調査区 裏口門南石塚1・2 平面図・断面図 (S=1/40)



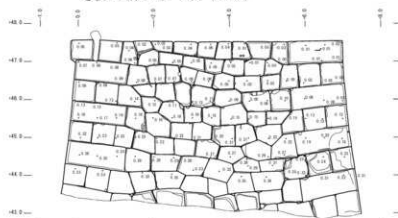
第 106 図 二ノ丸園路調査区 裏口門東石垣・南石垣間断面図 (S=1/100)



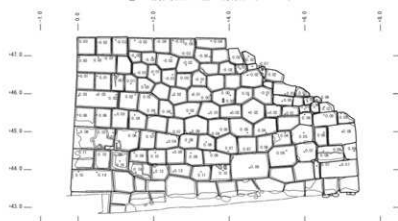
①裏口門西石垣 東面 (2710E)



②裏口門東石垣 西面 (2700W)



③土橋門西石垣 東面 (3620E)



④土橋門東石垣 西面 (3610W)



第 107 図 二ノ丸園路調査区 裏口門東・西石垣、土橋門東・西石垣立面図 (S=1/100)

3. 礎石・ピット (第108図)

調査区南部では、地表面から近代以後の整地層を約35cm掘り下げた標高49.10m付近で近世に遡る可能性がある黄褐色粘質土主体の整地層を検出し、これを基盤とする遺構として礎石とピット4基を確認した。P01は調査区南端から7.5m北で検出し、さらに北に向かってピット3基(P02・P03・P04)及び礎石が続き、調査区の軸にほぼ平行している。これらのピットは礎石の掘方及び採取痕と考えられ、遺構の間隔からP02・P03間にもう1基礎石あるいは採取痕が存在した可能性があるが、抜き取り以後の攪乱土によりその痕跡は確認できなかった。

第29表 ニノ丸園路調査区 礎石・ピット計測表

()は復元値

遺構	検出標高 (m)	長径 (cm)	短径 (cm)	埋土	備考
P01	49.11	30	20	黒褐色粘質土	P02～P04と埋土が異なる
P02	49.11	60	57	暗褐色粘砂質土	礎石採取痕か
P03	49.11	(72)	(72)	礎主体の暗灰褐色土	礎石掘方か
P04	49.11	72	46	暗褐色粘砂質土	礎石採取痕か
礎石	49.21	50	30	—	

P01

調査区南端から約5mの地点で検出している。検出レベルは49.11mで、長軸30cm、短軸20cmの略方形をなす。黒褐色粘質土を埋土とする。北方のピット群や礎石と列をなすことから、礎石の採取痕と考えられる。ただし、埋土が後述するP02～P04と異なることや、検出面での大きさの相違から、礎石列に関連する別の遺構である可能性も推測できる。

P02

調査区南端から6.1m、P01から心心距離で1.3m北の地点で検出している。検出レベルは49.11mで、長径約60cm、短径57cmの円形をなす。瓦片や焼土が混じる暗褐色粘砂質土を埋土とする。P03の南側に重なっていることから、P03が礎石掘方、P02が礎石採取痕と考えられる。遺構は、埋土の状況や直上を近現代層が覆うことから、近世末から存在した建物礎石が明治期の火災によって抜かれたものと推量している。

P03

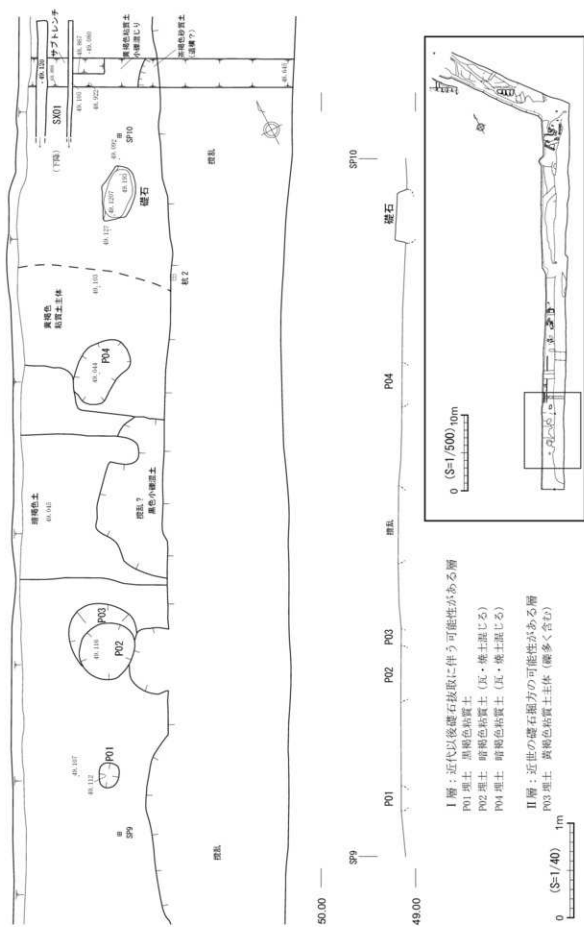
調査区南端から約6.3m、P01から心心間で1.45m北の地点で検出している。検出レベルは49.11mで、南側はP02が重なっており全形は遺存しないが復元直径約72cmの円形をなす。埋土は径10cm前後の礫を主体とする暗灰褐色土である。埋土は基盤層と同様の土で埋め返されているようにも見受けられ、基盤層の整地と礎石の敷設とが一体施工された可能性も推測できる。

P04

調査区南端から約9m、P01から心心間で4.2m北の地点で検出している。検出レベルは49.11mで、長径約72cm、短径約46cmの略円形をなす。P02と同様、瓦片や焼土が混じる暗褐色粘砂質土を埋土とする。

礎石

調査区南端から約11.8m、P01から心心間で約6.0m、P04から約1.8m北の地点で検出している。礎石の上面レベルは49.19～49.21m、石を据える基盤層である黄褐色粘質土主体の整地層検出レベルは49.12mである。礎石の形状は略楕円形で表出部分の計測値は長径約50cm、短径約30cmである。



I層：近代以後礎石採取に伴う可能性がある層

- P01 埋土 黄褐色粘質土
- P02 埋土 暗褐色粘質土 (瓦・粘土混じる)
- P04 埋土 暗褐色粘質土 (瓦・粘土混じる)

II層：近世の礎石掘方の可能性がある層

- P03 埋土 黄褐色粘質土主体 (礫多く含む)

第108図 ノノ丸園路調査区 礎石・ピット平面図・断面図 (S=1/40)

4. 溝状遺構・溜枡状遺構 (第109・110図)

調査区中央部では、地表面から近代以後の整地層を約60cm掘り下げた標高47.9m付近で溝状遺構3基(SD01・SD02・SD03)を検出した。これらは非常に近い位置にあるものの、周囲の攪乱層やそれに伴う基盤層の損壊などにより検出面から新旧関係を検証するには至らなかった。付着するコンクリートやモルタルの有無及び遺構の軸線等から、SD02については近世の石組溝である可能性を残す。

調査区南部では、地表面から近代以後の整地層を約35cm掘り下げた標高48.6m付近で溝状遺構1基(SX01)と石組の溜枡状遺構1基(SX02)を検出した。いずれも軸線は石垣軸と一致する。また、SX01とSX02間では、30～50cm程の石や不定形な落ち込みを検出したが、いずれも基盤層への混入あるいは攪乱の一部のように見受けられ、プライマリーな遺構とは認定しがたい。

SD01 (第109図)

淡色シルト粒を含む暗褐色粘質土を基盤とし、標高47.8m付近で検出している。溝の側板と思われる赤戸室石は長さ1.27m、幅13cm、高さ18cm以上を測る。北側に同種の青戸室石が接続して17cm程続くが、調査区外へ延びる。一部残存する溝底の石材も赤戸室石であるが、同一の石材かどうか不明である。石の間にモルタルが確認されることから、別の石を組み合わせているものと推測する。また、62×53cmの板状青戸室石が底板に重なるように置かれているが、溝との関係性は明らかでない。

SD02 (第109図)

淡褐色砂質土あるいは暗褐色粘質土を基盤とし、標高47.8m付近で検出している。溝の側板と思われる青戸室石は長さ80cm、そのうち切り欠き部分が13cm、幅6cm、高さ8cm以上を測る。付近には赤戸室石片が確認できるが、周囲に点在する河原石と同様、乱れた状況から同じ溝に関わるものとは判断できない。青戸室石を溝状遺構と仮定し、溝内にあたる部分にサブトレンチを入れているが、底板は確認していない。軸線は裏口門南石垣や二ノ丸西石垣とほぼ一致あるいは直角をなし、石材周辺にはモルタルやコンクリートは認められないことから、近世の石組溝である可能性は否定できない。

SD03 (第109図)

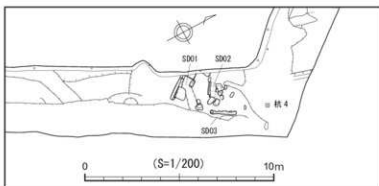
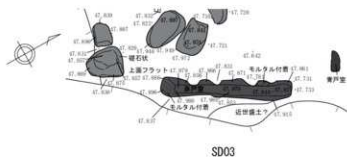
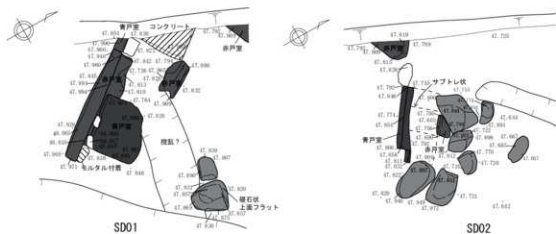
暗褐色粘質土を基盤とし、標高47.8m付近で検出している。溝の側板と思われる赤戸室石は長さ1.25m、幅12cm、高さ13cm以上を測る。周囲には40～50cmの河原石が点在し、何らかの遺構に関わる可能性はあるものの、いずれも乱れた状態で関係性は不明である。軸線は裏口門南石垣や二ノ丸西石垣と直角をなす、あるいはほぼ一致することから、近世の石組溝である可能性もあるが、石材にモルタルが付着していることから、近代以後に近世の石材を再利用して構築されたものと推測する。

SX01 (第110図)

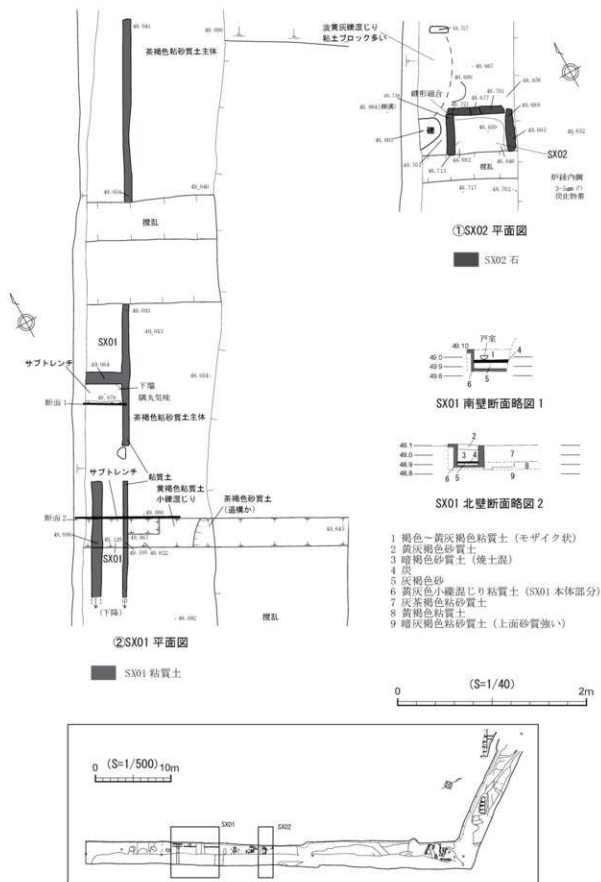
調査区南端から約11.5mの地点で検出した溝状遺構である。黄褐色系粘質土を主体とする土層を基盤とし、軸線は調査区とほぼ平行をなす。検出レベルは49.0～49.1mで、検出延長約6.1mを測る。黄灰色小礫混じり粘質土を素材とし、断面は箱形、南から4m付近に同素材で仕切りが付いている。南端は掘削停止面より深く潜っていたため確認していない。

SX02 (第110図)

SX01から約6m北の地点で検出した凝灰岩製の石組である。調査時は「石囲み遺構」とも呼称していた。SX01同様、黄褐色系粘質土を主体とする土層を基盤とし、軸線は調査区とほぼ平行をなす。南側は攪乱によって失われている。外形は東西72cm、南北(残存長)50cm、内形は東西53cm、南北(残存長)42cmを測る。石材は方形の各辺別個体を組み合わせるもので、北辺の長さが60cm、幅は各々8～10cm幅である。西辺と北辺は鉤型に組み合っているが、北辺と東辺は組み合わせが確認できない。北辺の中央には幅10cm、深さ3～5cm程の抉りが見られる。石組内部には焼土・炭化物を含み、遺構自体もこれに覆われていた状況から、機能時は内部が空洞の溜枡状であった可能性も推測される。



第 109 図 二ノ丸園路調査区 溝状遺構 (SD01 ~ SD03) 平面図 (S=1/40)



第 110 図 二ノ丸園路調査区 SX01 平面図・略断面図、SX02 平面図 (S=1/40)

第3節 出土遺物

1. 概要

二ノ丸園路調査区ではⅠ層（近現代層）、Ⅱ層（近世の可能性のある層）の二つの大別層があるが、遺構面の保護のために、近世と思われる遺構や整地層は上面での確認に留められているため、確実にⅡ層からの出土とされる遺物はなく、すべてⅠ層からの出土である。土器・陶磁器・瓦・金属製品・ガラス製品等が出土し、SX01やSX02付近からは焼けた壁土が出土している。熱を受けて変色・変形したり、灰等が溶着している遺物が多くみられるのは、主に明治14年（1881）の火災によるものと思われる。以下、材質ごとに記述していく。なお、土器・陶磁器・瓦の器形・胎土分類、年代観については、鶴ノ丸第1次調査区に準じている。（第29～31図）

2. 土器・陶磁器〔第111・112図、第30表〕

すべてⅠ層からの出土である。

P129～P139は磁器である。P137～P139以外は被熱している。P129～P131は瀬戸・美濃染付碗に赤の後絵付を施していて、旧陸軍で使用されていたと思われるものである。P129は体部片のために圏線・縦線は不明であるが、数字の「3」が描かれている。P130は圏線と数字かと思われる部分が残っているだけである。P131は熱によって圏線が赤から黄褐色に変色している。P132・P133は同じく瀬戸・美濃染付碗で焼けている。P132は広東碗の底部で、外底に白玉（焼継材）により記号が描かれている。高台端部が細かく割れているのは意図的に打ち欠いたものであろうか。P134は瀬戸・美濃染付小碗であり、被熱によって内外面とも釉が沸き、溶着物も多い。P135は17世紀末の肥前磁器と思われる染付小杯で、外面全体に灰が付着し溶けた緑色の自然釉が内面に流れ込んでいる。他の陶磁器が近代を主体としているのに対して古いものである。P136は瀬戸・美濃染付皿に赤の後絵付で圏線と縦線（2本以上）、「1」を描いている。旧陸軍のものである。P137は小片ではあるが再興九谷の色絵染付皿である。底部中央が欠損しているため不明であるが、蛇の目凹型高台と思われる。P138は肥前染付段重である。P139は白磁の菊花形紅皿である。18世紀末から19世紀初頭のものであろう。

P140～P147は陶器である。P140は灰釉の碗で、外面には一部白泥を掛けて鉄絵を描いていると思われる。P141は灰釉の合子底部で、餌猪口の可能性もある。被熱により全面に灰等が付着している。P142は灰釉の急須蓋でつまみ部分は欠損している。P143は肥前の播鉢で、口縁付近にのみ鉄釉が掛かる17世紀前半の製品である。P144は越前の鉢で、3個か4個の足が付くと思われる。内外面とも鉄泥を刷毛塗りしている。P145～P147は再興九谷の製品である。P145は灰釉の植木鉢で、外底に判読不明ではあるが墨書がある。P146・P147は甕で、P146は灰釉が、P147は茶色と黒色の鉄釉が掛かっている。どちらも被熱していて、図示したもの以外にも破片があるが接合しない。

P148は土師器皿の口縁片である。小型ではあるがB類と思われる。胎土には海綿骨片を含んでいる。口縁には油煙が付着している。17世紀初頭のものである。

P149はSX02上面付近から出土した陶磁器のボタンである。わずかに透明感のある白色で、外径1.12cm、4つ穴で、表面は滑らかであるが、裏面には穴の付近に細かい凸凹がある。被熱しており、緑色の溶着物がある。図示したものの他にも同様のボタンが4点出土している。これらはブロッサーボタン（Prosser Buttons）と呼ばれるもので、その中でも4つ穴皿型（Four-hole dish type）に分類される〔Sprague 2002〕。ブロッサーボタンは1840年にイギリスで考案され、その後フランス等で大量生産されるようになり、1850年代には欧米で広く普及している。今回出土したものは、旧陸軍の被服品に属するものとみられる。

3. 瓦 [第113図 T233、第30表]

パンケース1箱程度出土している。小片が多く全体のわかるものは無いが、燻瓦と軸葉瓦が混在していて、中には熱を受けたためか軸が縮れているものもある。図示した T233 は燻瓦で、丸瓦の先端部のみである。胎土は灰白色で焼成不良の感を受ける。玉縁部外面に「㊸」の刻印がある。

4. 金属製品 [第113図 M009～M013、第30表]

M009・M010 は、断面方形の棒状鉛製品である。M009 は3面をへら状工具で平らに整えてあり、1面には2枚を接合している痕跡が残っている。M010 も3面をへら状工具で整えているが、中央でずれている。用途は不明である。M011～M013 は鉄釘である。M011 は体部断面が円形で頭部は扁平になっている。M012 は体部断面が方形で頭部を巻くように作っている頭巻釘である。M013 も体部断面方形の頭巻釘と思われるが、頭部が欠損しているため明確ではない。

図示していないが SX02 の上面付近からは、薄い銅板が火を受けて焼土や炭とひと塊になった状態のものが出土している。



199907-B002 P129



199907-B004 P130



199907-B007 P131



199907-B010 P132



199907-B005 P133



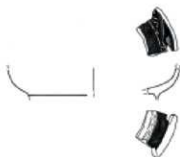
199907-B003 P134



199907-B001 P135



199907-B008 P136



199907-B006 P137



199907-B009 P138



199907-D009 P139

P129・P134・P135: I層 SX02

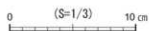
P130・P133: I層杭2・3間

P131・P136・P139: I層杭4・5間

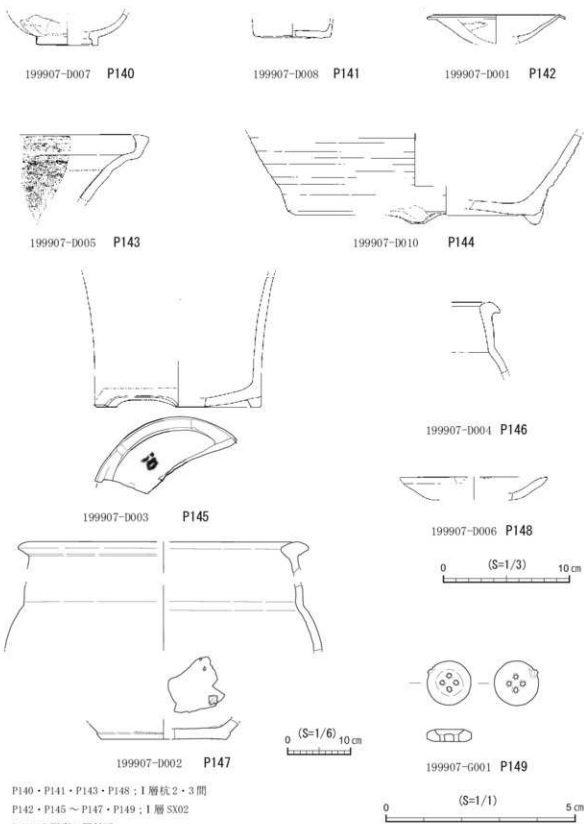
P132: I層裏口門西石垣精査(東面)

P137: I層杭3・4間

P138: I層裏口門付近



第111図 二ノ丸園路調査区 出土遺物実測図 土器・陶磁器 I (S=1/3)



P140・P141・P143・P148；I層杭2・3間

P142・P145～P147・P149；I層SX2

P144；I層裏口門付近

P147はS=1/6

P149はS=1/1

以下S=1/3

第112図 二ノ丸園路調査区 出土遺物実測図 土器・陶磁器2 (S=1/1・1/3・1/6)



199907-D011 T233 釵

0 (S=1/6) 10 cm



199907-M001 M009

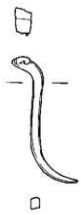


199907-M002 M010

0 (S=1/3) 10 cm



199907-M003 M011



199907-M004 M012



199907-M005 M013

(S=1/1)

0 5 cm

T233: I層杭3・4間
M009・M010: I層裏口門西石垣精査
M011～M013: I層SX02

T233はS=1/6
M009・M010はS=1/3
M011～M013はS=1/1

第113図 二ノ丸園路調査区 出土遺物実測図 瓦・金属製品 (瓦S=1/6、金属S=1/1・1/3)

第4節 小結

1. 裏口門と南石垣

第1節でも述べたように、調査当時の地表面標高は、裏口門付近で46.5～47.0m、二ノ丸西（数寄屋屋敷東）石垣に沿った部分では北側で48.0m、南側で49.5mと、南へ向けて上がってゆく。第7章でも記載する二ノ丸西縁の数寄屋屋敷では概ね46.2mと、現況で約3mの段差がある。そして本調査で検出した近世に遡る可能性を持つ遺構や整地層の上面は、裏口門付近で46.2～47.0m、調査区南へ向けて48.3m、49.1mと御殿中心部に向けて高まっている。

石垣1の各石上面レベルは凡そ47.00～47.06mと、西から東へと僅かに高くなっている。これに関して、二ノ丸階段の調査報告[石川県金沢城調査研究所2011c]によれば、近世後期の二ノ丸面は47.88m以上であることから、石垣1の位置から門を抜け、さらに御殿の方へ勾配が付いていたものと推測できる。なお、絵図（第100図）によると、上記斜面部分に階段の表現が見える。また裏口門本体部分南西部が調査区と重複しているが、これらに直接関わる遺構は確認できていない。

2. 礎石・ピット等について

調査区南部では、二ノ丸西（数寄屋屋敷東）石垣と平行する礎石・ピットを検出した。このうちP02・P03の関係からは、礎石が抜き取られ、明治14年（1881）の火災に係る土で埋められた状況が推測された。遺構周辺は、絵図（第100図）との照合では、文化5年（1808）に再建された二ノ丸御殿の一角で、奥能舞台に面する見物所あたりに相当する。明治5年（1872）頃の旧二ノ丸御殿の平面を描いた「金沢城廓内絵図面」『金沢城旧城廓総図並建物部分図等』（石川県教育委員会蔵）においてもあまり変化が見られない箇所であり、遺構は上記の建造物に関連する可能性があるが、上面の検出のみに留めたこともあり、確証は得られていない。礎石・ピットの北側に位置するSX01・SX02についても、明治14年火災以前に機能していたと推測される遺構であり、御殿建造物の縁辺部に相当するが、外側となる可能性も否定できず、性格は判然としない。

3. 溝状遺構等について

調査区中央部では、地表面から近代以後の整地層を約60cm掘り下げた標高47.9m付近で溝状遺構（SD01・SD02・SD03）を検出した。SD01とSD03にはコンクリートやモルタルが付着しており、この2基は近代以後に敷設あるいは改修された溝の一部と見られる。SD02については石垣軸とも整合し、近世の石組溝である可能性を残す。SD01とSD03についても、戸室石を多用することから、近世の石組溝用材を利用している可能性がある。

4. 遺物について

本調査区の出土遺物は多くないが、火災により被熱したと考えられる資料が比較的まとまって認められた。出土状況や遺物の特徴から、これらは明治14年（1881）の二ノ丸火災により廃棄されたと推定される。このうちには算用数字が絵付された磁器染付製品やボタン等が含まれる。

ボタンについては、調査時より素材等詳細が判然としなかったが、報告をまとめるにあたり、北米等における調査研究に接し、1840年にイギリスで開発された陶磁器に属する製品と判断した。

国内の報告例については十分に確認できていないが、色調が白色系統で、ガラス製・合成樹脂製とされているボタンの中に、本製品が含まれる可能性がある。産地については、特に量産したフランスが候補に挙げられるが、なお検討の余地がある。本製品の詳細を巡っては、旧陸軍被服品の需給体制等とも関連し、多くの課題がある。

第7章 数寄屋屋敷調査

第1節 調査の概要

数寄屋屋敷調査区は、金沢城公園整備事業に係り平成13年(2001)に発掘調査を実施した風呂屋口門、数寄屋門北、司令部門南の3地点と、前2地点に隣接する工事立会地点である溜枮1・2を対象とする。いずれの地点も17世紀前半の創建とされる二ノ丸西石垣(石垣ID:2720W)の西、近世の絵図表記に見える「数寄屋屋敷」に位置する。これらの地点は、調査時に「風呂屋口門等(地点名)」と呼称していたが、本書では、全地点を包括する名称「数寄屋屋敷調査区」として報告する。

郭の北部には、切手門前堀の東に土蔵の土台となる裏口門西石垣(石垣ID:2710EWSN)、西に切手門西櫓台(石垣ID:2810EWSN)が配され、南部に現存する旧第六旅団司令部建物正面入り口に合わせて旧陸軍が約16m西側から移設した切手門が、堀の中央やや東寄りに位置する。郭の最長部は南北80m、東西55mを測り、南に向かって先細る形状をなし、南西下方に位置する玉泉院丸との間に配備された数寄屋門へと続く。

平成22年の現況測量時点では、司令部建物を中心とする郭全体の標高はおおよそ46.2m、二ノ丸西石垣天端は48.8mと、約2.6mの段差がある。そして、司令部建物以南は徐々に下がり、南端で45.3m、数寄屋門付近では43.1mと、玉泉院丸方面へ向かって下る地形となっているため、本報告の風呂屋口門地点にあたる石垣南部の石段部分では、石段上が48.8m、下が45.3mと3.5mの段差となっている。

また、数寄屋屋敷では、北西部で発掘調査、南部でボーリング調査がなされている。金沢大学が昭和52年(1977)に実施した学術発掘調査〔佐々木達夫1981〕によれば、二ノ丸西石垣前面は地表面から2.6m掘り下げても地山に到達しておらず、石垣創建当初は空堀が存在し部屋方の増築等諸所の要因により埋め立てられたものと推測される。本報告の調査以後に実施したボーリング調査〔石川県金沢城調査研究所2015c〕でも、南部の溜枮2付近(BP-70)の地表面と地山との間に少なくとも厚さ1.3mの盛土が存在し、郭全体が近世、近代を経て一定の改変を受けていることが確認されている。本報告にあたり、土層の解釈等調査成果については、これらの知見も入れ再考したが、調査時の解釈と大きく相違はない。以下に各調査地点の概要について述べる。なお、土層の大別層番号は各調査地点で完結し、各土層断面図の細別層番号については、他に対応するものではない。第117・121・122図のように同一層あるいは対応層が判明している場合は各図に付記する。

1. 風呂屋口門地点(第114～123図)

二ノ丸御殿空間と数寄屋屋敷を連絡する通路部分にあたる石段及びその周囲に設定したトレンチを風呂屋口門地点と称する。調査時は「風呂屋口門」と呼称していた。

調査の原因は、公園整備の一環として公園全体の排水機能を整備するにあたり、数寄屋屋敷においても排水路や溜枮の敷設が余儀なくされたこと、また石段を園路として供用するために石段そのものの現況把握が必要となったことである。そのため、調査の主な目的を石段の構築方法や時期等の手がかりを得ることと定め、石段石加工状況等の表面観察に加え、石段と石垣との関係、石段最上段や最下段周辺の土層状況等を確認した。その結果、石段は近代以後に修築されていることが判明した。また、石段下部では二ノ丸西石垣面に沿って北から南へ流れる水路として敷設された石組溝を検出し、石段と同時施工されたものと確認した。

なお、園路側溝の排水溜枮設置に伴う工事立会地点である「溜枮1」の調査は、風呂屋口門地点の北西隅に隣接するため、遺構や土層の解釈等について整合性を持たせた上で合わせて成果を記載する。調査面積は溜枮1を含めて約73㎡である。

基本層序

風呂屋口門地点では、確認した土層断面を基に、基本層序を大別2層に区分した。大別層は近現代層（Ⅰ層）と近世層（Ⅱ層）を確認し、地山は検出していない。Ⅰ層は、表土及び近代以後造成土のうち石段修築以後の土層（Ⅰa層）と石段及び石組溝敷設に伴う土層（Ⅰb～Ⅰe層）と大きく2つに区分でき、そのうち後者は近代路面または路盤（Ⅰb層）、石段敷設に係る整地土（Ⅰc層）、石段の内部石組溝敷設に係る掘方埋土（Ⅰd層）、石段周辺の大規模な盛土（Ⅰe層）に細分した。Ⅱ層は近世盛土で、路面となる上部土層は削平を受け確認していない。

2. 数寄屋門北地点（第114・115・124～127図）

数寄屋屋敷敷南から玉泉院丸方面へ降る通路の中途、二ノ丸南居間先土蔵下に所在する数寄屋門の北部に設定したトレンチを数寄屋門北地点と称する。調査時は「数寄屋門北」と呼称していた。調査の原因は、公園整備の一環としてこの通路に排水路及び排水用溜橋を設置することである。近世以来の通路であることから、路面にかかわる遺構や路盤等の遺存が想定されたため、通路の軸線に沿って中央部に限定してトレンチ掘削し、近世の可能性のある土層を確認したところで掘削を停止することを前提に調査を進めた。主な調査成果として、通路の足がかりとなる石段やその抜取痕、通路を横断する石組溝等を確認した。

なお、調査開始前に実施した園路側溝の排水溜橋設置に伴う工事立会地点である「溜橋2」は、調査地点北部に隣接するため、この地点に含めて報告する。調査面積は溜橋2を含めて約20㎡である。

基本層序

数寄屋門北地点では、確認した土層断面を基に、基本層序を大別2層に区分した。大別層は近現代層（Ⅰ層）と近世の可能性のある層（Ⅱ層）を確認し、地山は検出していない。また、Ⅰ層は表土から近代以後造成土（Ⅰa層）、近代路面及び路盤（Ⅰb層）、近代または近世の路面及び路盤（Ⅰc層）に、Ⅱ層は近世の可能性のある路面及び路盤（Ⅱa層）、Ⅱa層より古い近世の路面及び路盤（Ⅱb層）に細分した。

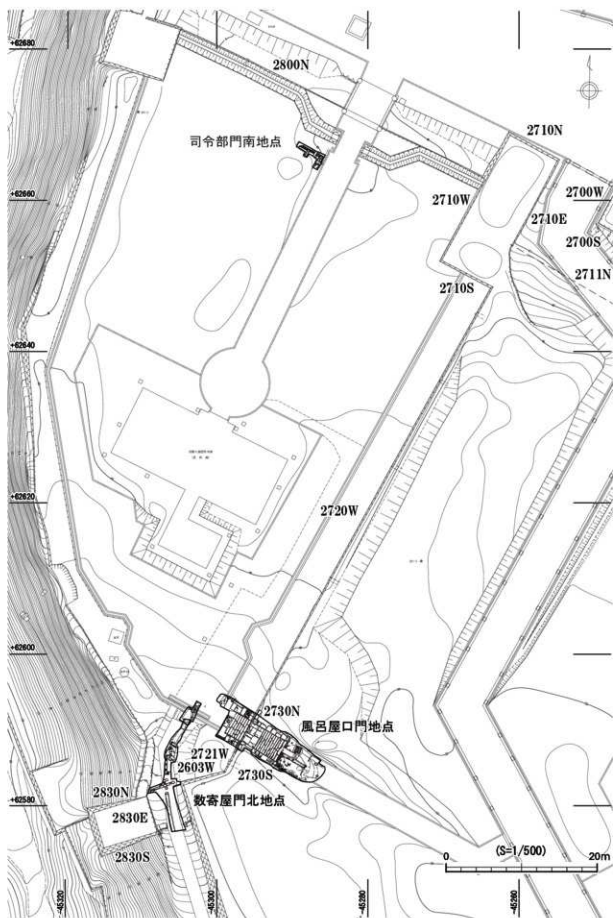
3. 司令部門南地点（第114・115・128～130図）

現存する切手門の南園路脇で近世後期には二ノ丸西部の部屋方に該当する位置に設定したトレンチを司令部門南地点と称する。調査時は「司令部入口門」と仮称していた。調査の原因は、園路整備に伴う表土すき取り工事中に石組の一部が露出したことであり、これを受け詳細調査を実施した。調査では表出した石組溝の規模確認のため、園路に直交して西側に長さ4.2m、幅0.8～0.9mのトレンチを設定し、遺構の状況に合わせて部分的に南にも拡張した。その結果、石組溝が近代の遺構と判明したことから、園路沿いに長さ2.5m、幅0.9mまでトレンチを拡張し、石組溝の基盤層を掘り下げ、地表から45cm程の深さで近世に遡ると思われる路盤と、これに伴う敷石状石材を確認した。調査面積は約6㎡である。

なお、これらの調査に伴い、旅団司令部建物南に現存する井戸1基、城内から持ち込まれた井戸の部材について実測調査を実施しているが、これらについては城内の井戸跡に関する基礎的研究としてすでに公開されている [宮川・西田 2015]。

基本層序

司令部門南地点では、3か所で確認した土層断面を基に、基本層序を大別2層に区分した。大別層は近現代層（Ⅰ層）と近世層（Ⅱ層）を確認し、地山は検出していない。また、Ⅰ層は表土から近代以後造成土（Ⅰa層）と近代路面または路盤（Ⅰb層）、近代または近世の盛土（Ⅰc層）に、Ⅱ層は近世路盤（Ⅱa層）、近世盛土（Ⅱb層）に細分した。



第 114 図 数寄屋敷調査区位置図 (S=1/500)



天保元年「御城中老分基絵図」横山隆昭家藏

第 115 図 教寄屋敷調査区位置図・絵図照合図 (S=1/500)

第2節 遺構

1. 風呂屋口門地点（第116～123図、第31・32表）

（1）石段

石段1（第116～123図、第31表）

石段の位置と調査方法

石段は、二ノ丸西石垣(石垣ID:2720W)の中途に敷設されている。その位置は、石垣南端から北方へ5.2mから8.2m間で、3.0mの幅をもつ。二ノ丸西石垣は石段北端から北方の裏口門西石垣(難土蔵)(石垣ID:2710S)まで約65mの長い切石積み石垣が続く。石段設置箇所では二ノ丸西石垣と一体的に構築されている風呂屋口門石垣北面、南面(石垣ID:2730N,2730S)が石段の側壁面として機能している。

調査の目的は、石段や石垣の表面観察及び発掘調査によって、石段の構造や構築時期等の手がかりを得ることにあった。そのため、調査の方法として、まずは石段中央軸に1.4mの幅で施されたモルタル舗装を除去し、さらに石段の最上段と最下段の状況を把握するため、土層確認用のアゼを残しながらトレンチの掘削を行った。石段上部東では、最上段の石設置状況を確認するため、東西5m、南北4.5mの範囲で表土除去を行い、石段中央付近から、石段と同軸方向に幅0.5m×長さ3.8mのトレンチを設けた。石段下部では、南北西の各方向に1m幅のトレンチを設け、石段敷設にかかわる土層を確認した。

石段の規模

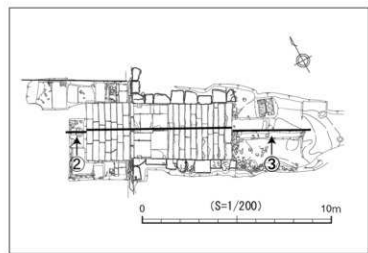
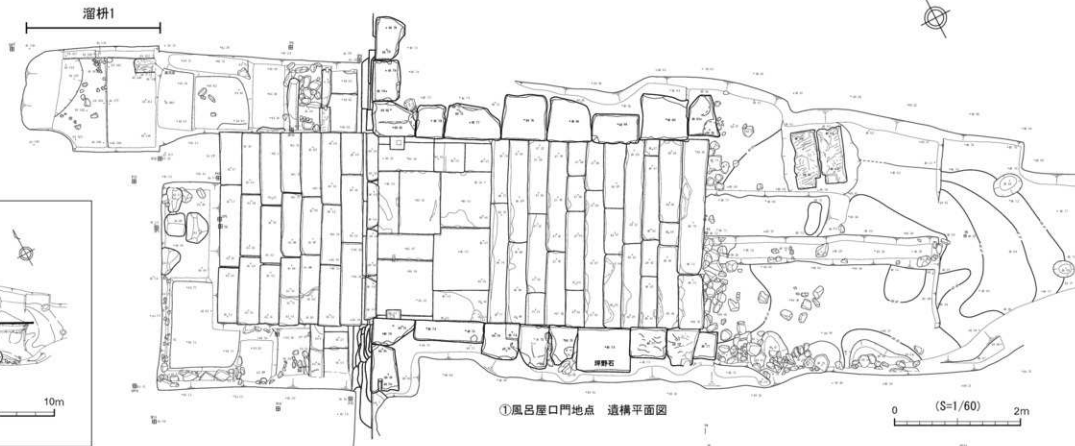
石段最下段は、調査前から西端でわずかに表出していたが、この下に基礎石としてもう一石検出した。石段としては調査前と同様、踊り場より上が11段、以下が8段の計19段であるが、最下段と面が揃い段数としては数えられない根固め様の石を合わせて、高さ3.95m、平面長にして7.7mを確認した。なお、本報告では石段石の遺構説明に際し、根石を段数に数えず、踏板として機能する最下段を1段目、踊り場を8段目、最上段を19段目として記述する。石段石は人の通行による磨滅が進行していると見られ、目視でもほとんどの段で中央部付近がやや凹んでいることが確認できる。このことから、石段中央軸のモルタル舗装は石段設置以後に補修として施されたものと推測できる。

各段の石の構成は第31表のとおり2～4石の縁石状の石材を使用する。長さは20cmに満たないものもあれば、最上段のように2mを超える石もあり、一定ではない。また、蹴上(厚さ)については18段目が16cmと最も薄く、中間的なもので18～20cm、8段目(踊り場)と10～14段目では21～23cmの厚みを持ち、階段の規格としてはばらつきが目立つ。

石段の構造

石段を構成する主な石材は赤戸室石である。異なる材を使用する場合についてはその旨記述する。

石段下段の基礎は、礫混じりの整地土上に、基礎石として石段石と同類の直方体をなす石材を据え置くもので、石段石西端の蹴上最下段は基礎石の直上に積み上げられている。西端の根石は、44.8mのレベルで礫混じり土を基盤として石段の北側に1石、南側に2石据え置かれていた。石の間には礫混じり土が隙間なく充填されており、南側の基礎石下には面15×20cmの切石材も見られる。礫混じり整地土とともに基礎石下の根固めを意図したものと見られ、基礎石設置はこれらの整地と一体の施工と推測できる。石段下段の南北それぞれの側面(石垣ID:2730S・2730N 第118図)は、西端の基礎石とほぼ同じ設置方法で、整地土を挟みながら基礎石を設置し、その上に切石が積まれている。設置レベルは北側で44.8m、南側で44.6mと、西側と北側がほぼ同じであるのに対し、南側が低くなっている。下段側面の石面の形状や大きさは、階段の形状に合わせて一つ一つ異なる。下方に位置する石材は大振りで五または六角形の横に長い形状である。各踏板直下の石は基本的に上部が鉤型の断面形態を呈し、さらに下部にも切り欠きを入れた石も見受けられ、上下の石材との接点を直角に欠くこと



※断面図は右側立面図を7.6軸 (3P3-4) と、左側断面図を (3P3-2)、土段 (3P5-4) を合成したものである。

②石段1下由央サトレンシ北壁土層断面図

- I a ~ I e 期は後の石・埴代寄
 I a1 赤土層 (除去済) 【石段設置以後 第 121 図I-2の I a1 層対比】
 I a2 埴代色粘土 (厚 1~5cm 未満少量層状) 【石段設置以後 第 121 図I-2の I a2 層対比】

- I e 期：石段改修時の整地土 (太線が I e 層上面を示す)
 I e1 円礫層 (厚 1~5cm の互角形状の埴代色土)
 【石段前期の表土が、第 121 図I-2の I e1 層対比】
 I e2 埴代色粘土 (厚少量層状)
 I e3 埴代色土 (厚 5mm 以上の散粒層状)
 I e4 埴代色土 (厚 5~15cm の大粒厚石・緑灰色粗粒質燧岩ブロック集中)

③石段1上中央北壁土層断面図

- I a : 古代以後の土層
 I a1 埴代色砂質土 (粗粒シルト質土ブロック層状)
 I a2 黄灰色シルト質土
 I a3 埴代色砂質土 (厚 5~12cm の緩少量・塊状・細粒質含む) 【石段設置時の整地土】
 I a4 埴代色砂質土 (小礫・塊状含む)
 I a5 黄灰色シルト質土
 I a6 埴代色砂質土 (I a7 層ブロック、厚 5~15cm の石含む)
 I a7 埴代色砂質土 (小礫含む)
 I a8 埴代色砂質土 (小礫含む)

- I b : 近世整地土
 I b1 黄灰色粘質土 (褐色土粒・灰白色粘質土ブロック含む、上面から露出せず)

②石段1下中央北壁土層断面図

第 31 表 敷寄屋敷調査区 風呂屋口門地点 石段1 石計測表

年代別設置 (V) (層別設置)	層別設置		石の計測 (1 下土層埋込土層断面図 10m)			定尺	特殊事情
	層別設置 (1) (層別設置)	埋込	埋込	埋込	埋込		
10	14.4	1262	1272	1281	1282	2.0 (1221~827)	部分埋込
17	16.9	1315	1285	1285	1285	6.0 (1229~27・1292)	部分埋込
18	18.7	1437	1267	1267	1267	2.0 (1161~1123)	部分埋込
19	20.6	1515	1265	1265	1265	2.0 (1088~71・1113)	部分埋込
11	20.9	1481	1272	1262	1262	2.0 (1084~215)	部分埋込
12	21.5	1467	1267	1267	1267	1.0 (1021~124・127・361)	部分埋込
13	21.6	1462	1265	1265	1265	2.0 (1088~1122)	部分埋込
14	21.9	1455	1263	1263	1263	3.0 (1320・138・471)	部分埋込
16	23.6	1532	1267	1267	1267	2.0 (1088~128)	部分埋込
9	25.6	1613	1263	1263	1263	2.0 (1088~100)	部分埋込
8 (編入層)	25	1487	1265	1265	1265	縁石(厚 112・111・71)	部分埋込
2	26	1471	1267	1267	1267	2.0 (1021~111・122)	部分埋込
6	27	1455	1261	1261	1261	2.0 (114~102・103)	部分埋込
5	28	1457	1272	1262	1262	2.0 (109・94・113)	部分埋込
4	18	1453	127	1262	1262	2.0 (105~103・110)	部分埋込
3	21	1445	29	1262	1262	2.0 (117~89・93)	部分埋込
7	18	1455	127	1262	1262	2.0 (108~106・106)	部分埋込
1	20	1445	43	1261	1261	2.0 (1098~128・361)	部分埋込
埋込層					49	2.0 (112・112・112・112・112・112・112)	部分埋込

第 116 図 敷寄屋敷調査区 風呂屋口門地点 遺構平面図・中央断面図 (S=1/60)

で石の据わりを良くしているものと見られる。石段の内部構造は不明であるが、最下段の検出状況から、礫混じりのしまった土と延石状の基礎石を基盤として石材を組み上げていったものと推測される。

石段8段目にあたる踊り場は、標高46.55m、幅2.9m、奥行1.95mを測り、西端にほぼ規格が揃った緑石を配し、内部はランダムな規格の切石材が嵌め込まれている。内部中央付近には切欠きが入った石材が見られる。石材は、表面観察ではいずれも戸室石と見受けられる。踊り場南北端には、西端から35cmの位置に周囲の石より2cm程高く23cm四方の凝灰岩と見られる石材が嵌め込まれ、各々の中央付近に5～6cm四方の枘穴が穿たれている。枘穴は必ずしも石の中央に位置しておらず、北側は東へ、南側は西へずれている。また、踊り場中央付近で、叩くと他より低音となる箇所があり、内部が部分的に空洞になっていると見られる。

石段上部については、最上段19段目の背後に東西方向に幅4.7m、長さ5.0mのトレンチを入れ、また石段南北の石垣についても露出する東端の石垣石の周辺にトレンチを入れて、石段石や石垣石の設置状況を確認した。石垣石東側では、表土下に河原石が乱雑に混入する整地層を確認した。また、石段石背後の整地層は、東へ3m以上にわたり同一と思われる近代層が続く。ただし、石段背後約50cmの範囲には、同一層の中に10～25cm程の河原石がびっしりと入れられ、石段設置に伴う一連の整地を行う中で石段背後には根固めとして石を混ぜ込んだものと推測する。

石垣との関係

二ノ丸西石垣は、石段設置個所で東へ折れ、出角を形成している。踊り場より上段では、南北それぞれの石垣面が石段の壁面となって最上段まで続く。南側の石垣天端には城内では使用場所が限定される坪野石が1石見られる。石段踊り場西端は、石垣西面と面を揃える。前述した石段踊り場南北2か所の枘穴直上にあたる石垣面には標高48.5mの位置に同様の枘穴が穿たれ、これらは対で門扉等出入口に設置された構造物の取り付け部分であったものと推測できる。石段の下段は石垣西面に取り付くように設置されており、隙間にはモルタルが注入されている。また、トレンチ調査により、石段下部で石垣に沿って敷設された石組溝を確認した。石組溝についての詳細は次項で述べる。

石段下部の廃絶状況

石段は、調査着手前状況では石段下地表面から約1.3m、標高46.5mで奥行1.8mの踊り場を持ち、踊り場上が11段、下が8段と、計19段が表出していた。最下段はほとんど土に埋もれ、部分的に表面が露出している状態で、石段下地表面から石段上まで高さ3.6m、平面長は7.7mであった。現況では、次項で詳述する石垣沿いの石組溝は埋もれ、水路としての機能は失われていたが、石段としては、モルタルによる表面の舗装や隙間の補修等、手を入れられながら今に至るものと見られる。

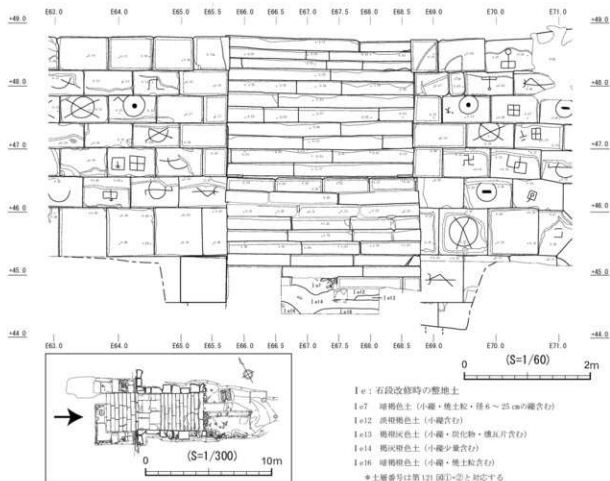
(2) 石組溝 (第119・120・122・123図)

石組溝1A・石組溝1B

上述の石段周辺について、近代以後の土層掘り下げが進むと、石垣に沿って石段南北にそれぞれ石組溝を検出した。調査着手前には地中に埋もれていたものである。いずれも石段の下へ続くため同一の遺構である可能性を考慮し、調査時は「石組溝1A」(北側)と「石組溝1B」(南側)と呼称した。本報告では遺構名を石組溝1とし、説明上石段より北側・南側を指し示す際に、それぞれ石組溝1A・1Bと表記する。

第120図①・第122図①のとおり、石組溝1A・1Bの側石はいずれも大規模造成土Ie層を基盤として据え置かれ、背後には栗石あるいは根固め状に10～20cmの河原石、80cm超の石材を入れ込んだI d層を確認している。これは掘方埋土とも考えられるが、基盤となるIe層が近代以後の造成土であるため、この造成と一体的な施工であると考えれば、あらかじめ石組溝と背後の栗石層の尺をとってIe層を造成し、石組溝側板の設置時にI d層で背後を固めたという一連の流れが推量できる。

石組溝の底板直上には、やや粘性を帯びたヘドロ状の土層が堆積し、その後、大振りの河原石やガラ



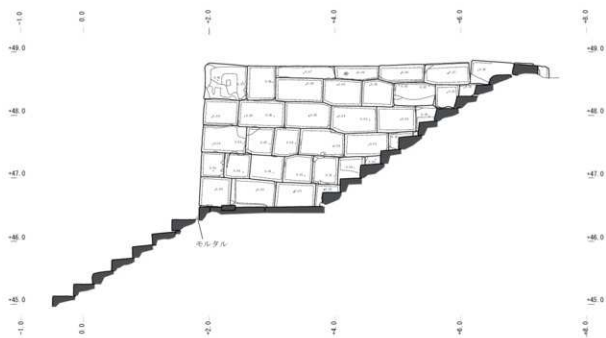
第117図 教習屋屋敷調査区 風呂屋口門地点 石段1立面図・土層断面図 (S=1/60)

ス片、煉瓦等を含む客土で埋まっている。この埋土を石段下中央に向かって掘り進めた結果、1A・1Bは貫通し、同一の溝であることを確認した。確認できた遺構の計測値は第32表のとおりである。

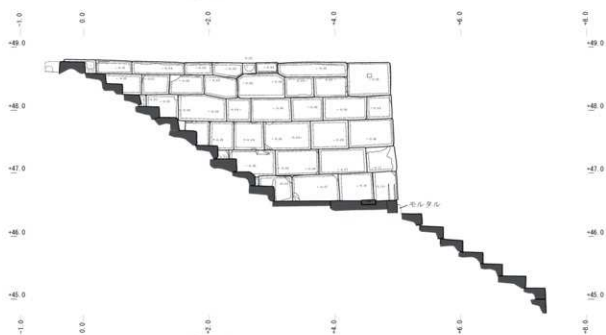
石組溝1A及び1Bの特徴として、まず両者に共通の事項を挙げる。①底板は西側が約5cm低く設置されている。②底板は黄色系凝灰岩製で、石垣に当て置く。③側板は、底板に別石を載せる。④側板は、最下に黄色系凝灰岩を置き、上部は戸室石も組み合わせる。戸室石は赤・青どちらも見られる。表出する天端石も凝灰岩と戸室石が混在することから、石材は材質・色ともにこだわりが見られない。⑤側板は石段基礎部分に当て置く。この基礎は、石組溝側板を兼ねる。これらの共通点に対し、石組溝1Aと1Bの相違は、底板の高さと勾配である。1A底板は検出した箇所南北で顕著な高低差がなく、ほぼ平坦であったが、1Bでは南北40cm程度の検出長で6cmの高低差があり、勾配は約15°となる。また、底板上面の高さは1Bが50cm程低い。なお、1Aでは側板上面をチキリで固定する箇所が見られる。

石段基礎部分の石組溝は、前項①・②・③は共通するが、④の側板の石材が異なり、形状や加工を丁寧に整えた赤戸室石の切石のみを使用する。縦石と横石2段分を組み合わせて横並びに据えている。⑤については同じ溝を構成する石材である以前に、石段の基礎として先行して強固に組まれたものと推測される。また、石段下の底石はスロープ状となっており、3mの延長で約50cmの高低差と、約20°もの勾配がついている。

石組溝の水路としての機能は、第120図1a9層によって埋まった時点で失われている。その時期ははっきりしないが、埋土より金沢大学開学以後と思われる遺物の出土が見られないことから、旧陸軍の駐屯中には埋まったものと推測する。

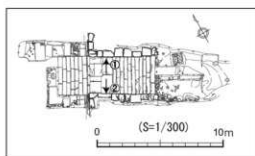


①石段北 二ノ丸西石垣 (2730S) 立面図

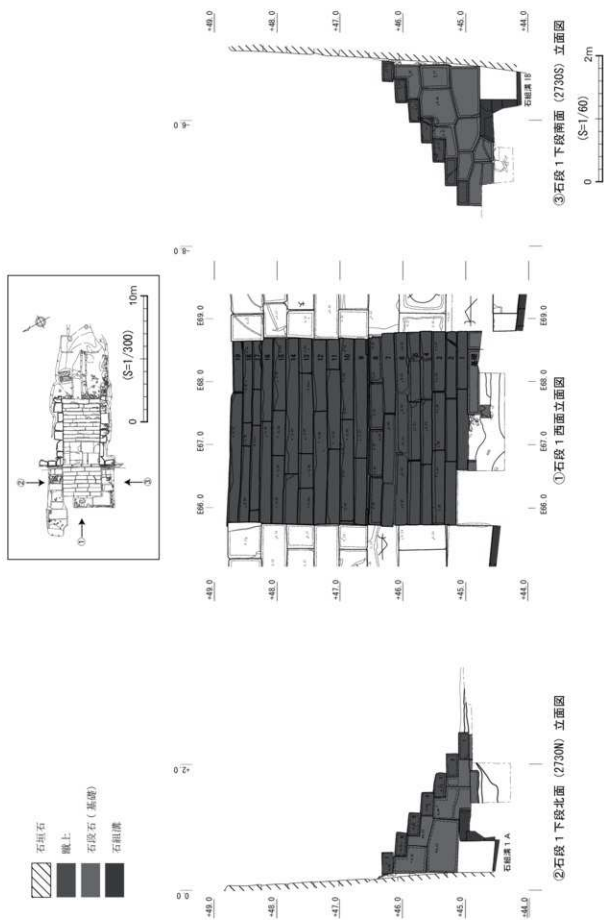


②石段南 二ノ丸西石垣 (2730N) 立面図

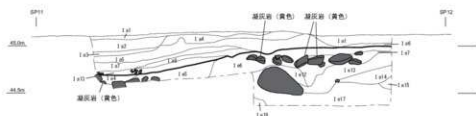
0 (S=1/60) 2m



第118図 数寄屋敷調査区 風呂屋口門地点石垣立面図 (S=1/60)



第119图 教寄屋敷調査区 風呂屋口門地点 石段1立面图 (S=1/60)



①石段 1 下西壁断面図

I a 層：現地表及び I e 層以後の近現代層

I a1 埴粉色土 (しまりなし)

【第 116 図断面①の I a1 層対応】

I a2 埴粉褐色土 (小礫・黒光りする細礫瓦含む)

I a3 埴粉灰色土 (小礫・径 3～10cm の礫・焼瓦片・細灰岩片含む)

I a4 明黄褐色土 (小礫・径 2～10cm の礫・焼瓦片含む)

I a5 埴粉褐色土 (小礫・径 3cm の礫含む)

I a6 埴粉色土 (小礫・径 2～3cm の礫含む)

【第 116 図断面①・第 121 図断面②の I a2 層対応】

I a7 黄褐色土 (小礫・径 2～8cm の礫含む)

I a8 灰褐色土 (小礫含む)

I a13 灰褐色土 (小礫・径 2～5cm の礫が多く入る)

I e 層：石段改修時の整地土 (太線が I e 層上面)

I e1 平や凹凸い灰褐色土 (小礫・径 10～25cm の礫・炭化物・細灰岩含む)

I e5 橙黄褐色土 (小礫・径 3～30cm の礫含む)

I e6 埴粉色土 (小礫・焼土粒・径 8～25cm の礫・細灰岩含む)

【第 116 図断面①の I e1 層対応】

I e7 埴粉色土 (小礫・焼土粒・径 6～25cm の礫含む)

I e12 赤褐色土 (小礫含む)

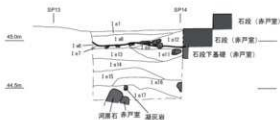
I e13 埴粉灰色土 (小礫・炭化物・焼瓦含む)

I e14 灰褐色土 (小礫少量含む)

I e15 埴粉色土 (小礫少量含む)

I e17 埴粉灰色土 (小礫・径 5～30cm の礫・細灰岩含む)

I e18 明黄褐色土



②石段 1 下西北壁断面図

I a：現地表及び I e 層番号の近現代層

I a1 埴粉色土 (しまりなし)

【第 116 図断面①の I a1 層対応】

I a6 埴粉色土 (小礫・径 2～3cm の礫含む)

I a12 灰褐色土 (小礫含む)

I e 層：石段改修時の整地土 (太線が I e 層上面)

I e6 埴粉色土 (小礫・焼土粒・径 8～25cm の礫・細灰岩含む)

I e7 埴粉色土 (小礫・焼土粒・径 6～25cm の礫含む)

I e8 灰褐色土 (小礫含む)

I e11 埴粉色土 (小礫・炭化物含む)

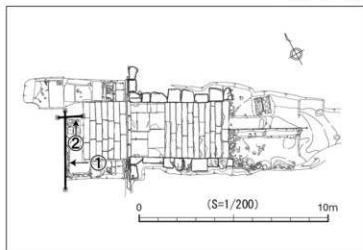
I e13 埴粉灰色土 (小礫・炭化物・焼瓦含む)

I e14 細灰褐色土 (小礫少量含む)

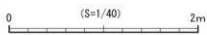
I e15 埴粉色土 (小礫少量含む)

I e16 埴粉褐色土 (小礫・焼土粒含む)

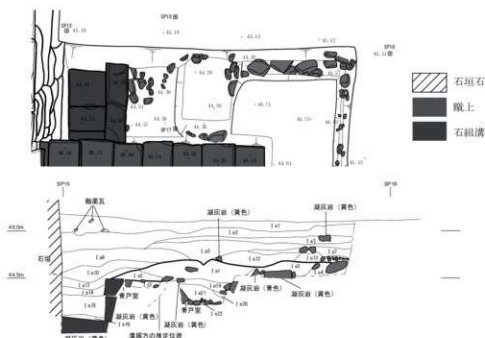
I e17 埴粉灰色土 (小礫・径 5～30cm の礫・細灰岩含む)



※第 121 図①・②、第 122 図①・②の
土層番号は対応する



第 121 図 数寄屋敷調査区 風呂屋口門地点 石段 1 下西土層断面図 (S=1/40)



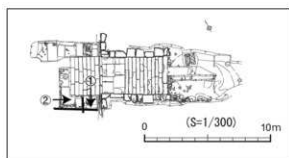
①石段1下南壁土層断面図

- I a 層：現地表及び I e 層以後に堆積した層
- Ia1 埋褐色土（しまりなし）
 - Ia2 埋褐色土（小礫・細葉瓦黒光り含む）
 - Ia3 埋褐色土（小礫・径3～10cmの礫・徳瓦片・凝灰片含む）
 - Ia5 埋褐色土（小礫・径3cmの礫含む）
 - Ia7 黄褐色土（小礫・径2～8cmの礫含む）
 - Ia9 埋褐色土（小礫含む）
 - Ia10 埋褐色土（小礫・径3～10cmの礫含む）
 - Ia11 埋褐色土（小礫・径3cmの礫含む）
 - Ia12 灰褐色土（小礫含む）
 - Ia13 灰褐色土（小礫・径2～5cmの礫が多く入る）
 - Ia14 埋褐色土（径3～8cmの礫含む）
 - Ia15 埋褐色土（小礫・径5cmの礫含む）
 - Ia16 埋褐色土（やや粘質土）凝灰にたまったヘドロ

- I e 層：石段構築時の整地土（太線が遺構面）
- Ie1 埋黄褐色土（小礫・径5～10cmの礫・炭化物含む）
 - Ie2 埋褐色土（小礫含む）
 - Ie3 埋褐色土（小礫含む）
 - Ie4 やや暗い灰褐色土（小礫・径10～25cmの礫・炭化物・凝灰岩含む）
 - Ie19 灰褐色土（炭化物多く含む、小礫含む）
 - Ie20 埋灰褐色土（粗砂含む）
 - Ie21 埋灰褐色土（小礫含む）
 - Ie22 やや暗い埋褐色土（小礫・径5～10cmの礫含む）

- I d 層：石組溝敷設に係る掘方堆土
- I d1 埋褐色土（小礫・径3～15cmの礫・炭含む）

※第121図①・②、第122図①・②の土層番号は対応する



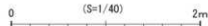
②石段1下東壁土層断面図

- I a 層：現地表及び I e 層以後に堆積した層
- Ia9 埋褐色土（小礫・ビール片含む、しまりなし）
 - Ia12 褐色土（小礫・径5cmの礫含む）

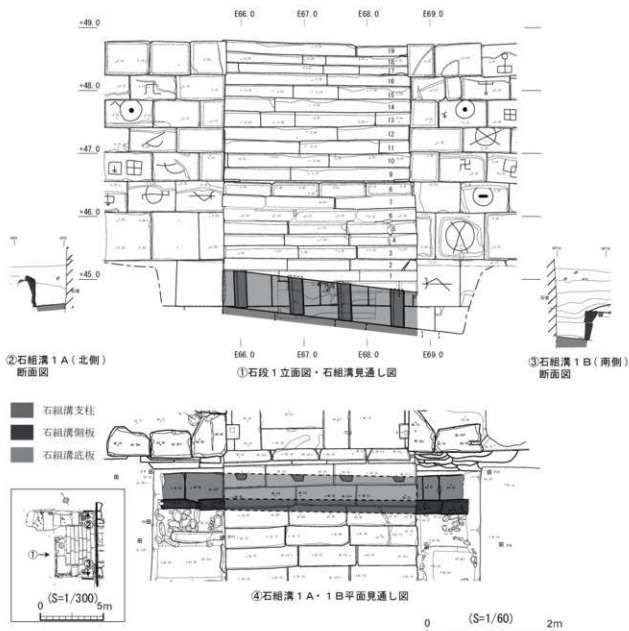
- I e 層：石段構築時の整地土（太線が踏面）
- Ie1 埋黄褐色土（小礫・径5～10cmの礫・炭化物含む）
 - Ie9 埋褐色土
 - Ie10 埋褐色土（炭化物・小礫含む）
 - Ie19 埋褐色土（炭化物多く含む、小礫含む）
 - Ie21 埋褐色土（小礫含む）

- I c 層：石段構築の掘方堆土
- Ic1 埋褐色土（小礫・径5～10cmの礫・戸室片含む、石段下に川原石等を基へてある）
 - Ic2 灰褐色土（小礫・粗砂含む）

- I 層または目層：I a～I e 以前の土層（時期判別できない）
- IIa1 埋褐色土（小礫・径2～3cmの礫含む）



第122図 数寄屋敷調査区 風呂屋口門地点 石段1下南〔南壁・南北トレンチ〕土層断面図 (S=1/40)



第 123 図 数寄屋敷調査区 風呂屋口門地点 石組溝 1 A・1 B 平面図・立面図 (S=1/60)

第 32 表 数寄屋敷調査区 風呂屋口門地点石組溝 1 A・1 B 計測表

計測位置	溝幅 (cm)		溝底標高 (m)		溝側板の高 (m)	側板側の溝高 (cm)	特記事項等
	上端	下端	東端	西端			
石段北 石組溝 1 A	50	50	44.62	44.58	45.02	45	側石は凝灰岩と戸室石混合、小振りの石も組み合わさる。石と石の間にチキリ
石段南 石組溝 1 B	46	46	44.15	44.08	44.5	45	側石は戸室石と凝灰岩が混合 (1 A よりやや厚みあり) 溝幅は下端で石段南が狭い 1 A より全体的に約 50cm 低い

(3) 石段 1 及び石組溝 1 に伴う近代盛土層・整地層 (第 116・117・120～122 図)

石組溝周囲の土層状況は、石段周辺の大規模な盛土層 (Ie 層) を基盤とする石段の内部石組溝敷設に係る掘方埋土 (Id 層)、石段敷設に係る整地土 (Ic 層)、近代路面または路盤 (Ib 層) までを一体とし、石段修築以後の土層 (Ia 層) がこれらを覆っている。

各層の時期と性格は、Ie 層が丸釘等近代以後の遺物を含むことから、少なくとも Ie 層以上層は近世に遡ることはなく、また Ie 層と石段基礎石が一体的に施工されている状況から、Ie 層から Ib 層が石段修築及び石組溝敷設に係る一連の工事によるものと推測される。

2. 数寄屋門北地点 (第 124～127 図)

数寄屋門北地点は、絵図表記と現況が変わらず郭間通路の中央部に位置する。検出した遺構はいずれも路面あるいは路盤に関わるもので、北端に位置する溜枮 2 地点も含め 6 面確認した路面の時期は近現代層 (I 層) と近世の可能性のある層 (II 層) に属すると推測される。

(1) 路面と路盤 (第 124・125 図)

路面 1

溜枮 2 地点の表土直下で検出した。礫混じり土を路面とし、北側が 45.0m、南側が 44.7m と南に向かって下がる。層位的に軍隊期末から金沢大学時代に下る可能性があり、大別層では近代路面及び路盤 (Ib 層) に属する。路面 2 との間に、後述する石組溝 2 の遺構面となる路面が存在したものと考えられ、路面 1 整備によりその上面は削平されているものと推測する。

路面 2

溜枮 2 地点の北側において、路面 1 下で検出した。部分的に玉砂利が混じるやや硬く締まった土層を路面とし、北側が 44.55m、南側が 44.5m と南に向かって下がる。大別層では近代路面及び路盤 (Ib 層) に属する。溜枮 2 地点中央付近で検出した石組溝 2 によって南側は損壊しているが、石組溝以南で検出した同様の玉砂利を含む土層 (Ie 層) も、路面は不明瞭であるが同時期の土層と見られる。

路面 3

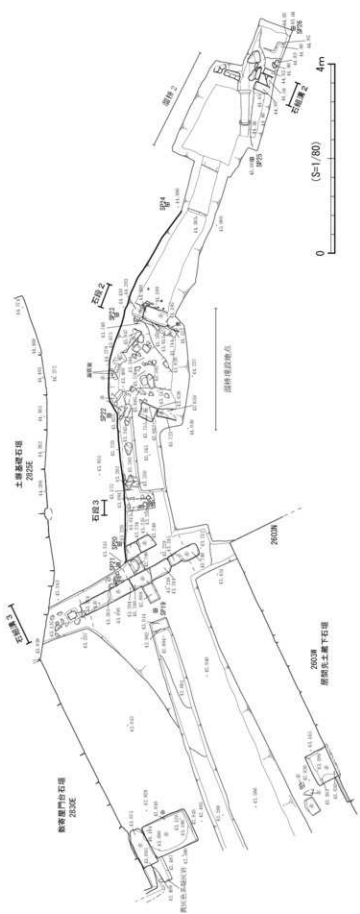
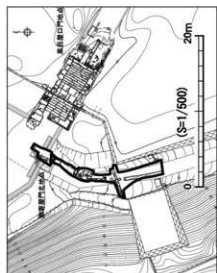
調査区北部の Ia 層直下で検出した。北側が 44.4m、南側が 43.2m と、南に向かって下がる。後述する石列あるいは石段の接地面に連続すると想定している。SP23 以北はこの路面検出面で掘削停止している。大別層では近代路面及び路盤 (Ib 層) とする。検出レベルや玉砂利が混じる検出面の状況から、路面 2 と同時期の地表面である可能性も考えられる。

路面 4

調査区中央部の SP21～SP22 間で部分的に検出した。後述する石組溝 3 埋没後の路面で、表面は黄褐色粗砂を主体とし径 1～2cm の玉砂利が混入する。検出部分の北側は 43.55m から 43.4m と緩やかに南に下り、2f 層を挟み南半 80cm 程の範囲は標高 43.25m の平場となる。この段差部分で南北幅 45cm、深さ 20cm 程の窪みを確認した。窪みの北側には 10～15cm の礫を主体とした根固めと見られる茶褐色粗砂層を幅 30cm の範囲で確認している。窪みは、段差境に位置すること、北側に根固め状礫層を確認したこと、またサブレンチで東西方向の溝状遺構と確認したことから、路面 4 に伴う石段踏石の抜取痕であると推測する。大別層では近代と思われる路面及び路盤 (Ic 層) に属する。

路面 5

調査区中央部の石組溝 2 周辺で約 2m にわたり確認した。トレンチ内は、ほぼこの上面で発掘停止している。後述する石組溝 3 と同時期に表出していた路面である。検出標高は、路面北側で 43.18m、石組溝 3 上面で 43.25m、路面南側で 43.25m である。石組溝 3 内が自然堆積層でほぼ埋まり、溝の周囲と溝内最上部に同じ第 125 図 A 層が薄く堆積する状況から、路面 4 の整備着手時にはすでに溝は



第 124 図 教書屋屋敷調査区 教書屋門北地点 遺構平面図 (S=1/80)

ほぼ埋まっていたと思われる。大別層では、近世の可能性のある路面及び路盤（Ⅱa層）に属する。

路面6

調査区中央部の石組溝1南で検出した。石組溝1以前の何らかの遺構掘方（Ⅱb1層）上面で確認した、薄く硬化した砂質土を路面とする。石組溝3の側石より20cm程度下部では、路面6の路盤を構成するⅡc3層を基盤として径約25cmの扁平な河原石が掘り込みを伴って据え置かれており、路面6に伴う礎石あるいは石組溝の底石の可能性が考えられる。大別層では、近世の路面及び路盤（Ⅱb層）に属する。

（2）石段（第126図）

石段2

SP23付近で検出した石段である。現況の通路では南西方向に下りる通路軸が南方向に折れる屈曲点に位置する。石列は北西-南東方向に敷設され、面は南西を向く。トレンチ内では3石確認しており、石材の内訳は赤戸室石2石、青戸室石1石である。このうち、全形を確認した中央の踏板は、幅約60cm、奥行きが上面25cm、高さ20cmを測り、面加工は上10cmがノミ加工で平滑に整えられ、下10cmは粗加工に留まる。この加工状況から、蹴上は10cmに満たず、通路斜面における足がかりの石列といえよう。

石段3 採取痕

SP21・SP22間で検出した溝状の遺構である。検出標高が43.26～43.46m、検出幅58cm、検出長約40cm、深さ30cmを測る。遺構の南北で路面4が約20cmの段差を生じていること、また溝の北側下層には根固め石と見られる礫の集積が確認されていることから、路面4に伴う足がかりの踏石が敷設されていたことが推測でき、この踏石が路面3の整備に伴って抜き取られ、溝状となった部分を埋めたものと考えられる。検出方向から、石段の設置方向はおおよそ土塀基礎石垣（石垣ID：2825E）に対して直交すると見られる。

（3）石組溝（第127図）

石組溝2

溜枿2地点で検出した石組溝である。路面1・2間を遺構面とするが、路面1の整備により、その上面は失われているものと推測される。底板と側板は別部材で、底板を側板で挟み込む組み方である。部材はいずれも凝灰岩製で、側板の幅は北側で幅14cm、南側で17cmを測る。側板間は22cm、底板から側板天端まで北側で19cm、南側で17cmである。側板は溝内面を平滑に整えているが、背面については粗加工に留めているもの、鉤型に折れているものが見られ、少なくとも側板の石材は再利用したものとも推測される。ほぼ東西方向に敷設され、大学時代のものと思われる鉄管敷設により西側が失われている。郭内の位置から見て東から西へ下るものと見られるが、遺存部分での高低差は確認できなかった。

石組溝3

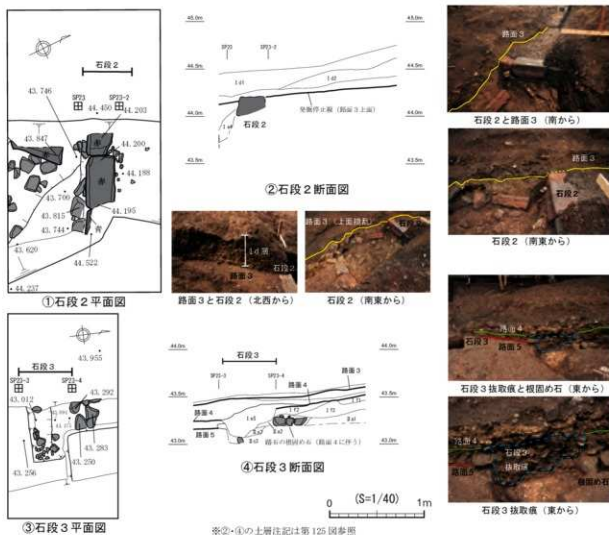
通路を横断する南西-北東軸の石組溝である。敷設当初の遺構面は路面5・6間と見られ、路面5の整備により、その上面は失われているものと推測される。溝の側板は北側で2石、南側で5石確認している。側板上面は北側が43.25～43.22m、南側が4.24～43.16mと西から東へ下がる。側板の幅は30～31cm、長さはばらつきがあり43～70cmを測る。石材は全て赤戸室石としているが、容易に認識可能な材と、色素が薄く僅かに赤みがある程度の材が混在する。SP19-SP20間に設けたサブトレンチで溝の断面を確認したところ、石材の加工状況は両側面とも平滑に加工してある。また、側石の背面では掘方を検出しており、Ⅱb1層を掘り込む。この層は、路面6の路盤であるとともに、遺構掘方埋土と見られ、石組溝3は先行する石組溝を抜き取り改修したものと推定される。この改修に伴い、路面も6から石組溝3の検出面に近いレベルまで上がったものと見られる。石組溝3の溝内は、表層が路面5となっているが、その下位層は自然堆積の砂層及びシルト層が37cm続き、底石状の扁

第33表 数寄屋屋敷調査区 数寄屋門北地点路面1～6計測・観察表

遺構	検出・確認地点	路面の土層状況	路盤の土層状況	検出標高(m)		特記事項等
				上端	下端	
路面1	露柱2東壁土層断面	玉砂利敷き	増褐色土(焼土ブロック・段積蓋)	45.00	44.70	近代～現代
路面2	露柱2東壁土層断面	玉砂利敷き	増褐色土(軟弱層)	44.85	44.50	近代 石組溝2と同時施工か 路面3と同時期の可能性あり
路面3	西壁土層断面SP21-24間 石段2以北は平面的に 検出	約3cmの玉砂利敷き 10cm以下の礫や砕葉瓦片 もわずかに混じる	河原石や戸室石片、凝灰岩 小片が乱雑に混じる	44.40	43.20	近代 石段2北の標高44.3m 路面2と同時期の可能性あり
路面4	西壁土層断面SP21-22間	1～2cmの玉砂利混土	粗砂～褐色砂礫層	43.55	43.25	近代 石段3(採取標高検出) と同時施工か
路面5	西壁土層断面SP19-20間	小礫敷き	石組溝3内部が埋まった後 石組を露出した状態で周囲 を整地	43.30	43.25	近世の可能性あり 石組溝3敷 設～埋まった後の路面
路面6	西壁土層断面SP19北	小礫混土	しまりの強い整地層	43.18	43.17	近世の可能性あり 石組溝3敷 設以前の路面

第34表 数寄屋屋敷調査区 数寄屋門北地点石段2・3計測表

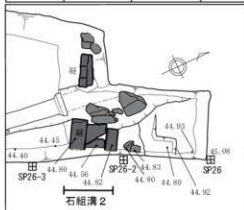
遺構	検出・確認地点	対応する路面	石材	検出標高(m)	特記事項等
				上端	
石段2	SP23付近	路面3	赤戸室石2 青戸室石1	44.28	近代
石段3	SP20-22間	路面4	不明	43.55以上	近代か、抜き取られている 背面に根固め石



第126図 数寄屋屋敷調査区 数寄屋門北地点 石段2・3平面図・断面図 (S=1/40)

第 35 表 数寄屋敷調査区 数寄屋門北地点石組溝 2・3 計測表

遺構	検出地点	対応する路面	石材	溝幅 (cm)		溝底高さ (m)		溝側板高さ (m)		溝高さ (cm)	特記事項等
				上端	下端	東端	西端	北側	南側		
石組溝 2	厨橋 2	路面 1 と路面 2 の間 (削平部)	凝灰岩	21	21	44.56	—	44.92	44.80	18	近代 大学時代の鉄管敷設により西側が損壊
石組溝 3	SP19-SP20間	路面 5 と路面 6 の間	赤戸室石	32	32	42.9	—	43.22	43.24	34	近世か 底板なし



石組溝 2 (南西から)



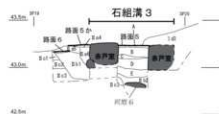
石組溝 2 (北西から)

①石組溝 2 平面図

②石組溝 2 南壁断面図
(南北反転)



③石組溝 3 平面図



④石組溝 3 断面図

※②・④の土層注記は
第 125 図参照



石組溝 3 (南西から)



石組溝 3 (北西から)

0 (S=1/40) 1m

第 127 図 数寄屋敷調査区 数寄屋門北地点 石組溝 2・3 平面図・断面図 (S=1/40)

平な河原石を確認した。しかし、側石の高さが23～26cmであることから、石組溝3に伴う底石としては機能せず、石組溝3の堆積層と認定できるのは第125図②図のB～D層のみで、E層以下の砂層は下層遺構に伴う自然堆積層と考えられる。これに加え、河原石を据え置いた基盤層と路面6の基盤層とが同一層であることも考慮すれば、この河原石は路面6に伴う遺構に関わるものと推定される。河原石であることから礎石の可能性もあるが、石の上部に自然堆積が発生する状況から石組溝の底石である可能性が高い。本報告ではこの下層遺構について別項として挙げていないが、石組溝3の前段階の様相を示す可能性があるものとして記述しておく。近世の早い段階から数寄屋門及び通路として機能したこの区域において、幾度となく路面や排水路等の補修が繰り返されてきたことが窺える遺構である。

3. 司令部門南地点（第128～130図）

近代の石組溝及び近世に遡る可能性がある敷石状石材を検出し、断割の土層断面では郭西方より移設された通称司令部門（旧切手門）掘方を確認した。

（1）石組溝（第128～130図）

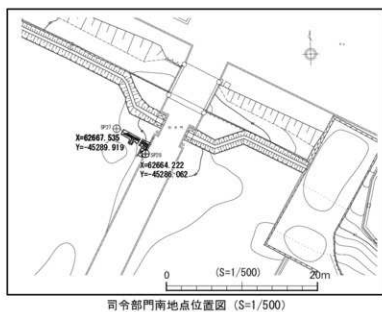
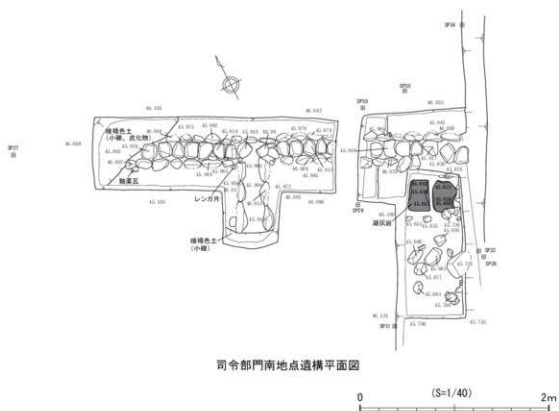
地表から約10cm、標高45.9～46.0mで検出した路盤に伴いT字形に交差する石組溝を検出した。いずれも小振りの河原石を側板として立て並べ、内幅約15cm、深さ約10cmを測る小規模な溝である。東西溝は幅約35cm、長さ3.6mで、側板間に15×12～15cmのやや扁平な河原石を底板として敷き並べている。現況園路から2.1mの地点で分岐する南北溝にはこの底板は見られず、東西溝も交差する地点では1石分ほどの隙間が空いている。南北溝は約1mまで、東西溝は約3.5mまで延長を確認し、いずれもその南側、西側は攪乱により失われている。これらの溝は、底石の有無や石材の大きさといった違いは見られるものの、少なくとも廃絶直前は同時期に機能した一連の遺構である。遺構の性格としては、規模や形状から建物に付随する雨落ち溝の可能性が考えられ、またその時期は、東西溝の掘方内から黒釉瓦片や煉瓦片が出土したことから近代以後に属するものと考えられる。

石組溝の基盤層は、次項の敷石状石材を覆う近代盛土であり、石組溝機能時の路面と推測する1b層は、北側の大規模な掘り込みに切り込まれている。この掘り込みは、位置や遺構の規模から移設された切手門の掘方である可能性が高いと考えられる。

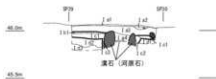
以上の状況から、詳細な時期は不明であるが、石組溝は近代以後の建物外構施設として敷設され、その後切手門が移設されるという先後関係が推測できる。

（2）敷石状石材（第128～130図）

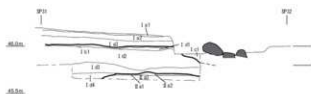
石組溝の基盤層を一部掘り下げ、地表から約45cm、標高45.65m付近で近世に遡ると思われる路盤と、これに伴う敷石状石材を2点確認した。石材は、おおよそ23×33cm、25×33cmを測る不正形の凝灰岩で、表面加工がやや平滑であることから敷石状としている。



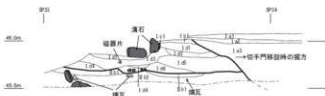
第 128 図 数寄屋屋敷調査区 司令部門南地点 遺構平面図 (S=1/40)



①中央部西壁土層断面図A

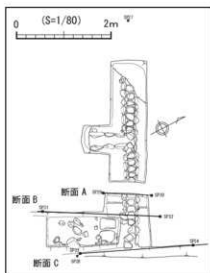


②西壁土層断面図B



③東壁土層断面図C

*南北方向で反転させている



①中央部西壁土層断面図A

I a: 近代以後整地土等 (I b 以後整地土・表土等)

- I a1 暗褐色土 (しまり悪い, 小礫多量を含む) 【表土】
- I a2 明黄褐色土 (固くしまる, 礫多量に, 粗砂含む)
- I a3 褐色土 (固くしまる, 礫多量を含む, 粘質土・粗砂含む)
- I a4 黄褐色土 (小礫・炭化物含む) 【石垣埋戻土】

I b: 近代路盤

- I b1 灰褐色土 (小礫・炭化物含む) 北面では未確認

I c: 近代盛土等 (I b の地盤等 近代溝掘方含む)

- I c1 やや暗い黄褐色土 (小礫・炭化物含む, 礫土)
- I c2 褐色土 (小礫含む) 【近代石垣埋戻方】
- I c3 黄褐色土 (小礫含む) 【近代石垣埋戻方】

I d: 近代または近世の盛土

- I d1 やや暗い褐色土 (やや粘質土)
- I d2 やや明るい黄褐色土 (小礫・炭化物含む)
- I d3 やや暗い褐色土

②西壁土層断面図B

I a: 表土・近代以後整地土等

- I a1 暗褐色土 (しまり悪い, 小礫多く含む)
- I a2 淡黄灰色土 (固くしまる, 粗砂, 礫多く含む)
- I a3 褐色土 (固くしまる, 粗砂, 礫多く含む)

I b: 近代路盤

- I b1 灰褐色土 (小礫・炭化物含む)

I c: 近代盛土等 (I b の地盤等 近代溝掘方含む)

- I c1 明黄褐色土 (小礫・粗砂含む)

I d: 近代または近世の盛土

- I d1 黄灰色土 (小礫・炭化物・粗砂含む)
- I d2 褐色土 (小礫多量を含む, 炭化物・粗砂含む)
- I d3 黄褐色土 (小礫・炭化物・粗砂含む)
- I d4 やや暗い黄褐色土 (小礫・炭化物含む)

II a: 近世路盤

- II a1 褐色土 (炭化物・小礫含む)
- II a2 暗褐色土 (粗砂多量に, 小礫含む)
- II a3 やや暗い褐色土 (小礫・炭化物含む)

③東壁土層断面図C

I a: 表土

- I a1 暗褐色土 (しまり悪い, 小礫多く含む) 近代地表?
- I a2 褐色土 (固くしまる, 小礫含む)
- I a3 黄褐色土 (小礫・炭化物含む) 【切手門跡埋戻方】

I b: 近代路盤

- I b1 灰褐色土 (固くしまる, 小礫多く含む)

I c: 近代盛土等 (I b 階の地盤等 近代溝掘方含む)

- I c1 褐色土 (しまり悪くゴロゴロ) 【近代石垣埋戻方】

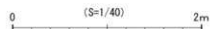
I d: 近代または近世の盛土

- I d1 黄灰色土 (固くしまる, 礫多く含む)
- I d2 黄褐色土 (小礫)
- I d3 明黄灰色土 (全体的に粘性を帯びる, 黄灰色粘質土ブロック含む)
- I d4 黄灰色土 (固くしまる, 砂状粒子が集まる, 礫瓦片含む)
- I d5 黄褐色土 (粘質土, 小礫少量含む, 礫瓦片含む)
- I d6 灰褐色土 (粘質土, 小礫少量含む, 礫瓦片含む)

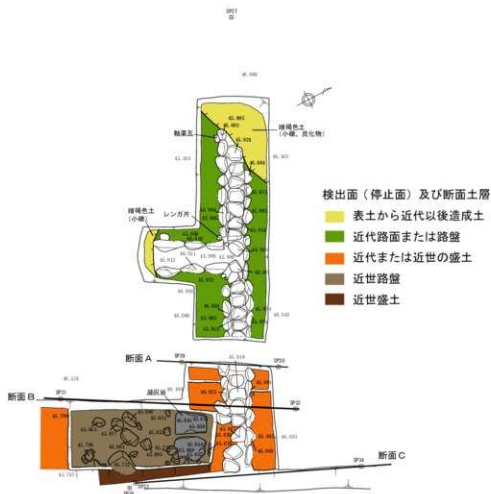
II: 近世盛土

- II 1 黄褐色土 (固くしまる, 小礫・炭化物含む)
- II 2 暗褐色土 (礫・炭化物含む)

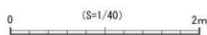
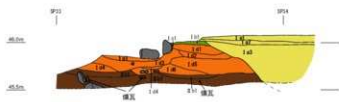
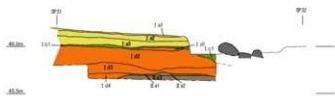
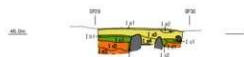
①～③の土層番号は, I a～II b の大別層はそれぞれ対応し, 細別層は対応しない。



第129図 数寄屋敷調査区 司令部門南地点 土層断面図 (S=1/40)



遺構平面図



第 130 図 数寄屋敷調査区 司令部門南地点 検出面・土層断面色分け図 (S=1/40)

第3節 出土遺物

1. 概要

数寄屋敷敷調査区で出土した遺物はパンケース9箱で、そのうち6箱が瓦である。その他には陶磁器・土器・金属製品・石製品・煉瓦・ガラス・炭等であるが、小片が多く、ほとんどが風呂屋口門地点からの出土であるので、陶磁器・瓦・石製品・金属製品に分けた後、土器・陶磁器については地点ごとに、その他のものについては器種を優先して記述していく。

また、土器・陶磁器・瓦の器形・胎土分類・年代観については、鶴ノ丸第1次調査区に準じている。(第29～31図)

2. 土器・陶磁器 [第131図、第36表]

風呂屋口門地点 [第131図P150～P156]

石組溝の埋土と近代の整地土から出土したもののみに、確実に近世の土層から出土したものは無い。土器も出土しているが、小片のため図化していない。

P150は肥前磁器染付小杯で、外面の釉は一部ムラになっている。17世紀後半のものである。P151は中国製磁器と思われる染付の小片で、器種は不明である。灰白色の緻密で滑らかな胎土で、片面には染付が施されているが片面は無釉である。P152は肥前白磁の鉢か皿の口縁片で、内面には陽刻が施され、口錆が施されている。被熱によって器面が荒れている。P153は肥前陶器鉢で、象嵌の手法を用いているいわゆる三島唐津の製品である。見込には砂目痕が4か所残っているが、全体では7か所あったと思われる。砂目痕が摩耗し、畳付も平滑になっていることから、長く使用されていたことがわかる。被熱による変色等はしていないが、割れ口にも煤が付着している。17世紀後期から18世紀前期のものである。P154は陶器の蓋で上面のみに灰釉が掛かっている。信楽製の水指の蓋であろうか。P155は鉄釉が施された陶器の土瓶蓋で、つまみは欠損している。溜樋1地点のIa7層からは、P156が出土している。肥前磁器染付の大皿で被熱のため内面には壁材の細粒などが溶着し、割れ口の一部分が平滑になっている。

数寄屋門北地点 [第131図P157]

わずかな遺物も、ほとんどが表土から出土した近代のものである。被熱しているものは目立たないが、溶けた鉛瓦が付着した小礫の存在は、火災との関係を窺わせるものである。

P157は中国青白磁梅瓶の底部片で、灰白色の胎土に明緑灰色の釉が掛かり、片切彫りによる陰刻が施されている。13世紀の製品であろう。

司令部門南地点 [第131図P158]

幕末から近代の染付・色絵磁器片が表土から少量出土している。

P158は第129図断面図CのI d3層から出土した肥前磁器の二重斜格子文染付皿で、欠損しているが蛇の目釉剥ぎをしていると思われる。17世紀末から18世紀のものである。

3. 瓦 [第132図T234～T242、第37表]

瓦もほとんどが風呂屋口門地点からの出土である。図示したものはT239が司令部門南地点から出土している他は全て風呂屋口門地点から出土したものである。煉瓦、釉薬瓦が混在しているが、煉瓦では腰瓦、釉薬瓦では棧瓦が目立つ。

T234・T235は、釉薬瓦の軒丸瓦である。T234は石組溝1Aの埋土から出土している。胎土は橙色で砂粒・礫を多く含み、被熱のためにやや縮れた光沢のないにぶい赤褐色の釉を表面のみに掛けている。瓦当は巴III 1a類である。T235は黄橙色の胎土に黒色の釉が掛かっているが、被熱のため縮れて

いる。瓦当は梅鉢である。T236～T239は軸葉瓦の軒平瓦である。T236・T238・T239の胎土は橙色で砂粒・礫を多く含み、T237はにぶい橙色で砂粒を少量含んでいる。T236は光沢のない暗赤褐色の釉が掛かり、瓦当は梅鉢Ⅲ類で文様はシャープである。T237は瓦当は玉Ⅲ類、光沢のない黒褐色の釉が全面に掛かっている。T238は光沢のある黒褐色の釉が掛かり、瓦当は菊Ⅳ類である。T239は暗赤褐色の釉で、瓦当は玉Ⅱ類である。瓦当の左周縁に刻印「㊦」がある。T240は表土から出土した燻瓦の丸瓦である。T241は光沢のない暗赤褐色の釉が全面に掛かった道具瓦である。胎土は明赤褐色で、砂粒を多く含んでいる。T242は光沢のない暗赤褐色の釉が掛かる棟瓦で、にぶい橙色の胎土に砂粒を多く含んでいる。刻印「○」があり、焼成前にあけられた釘穴が2個ある。

4. 金属製品 [第132図 M014～M018、第36表]

教寄屋門北地点の表土から鉄釘等が少量出土している他は、全て風呂屋口門地点からの出土である。

M014～M016は銅製の釘である。何れも5cm以下の小型品で、不整四角形の本体に略円形の頭が付いている。M017は鉄製の鏝である。M018は溜枡1の近代整地土から出ている。鉄釘で本体は不整四角形であるがやや丸くなっている。

5. 石製品 [第133図 S010～S012、第36表]

風呂屋口門地点では凝灰岩の板状製品等が出土し、教寄屋門北地点では壁材の細粒が溶着した戸室石の小片が出土している。図示したものは全て風呂屋口門地点のものである。

S010は砥石で、よく使われたために中央が薄くなっている。S011は石段最上段の根固めに使われていた板状の凝灰岩である。片面は平滑に整えられているが、もう片面はノミ痕を残している。平滑な面には線刻があるが途中で切れているので、他で使われていたものが転用されたのであろう。S012は凝灰岩で竈の破片と思われる。外面は平滑に整形されているが、内面にはノミ痕が残り、煤のためか暗褐色になっている部分がある。

6. 煉瓦 [第133図 P158、第36表]

少量ではあるが各地点から煉瓦が出土している。

P159は風呂屋口門地点の石組溝1Bの埋土から出土したもので、割れてはいるが完形に近い。胎土は橙色で、白色微粒砂及び焼土塊を含んでいる。積み上げた際に見えなくなる平の面も板状工具で撫でて平滑にしていることから手抜き成形法で作られていると思われ、寸法が22.9×11.35×5.5cmと大きくて薄いことも合わせると、19世紀の製品であろう。



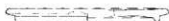
200101-D004 P150



200101-B003 P151



200101-D001 P152



200101-D002 P154



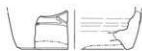
200101-D003 P155



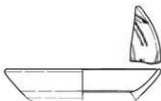
200101-B002 P153



200101-B001 P156



200101-B004 P157



200101-B005 P158

風呂屋口門地点

P150: 1層階段北西北断面、近代整地土

P151・P152: 1層石段南(トレンチ)

P153: 1層石段北側(ベルト面の断面) 近代整地土

P154: 1層階段南、近代整地土(表土下)

P155: 1層石段下南、近代整地土

P156: 1層濠橋 1 a7層

数寄屋門北地点

P157: 1層数寄屋門周辺、石段2・石組溝3間 表土

司令部南地点

P158: 1層断面図C 1 a3層

0 (S=1/3) 10 cm

第131図 数寄屋屋敷調査区 出土遺物実測図 陶磁器 (S=1/3)



200101-D007 T235 軸

200101-D006 T236 軸

200101-D011 T237 軸

200101-D010 T234 軸



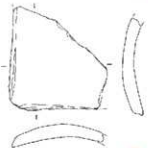
200101-D012 T238 軸



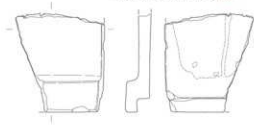
200101-D013 T239 軸



200101-D005 T240 軸

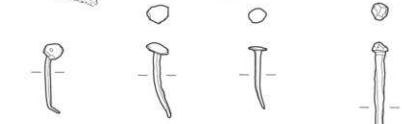


200101-D008 T241 軸



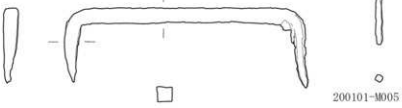
200101-D009 T242 軸

風呂屋口門地点
 T234: I層石組溝 1 B埋土
 T235・T241・T242: I層階段北脇掘方表土
 T236: I層表土
 T237: I層階段北、近代整地土
 T238: I層階段南、近代整地土(表土下)
 T240: I層北側石垣上表土
 司令部南地点
 T239: I層表土すきとり排土中表採



200101-M001 M014 200101-M002 M015 200101-M003 M016

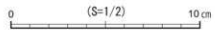
風呂屋口門地点
 M014: I層石段南、石組溝 1 掘方
 M015・M016: I層階段北、近代整地土、焼土
 M017: I層石段下南、近代整地土
 M018: I層掘溝 1、近代整地土



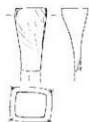
200101-M005 M018

□ 200101-M004 M017

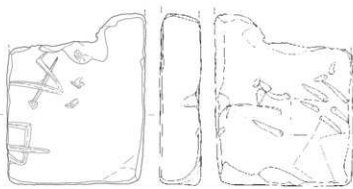
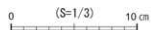
T234 ~ T242 は S=1/6
 M014 ~ M018 は S=1/2



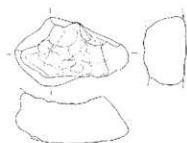
第 132 図 数寄屋敷調査区 出土遺物実測図 瓦・金属製品 (瓦 S=1/6、金属 S=1/2)



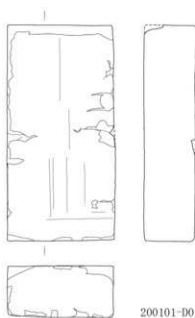
200101-S001 S010



200101-S002 S011



200101-S003 S012



200101-D014 P159

風呂屋口門地点

S010: I層南側石壇上、表土

S011: I層石段上 最上段 根因め

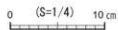
S012: I層階段北埋土 石組溝 1 A

P159: I層石組溝 1 B 埋土

S010 は S=1/3

S011・S012 は S=1/6

P159 は S=1/4



第 133 図 数寄屋敷調査区 出土遺物実測図 石製品・煉瓦 (石 S=1/3・1/6、煉瓦 S=1/4)

第36表 敷香屋敷敷調査区 出土遺物観察表 陶磁器・金属製品・石製品・煉瓦

(1)は調査番号 (2)は調査年度

図版 No.	部種	形状	出土地点	口径 (cm)	高さ (cm)	底径 (cm)	成形・形状	釉薬・胎土等	胎土・色澤等	形状特徴	特記事項	出(採)掘番号
P131	磁器	小杯	東京原口門 1層 階段北西北廊南側,近代製煉土	7.9	(4.5)		ロクロ	灰付	26a 灰	彫傷	軸のムクあり,17℃焼半	200101-0004
P132	磁器	不明	東京原口門 1層 石段南(トレンチ)		(1.15)		ロクロ	外・灰付 内・無釉	16a 灰白	中国		200101-0003
P133	磁器	鉢・皿	東京原口門 1層 石段南(トレンチ)		(1.3)		ロクロ(葉打ち)	白釉 襷指文 口縁	26a 白	彫傷	口縁部平田文面毛付,被酒 三島製煉 内面は胎土目録4(小穴有傷), 灰付又は灰付に土が厚着	200101-0002
P134	磁器	茶	東京原口門 1層 石段北側<C>(トレンチ南側),近代製煉土	11.6	(5.7)		ロクロ	外・灰釉 内・無釉	123a 赤褐色	彫傷		200101-0002
P135	磁器	蓋	東京原口門 1層 階段南,近代製煉土(灰土下)	11.2	(1.2)		ロクロ	外・灰釉 内・無釉	123b 灰白	信楽		200101-0002
P136	磁器	蓋	東京原口門 1層 石段下南,近代製煉土	6.4	5.0		ロクロ	外・灰釉 内・無釉	126a 灰	瀬戸	つまみ部分欠損 回転<ク>ズリ	200101-0003
P137	磁器	入蓋	東京原口門 1層 階段1 1号層	[29.2]	4.35		ロクロ	灰付	26a 灰白	彫傷	襷指,襷指細灰付着	200101-0001
P138	磁器	梅瓶	敷香屋敷門北 1層 敷香屋敷門北,石段下・石段南3間 表土	[8.6]	(3.05)		ロクロ	青石釉	26a 灰白	中国	片切窯,14℃	200102-0004
P138	磁器	蓋	当合部門南 1層 新堀説C 1号層	12.20	(2.4)		ロクロ	灰付	26a 灰白	彫傷		200101-0005

金属製品

図版 No.	部種	出土地点	全長 (cm)	全幅 (cm)	厚さ (cm)	材質	重量 (g)	特徴事項	出(採)掘番号
M014	釘	東京原口門 1層 石段南,石組煉1号層	3.66	1.03×0.17	0.27×0.23	鋼	1.4		200101-0001
M015	釘	東京原口門 1層 階段北,近代製煉土・焼土	3.06	1.15×0.40	0.37×0.3	鋼	2.1		200101-0002
M016	釘	東京原口門 1層 階段北,近代製煉土・焼土	3.3	0.95×0.43	0.25×0.24	鋼	1.3		200101-0003
M017	釘	東京原口門 1層 石段下南,近代製煉土	12.9	4.28	0.77×0.77	鉄	87.9		200101-0004
M018	釘	東京原口門 1層 階段1 1号層表<C>-南,近代製煉土	9.9	0.85×0.85	0.38×0.38	鉄	7.5		200101-0005

石製品

図版 No.	部種	出土地点	全長 (cm)	全幅 (cm)	厚さ (cm)	材質	重量 (g)	特徴事項	出(採)掘番号
S010	礎石	東京原口門 1層 階段石組上,焼土	(6.0)	2.5	2.1	輝石雲母岩	30.2		200101-0001
S011	礎石(石製品)	東京原口門 1層 石段上 南段 相留心	27.2	22.1	6.6	凝灰岩	3548.0	縁付あり,転用か?	200101-0002
S012	礎石	東京原口門 1層 階段北東土,石組煉1A	(11.7)	(19.2)	8.7	凝灰岩	1043.2		200101-0003

煉瓦

図版 No.	出土地点	全長 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	材質	特記事項	出(採)掘番号
L01	東京原口門 1層 石組煉1号 焼土	22.9	11.35	190	硬白,白色顔料(砂及/1~3mm)の焼土塊を付	転用(瓦工による)ナラ製煉	200101-0014

第37表 歡奇屋原較調査区 出土遺物羅列表 瓦

()は保存率

図版 No.	記号	出土地点	瓦当 記号	瓦当 形状	寸法(単位)															胎土	胎土 成分	特記事項	ID(調査番号)	
					u	v	w	x	y	z	a	b	c	d	e	f	g	h	i					j
T231	軒瓦	黒呂屋口内	輪	瓦	1	15.4	11.0	17.1	2.4												褐色、白・褐色色細砂多、空腔あり	片面	褐色、 灰白(瓦表)・ 黒(瓦裏)	200101-0010
T232	軒瓦	黒呂屋口内	輪	輪	1				2.45												黄褐色、白色細砂・細砂少	両面	黒(瓦表)	200101-0007
T233	軒瓦	黒呂屋口内	輪	輪	1	8.30	3.3	5.0	3.1	3.3											褐色、白・褐色色小砂少、白・褐色色細砂多、空腔あり	側面	緑青黒(瓦表)	200101-0006
T234	軒瓦	黒呂屋口内	輪	瓦	1	8.30	3.3	5.0	3.1	3.3											褐色、白・褐色色小砂少、白・褐色色細砂多、空腔あり	全面	黒褐色(瓦表)	200101-0011
T235	軒瓦	黒呂屋口内	輪	瓦	1	10.15	2.75	4.7	2.75	2.6											褐色、白・褐色色小砂少、白・褐色色細砂多、空腔あり	側面	緑青黒、黒(瓦表)	200101-0012
T236	軒瓦	可成門前	輪	瓦	1	6.8	11.1	2.8	3.0	3.4	2.0										褐色、白・褐色色小砂少、白・褐色色細砂多、空腔あり	側面	緑青黒、黒(瓦表)	200101-0013

図版 No.	記号	出土地点	瓦当 記号	瓦当 形状	寸法(単位)															胎土	胎土 成分	特記事項	ID(調査番号)		
					a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o					p	
T240	瓦	黒呂屋口内	輪	北葺石版上表土	1	13.0	13.4	5.0	6.3	2.7												灰白色、白・褐色色細砂少	側面	褐色	200101-0005
T241	葺瓦	黒呂屋口内	輪	南葺北葺、南方表土	1	16.6	15.7		2.1													褐色、白・褐色色細砂多、空腔あり	全面	緑青黒(瓦表)	200101-0008
T242	葺瓦	黒呂屋口内	輪	南葺北葺、南方表土	1	15.7	13.9		1.9													白・褐色、褐色色細砂少、白・褐色色細砂多	側面	緑青黒(瓦表)	200101-0009

第4節 小結

1. 風呂屋口門地点

絵第1・2節で述べたように、風呂屋口門地点では現存する石段（石段1）が近代以後改修されていること、また石垣沿いに敷設されていた石組溝（石組溝1）が石段と同時に施工であること、旧陸軍期のうちに水路としての役割を終えていることを確認した。石段1と石組溝1は、近代の大規模造成とともに敷設されており、近世盛土は石段上段で削平された一部を確認するとどまった。

石段1は、二ノ丸西石垣南端から北方へ5.2m地点に3.0mの幅で設置され、石垣天端48.8mから石垣下現況地表面45.3mまで3.5mの段差となっている。埋もれていた踏板を含め、確認した石段は踊り場より上が11段、以下が8段の計19段、高さ3.95mである。石組溝1は、二ノ丸西石垣裾に並行して敷設されており、石段1の下部を暗渠状となって潜っている。

二ノ丸と数寄屋屋敷を連絡する当該階段については、近世前期から絵図に描かれており（第134・135図）、近世後期には「西ノ口」、「西口石櫓」、「御風呂口」等の表記が見られる。近世中後期の絵図によると、付近には御殿に伴う風呂屋が存在していた。なお風呂屋は文化5～7年（1808～1810）年の御殿再建時からしばらくの間二ノ丸側にあったが、天保元年（1830）頃までには数寄屋屋敷側に移されている。

階段の位置については時期により若干の動きがあり、寛政頃の絵図によると、現在よりやや北側に寄っていたと見られる。現在の位置に定まったのは文化5年（1808）の二ノ丸火災以後のことである。

旧陸軍期の絵図によっても風呂屋口門の位置は踏襲されていることが判明する。現況の形状となった改修時期を確定することは難しいが、おそらく明治期のことと考えられる。

2. 数寄屋門北地点

数寄屋門北地点では、近世ないし近世の可能性のある路面及び路盤（IIa・IIb層）、近世の石段・石組溝等を検出した。

このうち石組溝3は、居間先土蔵下石垣北面（石垣ID:2603N）東端付近から、数寄屋門台石垣（石垣ID:2830E）と北側に続く土塀基礎石垣（石垣ID:2825E）の屈曲点付近へと伸びる。溝の側板は北側で2石、南側で5石確認している。側板上面は北側が43.25～43.22m、南側が43.24～43.16mと西から東へ下がる。

近世前期の絵図には、数寄屋門の背後（数寄屋屋敷側）に石段を描くものが見られる（第134図）。石組溝は近世前期・後期の絵図ともに見えないが、門周辺の排水等に関わるものであろう。

近世の早い段階から数寄屋門及び通路として機能したこの区域において、幾度となく路面や排水路等の補修が繰り返されてきたことが窺える。

3. 司令部門南地点

司令部門南地点では、近世～近代にかけての路面・路盤・造成土等のほか、近代以後の建物に附属する雨落ち溝と見られる石組溝、近世に属する可能性のある敷石状の石材を確認した。

絵図面に描かれる数寄屋屋敷の建物配置等については、[石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室2006b]で図解されている。これによると、17世紀後半の時点では建物がなく、元禄10年（1697）に二ノ丸拡張工事により部屋方が増築される。調査地点はこの時の建物内に相当する。以後、宝暦の大火、文化の二ノ丸火災を経て、建物は都度改築を余儀なくされるが、いずれにおいても調査地点は建物の内側に相当すると見られる。

今回の調査で検出した敷石状石材については、絵図上に該当するような施設は見い出せない。ただ

し、絵図に描かれる建物は、二ノ丸西石垣や、これとほぼ直角をなす切手門前堀の軸線に合わせて配置されており、敷石状遺構と軸線を同じくする。本遺構がこれら建物に付随する施設であった可能性は高い。

石組溝については、詳細な時期は不明であるが、近代以後の建物外構施設として敷設されたものと見られる。すぐ北側に位置する司令部門は、敷寄屋敷北側の出入り口となっているが、近世にはこの位置に出入り口はなく（より西側に切手門が設けられていた）、門も明治 32 年までに別の場所から移設されたと考えられる。今回の調査で、石組溝に伴う路面と推測する I b 層を司令部門の掘方が切り込むことが判明したため、門の移設は石組溝廃絶以後であり、両者の存続時期は重ならない可能性が高いと考えられる。

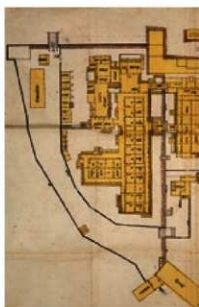
なお、本地点の西側、雑土蔵のすぐ南、二ノ丸西石垣の西側の一角では、金沢大学による学術発掘調査（昭和 52 年度）が実施されている〔佐々木 1981〕。この時の調査の近世末遺構群（礎石群）は本地点の下層敷石状石材と地盤高が近く、同一面に展開していた可能性が高いものと推測される。



近世前期
「金沢城二之丸座敷之図」
(金沢市立玉川図書館蔵)



近世前期
「金沢城座敷之図二ノ丸」
(石川県立歴史博物館蔵)



宝暦 5 年 (1755)
「御家廻り図」(「金沢城御城中絵図」)
(石川県立図書館蔵)

第 134 図 敷寄屋敷調査区 敷寄屋敷の絵図 (近世)



寛政5年(1793)
「二之丸御殿御広式御絵図」
(金沢市立玉川図書館蔵)



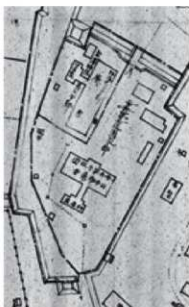
文化8年(1811)頃
「金沢城二ノ丸絵図面」
(金沢市立玉川図書館蔵)



嘉永3年(1850)
「御城分間御絵図」
(公財)前田育徳会蔵)



明治32年(1899)
「歩兵第七連隊構外木柵解除之圖」
(防衛研究所戦史研究センター蔵)



大正15年(1926)
「金澤旧城郭 第九師團司令部
歩兵第七聯隊 歩兵第六旅團司令部
第九師團城内被服庫 金澤憲兵隊配置圖」
部分 階調を反転
(防衛研究所戦史研究センター蔵)



昭和20年(1945)
「第五十二師団司令部図」
(石川県立歴史博物館蔵)

第135図 数寄屋屋敷調査区 数寄屋屋敷の絵図・図面(近世・近代)

第8章 まとめ

鶴ノ丸第1次調査

調査は便益施設（トイレ）建設に伴い実施した。調査区は橋爪門南側の「五正建御殿」付近に相当する。主な遺構として暗渠遺構（辰巳用水）、馬洗場遺構、石垣台、塀基礎等を検出した。暗渠遺構（辰巳用水）については、木樋・粘土巻木樋・石管の3種類の導水管を持つ流路を確認した。切り合い関係や出土遺物、絵図・文献との対比により、18世紀後半から19世紀半ばにかけて上記の順で変遷したと見られる。馬洗場遺構については、黄色系の粘土敷面と凝灰岩の石列を確認した。遺構の構築は、切り合い関係から木樋（SD03）敷設より新しく、絵図・文献との対比により、文化5年（1808）の二ノ丸火災後と考えられる。絵図によると内部は石敷きであるが、発掘では確認できず、検出した遺構は石敷きの下部構造であったと推定される。石垣台は橋爪二ノ門の西側と、本丸・二ノ丸間の空堀東端を限るもので、上部は失われているが、本調査区ではその南面・西面の根石を一部検出した。石垣編年4期に属し、寛永8年（1631）の大火後に構築されたと考えられる。

新丸第1次調査

調査は湿性の植物園（湿性園）整備に伴い実施した。調査区は近代以後埋立てられた三ノ丸北堀西部に相当し、堀の北辺確認を目的にトレンチを設定した。調査の結果、調査範囲東端で近世石垣、中央～西側で土羽となる堀北辺を検出した。堀北辺は上部を削平されていたが、平面形はほぼ近世の絵図と合致した。検出した石垣は、石垣編年2期新段階（慶長後期）の特徴をもつ。なお近代以後についても、近世土羽の位置を踏襲した石垣が構築された後、次第に埋立てられた過程が判明した。

尾坂門調査

調査は園路整備・植栽工事に伴い実施した。調査区は尾坂門と門前の通路に相当する。金沢大学期の下水道や旧陸軍期の石組溝等の範囲が多くを占め、近世の門本体の基礎は確認できなかったが、門に関わる路面・石組溝を部分的に検出した。また調査区南東側を中心に、尾坂門設置以前と見られる鍛冶関連遺構等を検出した。鞆羽口や鍛冶滓等と伴出した陶磁器は、16世紀末期以前に属すると考えられる。本調査区に近接する新丸第2次調査区でも類似した遺構面を確認しており、尾坂門設置以前、一帯は町屋の一角であった可能性がある。

二ノ丸園路調査

調査は園路整備に伴い実施した。調査区は二ノ丸御殿西半の一角に相当する。主な遺構として、石垣・礎石・ピット・溝状遺構・溜枡状遺構等を検出した。石垣は裏口門南側を画するもので、上部は失われているが、下部を部分的に確認した。礎石・ピットは二ノ丸西（数寄屋敷東）石垣とほぼ並行し、絵図との照合等から、御殿に関連する可能性も考えられる。なお礎石・ピットや溜枡状遺構等は、明治14年（1881）の火災に関わると推測される焼土・被災遺物等に覆われていた。

数寄屋敷調査

調査は園路整備に伴い実施した。調査区は風呂屋口門・数寄屋門北・司令部門南の3地点に分かれる。おおよそ元禄期以前は数寄屋敷、以後は二ノ丸御殿広式の下段で部屋方とされた区域に含まれる。風呂屋口門地点では、二ノ丸本体側と連絡する現況の石段について、近代に修築されていることが判明した。近世に属する遺構は全般的に少ないが、数寄屋門北地点では路面・石段・石組溝を一部確認した。

引用・参考文献

- Roderick Sprague 2002 「China or Prosser Button Identification and Dating」 *Historical Archaeology*, vol. 36, No. 2
愛知県陶磁資料館 2005 『桃山陶の華麗な世界』
青木治夫 1989 「辰巳用水から見た近世初期の木管技術」 『第9回日本土木史研究発表会論文集』
阿部和江編 1999 『ボタン事典』 文園社
石川県金沢城・兼六園管理事務所 石川県金沢城調査研究所 2012 『特別名勝兼六園 築堀石垣等修理工事報告書』
石川県金沢城調査研究所 2008a 『金沢城跡埋蔵文化財確認調査報告書Ⅰ』
石川県金沢城調査研究所 2008b 『戸室石切丁場確認調査報告書Ⅰ』
石川県金沢城調査研究所 2008c 『松園でみる金沢城』
石川県金沢城調査研究所 2008d 『金沢城調査研究所年報Ⅰ』
石川県金沢城調査研究所 2008e 『金沢城石垣構築技術史料Ⅰ』
石川県金沢城調査研究所 2009a 『よみがえる金沢城Ⅱ』
石川県金沢城調査研究所 2009b 『金沢城調査研究所年報Ⅱ』
石川県金沢城調査研究所 2010a 『金沢城跡石垣修理工事報告書—玉泉院丸南西石垣—』
石川県金沢城調査研究所 2010b 『金沢城の三御門—河北門・橋爪門・石川門—』
石川県金沢城調査研究所 2010c 『金沢城跡玉泉院丸遺構確認調査概報Ⅱ』 (現地説明会資料)
石川県金沢城調査研究所 2010d 『金沢城調査研究所年報Ⅲ』
石川県金沢城調査研究所 2011a 『金沢城石垣構築技術史料Ⅱ』
石川県金沢城調査研究所 2011b 『金沢城跡—河北門—』
石川県金沢城調査研究所 2011c 『金沢城跡—二ノ丸内堀・菱橋・五十間長屋・橋爪門被櫓Ⅰ—』
石川県金沢城調査研究所 2011d 『金沢城調査研究所年報Ⅳ』
石川県金沢城調査研究所 2011e 『金沢城跡玉泉院丸遺構確認調査概報Ⅲ』 (現地説明会資料)
石川県金沢城調査研究所 2012a 『金沢城跡—二ノ丸内堀・菱橋・五十間長屋・橋爪門被櫓Ⅱ—』
石川県金沢城調査研究所 2012b 『金沢城調査研究所年報Ⅴ』
石川県金沢城調査研究所 2012c 『城郭石垣の技術と組織』
石川県金沢城調査研究所 2012d 『金沢城跡玉泉院丸遺構確認調査概報Ⅳ』 (現地説明会資料)
石川県金沢城調査研究所 2013a 『戸室石切丁場確認調査報告書Ⅱ』
石川県金沢城調査研究所 2013b 『金沢城調査研究所年報Ⅵ』
石川県金沢城調査研究所 2013c 『金沢城普請作事史料Ⅰ』
石川県金沢城調査研究所 2014a 『金沢城普請作事史料Ⅱ』
石川県金沢城調査研究所 2014b 『金沢城跡—石川門付隅太鼓塀—』
石川県金沢城調査研究所 2014c 『金沢城跡埋蔵文化財確認調査報告書Ⅱ』
石川県金沢城調査研究所 2014d 『金沢城調査研究所年報Ⅶ』
石川県金沢城調査研究所 2015a 『奥村実実御用番井御城方日記』
石川県金沢城調査研究所 2015b 『金沢城跡—橋爪門—』
石川県金沢城調査研究所 2015c 『金沢城跡—玉泉院丸庭園Ⅰ—』
石川県金沢城調査研究所 2015d 『金沢城調査研究所年報Ⅷ』
石川県金沢城調査研究所 2015e 『金沢城跡鼠多門・鼠多門橋遺構確認調査概報Ⅰ』 (現地説明会資料)
石川県教育委員会・(財) 石川県埋蔵文化財センター 1998 『金沢城跡を掘る 1998』
石川県教育委員会・(財) 石川県埋蔵文化財センター 1999a 『金沢城跡を掘る 1999』
石川県教育委員会・(財) 石川県埋蔵文化財センター 1999b 『金沢城跡を掘る 1999』 vol. 2
石川県教育委員会・(財) 石川県埋蔵文化財センター 2000 『金沢城跡を掘る 2000』
石川県教育委員会・(財) 石川県埋蔵文化財センター 2001 『金沢市 三社町遺跡』
石川県教育委員会・(財) 石川県埋蔵文化財センター 2002a 『金沢市 金沢城跡Ⅰ』
石川県教育委員会・(財) 石川県埋蔵文化財センター 2002b 『金沢市 木ノ新保遺跡』
石川県教育委員会・(財) 石川県埋蔵文化財センター 2002c 『金沢市 経王寺遺跡』
石川県教育委員会・(財) 石川県埋蔵文化財センター 2002d 『金沢市 高岡町一ツ水溜跡』
石川県教育委員会・(財) 石川県埋蔵文化財センター 2002e 『金沢市 前田氏(長種系)風敷跡』
石川県教育委員会・(財) 石川県埋蔵文化財センター 2007 『金沢市 三社町遺跡』
石川県教育委員会・(財) 石川県埋蔵文化財センター 2010 『金沢市 金沢城跡Ⅰ』
石川県教育委員会・(財) 石川県埋蔵文化財センター 2012 『金沢市 金沢城跡Ⅱ—壹形(第3・4次調査)—』
石川県教育委員会・(財) 石川県埋蔵文化財センター 2013 『小松市 八幡遺跡Ⅱ』
石川県教育委員会・(公財) 石川県埋蔵文化財センター 2014a 『石川県金沢市 金沢城下町遺跡(丸の内7番地点)』
石川県教育委員会・(公財) 石川県埋蔵文化財センター 2014b 『金沢市 小立野エミノマチ遺跡』
石川県教育委員会・(公財) 石川県埋蔵文化財センター 2014c 『金沢市 金沢城跡Ⅲ—壹形(第5次調査)—』

- 石川県教育委員会 1970『金沢城二ノ丸跡発掘調査概報』
- 石川県教育委員会 2001『金沢城フォーラム いま甦る金沢城』
- 石川県教育委員会事務局文化財課『いしかわ文化財ナビ』[http://www.bunkazainavi.pref.ishikawa.lg.jp/] (2015/03/17参照)
- 石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室 2003『年報1』
- 石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室 2004a『年報2』
- 石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室 2004b『御造営方日記』上巻
- 石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室 2005a『年報3』
- 石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室 2005b『御造営方日記』下巻
- 石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室 2005c『金沢城フォーラム 記録集 石垣の匠と技』
- 石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室 2005d『金沢城を探る』金沢城調査研究パンフレット No. 3
- 石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室 2006a『金沢城跡Ⅱ』
- 石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室 2006b『よみがえる金沢城1』
- 石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室 2006c『金沢東照宮(尾崎神社)の研究』
- 石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室 2006d『年報4』
- 石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室 2007a『年報5』
- 石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室 2007b『金沢城代と横山家文書の研究』
- 石川県教育委員会文化課・金沢御堂金沢城調査委員会 1991『金沢御堂・金沢城調査報告書Ⅰ』金沢城史料編
- 石川県教育委員会文化課・金沢御堂金沢城調査委員会 1991『金沢御堂・金沢城調査報告書Ⅰ』金沢御堂史料編(2分冊)
- 石川県図書館協会 1937『金城深秘録』
- 石川県土木部管轄課 2001『金沢城公園差橋・五十間長屋・橋爪門結構等復元工事報告書』
- 石川県土木部公園緑地課 2013『金沢城公園 河北門復元整備工事報告書』
- 石川県立埋蔵文化財センター 1990『元菊町遺跡』
- 石川県立埋蔵文化財センター 1992『特別名勝 兼六園(江戸町推定地)発掘調査報告書一附 本多家上屋敷跡発掘調査報告一』
- 石川県立埋蔵文化財センター 1995『谷内・杉谷遺跡群』
- 石川県立埋蔵文化財センター 1996『金沢城跡車橋門発掘調査報告書』
- 石川県立埋蔵文化財センター 1997『金沢城跡石川門前土橋(通称石川橋)発掘調査報告書Ⅰ』
- 石川県立埋蔵文化財センター 1998『金沢城跡石川門前土橋(通称石川橋)発掘調査報告書Ⅱ』
- 井上喜久男 1990『尾張陶磁(1) - 近世初期の瀬戸物生産 - 』『愛知県陶磁資料館研究紀要9』
- 井上親夫 1969『金沢城跡の発掘』金沢大学金沢学術調査委員会
- 上野佳也 1976『金沢城四十間長屋跡発掘調査概報』『日本海文化』No.3 金沢大学法文学部日本海文化研究室
- 江戸遺跡研究会 2001『図説 江戸考古学研究事典』柏書房
- 小野正敏 1982『15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代』『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
- 小野正敏 1985『出土陶磁器よりみた15・16世紀における画期的審美』『MUSEUM』416号 東京国立博物館
- 加藤道雄 2001『小立野台地と金沢城址』『いしかわ人は自然人』第57号 橋本論文堂
- 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2002『石川県金沢市 彦三町遺跡』
- 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2003a『石川県金沢市 昭和町遺跡Ⅱ』
- 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2003b『石川県金沢市 高岡町遺跡Ⅱ』
- 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2003c『石川県金沢市 本町一丁目遺跡Ⅲ』
- 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2003d『野田山墓地』
- 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2004a『石川県金沢市 昭和町遺跡Ⅲ』
- 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2004b『石川県金沢市 広坂遺跡(1丁目)Ⅰ(測量図編Ⅰ)』
- 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2004c『石川県金沢市 久昌寺遺跡』
- 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2005a『石川県金沢市 片町二丁目遺跡』
- 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2005b『石川県金沢市 広坂遺跡(1丁目)Ⅱ(古代・中世編、測量図編2)』
- 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2005c『石川県金沢市 木ノ新保遺跡Ⅱ』
- 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2005d『平成16年度 金沢市埋蔵文化財調査年報』
- 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2006a『石川県金沢市市内遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
- 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2006b『石川県金沢市 広坂遺跡(1丁目)Ⅲ(近世編1)』
- 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2006c『石川県金沢市 本町一丁目遺跡Ⅳ』
- 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2007a『石川県金沢市 兼六元町遺跡 彦三丁目遺跡』
- 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2007b『石川県金沢市 下堤・青草町遺跡』
- 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2007c『石川県金沢市 広坂遺跡(1丁目)Ⅳ(近世編2)』
- 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2008a『石川県金沢市 金沢城惣構跡Ⅰ～西外惣構跡・東内惣構跡発掘調査報告書～』
- 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2008b『野田山・加賀藩主前田家墓所調査報告書』
- 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2009a『平成20年度 金沢市埋蔵文化財調査年報』
- 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2009b『辰巳用水調査報告書』

- 金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2009c『石川県金沢市 広坂遺跡（1丁目）V（金沢能楽美術館地点）』
- 金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2010a『平成21年度 金沢市埋蔵文化財調査年報』
- 金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2010b『石川県金沢市 東山一丁目遺跡』
- 金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2011a『平成22年度 金沢市埋蔵文化財調査年報』
- 金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2011b『石川県金沢市 金沢城惣構跡Ⅱ～西内惣構跡（主計町地点）発掘調査報告書～』
- 金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2011c『石川県金沢市 金沢城惣構跡Ⅲ～西外惣構跡（武蔵町地点）発掘調査報告書～』
- 金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2012『石川県金沢市 金沢城惣構跡Ⅳ～西外惣構跡（武蔵町地点）発掘調査報告書』
- 金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2012a『石川県金沢市 金沢城下町遺跡（本多町三丁目地点）』
- 金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2012c『野田山・加賀八家墓所調査報告書』
- 金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2012d『石川県金沢市 金沢城下町遺跡（西外惣構跡升形地点）発掘調査報告書 遺構編』
- 金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2013a『平成24年度 金沢市埋蔵文化財調査年報』
- 金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2013b『石川県金沢市 金沢城惣構跡V 金沢城下町遺跡（西外惣構跡升形地点）発掘調査報告書 遺物編』
- 金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2014a『平成25年度 金沢市埋蔵文化財調査年報』
- 金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2014b『石川県金沢市 片町二丁目遺跡（5番地点）』
- 金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2014c『石川県金沢市 金沢城惣構跡VI 東内惣構跡（枯木橋南地点）発掘調査報告書』
- 金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2015a『平成26年度 金沢市埋蔵文化財調査年報』
- 金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）2015b『石川県金沢市 長家上屋敷跡調査報告書』
- 金沢市・金沢市教育委員会1991『瓢箪町遺跡』
- 金沢市教育委員会1995『金沢市本町一丁目遺跡』
- 金沢市教育委員会1997a『安江町遺跡』
- 金沢市教育委員会1997b『金沢市本町一丁目遺跡Ⅱ 鍛冶片原地点』
- 金沢市教育委員会（金沢市埋蔵文化財センター）2001a『金沢市高岡町遺跡Ⅰ』
- 金沢市教育委員会（金沢市埋蔵文化財センター）2001b『金沢市昭和町遺跡Ⅰ』
- 金沢市教育委員会（金沢市埋蔵文化財センター）2001c『金沢市醒ヶ井遺跡』
- 金沢市史編さん室1965『金沢の百年 明治編』 金沢市
- 金沢市史編さん室1967『金沢の百年 大正・昭和編』 金沢市
- 金沢市埋蔵文化財センター1998『長田町遺跡 長町遺跡 穴水町遺跡』
- 金沢市埋蔵文化財センター1999『下本多町遺跡』
- 金沢市役所1973『稿本 金澤市史』市街編第四 名著出版
- 金沢市立三川図書館2003『温故集録』一 金沢市図書館叢書（四）
- 金沢大学金沢城学術調査委員会1967『金沢城 その自然と歴史』金沢大学生協同組合
- 九州大学創立50周年記念事業後援会2001『金沢大学50年史』通史編
- 金沢大学埋蔵文化財調査センター2000『金沢大学文化財学研究』2
- 金沢大学埋蔵文化財調査センター2002『金沢大学文化財学研究』3・4
- 金沢大学埋蔵文化財調査センター2003『金沢大学文化財学研究』5
- 金沢御妻・金沢城調査委員会1993『金沢城跡 金沢城跡遺構実態調査概要報告書』石川県教育委員会
- 金山哲哉・関見史2015『金沢城下町遺跡（本多氏上屋敷跡地区）』『石川県埋蔵文化財情報』第34号（公財）石川県埋蔵文化財センター
- 木越隆三2003『元和～寛文期の金沢城修築について』『研究紀要 金沢城研究』創刊号 金沢城研究調査室
- 木越隆三2004『金沢城全域絵図の編年と分層』『研究紀要 金沢城研究』第2号 金沢城研究調査室
- 木越隆三2005『金沢城の地割図と二の丸御殿絵図』『研究紀要 金沢城研究』第3号 金沢城研究調査室
- 木越隆三2013『金沢の惣構創建年次を再検証する』『日本歴史』第780号 日本歴史学会
- 北垣徳一郎1987『石垣普請』法政大学出版局
- 北野博司2003『金沢城石垣の変遷Ⅰ』『研究紀要 金沢城研究』創刊号 金沢城研究調査室
- 北野博司2004『金沢城石垣の変遷Ⅱ』『研究紀要 金沢城研究』第2号 金沢城研究調査室
- 喜内敏1978『辰巳用水考』『土木学会誌』1978年2月号
- 九州近世陶磁学会2000『九州陶磁の編年 九州近世陶磁学会10周年記念』
- 九州近世陶磁学会2008『江戸後期における庶民向け陶磁器の生産と流通（東海・北陸・甲信越編）』
- 兼六園全史編纂委員会1976『兼六園全史』石川県観光協会
- 佐々木達夫1980『金沢城跡の発掘—一九七九年—』『日本海文化』No.7 金沢大学文学部日本海文化研究室
- 佐々木達夫1981『金沢城跡の発掘—1977年—』『金沢大学日本海地域研究所報告』第13号
- 貞末亮司・石崎俊哉・前田清彦1986『金沢城の発掘—1981—藤右エ門丸北側北面掘削発掘報告』『金沢大学日本海地域研究所報告』第18号
- 貞末亮司・前田清彦・児玉剛1989『金沢城の発掘—1986年—黒門横北側異外発掘調査報告』『日本海文化』No.15 金沢大学文学部日本海文化研究室

- 佐藤雅彦 1977 「宋の白磁」『世界陶磁全集』12 宋 小学館
- 庄川町 1975 『庄川町史』下巻
- 庄田知宏 2012 「金沢・城と城下町の調査成果」『考古学ジャーナル』No. 623 ニューサイエンス社
- 白峰 旬 1998 『日本近世城郭史の研究』校倉書房
- (財) 瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター 2006 『江戸時代の瀬戸・美濃―三都と名古屋―』
- (財) 瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター 2007 『窯跡出土の“近代陶磁”―瀬戸・美濃窯の近代1―』
- (財) 瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター 2008 『東京・小田原出土の“近代陶磁”―瀬戸・美濃窯の近代2―』
- (財) 瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター 2009 『せとの百年史―中部地方出土の近代陶磁 瀬戸・美濃窯の近代3―』
- (財) 瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター 2010 『関西出土の近代陶磁―瀬戸・美濃窯の近代4―』
- (財) 瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター 2011 『瀬戸・美濃窯の近代―生産と流通―』
- 瀬戸市歴史民俗資料館 2002 『大正2年のせとの風』
- 千田嘉博 2000 『織豊系城郭の形成』東京大学出版会
- 高岡市水道史編纂委員会編 1979 『高岡市水道史』高岡市水道局
- 滝川重徳 1999 「金沢城跡(本丸階段調査区)」『石川県埋蔵文化財情報』創刊号 (財) 石川県埋蔵文化財センター
- 辰巳ダム関係文化財調査団 1983 『加賀辰巳用水』
- 土田友信 2000 「金沢城跡」『石川県埋蔵文化財情報』第4号 (財) 石川県埋蔵文化財センター
- 坪井利弘 1993 『建築家のための瓦の知識』鹿島出版会
- 坪井利弘 1999 『因縁 瓦屋根』理工学社
- 東北大学埋蔵文化財調査研究センター 1999 『東北大学埋蔵文化財調査年報11』
- 富田和気夫・滝屋玲美 2002 「金沢城跡」『石川県埋蔵文化財情報』第7号 (財) 石川県埋蔵文化財センター
- 長山直治 2006 『兼六園を読み解く―その歴史と利用―』桂書房
- 日本海文化研究室編 1976 『金沢城郭史料』日本海文化叢書第三巻 金沢大学法文学部日本海文化研究室
- 橋本確文堂企画出版部編 1997 『特別名勝兼六園 その歴史と文化』
- 服部 郁 1993 『幕末から明治の瀬戸窯』『遺跡に見る幕末から明治』江戸遺跡研究会第6回大会発表要旨 江戸遺跡研究会
- 文化庁 1969 『重要文化財金沢城 石川門・三十間長屋保存修理工事報告書』
- 宮川勝次・西田郁乃 2015 「金沢城内の井戸跡に関する基礎的調査」『研究紀要 金沢城研究』第13号 石川県金沢城調査研究所
(有) ビバテック HP「南ブラシの歴史」[http://vivatec.jp/history/index.html] (2015/11/05参照)
- 藤 則雄 1999 「金沢城「百間堀」の新堀とその周辺の地形」『北陸の考古学Ⅲ』石川考古学研究会々誌第42号 石川考古学研究会
- 藤澤良祐 1987 「本業焼きの研究(1)」『瀬戸市歴史民俗資料館 研究紀要VI』瀬戸市歴史民俗資料館
- 藤澤良祐 1993 『瀬戸市史』陶磁史篇四 瀬戸市史編纂委員会
- 藤澤良祐 1998 『瀬戸市史』陶磁史篇六 瀬戸市史編纂委員会
- (有) 平凡社地方資料センター 1991 『日本歴史地名体系 17 石川県の地名』
- 北陸中世考古学研究会 2006 『中世北陸のかわらけと輸入陶磁器・瀬戸・美濃製品』
- 増山 仁 1997 「金沢城下における近世墓―久昌寺墓地を中心として―」『第9回関西近世考古学研究会大会 西日本近世墓の諸様相』
- 増山 仁 1999 「金沢城跡」『金沢市史』資料編19 考古 金沢市史編さん委員会
- 松田裕子編 2012 『南ブラシ事典』学建書院
- 三浦ゆかり 1999 「金沢城跡いり堀発掘調査」『石川県埋蔵文化財情報』第2号 (財) 石川県埋蔵文化財センター
- 水野信太郎 1999 『日本棟瓦史の研究』法政大学出版局
- 滝屋玲美・土田友信 2001 「金沢城跡」『石川県埋蔵文化財情報』第5号 (財) 石川県埋蔵文化財センター
- 滝屋玲美・土田友信ほか 2001 「金沢城跡」『石川県埋蔵文化財情報』第6号 (財) 石川県埋蔵文化財センター
- 本康宏史 2005 「金沢城・兼六園の近代史」『金沢市史 通史編3 近代』金沢市
- 森島康雄 1999 「中世末から近世初頭の陶磁器」『考古学ジャーナル』442
- 森島康雄 2003 「中世末から近世初頭の土器・陶磁器」『日本考古学協会 2003 年選賀大会資料集』日本考古学協会 2003 年選賀大会実行委員会
- 谷口明伸・増山 仁 2004 「前田土佐守家の下屋敷と櫻ヶ井遺跡」『研究紀要』第1号 (財) 金沢文化振興財団
- 山川出版社 2000 『石川県の歴史』
- 吉岡康暢 1985 「金沢城の発掘」『金沢城と前田氏領内の諸城』日本城郭史研究叢書 第五巻 名著出版
- 和田龍介 2014 「金沢城下町遺跡(東兼六町5番地区)」『石川県埋蔵文化財情報』第31号(公財) 石川県埋蔵文化財センター
- 和田龍介 2015 「金沢城下町遺跡(東兼六町5番地区)」『石川県埋蔵文化財情報』第34号(公財) 石川県埋蔵文化財センター

報告書抄録

ふりがな	かなざわじょうあと — つるのまるだい1じ・しんまるだい1じ — おさかもん・にのまるえんろ・すきややしき							
書名	金沢城跡 一鶴ノ丸第1次・新丸第1次・尾坂門・二ノ丸園路・数寄屋屋敷一							
副書名	金沢城史料叢書27							
シリーズ名	金沢城公園整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	9							
編著者名	安中玲美、荒木麻理子、東 絢美、辻森由美子、本田秀生、滝川重徳							
編集機関	石川県金沢城調査研究所							
所在地	〒920-0918 石川県金沢市尾山町10-5 TEL 076-223-9696							
発行年月日	2016年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	〇ノ〇	〇ノ〇	(㎡)		
金沢城跡	石川県 金沢市丸の内	01	01215	36° 33′ 58″	136° 39′ 35″	19990729 ～ 19991005 19991013 ～ 20000114 19991124 ～ 19991208 20001206 ～ 20001225 20010423 ～ 20010502 20010515 ～ 20010626	630 (新丸 第1次) 270 (鶴ノ丸 第1次) 220 (二ノ丸 園路) 100 (尾坂門) 40 (尾坂門) 100 (数寄屋 屋敷)	活用目的 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
金沢城跡	城館	近世	暗渠(辰巳用水)、馬洗場(粘土面)、石垣、堀、路面、石組溝、土埃、礎石、ピット、石段	陶磁器、土器、土製品、瓦、金属製品、石製品、骨製品				
要約	<p>金沢城公園整備事業に伴い、鶴ノ丸・新丸・二ノ丸等を対象に埋蔵文化財調査を実施した。本書では平成11～13年度の調査結果を報告した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・鶴ノ丸第1次調査では、暗渠(辰巳用水)、馬洗場遺構、石垣台等を検出した。辰巳用水の導水管は、18世紀後半から19世紀半ばにかけて、木桶・粘土巻木桶・石管の順に変遷していることが判明した。 ・新丸第1次調査では、近代以後埋め立てられた三ノ丸北堀北辺の範囲を確認した。 ・尾坂門調査では、門に関連する近世の路面・石組溝の他、16世紀に遡ると考えられる尾坂門設置以前の遺構群を検出した。 ・二ノ丸園路調査では、裏口門南石垣下部、礎石・ピット、溝状遺構・溜槽状遺構等を検出した。 ・数寄屋屋敷調査では、現存する風呂屋口門の石段が近代に修築されたものであることが判明した。また数寄屋門北地点では、近世の路面・石段・石組溝等を検出した。 							



調査区全景（垂直写真）



調査区全景（南から）



調査区北壁中央 土層断面



調査区北壁中央 土層断面（下部）



P07 東壁土層断面



P10 東壁土層断面



P10 南壁土層断面



15号攪乱 西壁土層断面

写真図版1 鶴ノ丸第1次調査区1



調査区中部 旧陸軍整地土瓦溜検出状況 (南から)



調査区中部 旧陸軍整地土瓦溜検出状況 (西から)



調査区南端部 辰巳用水 (SD01~03) 検出状況



調査区南端部 SD01-02 石管・粘土巻木樋検出状況 (西から)



粘土巻木樋拡大



調査区南西部 SD02粘土巻木樋検出状況 (北から)



粘土巻木樋拡大



調査区南端部 SD01・SD02土層断面



調査区南端部 SD02粘土巻木桶断面



12号掘乱 北壁土層断面 (SD02・03)



トレンチ1 南壁土層断面 (北西から)



トレンチ1 南壁土層断面 (SD02・03)



トレンチ1 南壁SD03木桶跡



トレンチ1 南壁SD02粘土巻木桶検出状況



トレンチ1 南壁SD02粘土巻木桶残存木質



トレンチ1 北壁SD02粘土巻木桶検出状況

写真図版3 鶴ノ丸第1次調査区3



1号掘乱 北壁SD03木樁跡



1号掘乱 南壁SD03木樁跡



衛戍拘禁所跡と馬洗場検出状況（北東から）



石垣台（2330S）根石検出状況（西から）



石垣台（2330S）根石検出状況（東から）



石垣台（2330S）根石検出状況（北から）



石垣抜取痕 土層断面（南半）



石垣抜取痕 土層断面（北半）

写真図版4 鶴ノ丸第1次調査区4



石垣台 (2330S) 西端部根石検出状況



石垣台 (2330W) 根石検出状況



塀基礎 検出状況 (西から)



塀基礎南面



塀基礎北面



調査区西壁北端 土層断面



調査区西壁北端 塀基礎根石



調査区西壁北端 I b30層赤戸室粗加工石出土状況

写真図版 5 鶴ノ丸第1次調査区 5



調査範囲全景（上空から）



トレンチ1 三ノ丸北堀北岸石垣（4300S）



トレンチ1 三ノ丸北堀北岸石垣（4300S）検出状況



トレンチ1 石垣石刻印



トレンチ1 SK01・SK02（西から）

写真図版6 新丸第1次調査区1



トレンチ1 東壁土層断面



トレンチ1 東壁土層断面



トレンチ1 東壁土層断面



トレンチ1 SK01土層断面 (西から)



トレンチ2 三ノ丸北堀北岸石垣 (4300S) 検出状況



トレンチ2 石垣石刻印



トレンチ2 近代石垣 (4203S) 掘方検出状況



トレンチ2 近代石垣 (4203S)

写真図版7 新丸第1次調査区2



トレンチ2 拡張部遺構検出状況（東から）



トレンチ3 遺構検出状況（東から）



トレンチ3 近代石垣（左：4203E・右：4203S）



トレンチ3 近代石垣（4203S）



トレンチ3 東壁土層断面



トレンチ3 西側（北から）



トレンチ3 北壁土層断面



トレンチ4 近代石垣（左：4203S・右：4203E）

写真図版8 新丸第1次調査区3



トレンチ4 石垣背面(東から)



トレンチ4 西壁土層断面



トレンチ4 石管下部検出状況



トレンチ5 全景(北西から)



トレンチ5 近代石垣(4203E)



トレンチ5 南壁土層断面



トレンチ5 南壁土層断面



トレンチ5 南壁土層断面

写真図版9 新丸第1次調査区4



トレンチ6 全景 (西から)



トレンチ6 近代石垣 (4203E)



トレンチ6 北壁土層断面



トレンチ6 北壁土層断面



トレンチ6 北壁土層断面



トレンチ8 西壁土層断面



トレンチ8 北壁土層断面



トレンチ8 近代石垣 (4203S)

写真図版 10 新丸第1次調査区5



トレンチ8 近代石垣 (4203W)



トレンチ9 全景 (南から)



トレンチ9 近代石垣 (4203S)



トレンチ9 西壁土層断面



トレンチ10 全景 (南から)



トレンチ10 西壁土層断面



トレンチ11 全景 (東から)



トレンチ12 全景 (東から)

写真図版 11 新丸第1次調査区6



2000-1地点 全景（西から）



2000-1地点 全景（東から）



2000-1地点 北部全景（南東から）



2000-1地点 調査地点北部土層断面全景（南東から）



2000-1地点 調査地点北部土層断面



2000-1地点 調査地点北部土層断面（石列1・路面2～5）



2000-1地点 調査地点北部土層断面（路面3～5・石組暗渠2）



2000-1地点 調査地点北部土層断面

写真図版 12 尾坂門調査区 1



2000-1地点 調査地点南壁土層断面



2000-1地点 調査地点南壁土層断面 (SD03・SK09)



2000-1地点 調査地点南壁土層断面 (SK09・河原石群)



2000-1地点 調査地点南壁土層断面 (河原石群)



2000-1地点 調査地点南壁土層断面 (焼土層)



2000-1地点 調査地点南壁土層断面



2000-1地点 調査地点南壁土層断面 (路面1路盤層)



2000-1地点 調査地点南壁土層断面

写真図版 13 尾坂門調査区 2



2000-1地点 南壁土層断面 (S02)



2000-1地点 調査地点南壁土層断面



2000-1地点 調査地点南壁土層断面



2000-1地点 石組暗渠1石垣面全景 (北東から)



2000-1地点 石組暗渠1石垣面



2000-1地点 石組暗渠1石垣面



2000-1地点 石組暗渠1石垣面



2000-1地点 石組暗渠1石垣面

写真図版 14 尾坂門調査区3



2000-1地点 石組暗渠1 石垣面



2000-1地点 石組暗渠1 石垣面



2000-1地点 石組暗渠1 石垣面



2000-1地点 石組暗渠1 石垣面



2000-1地点 石組暗渠1 石垣面



2000-1地点 石組暗渠1 内西土手東壁土層断面



2000-1地点 調査地点東壁土層断面全景(北西から)



2000-1地点 調査地点東壁土層断面(石組暗渠1)

写真図版 15 尾坂門調査区4



2000-1地点 調査地点東壁土層断面



2000-1地点 調査地点東壁土層断面 (SK06)



2000-1地点 調査地点東壁土層断面 (SK03)



2000-1地点 調査地点東壁土層断面 (SK02・SK01)



2000-1地点 石段1 (北東から)



2000-1地点 河原石群 (北東から)



2000-1地点 南東部遺構 (南から)



2000-1地点 南東部遺構 (北西から)

写真図版 16 尾坂門調査区5



2000-1地点 SK08



2000-1地点 P03土層断面



2000-1地点 P04土層断面



2000-1地点 東部石組暗渠1・SK07土層断面



2000-1地点 東部遺構（東から）



2001-1～4地点 全景（南から）



2001-1地点 全景（南から）



2001-1地点 調査地点北壁土層断面

写真図版 17 尾坂門調査区6



2001-1地点 調査地点東壁土層断面



2001-1地点 調査地点南壁土層断面



2001-1地点 調査地点西壁土層断面



2001-1地点 近代攪乱(石組側溝2を破壊)



2001-2地点 全景(南から)



2001-2地点 調査地点北壁土層断面



2001-2地点 路面3(II6層上面)検出状況



2001-2地点 石組側溝2蓋石出土状況



2001-3地点 全景（南から）



2001-3地点 石組暗渠1



2001-3地点 石組側溝2



2001-3地点 石組側溝2 蓋石 (S15) 出土状況



2001-4地点 全景（東から）



2001-4地点 調査地点西壁土層断面



2001-4地点 調査地点北壁土層断面



2001-4地点 調査地点東壁土層断面



2001-4地点 南壁土層断面



2001-4地点 路面2 検出状況



2001-4地点 P09検出状況



2001-4地点 西北部Ⅲ層遺構検出状況



2001-5地点 東壁土層断面



2001-5地点 東壁土層断面



2001-5地点 東壁土層断面



2001-6地点 全景 (南西から)



2001-6地点 北トレンチ南壁土層断面



2001-6地点 南トレンチ北壁土層断面



2001-6地点 南トレンチ北壁土層断面



2001-6地点 南トレンチ北壁土層断面



2001-6地点 南トレンチ北壁土層断面



2001-6地点 南トレンチ北壁土層断面 (南東から)



2001-6地点 切石列1 (北から)



2001-6地点 建物基礎と石組側溝1 (東から)

写真図版 21 尾坂門調査区 10



調査区南部 P01～P03 (南東から)



調査区南部 P02～P04・礎石 (南東から)



調査区南部 P04・礎石・SX01 (南東から)



調査区南部 SX01 (南東から)



調査区南部 P01～P04・礎石・SX01 (南西から)



調査区南部 SX01 (南西から)



調査区南部 (北東から)



調査区南部 SX01北部 (南東から)

写真図版 22 二ノ丸園路調査区 1



調査区南部 SX02 (南東から)



調査区南部 SX02 (南東から)



調査区南部 (北東から)



調査区中央部 (南から)



調査区中央部 SD01～SD03 (南東から)



調査区中央部 SD01～SD03 (南西から)



調査区中央部 (北東から)



裏口門周辺 (南東から)



裏口門周辺 (北西から)



裏口門周辺 (東から)



裏口門周辺 (西から)



裏口門周辺 (南東から)



裏口門南石垣 (2711N) 石垣1 検出状況 (東から)



裏口門南石垣 石垣1 検出状況 (北から)



裏口門南石垣 石垣2 検出状況 (南東から)



裏口門南石垣 石垣2 検出状況

写真図版 24 二ノ丸園路調査区 3



裏口門南石垣 石垣2 検出状況



裏口門南石垣 石垣2 検出状況 (北西から)



裏口門東石垣西面 (2700W) 全景



裏口門東石垣西面 下部検出状況



裏口門西石垣東面 (2710E) 全景



裏口門西石垣東面南側 下部検出状況



裏口門西石垣東面中央 下部検出状況



裏口門西石垣東面北側 下部検出状況



土橋門東石垣西面 (3610W) 下部 全景



土橋門東石垣西面北側 下部検出状況



土橋門東石垣西面中央 下部検出状況



土橋門東石垣西面南側 下部検出状況



土橋門西石垣東面 (3620E) 下部 全景



土橋門西石垣東面南側 下部検出状況



土橋門西石垣東面中央 下部検出状況



土橋門西石垣東面北側 下部検出状況



SD01検出状況 (南東から)



SD02・SD03検出状況 (南から)



SD02検出状況 (南西から)



SX01北側 断面1北 仕切 (南から)



SX01南側 断面2 (南西から)



SX01南側 断面2南 南壁 (北東から)



SX02検出状況 (南西から)



発掘調査風景 (南から)



全景（西から）



全景（北西から）



全景（南東から）



調査区整備後状況（北西から）



調査区整備後状況（南西から）

写真図版 28 数寄屋敷調査区 風呂屋口門地点 1



石段1 検出状況（北西から）



石段1 上段（西から）



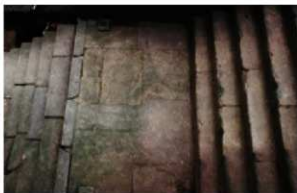
石段1 北側壁石垣



石段1 南側壁石垣



石段1 踊り場（東から）



石段1 踊り場（南から）



石段11段目北側の柵穴（南西から）



石段踊り場と南側石垣の接点



石段踊り場北西側の柵穴（南から）

写真図版 29 数寄屋敷敷調査区 風呂屋口門地点 2



石段1 上段東 全景 (南西から)



石段1 最上段 背面の根固め石 (南から)



石段1 東 サブトレンチ北壁土層断面 (西半)



石段1 東 サブトレンチ北壁土層断面 (東半)



溜拵1 全景 (北西から)



溜拵1 北壁土層断面



石段1 下段 全景 (南西から)



石段1 下段北 北壁土層断面

写真図版 30 数寄屋敷調査区 風呂屋口門地点 3



石段1下段北 東壁土層断面



石段1基礎 土層断面 (北西から)



石段1下段西 西壁土層断面南部



石段1下段西 西壁土層断面中央部



石段1下段西 西壁土層断面北部



石段1下段西 北壁土層断面



石段1下段南 南壁土層断面



石段1下段南 東壁土層断面

写真図版 31 数寄屋敷調査区 風呂屋口門地点 4



石段1下段北面 (2730N)



石組溝1A 検出状況 (北東から)



石段1下段南面 (2730S)



石組溝1B 検出状況 (南西から)



石組溝1内部 支柱検出状況 (北から)



石組溝1内部 側板検出状況 (北東から)



石組溝1内部 支柱の面取り状況 (南西から)



石段1周辺 作業風景 (南から)

写真図版 32 数寄屋敷調査区 風呂屋口門地点 5



全景（南東から）



全景（南から）



全景（南東から）



全景（北東から）



西壁土層断面（石組溝3・石段3付近）



西壁土層断面（石段3付近）



西壁土層断面（SP22～SP23間）



北西壁土層断面（石段2付近）

写真図版 33 数寄屋敷調査区 数寄屋門北地点 1



北西壁土層断面 (石段2北)



石段2・路面3 (南から)



石段2・路面3 (南東から)



溜橋2 北部 (南西から)



溜橋2 石組溝2 (北西から)



石組溝3 検出状況 (南西から)



石組溝3内部 土層断面 (北東から)



石組溝3背面 土層断面 (北東から)

写真図版 34 数寄屋敷調査区 数寄屋門北地点 2



全景（西から）



全景（東から）



作業風景（南西から）



東側トレンチ 拡大（上から）



断面A（東から）



断面A南側拡大（東から）



断面B（東から）



断面C（東から）

写真図版 35 数寄屋屋敷調査区 司令部門南地点



199904-B104 P001



199904-B103 P002



199904-B109 P003



199904-B105 P004



199904-B024 P005



199904-B106 P006



199904-B107 P007



199904-B012 P008



199904-B026 P009



199904-B102 P010

199904-B015 P011

199904-B005 P012

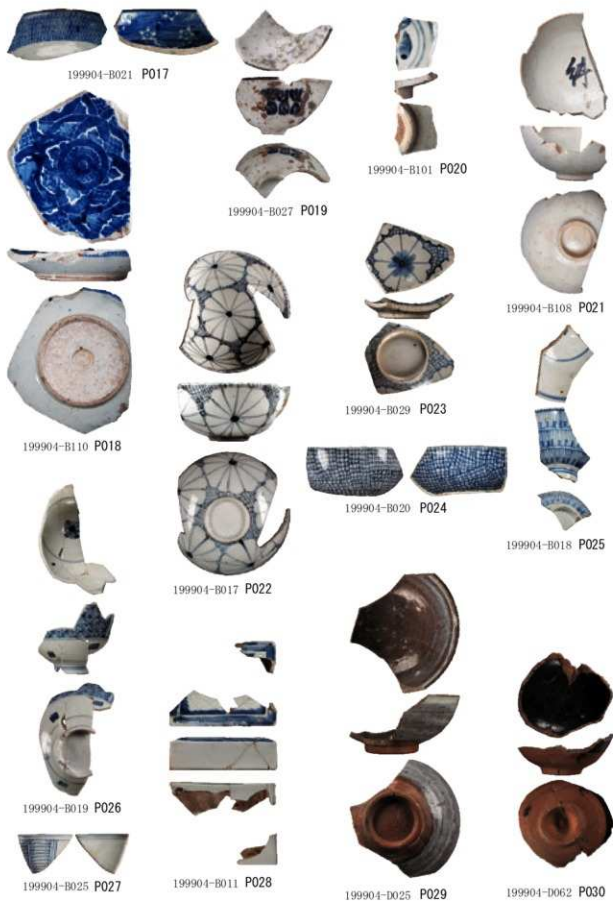
199904-B013 P013



199904-B014 P014

199904-B010 P015

199904-B016 P016



写真図版 38 鶴ノ丸第1次調査区 出土遺物 土器・陶磁器 3



199904-D022 P031



199904-B007 P033



199904-B009 P032



199904-B008 P034

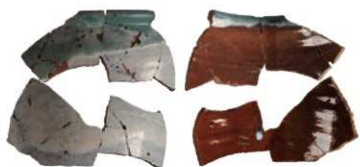


199904-B028 P035



199904-D020 P036

写真図版 39 鶴ノ丸第1次調査区 出土遺物 土器・陶磁器 4



199904-D021 P037



199904-D066 P038



199904-D067 P039



199904-D018 P040



199904-D065 P041



199904-D019 P042



199904-D064 P043



199904-D063 P044



199904-D061 P045

写真図版 40 鶴ノ丸第1次調査区 出土遺物 土器・陶磁器 5



199904-B022 P046



199904-B004 P048



199904-B002 P047



199904-D017 P049



199904-D059 P050



199904-D015 P051



199904-D016 P052



199904-D002 P053



199904-D003 P054



199904-B006 P055



199904-B023 P056



199904-B003 P057



199904-D004 P058



199904-B001 P059



199904-D001 P060

写真図版 41 鶴ノ丸第1次調査区 出土遺物 土器・陶磁器 6



199904-A P061



199904-B P062



199904-C P063

写真図版 42 鶴ノ丸第1次調査区 出土遺物 土製品



199904-D059a T001



199904-D041 T002



199904-D028 T003



199904-D029 T004



199904-D027 T005



199904-D054 T006



199904-D055 T007



199904-D005 T008



199904-D042 T009



199904-D056 T010



199904-D035 T011



199904-D033 T012

写真図版 43 鶴ノ丸第1次調査区 出土遺物 瓦 1



199904-D036 T014



199904-D031 T013



199904-D030 T015



199904-D060 T016



199904-D050 T017



199904-D049 T018



199904-D057 T019



199904-D047 T020



199904-D026 T021



199904-D039 T022



199904-D010 T023



199904-D006 T024

写真図版 44 鶴ノ丸第1次調査区 出土遺物 瓦 2



199904-D052 T025



199904-D014 T026



199904-D051 T027



199904-D034 T028



199904-D040 T030



199904-D032 T029



199904-D009 T032



199904-D011 T033



199904-D013 T034



199904-D044 T031



199904-D008 T035



199904-D023 T036

写真図版 45 鶴ノ丸第1次調査区 出土遺物 瓦 3



199904-D012 T037



199904-D007 T038



199904-D058 T039



199904-D053 T040



199904-D046 T041



199904-D048 T042



199904-D043 T043



199904-D045 T044



199904-D037 T045



199904-D024 T046



199904-D038 T047

写真図版 46 鶴ノ丸第1次調査区 出土遺物 瓦 4



写真图版 47 鶴ノ丸第1次調査区 出土遺物 瓦当・刻印 1



写真図版 48 鶴ノ丸第1次調査区 出土遺物 瓦当・刻印 2



199904-D218 T118



199904-D237 T119



199904-D410 T120



199904-D413 T121



199904-D201 T122



199904-D230 T123



199904-D233 T124



199904-D240 T125



199904-D215 T126



199904-D226 T127



199904-D210 T128



199904-D216 T129



199904-D412 T130



199904-D244 T131



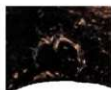
199904-D245 T132



199904-D231 T133



199904-D235 T134



199904-D236 T135



199904-D238 T136



199904-D232 T137



199904-D234 T138



199904-D408 T139



199904-D211 T140



199904-D219 T141



199904-D222 T142



199904-D247 T143



199904-D308 T144



199904-D239 T145

写真図版 49 鶴ノ丸第1次調査区 出土遺物 瓦当・刻印 3



199904-D205 T146



199904-D206 T147



199904-D204 T148



199904-D309 T149



199904-D207 T150



199904-D401 T151



199904-D202 T152



199904-D209 T153



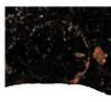
199904-D208 T154



199904-D409 T155



199904-D414 T156



199904-D403 T157



199904-D228 T158



199904-D241 T159



199904-D243 T160



199904-D224 T161



199904-D217 T162



199904-D411 T163



199904-D203 T164



199904-D242 T165



199904-D227 T166



199904-D214 T167



199904-D220 T168



199904-D229 T169



199904-D221 T170



199904-D281 T171



199904-D417 T172



199904-D223 T173



199904-M001 M001



199904-M003 M002



199904-M002 M003



199904-M004 M004



199904-S006 S001



199904-S005 S002



199904-S004 S003



199904-S003 S004



199904-S002 S005



199904-S007 S006



199904-S001 S007

写真図版 52 鶴ノ丸第1次調査区 出土遺物 石製品・骨製品



写真図版 53 新丸第1次調査区 出土遺物 土器・陶磁器・金属製品・石製品



写真図版 54 新九第1次調査区 出土遺物 瓦



200006-B033 P076



200006-B035 P077



200006-B036 P078



200006-D089 P079

200006-B034 P080



200006-B025 P081



200006-B030 P082



200006-B029 P083



200006-B028 P084



200006-B021 P085



200006-B026 P086



200006-B037 P087



200006-B023 P089



200006-D090 P090



200006-B024 P088



200006-D120 P091



200006-D134 P092



200006-D131 P093



200006-D153 P095



200006-D145 P096



200006-D088 P097



200006-D149 P094

写真図版 55 尾坂門調査区 出土遺物 土器・陶磁器 1



写真図版 56 尾坂門調査区 出土遺物 土器・陶磁器 2



写真図版 57 尾坂門調査区 出土遺物 土器・陶磁器 3



写真図版 58 尾坂門調査区 出土遺物 瓦 1



写真図版 59 尾坂門調査区 出土遺物 瓦 2



200006-D208 T217



200103-D105 T218



200103-D106 T219



200103-D102 T220



200103-D101 T221



200103-D103 T222



200103-D110 T223



200103-D104 T224



200103-D107 T225



200006-D206 T226



200103-D108 T227



200103-D109 T228



200006-D201 T230



200006-D202 T231



200006-D203 T232



200006-D207 T229



200006-M012 M006



200006-M013 M007



200006-M011 M008



200006-S010 S009



199907-B002 P129



199907-B004 P130



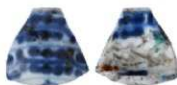
199907-B007 P131



199907-B010 P132



199907-B005 P133



199907-B003 P134



199907-B001 P135



199907-B008 P136



199907-B006 P137



199907-B009 P138



199907-D009 P139



199907-D007 P140



199907-D008 P141



199907-D001 P142



199907-D005 P143



199907-D010 P144



199907-D003 P145



199907-D004 P146



199907-D006 P148



199907-G001 P149



199907-D002 P147

写真図版 62 二ノ丸園路調査区 出土遺物 土器・陶磁器 2



199907-D011 T233



199907-M001 M009



199907-M002 M010



199907-M003 M011



199907-M004 M012



199907-M005 M013



200101-D004 P150



200101-B003 P151



200101-D001 P152



200101-B002 P153



200101-D002 P154



200101-D003 P155



200101-B004 P157



200101-B001 P156



200101-B005 P158

写真図版 64 数寄屋敷調査区 出土遺物 陶磁器



200101-D010 T234

200101-D007 T235



200101-D006 T236

200101-D011 T237



200101-D012 T238

200101-D013 T239



200101-D005 T240



200101-D009 T242



200101-D008 T241



200101-M001 M014



200101-M002 M015



200101-M003 M016



200101-M004 M017



200101-M005 M018

写真図版 65 数寄屋敷調査区 出土遺物 瓦・金属製品



200101-S001 S010



200101-S002 S011



200101-S003 S012



200101-D014 P159

金沢城史料叢書 27
金沢城公園整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書 9

金 沢 城 跡

一鶴ノ丸第1次・新丸第1次・尾坂門・二ノ丸園路・数寄屋屋敷一

平成 28 年 (2016) 3 月 31 日 発行

編集・発行 石川県金沢城調査研究所

〒920-0918 石川県金沢市尾山町10-5

電話 076 (223) 9696 FAX 076 (223) 9697

<http://www.pref.shikawa.lg.jp/kyoiku/bunkazai/kanazawazyo/index.html>

メールアドレス kncastle@pref.shikawa.lg.jp

印刷 能登印刷株式会社